高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊

鹿伏・中所遺跡Ⅱ

２００９．１

香　川　県　教　育　委　員　会

高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊

鹿伏・中所遺跡Ⅱ

２００９．１

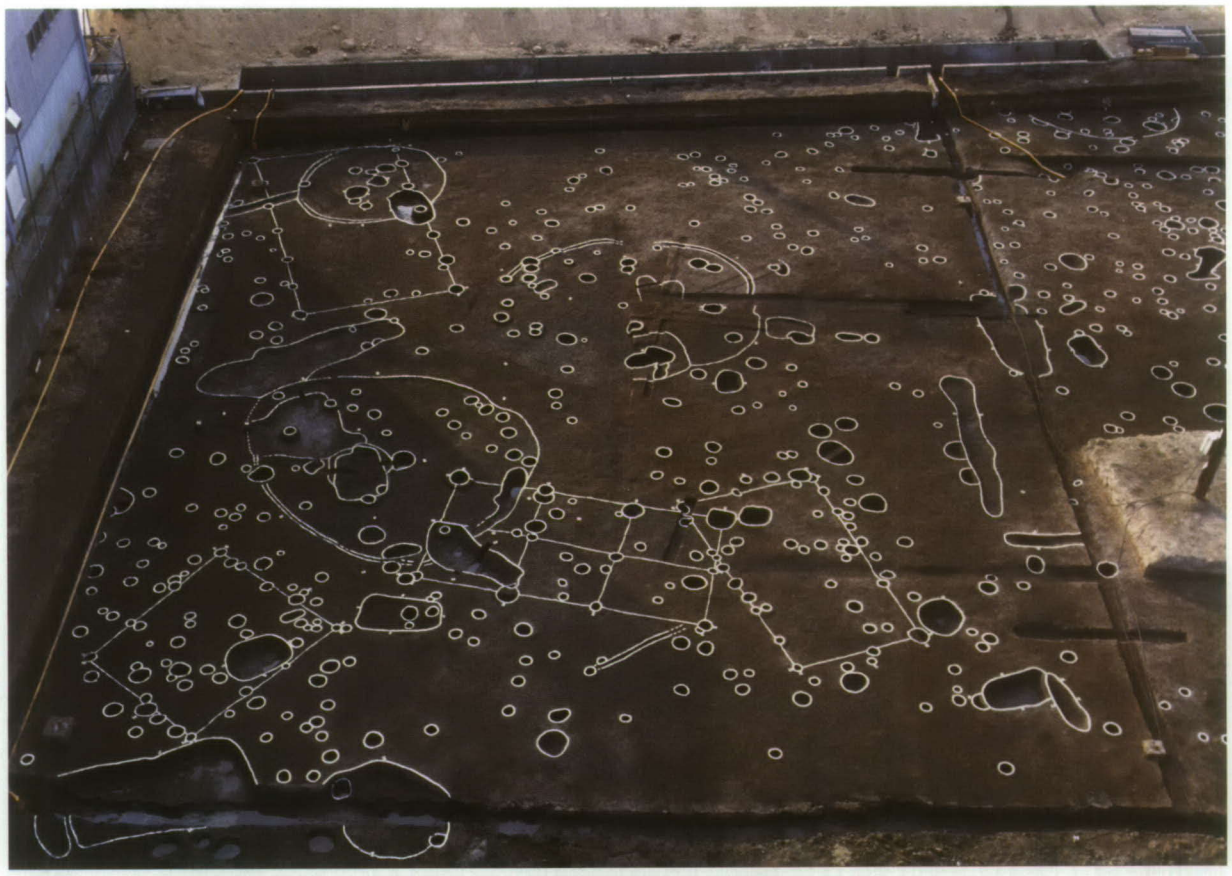
香川県教育委員会

Ⅶ東区第３遺構面斜め空中写真（東から）

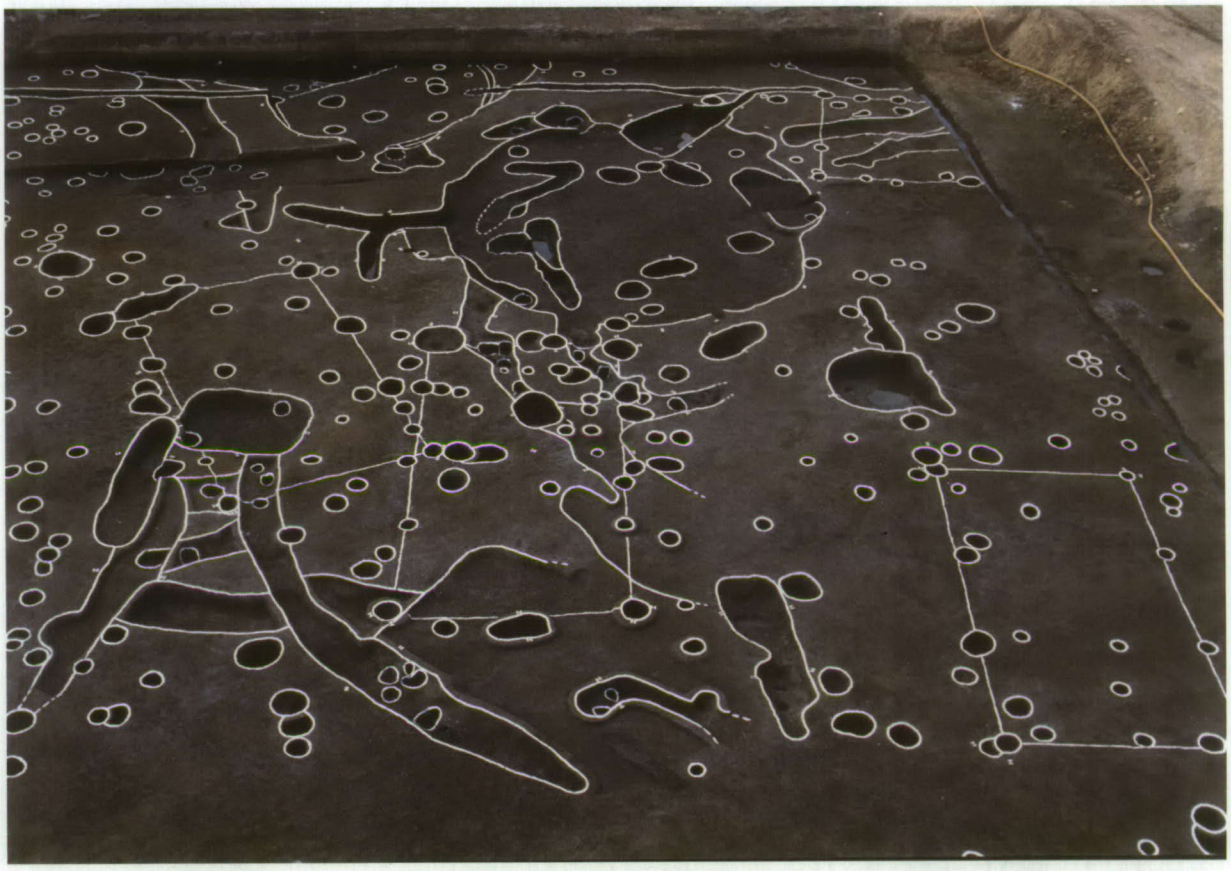
Ⅶ西区第３遺構面斜め空中写真（西から）

Ⅸ区第３遺構面北部斜め空中写真（南西から）

巻頭図版２　鹿伏・中所遺跡



Ⅶ西区第３遺構面南部全景（東から）



Ⅶ西区第３遺構面北部全景（東から）

Ⅸ区 SDa70 土器集中 E 群（東から）

Ⅸ区 SDa70 土器集中 E 群（南から）

Ⅸ区 SDa70 土器集中 E 群（南から）

756

713

60

867

61

937

938

146

146
（AMS 測定）

出土遺物

序　　文

鹿伏・中所遺跡は、県立三木高等学校の新設に伴い発掘調査が行われた、木田郡三木町に所在する遺跡です。

発掘調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによって実施されました。

発掘調査の結果、弥生時代中期から古墳時代までの遺構と遺物が多量に出土しました。注目される遺構としては、弥生時代から古墳時代までの100棟を超える住居跡と、当時の墓地と考えられる区域で見つかった土器棺墓群等があります。また、集落跡の近くには、弥生時代から古墳時代にかけての川跡があり、その中からは大量の土器や、堰の跡等が出土しています。これらの調査成果から、鹿伏・中所遺跡は、三木町における弥生時代の代表的な集落跡であることが分かりました。

整理作業は、香川県埋蔵文化財センターが平成18年度から開始し、その成果を数箇年に分けて、報告することになりました。平成19年度にはその第1冊の刊行を終えており、本書はその二冊目に当ります。

本報告書が、香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、香川県教育委員会事務局高校教育課及び関係諸機関、地元関係者各位に多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表すとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年1月

香川県埋蔵文化財センター
所長　　大山眞充

例　　言

1．本報告書は、高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県木田郡三木町平木・同鹿伏に所在する鹿伏・中所遺跡（ししぶせ・なかしょいせき）の調査のうち、Ⅶ区、Ⅸ区、東水路③の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会事務局高校教育課高校新設準備室から依頼を受けて、香川県教育委員会事務局文化行政課が調査主体となり、現地調査は、平成６・７年度に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが担当し、整理作業は、平成19年度に香川県埋蔵文化財センターが担当した。

3．発掘調査の期間及び体制は、「第Ⅰ章　第２節　発掘調査の経過」に記載した。

4．調査にあたっては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県教育委員会事務局高校教育課、香川県土木部建築課、香川県長尾土木事務所、三木町、地元自治会、地元水利組合

5．本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
本報告書の執筆・編集は、西村尋文が担当した。

6．本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標系第Ⅳ系（日本測地系）の北であり、標高は東京湾平均海面（Ｔ．Ｐ．）を基準としている。

7．本書で用いる遺構記号は、次のとおりである。
ＳＨ：竪穴住居跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＡ：柵列跡　ＳＰ：柱穴跡　ＳＫ：土坑
ＳＤ：溝状遺構　ＳＴ：墓跡　ＳＸ：不整形遺構　ＳＲ：自然河川跡

8．遺物の実測図中に記載した記号等は、以下の事項を表す。
①土器の実測図中の一点破線は、黒斑の範囲を表す。②木製品の一点破線は、炭化している範囲を表す。③石器の側縁部の←→はツブレの範囲を表す。④石器の黒く塗りつぶした箇所は、新しい欠損部分を表す。

9．報告遺構名は、発掘調査時に調査区単位で付けられていた遺構番号を、「01」から始まる通し番号により整理を行った。調査区単位で通し番号を付けた場合、同一番号が多数生じ、遺構の所在地が分からなくなるため、調査区とは別に「遺構名区画」を設定し、この区画単位で「01」から始まる通し番号を付した。平成19年度の整理区域に当るⅦ区、東水路③は「遺構名区画ｂ」に当るため、遺構記号と遺構番号の間に区画名を表す「ｂ」を記入して、「01」から始まる通し番号を付した。なお、Ⅸ区は、平成18年度の整理対象地区であるⅠ～Ⅲ区と、南水路②③同様の「遺構名区画ａ」に当るため、遺構記号と遺構番号の間に区画名を表す「a」を記入して、Ⅰ～Ⅲ区等に付した遺構番号から連続する通し番号を付した。

（記載例：　ＳＢ　　ａ　　０１　）
遺構記号　遺構名区画名　遺構番号

なお、既刊の報告書『鹿伏・中所遺跡Ⅰ』の挿図のうち、「第６図　整理区画名」中の凡例に記載してある「整理区画」は「遺構名区画」の誤りである。

10. 挿図の一部に、国土交通省国土地理院作成の１／25,000 地形図を使用した。
11. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修『新版標準土色帖 1997 年度版』による。
12. 本遺跡の報告に当っては、下記のとおり分析と保存処理を業者委託した。

樹種同定・花粉分析 ･････････････････（株）古環境研究所

木製品の保存処理及び樹種同定 ･････････（株）吉田生物研究所

放射性炭素年代測定 ･････････････････（株）加速器分析研究所

本文目次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯……1
第２節　発掘調査の経過……2
第３節　整理作業の経過……4
第４節　調査体制……5

第Ⅱ章　調査の方法

第１節　発掘調査の方法……7
第２節　整理作業の方法……7

第Ⅲ章　鹿伏・中所遺跡の調査成果の概要

……9

第Ⅳ章　Ⅶ区・東水路③の調査成果

第１節　Ⅶ区・東水路③の調査概要……11
第２節　Ⅶ区・東水路③の基本層位……11
第３節　Ⅶ区・東水路③の遺構・遺物……12

第Ⅴ章　Ⅸ区の調査成果

第１節　Ⅸ区の調査概要……148
第２節　Ⅸ区の基本層位……148
第３節　Ⅸ区の遺構・遺物……152

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　鹿伏・中所遺跡における樹種同定……207
第２節　鹿伏・中所遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）……217
第３節　鹿伏・中所遺跡における花粉分析……223

第Ⅶ章　まとめ

第１節　Ⅶ区で検出した弥生時代の遺構の変遷とその内容について……233
第２節　Ⅸ区の遺構及び出土遺物について……238

挿図目次

第1図　遺跡位置図 …… 1
第2図　調査区割図 …… 2
第3図　遺構名区画割図 …… 8
第4図　鹿伏・中所遺跡周辺地形分類図 …… 10
第5図　Ⅶ区主要遺構分布図1 …… 13
第6図　Ⅶ区主要遺構分布図2 …… 15
第7図　Ⅶ区西壁土層図 …… 17
第8図　Ⅶ区東・北・南壁土層図 …… 19
第9図　SHb01平・断面図、出土遺物 …… 21
第10図　SHb02平・断面図、出土遺物 …… 22
第11図　SHb03平・断面図、出土遺物 …… 23
第12図　SHb04平・断面図、出土遺物 …… 24
第13図　SHb05平・断面図、出土遺物（1） …… 25
第14図　SHb05出土遺物（2） …… 27
第15図　SHb06平・断面図 …… 28
第16図　SHb07平・断面図、出土遺物 …… 29
第17図　SHb08平・断面図 …… 30
第18図　SHb09平・断面図 …… 31
第19図　SHb10平・断面図、出土遺物 …… 32
第20図　SHb11平・断面図 …… 33
第21図　SHb13平・断面図 …… 34
第22図　SHb14平・断面図、出土遺物 …… 36
第23図　SHb15平・断面図 …… 37
第24図　SHb16平・断面図、出土遺物 …… 38
第25図　SHb17平・断面図、出土遺物 …… 41
第26図　SHb18平・断面図 …… 43
第27図　SHb19平・断面図、出土遺物 …… 44
第28図　SHb20平・断面図、出土遺物 …… 45
第29図　SHb21平・断面図、出土遺物 …… 46
第30図　SHb22平・断面図 …… 48
第31図　SHb22出土遺物 …… 49
第32図　SHb23平・断面図 …… 50
第33図　SHb23出土遺物 …… 51
第34図　SHb25平・断面図 …… 52
第35図　SHb26平・断面図 …… 53
第36図　SHb27平・断面図、出土遺物 …… 54
第37図　SHb28平・断面図 …… 56
第38図　SHb29平・断面図、出土遺物 …… 57
第39図　SHb30平・断面図（1） …… 59
第40図　SHb30平・断面図（2）、出土遺物 …… 60
第41図　SHb31平・断面図 …… 62
第42図　SHb32平・断面図、出土遺物（1） …… 63
第43図　SHb32出土遺物（2） …… 64
第44図　SHb33平・断面図、出土遺物 …… 65
第45図　SHb34平・断面図（1） …… 66
第46図　SHb34断面図（2） …… 67
第47図　SHb34出土遺物（1） …… 68
第48図　SHb34出土遺物（2） …… 69
第49図　SHb35平・断面図、出土遺物 …… 70
第50図　SHb39平・断面図 …… 72
第51図　SHb40平・断面図 …… 72
第52図　SHb41平・断面図、出土遺物 …… 73
第53図　SHb42平・断面図 …… 74
第54図　SHb43平・断面図 …… 74
第55図　SHb44平・断面図 …… 75
第56図　SBb01平・断面図 …… 76
第57図　SBb02平・断面図、出土遺物 …… 77
第58図　SBb03平・断面図 …… 78
第59図　SBb04平・断面図 …… 78
第60図　SBb05平・断面図、出土遺物 …… 79
第61図　SBb07平・断面図 …… 80
第62図　SBb08平・断面図 …… 81
第63図　SBb09平・断面図 …… 82
第64図　SBb09断面図、出土遺物 …… 83
第65図　SBb10平・断面図 …… 83
第66図　SBb12平・断面図、出土遺物 …… 84
第67図　SBb13平・断面図、出土遺物 …… 85
第68図　SBb15平・断面図 …… 85
第69図　SBb16平・断面図 …… 86
第70図　SBb17平・断面図、出土遺物 …… 87
第71図　SBb18平・断面図 …… 88
第72図　SBb19平・断面図、出土遺物 …… 89
第73図　SBb20平・断面図 …… 90
第74図　SBb21平・断面図、出土遺物 …… 91
第75図　SBb22平・断面図 …… 92
第76図　SBb23平・断面図 …… 93
第77図　SBb25平・断面図 …… 94
第78図　SBb26平・断面図 …… 94
第79図　SBb27平・断面図、出土遺物 …… 95
第80図　SBb28平・断面図 …… 96
第81図　SBb29平・断面図、出土遺物 …… 97
第82図　SBb30・31平・断面図 …… 98
第83図　SBb32平・断面図、出土遺物 …… 99
第84図　SAb01平・断面図、出土遺物 …… 100
第85図　SAb02・04平・断面図 …… 100
第86図　SAb03平・断面図 …… 101
第87図　SAb07平・断面図 …… 101
第88図　SAb13平・断面図 …… 102
第89図　Ⅶ東区　SPb122・125・470
平・断面図、出土遺物 …… 103
第90図　Ⅶ区SP出土遺物 …… 104
第91図　SKb04平・断面図、出土遺物 …… 105
第92図　SKb06平・断面図、出土遺物 …… 105
第93図　SKb08平・断面図、出土遺物 …… 105
第94図　SKb10平・断面図、出土遺物 …… 106
第95図　SKb13・22平・断面図、出土遺物 …… 107
第96図　SKb16平・断面図、出土遺物 …… 108
第97図　SKb17平・断面図、出土遺物 …… 108
第98図　SKb20・21平・断面図、出土遺物 …… 109
第99図　SKb23平・断面図、出土遺物 …… 110
第100図　SKb26平・断面図、出土遺物 …… 111
第101図　SKb32平・断面図、出土遺物 …… 111
第102図　SKb35平・断面図、出土遺物 …… 111
第103図　SKb36平・断面図、出土遺物 …… 112
第104図　SKb41平・断面図、出土遺物 …… 112
第105図　SKb42平・断面図、出土遺物 …… 113
第106図　SKb43平・断面図、出土遺物 …… 113
第107図　SKb44平・断面図、出土遺物 …… 114
第108図　SKb63平・断面図、出土遺物 …… 116
第109図　SKb67平・断面図、出土遺物 …… 117
第110図　SKb68・70平・断面図 …… 117
第111図　SKb69平・断面図、出土遺物 …… 118
第112図　SKb68・70出土遺物 …… 119
第113図　SKb73平・断面図、出土遺物 …… 120

第 114 図　SKb74 平・断面図、出土遺物 …… 121
第 115 図　SDb01・02 断面図、出土遺物 …… 122
第 116 図　SDb04 断面図、出土遺物 ……123
第 117 図　SDb05・10 断面図、
SDb05 出土遺物（1）……124
第 118 図　SDb05 出土遺物（2）……125
第 119 図　SDb11・12 断面図、出土遺物 ……126
第 120 図　SDb19 ～ 22 断面図、出土遺物 ……127
第 121 図　SDb26 断面図、出土遺物 ……129
第 122 図　SDb27 断面図、出土遺物 ……129
第 123 図　SDb28 断面図、出土遺物 ……129
第 124 図　SDb34・35 断面図、出土遺物 ……130
第 125 図　SDb37 断面図、出土遺物 ……131
第 126 図　SDb39 断面図、出土遺物 ……131
第 127 図　SDb40 断面図、出土遺物 ……132
第 128 図　SDb44 断面図、出土遺物 ……133
第 129 図　SDb48 断面図、出土遺物 ……133
第 130 図　SDb51 断面図、出土遺物 ……133
第 131 図　STb01 平・断面図、出土遺物 ……135
第 132 図　SXb11 平・断面図、出土遺物 ……136
第 133 図　SXb13 平・断面図、出土遺物 ……136
第 134 図　SXb14 平・断面図、出土遺物 ……137
第 135 図　SXb18 平・断面図、出土遺物 ……137
第 136 図　SXb20 平・断面図、出土遺物 ……138
第 137 図　包含層出土遺物（1）……140
第 138 図　包含層出土遺物（2）……141
第 139 図　包含層出土遺物（3）……142
第 140 図　包含層出土遺物（4）……143
第 141 図　包含層出土遺物（5）……143
第 142 図　包含層出土遺物（6）……144
第 143 図　包含層出土遺物（7）……145
第 144 図　包含層出土遺物（8）……146
第 145 図　Ⅸ区・周辺調査区 第２遺構面
遺構分布図 ……149
第 146 図　Ⅸ区第３遺構面平面図 ……151
第 147 図　Ⅸ区南壁土層図 ……152
第 148 図　Ⅸ区西・北壁・Ｔｒ②西壁土層図 ……153
第 149 図　SDa34 出土遺物（1）……156
第 150 図　SDa34 出土遺物（2）……157
第 151 図　SDa34 出土遺物（3）……158
第 152 図　SDa64 遺物分布平面図 ……160
第 153 図　SDa64 垂直遺物分布図 ……161
第 154 図　SDa64 出土遺物（1）……162
第 155 図　SDa64 出土遺物（2）……163
第 156 図　SDa64 出土遺物（3）……164
第 157 図　SDa65 断面図 ……164
第 158 図　SDa65 出土遺物（1）……165
第 159 図　SDa65 出土遺物（2）……166
第 160 図　SDa65 出土遺物（3）……167
第 161 図　SDa70 遺物分布平面図 ……170
第 162 図　SDa70 垂直遺物分布図 ……171
第 163 図　SDa70 出土遺物（1）……172
第 164 図　SDa70 出土遺物（2）……173
第 165 図　SDa70 出土遺物（3）……174
第 166 図　SDa70 出土遺物（4）……175
第 167 図　SDa70 出土遺物（5）……176
第 168 図　SDa70 出土遺物（6）……177
第 169 図　SDa70 出土遺物（7）……178
第 170 図　SDa70 出土遺物（8）……179
第 171 図　SDa70 出土遺物（9）……180
第 172 図　SDa70 出土遺物（10）……181
第 173 図　SDa70 出土遺物（11）……182
第 174 図　SDa70 出土遺物（12）……183
第 175 図　SDa70 出土遺物（13）……184
第 176 図　SDa70 出土遺物（14）……185
第 177 図　SDa70 出土遺物（15）……186
第 178 図　SDa70 出土遺物（16）……187
第 179 図　SDa70 出土遺物（17）……188
第 180 図　SDa70 出土遺物（18）……189
第 181 図　SRa02 断面図 ……192
第 182 図　SRa03 出土遺物 ……193
第 183 図　Ⅸ区包含層出土遺物（1）……196
第 184 図　Ⅸ区包含層出土遺物（2）……197
第 185 図　Ⅸ区包含層出土遺物（3）……198
第 186 図　Ⅸ区包含層出土遺物（4）……199
第 187 図　Ⅸ区包含層出土遺物（5）……200
第 188 図　Ⅸ区包含層出土遺物（6）……201
第 189 図　Ⅸ区包含層出土遺物（7）……202
第 190 図　Ⅸ区包含層出土遺物（8）……203
第 191 図　Ⅱ・Ⅲ区出土遺物 ……204
第 192 図　Ⅸ区・周辺調査区 第３遺構面
遺構分布図 ……205
第 193 図　鹿伏・中所遺跡の木材（1）……213
第 194 図　鹿伏・中所遺跡の木材（2）……214
第 195 図　鹿伏・中所遺跡の木材（3）……215
第 196 図　鹿伏・中所遺跡の木材（4）……216
第 197 図　試料の採取位置 ……219
第 198 図　暦年較正曲線（1）……221
第 199 図　暦年較正曲線（2）……222
第 200 図　鹿伏・中所遺跡のⅦ西区西壁における
花粉ダイアグラム ……229
第 201 図　鹿伏・中所遺跡のⅦ区南壁における
花粉ダイアグラム ……230
第 202 図　鹿伏・中所遺跡のⅨ区西壁における
花粉ダイアグラム ……231
第 203 図　鹿伏・中所遺跡の花粉・胞子 ……232
第 204 図　鹿伏・中所遺跡Ⅶ区弥生時代遺構変遷図（1）
……234
第 205 図　鹿伏・中所遺跡Ⅶ区弥生時代遺構変遷図（2）
……235
第 206 図　Ⅶ区弥生時代後期遺構の分布傾向 ……236

表目次

第1表　鹿伏・中所遺跡調査工程表 …… 4
第2表　平成6年度調査体制 …… 5
第3表　平成7年度調査体制 …… 6
第4表　平成19年度整理体制 …… 6
第5表　鹿伏・中所遺跡における樹種同定結果 …… 212
第6表　炭素の同位体比および年代値 …… 220
第7表　暦年較正用年代 …… 220
第8表　鹿伏・中所遺跡における花粉分析結果 …… 227
第9表　鹿伏・中所遺跡出土土器観察表 …… 243
第10表　鹿伏・中所遺跡出土石器観察表 …… 278
第11表　鹿伏・中所遺跡出土木製品観察表 …… 280
第12表　鹿伏・中所遺跡Ⅱ遺構別石器組成表 …… 281
第13表　鹿伏・中所遺跡Ⅱ遺構別土器組成表 …… 284

図版目次

図版1
Ⅶ東区第3遺構面斜め空中写真（東から）
Ⅶ西区第3遺構面斜め空中写真（西から）
Ⅸ区第3遺構面北部斜め空中写真（南西から）
図版2
Ⅶ西区第3遺構面空中写真
図版3
Ⅶ東区第3遺構面空中写真
図版4
Ⅸ区第3遺構面北部空中写真
Ⅸ区第3遺構面南部空中写真
図版5
Ⅶ東区第1遺構面全景（北から）
Ⅶ東区南部全景（北から）
Ⅶ東区南東部SHb03付近全景（北から）
Ⅶ東区南部SHb04付近全景（北から）
Ⅶ東区第3遺構面北部全景（西から）
Ⅶ東区第3遺構面北部全景（西から）
Ⅶ西区第1遺構面南部全景（西から）
Ⅶ西区第1遺構面中央部全景（西から）
図版6
Ⅶ西区第1遺構面中央部全景（北から）
Ⅶ西区第3遺構面全景（北から）
Ⅶ西区第3遺構面南部全景（東から）
Ⅶ西区第3遺構面南部全景（北西から）
Ⅶ西区第3遺構面南部全景（北西から）
Ⅶ西区第3遺構面中央部全景（東から）
Ⅶ西区第3遺構面北部全景（東から）
Ⅶ西区第3遺構面北部全景（南から）
図版7
SHb02主柱穴列検出状況（北から）
SHb02-SP274土層断面（南から）
SHb02-SP279土層断面（南から）
SHb02-SP377土層断面（北から）
SHb03全景（北西から）
SHb03中央ピット(P1)土層断面（東から）
図版8
SHb04全景（北から）
SHb05-SKb19土層断面（北から）
SHb09-SKb29土層断面（西から）
SHb09-SKb29土層断面（北から）
SHb10-SKb27土層断面（西から）
SHb14-SKb56土層断面（西から）
SHb16-SKb45土層断面（西から）
SHb17・SBb05全景（北西から）
図版9
SHb17遺物出土状況（東から）
SHb17遺物出土状況（南から）
SHb17全景（北西から）
SHb17全景（東から）
SHb17下層完掘（北東から）
SHb17炉址東西土層断面（北から）
SHb22全景（西から）
SHb22全景（東から）
図版10
SHb22全景（北西から）
SHb23・SBb09全景（北西から）
SHb26-SKb51土層断面（西から）
SHb29全景（北から）
SHb30-SKb59遺物出土状況（南から）
SHb30-SKb59土層断面（南から）
SHb32-SKb61土層断面（南から）
SHb32全景（南西から）
図版11
SHb33全景（南から）
SHb34-P2遺物出土状況（北から）
SHb34-SDb50遺物出土状況（南から）
SHb34全景（東から）
SHb34全景（南から）
SHb35-SKb65土層断面（東から）
SHb41・SBb15付近全景（西から）
図版12
SHb41全景（西から）
SHb41全景（東から）
SBb05・07付近全景（東から）
SBb05・SHb17全景（北から）
SBb07付近全景（北西から）
SBb16・SAb07全景（西から）
SBb16全景（西から）
SBb18全景（東から）
図版13
SBb19-SP497遺物出土状況（西から）
SBb20・SBb21全景（西から）
SBb20全景（西から）
SBb21全景（西から）
SBb22付近全景（西から）
SBb25全景（南西から）

SBb26・25 全景（東から）
SBb27 全景（東から）
図版 14
SBb28 全景（南から）
SBb29-SP724 土層断面（北から）
SBb29-SP732 土層断面（南から）
SBb29 全景（南から）
SBb30 全景（南から）
Ⅶ東区 SPb470 遺物出土状況（東から）
Ⅶ西区 SPb668 遺物出土状況
SKb13 完掘（東から）
図版 15
SKb13 南北土層断面（東から）
SKb16 土層断面（西から）
SKb20 遺物出土状況（北東から）
SKb22 土層断面（南から）
SKb36 土層断面（東から）
SKb37 土層断面（北東から）
SKb38 完掘（北東から）
SKb42 土層断面（東から）
図版 16
SKb43 土層断面（西から）
SKb44 遺物出土状況（北から）
SKb44 遺物出土状況（北から）
SKb47 土層断面（南から）
SKb55 土層断面（西から）
SKb57 土層断面（東から）
SKb63 遺物出土状況（西から）
SKb63 土層断面（東から）
図版 17
SKb63 遺物出土状況（東から）
SKb68 遺物出土状況（北から）
SKb68 南北土層断面（東から）
SKb69 土層断面（南から）
SKb70 土層断面（東から）
SKb72 土層断面（西から）
SKb73 土層断面（南から）
SKb74 遺物出土状況（東から）
図版 18
SKb74 遺物出土状況（東から）
SKb74 土層断面（東から）
SKb79 土層断面（南から）
SDb01 ～ 03（西から）
SDb05 遺物出土状況（西から）
SDb05（西から）
SDb35 土層断面（東から）
SDb37 遺物出土状況（北から）
図版 19
SDb40 遺物出土状況（南から）
SDb44 土層断面（西から）
STb01 第 1 層検出状況（西から）
STb01 第 1 層第 2 次検出状況（西から）
SXb07 土層断面（南から）
SXb14 土層断面（南から）
SXb16 土層断面（南西から）
SXb20 遺物出土状況（南東から）
図版 20
Ⅸ区第 2 遺構面全景（北から）
Ⅸ区第 2 遺構面全景（南から）
図 版 21
SDa34 東半部全景（北から）
SDa35・68 全景（西から）
図版 22
Ⅸ区第 2 遺構面全景（西から）
SDa34 土層断面（東から）
SDa68 土層断面（東から）
図版 23
Ⅸ区第 3 遺構面北部全景（西から）
Ⅸ区第 3 遺構面北部全景（南から）
図版 24
SDa70 土器集中 H 群（西から）
SDa70 土器集中 H 群（北から）
SDa70 土器集中 H 群（東から）
図版 25
Ⅸ区遺物出土状況（東から）
SDa70 土器集中 D 群（西から）
SDa70 土器集中 D 群（北西から）
図版 26
SDa70 土器集中 E 群（東から）
SDa70 土器集中 E 群（南から）
SDa70 土器集中 E 群（南から）
図版 27
SRa02 土器集中（西から）
SRa02 木製品出土状況
SRa02 土器出土状況（東から）
図版 28
SDa70 土層断面（東から）
SRa02・SDa70（Tr ⑩）土層断面（西から）
SRa02 土層断面（東から）
図版 29
SDa65 土層断面（東から）
SDa64 土層断面（東から）
SDa65 土層断面（南から）
図版 30
Ⅸ区土器 (875) 出土状況（南から）
Ⅸ区第 3 遺構面南部全景（東から）
Ⅸ区第 3 遺構面南部全景（南から）
図版 31
Ⅸ区南壁土層断面（北西から）
Ⅸ区北壁土層断面（東から）
Ⅸ区西壁土層断面（南東から）
図版 32 ～ 57
出土遺物（1）～（26）

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

香川県教育委員会事務局高校教育課高校新設準備室（以下準備室と略称）は、木田郡三木町平木・同鹿伏において、平成８年度の開校を目標に県立高校（現在の香川県立三木高校）の建設を計画した。

この計画に係る埋蔵文化財の取り扱い等の照会を受けた香川県教育委員会事務局文化行政課（現生涯学習・文化財課。以下文化行政課と略称）は、予定地周辺が遺跡密度の高い地域であることと、工事範囲がかなり広範囲に及ぶことから、予定地内に未周知の埋蔵文化財包蔵地が所在する可能性が高いものと判断し、準備室と協議を重ね、試掘調査を実施することで合意した。

その合意を受けて文化行政課は、予定地内の埋蔵文化財の有無と範囲を確認するため、用地の準備が整った平成６年に試掘調査を実施した。その結果、工事予定地の約４割、面積にして15,391㎡の範囲で、弥生時代中期～後期の遺構密度の高い集落跡が確認され、埋蔵文化財の保護措置が必要であることが明らかになった。

ところが、開校までの工事工程を検討した結果、２ヵ年程度の本発掘調査期間しか確保できないことが判明した。そのため、文化行政課と準備室は、建設工事を担当する県土木部建築課及び造成工事を担当する県土木部長尾土木事務所と協議を重ねた。

その結果、工事の実施設計が暫定的で、校舎の位置や規模が不確定なところもあったが、Ⅰ期工事のうち、最も工事を急ぐ、北校舎・管理棟・外周水路部分から本発掘調査を開始することになり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下、センターと略称）を調査担当として、平成６年６月より７年度の上半期にかけて発掘調査を実施することになった。

第１図　遺跡位置図

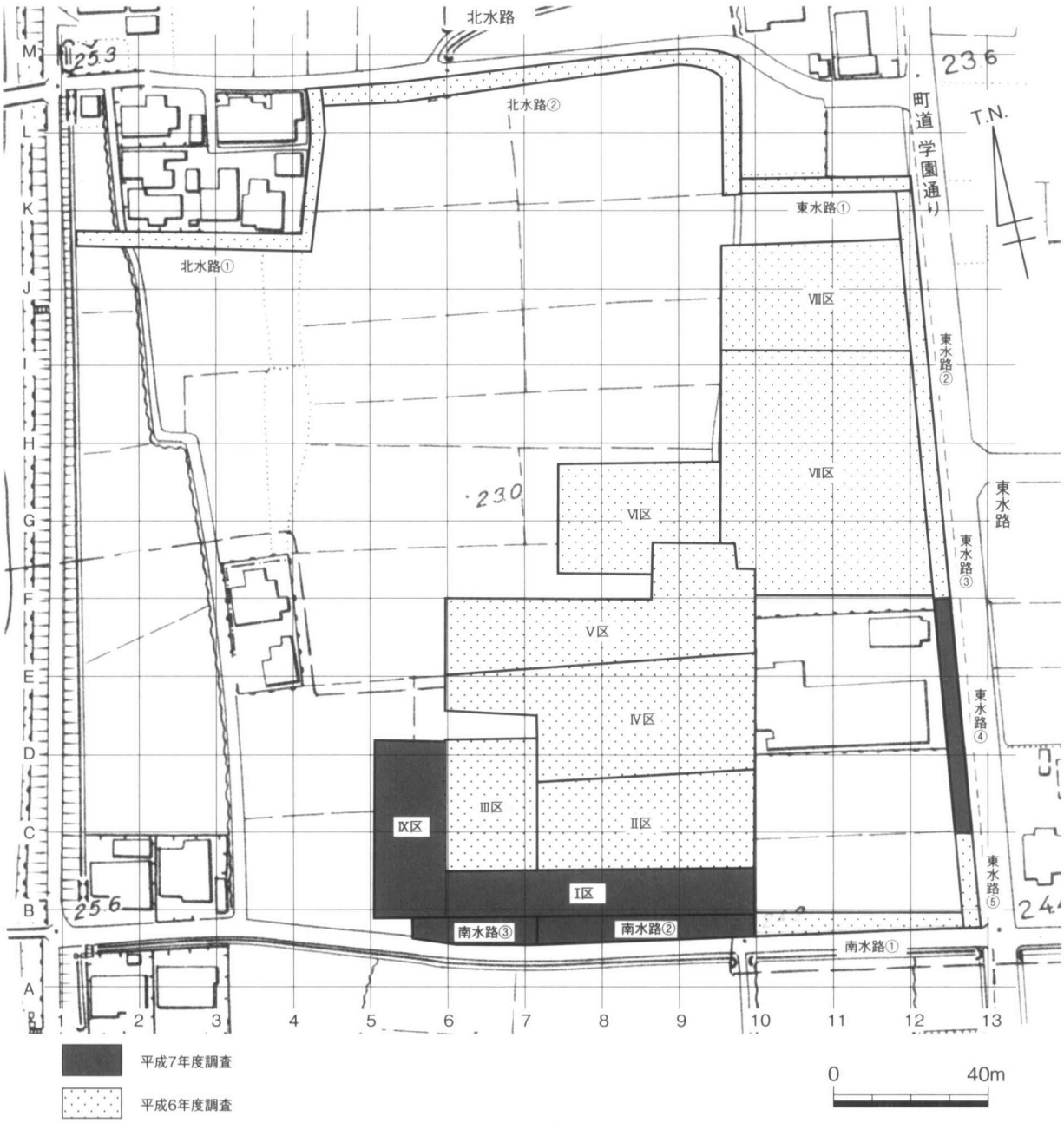
第２節　発掘調査の経過

平成６年度の調査

発掘調査は、平成６年６月から準備を開始し、同年７月から本格的に着手した。発掘調査は、２班編成で実施することになった。また、その調査体制は、調査の効率と機動性を考慮して、第１班は、発掘調査の掘削作業と労務管理を土木業者に請負わせた工事請負調査班、第２班は、作業員と直接雇用契約を結ぶ直営調査班の２つの異なる体制を編成し、発掘調査を実施することになった。対象となる調査面積は13,041㎡である。各班の担当と分担は以下のとおりである。

第１班（担当：西村、中西、森澤）－Ⅱ・Ⅲ・Ⅶ区、東水路③

第２班（担当：古野、高月、松尾）－Ⅳ～Ⅵ・Ⅷ区、北水路①②、東水路①②⑤、南水路①



第２図　調査区割図

発掘調査は、Ⅰ期工事のうち最も工事を急ぐ、北校舎・管理棟・東水路区域に該当する、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区、東水路①～③⑤区について７月から着手した。この区域は、集落跡のほぼ中央部分から南半部に当り、弥生時代中期～古墳時代前期前半の数10棟の竪穴住居跡を主体にした居住域と、10数基の土器棺墓群で構成される墓域や自然河川跡等を確認した。平成６年度の調査区の中で最も注目される区域であった。11月以降、機械棟・浄化槽・体育館・プールの区域に当る、Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ区の調査に移った。この区域は集落跡の北半部に当り、竪穴住居跡と掘立柱建物跡を中心にした居住域を確認した。

体育館予定地のⅦ区は、調査対象地の北東部に位置し、面積は3,434㎡を測る。調査区は東西に２分割し、東側をⅦ東区、西側をⅦ西区と区分して、Ⅶ東区から開始した。調査区のほぼ全域に弥生時代後期後半前後の遺物を含む、厚さ約0.5ｍの遺物包含層が広範囲に広がっており、その上面からは中世以後を主とした時期の遺構面、その下面からは弥生時代中期前半～後期終末期頃の遺構面が検出された。そのため延べ調査面積は、調査対象面積の２倍になった。

Ⅶ区は、竪穴住居跡を始めとして遺構密度はかなり高い。特に住居跡として把握できない柱穴跡が多数検出できた。その検出状況を見る限り、削平を受けて掘り方が把握しにくい竪穴住居跡が、多数存在している可能性が考えられた。また、他の調査区ではあまり確認できていない、掘立柱建物跡が比較的多数検出された点も、この調査区の特徴である。

平成７年度の調査

平成７年度の発掘調査は、４月初旬から開始し、同年９月末日に終了した。発掘調査は、直営調査班の１班を当てた。調査区は、微高地の南辺から古川の氾濫原に該当するⅠ・Ⅸ区と、南水路②③、東水路④である。調査対象面積は2,350㎡である。なお、平成７年度の調査区も、６年度の調査区同様に、調査区のほぼ全域に、弥生時代後期後半前後の遺物を多量に含む、厚さ約0.5ｍの遺物包含層が広範囲に広がっており、その上面には中世を主とした時期の遺構面が検出された。そのため延べ調査面積は対象面積の２倍になった。

発掘調査は、南校舎部分に当たるⅠ区、南水路②③区から開始し、次に自転車置場部分に当るⅨ区へと広げ、最後に用地内に残る店舗の移転の問題で、６年度着手できなかった東水路④の調査を実施した。Ⅰ・Ⅸ区の低地部からは大量の土器と、当初予想していなかった複数の堰状遺構等を検出した。調査期間が台風シーズンと重なり、調査が難航する時期もあったが、当初の予定どおり同年９月末日に終了した。

Ⅰ区・南水路②③からは、６年度に調査を実施した、Ⅱ区より広がる弥生時代中期～古墳時代前期初頭の集落域及び土器棺墓群で構成される墓域、微高地の南西辺を流れる弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の自然河川跡を検出した。Ⅸ区は、６年度のⅢ区から続く、微高地の南西辺を流れる自然河川跡と溝状遺構を検出した。東水路④からも竪穴住居跡を中心とした集落域を確認した。

注目されるのは、Ⅰ区の河川跡の河床面で検出した堰状遺構と、Ⅸ区の河川跡と溝状遺構から出土した大量に廃棄された土器群である。堰状遺構は、合計５基を検出した。使用された部材には、建築部材を転用したものが多数認められ、その中には住居跡の柱材と考えられる部材も確認できる。これらの木製品は、当時の住居構造を探るうえで重要な資料になった。

Ⅸ区は850㎡の小区画ながら、検出された河川跡及び溝状遺構の上面から、集落域より廃棄されたと考えられる弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃の土器が約280箱出土した。検出した河川跡と溝状

遺構は、６年度のⅢ区から続く遺構で、Ⅲ区の遺物を含めると約430箱を数える。その出土量は、平成６・７年度の全ての調査区より出土した遺物（約960箱）の45%を占める数になった。これらの資料は、高松平野東部の弥生土器の地域性を検討する上で、大変重要な資料になった。

第１表　鹿伏・中所遺跡調査工程表

地区	面積（㎡）	施設名	平成６年度									平成７年度					
			7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
Ⅰ区，南水路②③	1,320	南校舎															
Ⅱ区	1,430	管理棟															
Ⅲ区	890	管理棟															
Ⅳ区	1,600	管理棟															
Ⅴ区	1,700	北校舎															
Ⅵ区	997	機械棟、浄化槽															
Ⅶ区	3,434	体育館															
Ⅷ区	1,290	プール															
Ⅸ区	850	自転車置場															
北水路	960	外周水路															
東水路①～③⑤	560	外周水路															
東水路④	180	外周水路															
南水路①	180	外周水路															
合計	15,391																

調査担当
：平成６年度　１班　西村・中西・森澤
：平成６年度　２班　古野・高月・松尾
：平成７年度　西村・中村・松尾

第３節　整理作業の経過

鹿伏・中所遺跡の整理作業は、調査終了年度より11年を経過した後の、平成18年度から実施した。本遺跡は遺構密度も高く、遺物の量も多い。そのため、平成18年度より４ヵ年計画で整理作業を進めることになった。

１年目の平成18年度は、調査対象地区の南端部に当る、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区、南水路②③の整理作業を実施し、その成果を「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　鹿伏・中所遺跡Ⅰ」として刊行した。

２年目の平成19年度は、平成６・７年度に発掘調査を実施した、調査対象地の北東部に当るⅦ区、東水路③及び、調査対象地の南西端部のⅨ区を対象とした。

整理対象地区のⅦ区は集落の北東部に当り、竪穴住居跡を始めとした遺構密度はかなり高い。特に、柱穴跡が多数あることから、発掘調査時に確認できていない、掘り方が削平を受けた未確認の竪穴住居跡等が多数存在している可能性が考えられる状況であった。そのため、整理作業の課題として、未確認の住居跡の復元に重点を置くことが必要になった。その結果、発掘調査終了時に37棟であった竪穴住居跡が、最終的に竪穴住居跡44棟、掘立柱建物跡32棟の合計76棟に増加した。

整理対象地区のⅨ区は、平成19年度に整理作業を実施した、Ⅰ・Ⅲ区の西に位置する面積850㎡を測る小さな調査区である。この地区は微高地の西辺を画する低地部に当る区域で、主にⅠ・Ⅲ区から続く自然河川跡及び複数の溝状遺構を検出した。注目されるのは、集落からの廃棄遺物である、大量の土器をはじめとした遺物である。その数量は280箱を数え、全調査区の45%を占めている。その遺物量は、単年度で処理できる数量ではないために、整理作業を計画した頃からの課題であった。そのため、平成18年度に作業工程の再検討を行った結果、Ⅸ区の整理作業を2ヵ年に分けて行うことになった。具体的には、Ⅸ区で検出した自然河川跡（SRa02）の遺物整理について、次年度以降に報告する事になった。

出土遺物の中で、木製品や現地で採集した土壌等については、可能な限り科学的分析を行い、調査成果の補強資料とした。具体的には、Ⅶ区の柱穴跡中に残る柱材等については樹種同定を実施した。時期の判断が付きにくい遺構については、出土している木片の放射性炭素の分析を行うことにより、時期判断の資料とした。また、現地調査の際に採集した土壌サンプルについては花粉分析を実施し、当時の環境復元の資料とした。

なお、平成18年度の整理対象地区の、Ⅰ区で検出した堰状遺構からは、杭材として用いられた、多数の木製品が出土している。これらの木製品の中には、住居跡の建築部材を転用したと考えられる木製品が含まれており、当時の住居の構造を検討する上で貴重な資料になっている。これらの中で、平成18年度に保存処理を行う必要があったものについては業者に外注し、処理を行ったが、予算的な制約から、全ての木製品を、単年度で処理することができなかった。そのため、平成19年度も引続き木製品1点の保存処理を業者に外注した。

第4節　調査体制

平成6・7年度の発掘調査及び、平成19年度の整理作業に係わる調査体制は以下のとおりである。

第2表　平成6年度調査体制

香川県教育委員会事務局文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
区分	役職	氏名	区分	役職	氏名
総務	課長	高木　尚	総務	所長	松本　豊胤
	主幹	小原　克己		次長	真鍋　隆幸
	係長	源田　和幸		係長	土井　茂樹　(～5. 31)
	主任主事	櫻木　新士　(～5. 31)		係長	前田　和也　(6. 1～)
	主任主事	星加　宏明　(6. 1～)		係長	今田　修
	主事	藤原　和子　(～5. 31)		主査	大西　健司
	主事	高倉　秀子　(6. 1～)	調査	参事	糸目　末夫
埋蔵文化財	係長	藤好　史郎		主任文化財専門員	渡部　明夫
	主任技師	國木　健司		文化財専門員	西村　尋文
	主任技師	森下　英治		文化財専門員	高月　計
				文化財専門員	中西　昇
				主任技師	古野　徳久
				調査技術員	森澤　千尋
				調査技術員	松尾　歩

第３表　平成７年度調査体制

香川県教育委員会事務局文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
区分	役職	氏名	区分	役職	氏名
総括	課長	高木　尚　(～10. 23)	総括	所長	大森　忠彦
	課長	藤原　章夫　(10. 24～)		次長	真鍋　隆幸
	主幹	小原　克己	総務	参事	別枝　義昭
	課長補佐	高木　一義		係長	前田　和也
総務	係長	源田　和幸　(～5. 31)		主査	大西　健司　(～5. 31)
	係長	山崎　隆　(6. 1～)		主任主事	西川　大　(6. 1～)
	主査	星加　宏明	調査	参事	糸目　末夫
	主事	高倉　秀子　(6. 1～)		係長	大山　眞充
埋蔵文化財	副主幹	渡部　明夫		文化財専門員	西村　尋文
	主任技師	森下　英治		文化財専門員	中村　昭浩
	技師	塩崎　誠司		調査技術員	松尾　歩

第４表　平成19年度整理体制

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
区分	役職	氏名	区分	役職	氏名
総括	課長	鈴木　健司	総括	所長	渡部　明夫
総務・振興	課長補佐	武井　薗紀		次長	廣瀬　常雄
グループ	副主幹	古田　泉	総務課	総務課長	野口　孝一
	主任	林　照代		主任	宮田 久美子
文化財グループ	課長補佐	藤好　史郎		主任	嶋田　和司
	文化財専門員	森　格也		主任	古市　和子
	文化財専門員	信里　芳紀	資料普及課	資料普及課長	廣瀬　常雄　(兼務)
				主任文化財専門員	西村　尋文
				嘱託職員	柴垣　智美
					山地真理子
					山田　昌代
					米田　静恵

第Ⅱ章　調査の方法

第１節　発掘調査の方法

事業予定地は、新川が形成した扇状地と、「白山」から西に延びる低丘陵の先端が交わる微高地周辺に位置する。遺跡は、町道 「学園通り」を東限とし、南北約 225 m、東西約 230 mの範囲で確認された。その事業地の中で調査対象地は、地下遺構に影響が及ばない運動場部分を除く、校舎・体育館・プール等の構造物が建築される区域と、事業地の外周を巡る水路部分に限定されることになった。調査の対象となる面積は 15,391㎡を測る。

調査区は、南校舎をⅠ区、管理棟をⅡ～Ⅳ区、北校舎をⅤ区、機械棟・浄化槽棟をⅥ区、体育館をⅦ区、プールをⅧ区、自転車置場をⅨ区に分けて設定した。外周水路については、事業地が方形に近い形を呈していることもあり、事業地の北辺を画する水路を北水路①②、南辺水路を南水路①～③、東辺水路を東水路①～⑤に区分し調査区を設定した。なお、西辺部と南辺部の一部は、保護措置の必要な範囲より外れるため、調査対象より除外した。

予定地内を調査するに当り、まず事業予定地全体に南東隅を基点とする 20 mメッシュのグリッドを設定した。グリッドの方向は、予定地周辺には条里地割が良く残っていることと、旧地形を把握しながら調査を進める必要があることから、予定地周辺の地割方向に揃えることにした。グリッド基点は国土座標第Ⅳ系の座標値を使用し、座標北の方向に１・２・３・・、西の方向にＡ・Ｂ・Ｃ ・・・と付し、各交点を杭 A2・B2 等のように呼称することにした。また、南西隅の交点名を 20 mメッシュのグリッド名とした。なお、調査地内に設置する基準点については、測量業者に委託して打設した。

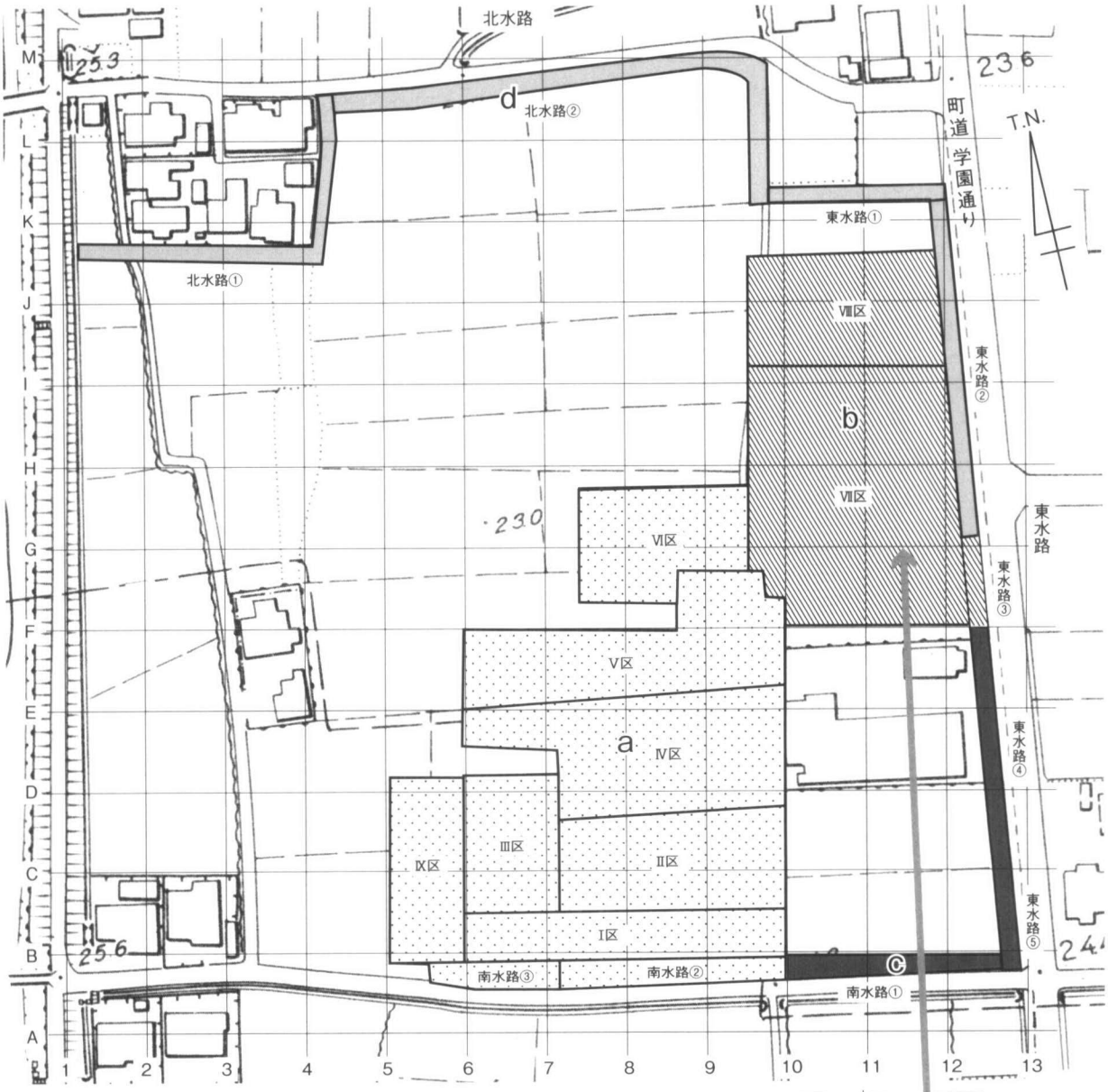
調査区全体の図化は、航空測量を業者委託し、航空測量により実施した。撮影の回数は平成６年度－６回、平成７年度－４回である。図面は、撮影した空中写真をもとに、1/20・1/50 の縮尺で必要箇所を図化し、それを編集して 1/100 の全体図を作成した。また、遺物の出土状況図、土層断面図等の実測図等については、手描きにより担当職員が対応した。

第２節　整理作業の方法

発掘調査では、広い調査対象地を２ヵ年（延べ 26 ヶ月）にわたり、複数の班で調査を実施した関係上、多数の職員が調査に携わったため、全体像を把握し難い状況になっている。また、整理作業に際しては、発掘調査を直接担当した１名の職員が、数ヵ年に分けて整理作業を実施することになった。そこで、計画的に整理作業を実施していく都合上、調査区を新たに「整理区画」として４区分し、その区画をもとに作業を進めることにした。

参考文献

香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1995
平成６年度「鹿伏・中所遺跡」『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1996
平成７年度「鹿伏・中所遺跡」『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会　2008「鹿伏・中所遺跡Ⅰ」『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊』



：遺構名区画a

：遺構名区画b

：遺構名区画c

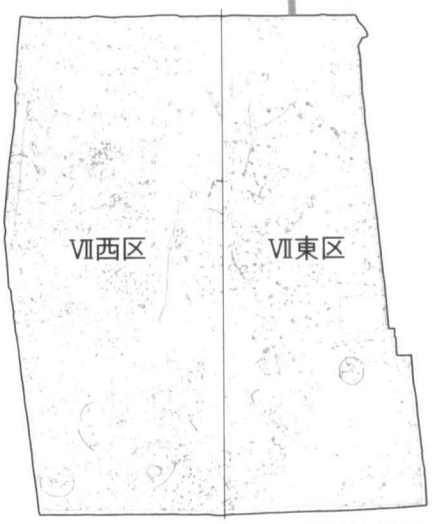
：遺構名区画d

第1年度整理区画:Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区、南水路②③(平成18年度整理)

第2年度整理区画:Ⅶ・Ⅸ区、東水路③(平成19年度整理)

第3年度整理区画:Ⅳ・Ⅴ・Ⅸ区

第4年度整理区画:Ⅵ・Ⅷ区、北水路①②、南水路①、東水路①②④⑤



Ⅶ区詳細区画

第３図　遺構名区画割図

第Ⅲ章　鹿伏・中所遺跡の調査成果の概要

鹿伏・中所遺跡の微高地上には、弥生時代中期前半～古墳時代前期前半の集落跡が広がっており、その範囲は南北160ｍ、東西140ｍに及ぶことが確認されている。なお、この集落跡の東辺については調査対象地より外れるため、明らかにすることはできなかったが、おそらく、東へ約100ｍ離れた天神山古墳群が所在する丘陵近くまで広がっているものと考えられる。

集落跡が広がる微高地上のほぼ全域には、弥生時代中期～後期後半頃の遺物を含む、厚さ0.2～0.5ｍの遺物包含層が広範囲に広がっており、その上面と下面において遺構面を２面確認した。上面を「第１遺構面」、下面を「第３遺構面」と呼ぶ。第１遺構面上は、ＴＰ．平均23.0ｍを測り、中世を主体にした時期の遺構が広がる。第３遺構面上は、ＴＰ．平均22.5ｍを測り、弥生時代中期～古墳時代前期前半頃の遺構が広がる。この遺跡で検出した遺構の大部分は、この遺構面上に所在する。微高地上の集落跡では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等を中心とした居住域と、土器棺墓からなる墓域を確認した。竪穴住居跡等の住居は80棟以上、掘立柱建物跡は20棟以上を数える。土器棺墓は集落の南東辺にあたるⅠ・Ⅱ区、南水路①②において19基を、また、集落の北東辺にあたるⅦ区においても１基を検出した。

微高地の北辺及び南西辺は低地状を呈している。南西辺に当るⅠ・Ⅲ・Ⅸ区、南水路②③の低地では、３面の遺構面を検出した。

この地域からは、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半頃の小規模な３条の自然河川跡と、ほぼ同時期の溝状遺構及び自然河川跡の河床近くに築かれた、古墳時代前期前半頃の堰状遺構を検出している。また、この地域からは集落から廃棄された大量の遺物が出土している。注目できるものとしては、堰状遺構から出土した多量の木製品がある。これらの木製品の中には、住居の建築部材を転用したものと考えられる木製品が含まれており、当時の住居の構造を検討する上で貴重な資料になった。

微高地北辺に当るⅧ区、北水路①②、東水路①②の低地は、遺跡の北東方面にある「平木尾池」周辺から延びる開折谷の延長部分に当る。この地域からも、弥生時代中期～後期頃の複数の自然河川跡と、多量の木製品が出土している。この地域の詳細については、次年度以降の整理作業によって明らかにする。

これらの集落規模及び遺構内容等より、本遺跡は三木町周辺に所在する同時期の遺跡の中でも、代表的な拠点集落の一つにあげられる。

平成19年度の整理の対象となったのは、微高地の北東部に位置するⅦ区・東水路③と、微高地南西辺の低地に位置するⅨ区である。

参考文献

三木町　1978「第１章　三木町のあけぼの」『三木町史』
金田章裕　1992「第２章　第１節　地理的環境」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
高橋　学　1992「第４章　第１節　高松平野の環境復原」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1995
平成６年度「鹿伏・中所遺跡」『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1996
平成７年度「鹿伏・中所遺跡」『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会　2008「鹿伏・中所遺跡Ⅰ」『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊』

段丘・山地

埋没自然河川、開折谷

第４図　鹿伏・中所遺跡周辺地形分類図

第Ⅳ章　Ⅶ区・東水路③の調査成果

第１節　Ⅶ区・東水路③の調査概要

Ⅶ区は、微高地の北東部に位置する調査区である。調査面積 3,434㎡を測る。調査区全域に、厚さ 0.16～0.32m の黒～茶褐色系の粘質土～シルト質の遺物包含層が広がり、その包含層の上面と下面で２つの遺構面を検出した。上面で検出したのが「第１遺構面」であり、包含層の下面で検出したのが「第３遺構面」である。

第１遺構面上からは、古代以降の条里地割の主軸方向に合致した溝状遺構２条、土坑４基、土器棺墓１基、時期不詳の溝状遺構６条を検出した。

第３遺構面上からは、弥生時代中期～終末期の竪穴住居跡 44 基、掘立柱建物跡 32 基、土坑 60 基、溝状遺構 37 条と多数の柱穴跡等を検出した。住居跡を初めとした遺構密度はかなり高い。

なお柱穴跡の配列から復元した住居跡については、主柱穴を構成すると考えられる柱穴列を「主柱穴列」とした。さらにその外側に、住居周堤の外縁線と考えられる柱穴列があり、これを「外周柱穴列」とした。一つの住居跡に複数の柱穴列が認められる場合は、それぞれ①、②～として区分した。

第２節　Ⅶ区、東水路③の基本層位

Ⅶ区、東水路③の旧地盤はＴＰ．約 23.0 ｍを測り、地形の全体的な傾向として、北方のⅧ区方向へ傾斜している。なお、Ⅶ区の旧状は、全面農地であった。

先述したように両調査区のほぼ全域には、弥生時代後期後半の土器を含む、厚さ約 0.3 ｍを測る褐色系の粘質土（第７図７・18・54・56 層）が広がり、その上面と下面において遺構面を２面確認した。上面を「第１遺構面」、下面を「第３遺構面」と呼ぶ。なお、「第２遺構面」はⅠ・Ⅲ・Ⅸ区等の限られた区域の、第１遺構面～第３遺構面の中間で確認できる遺構面である。

第１遺構面上は、ＴＰ．平均 22.3 ｍを測り、Ⅶ区では主に中世以降の遺構を検出した。第３遺構面上は、ＴＰ．平均 22.0 ｍを測り、弥生時代中期～後期末の遺構を検出した。

Ⅶ区のベースとして捉えた土層は、暗灰色系の粗砂層である。このベース土は、地点により土質等は微妙に異なり、またⅦ区の北方に位置するⅧ区で検出した低湿地部に向けて、緩やかに傾斜している。

第３節　Ⅶ区、東水路③の遺構・遺物

１．竪穴住居跡

SHb01（第９図）

Ⅶ東区南端部の南壁際の第３遺構面上で検出した住居跡である。住居跡の南半部は調査区より外れるため約 1/2 を検出した。主柱穴は８基を検出した。

住居跡の平面形は、おそらく円形を呈すものと考えられ、住居跡の最大期の長径は 7.2 m以上を測る。主柱穴列は、２組検出されたが、住居の構造によるものか、建て替えによるものかは判断がつかない。仮にそれを主柱穴列①・②と仮称する。

主柱穴列①は、４柱穴跡が正方形状に組み合う。SPb102・105・107・109 の４柱穴跡である。各柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は 2.7 ～ 3.1 mを測り、柱径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mを測る。主柱穴列②は、主柱穴列①の外側に配され、直径約 7.0 mの円の範囲に４基の柱穴跡を検出した。SPb97・101・112・113 の４柱穴跡である。各柱穴は比較的大型で、平面形は円形を呈し、径約 0.7 m、深さ約 0.2 mを測る。柱穴跡の間隔は 2.5 ～ 3.0 mを測る。

出土遺物としては、主柱穴列②の SPb112 から弥生時代後期中頃以降の土器が出土した。１は、下川津Ｂ類（大久保 1989）の甕の口縁部である。２は、僅かに平底を残す小型の鉢である。

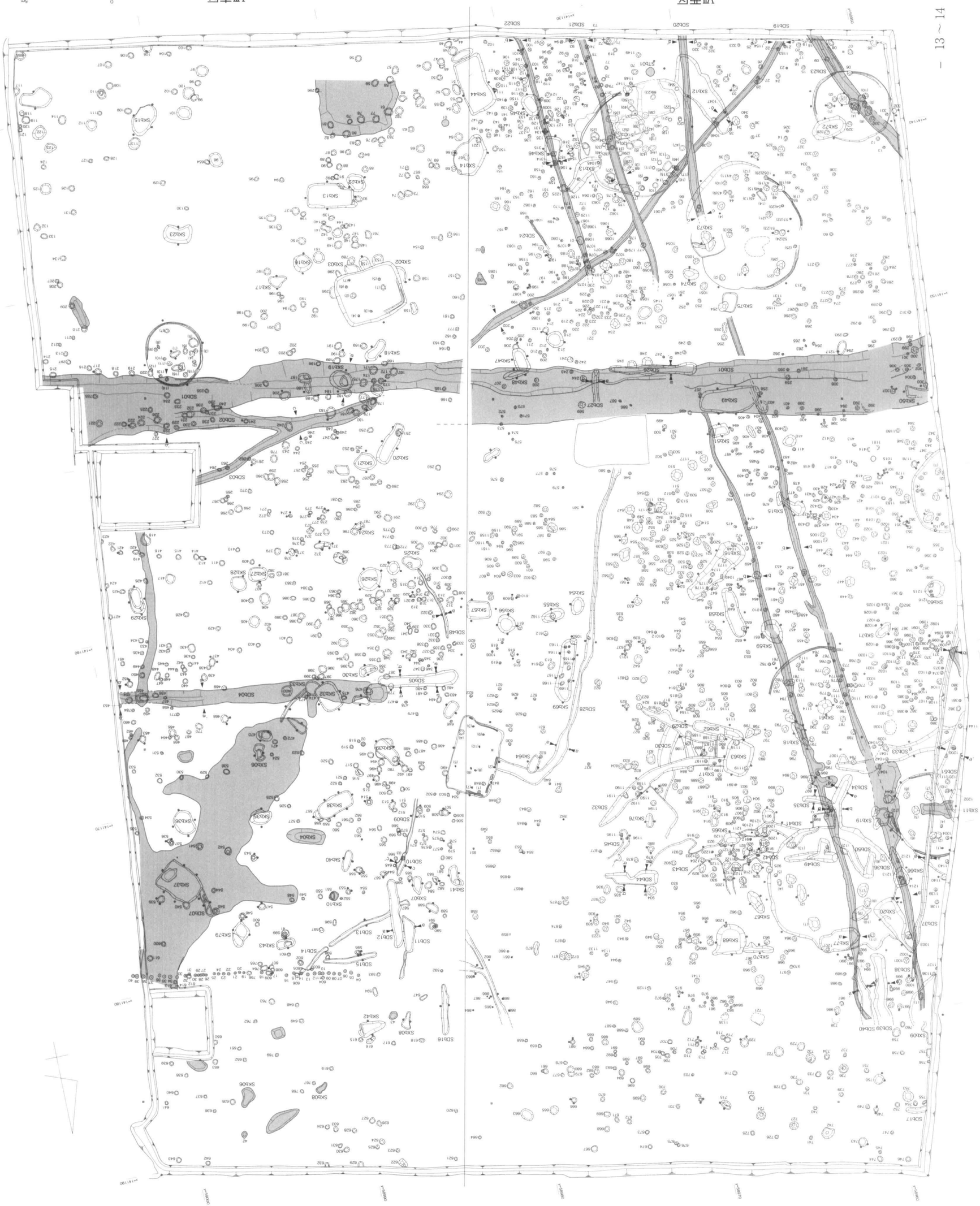
SHb02（第 10 図）

Ⅶ東区中央の第３遺構面上で検出した住居跡である。この住居跡は削平により、主柱穴跡のみを残す。周囲には、SHb02 を中心にして直径約 7.5 mの範囲に、９基の柱穴跡により構成される外周柱穴列を検出した。この外周柱穴列は SHb02 を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある。

住居跡の平面形は不明であるが、おそらく円形を呈すものと考えられる。長径 3.5 m以上、短径 3.2 m以上を測る。主柱穴は、SPb274・279・371・377 の４柱穴跡である。径 0.2 ～ 0.3 m、深さ約 0.4 mを測り、全ての主柱穴跡から柱材を検出した。床面中央には SPb373・374 の柱穴２基が切り合っている。この地点は、SHb10 の外周を廻る外周柱穴列の柱穴跡の位置に当るため、２基のうち１基については、この住居跡の中央土坑の可能性を有するが、その区分はできない。SPb373・374 の径は約 0.3 m、深さ約 0.6 mを測る。

外周柱穴列は直径約 7.5 mの円の範囲に、９基の柱穴跡により構成されるが、唯一北西辺の１柱穴跡が欠けている。柱穴跡の間隔は比較的均一で、2.0 ～ 2.5 mを測る。各柱穴跡の平面形は円形を呈し、径 0.2 ～ 0.4 m、深さ約 0.3 mを測る。

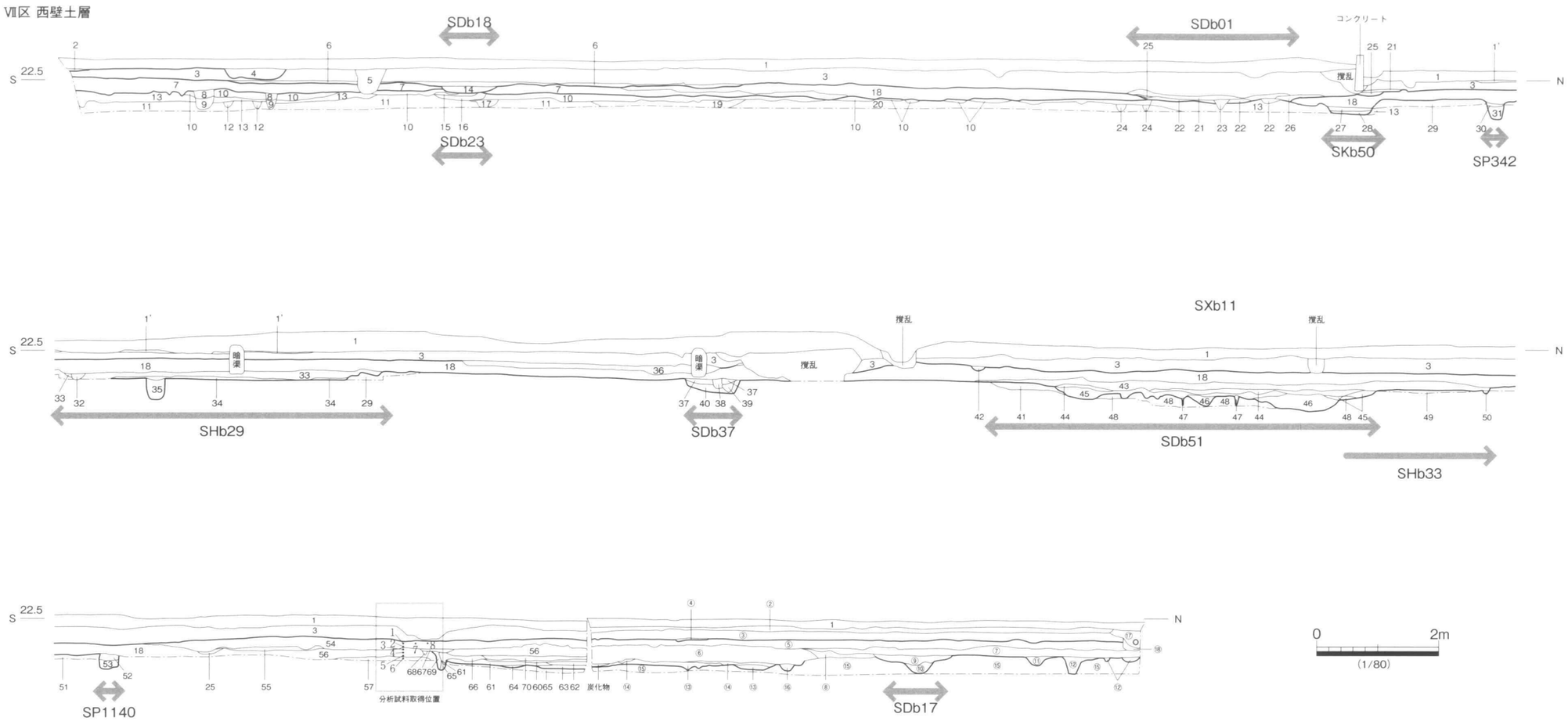
出土遺物としては、主柱穴跡及び外周柱穴列から出土した柱材があげられる。３は、外周柱穴列の SPb269 から出土した、径 15cmを測る、芯持丸太材の基底部で、下端部に切断痕が確認できる。樹種はクリである。４は、主柱穴跡の SPb279 から出土した、径 10.5cmを測る、芯持分割材の基底部で、下端部に切断痕が確認できる。樹種はヒノキである。５は、主柱穴跡の SPb377 から出土した、径 10.5cmを測る、芯持丸太材の基底部で、下端部に切断痕が確認できる。樹種はヒノキである。６は、SPb274 か



第５図　Ⅶ区主要遺構分布図１

（竪穴住居跡・掘立柱建物跡の似元線・辺柵番号を要示）

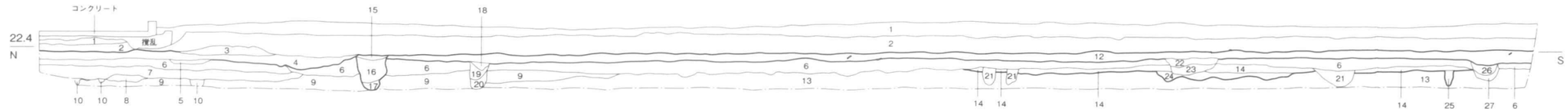
第６図　Ⅶ区主要遺構分布図２



1 耕作土
1' やや淡い
2 淡青白色土
3 床土　淡灰茶色土
4 2に1が混じる
5 暗渠および埋土（1に3が混じる）
6 灰黄褐色土
7 包含層　暗灰褐色土
8 茶褐色土
9 灰黒色粘質土
10 濁茶灰色砂質土
11 灰色砂
12 暗灰色砂質土
13 ベース　暗灰色粗砂質土
14 SDb18　暗灰褐色砂質土
15 SDb23　暗灰色粘質土
16 SDb23　灰黒色粘質土
17 暗灰色粘質土（砂混じり）
18 暗灰褐色土（基本的には7と共通、粗砂が多く混じる）
19 濁暗灰色粘質土
20 濁暗灰色砂
21 SDb01　明灰色粘質土
22 濁灰色砂質土
23 濁灰色粘質土（砂多く混じる）
24 灰色砂（粘質土混じる）
25 SDb01　淡灰茶色細砂
26 SDb01　21 + 25
27 SKb50　濁暗灰褐色粘質土（粗砂混じる）
28 SKb50　灰黒色粘質土（細砂混じる）
29 ベース　濁暗灰褐色粗砂質土
30 SP342　暗灰褐色粘質土
31 SP342　暗灰色粘質土（砂が多く混じる）
32 SP　暗灰茶色土
33 SHb29　暗灰茶褐色土
34 SHb29　黒褐色土
35 灰黒色粘質土
36 暗灰褐色土（砂が多く混じる）（7、18と近似）
37 SDb37　暗灰色粘質土
38 SDb37　暗灰色粗砂質土
39 SDb37　灰黒色粘質土
40 SDb37　暗灰色砂
41 ベース　暗灰色粘質土（粗砂多く混じる）
42 36と同じでやや褐色が強い
43 SDb51　暗灰色粘質土（砂、明茶灰色土混じる）
44 SDb51　暗灰色粘質土
45 SDb51　灰黒色粘質土（砂が混じる）
46 SDb51　灰黒色粘質土
47 灰黒色粘質土（砂が多く混じる）
48 淡灰色砂
49 灰色粘質土
50 濁暗灰色粘質土
51 43と同一のようであるが砂があまり混じらない
52 SP1140　灰黒色粘質土
53 SP1140　暗灰色粘質土
54 淡灰黄褐色粘質土
55 灰褐色砂質土
56 暗灰褐色粘質土
57 暗灰色粘質土
60 灰褐色粘質土
61 暗灰色粘質土
62 灰黒色粘質土
63 淡灰色粘質土
64 淡灰色砂
65 濁灰色砂
66 濁暗灰茶色粘質土
67 暗灰色粘質土（砂が多く混じる）
68 暗灰色粘質土
69 灰黒色粘質土
70 66と同じで、66よりやや砂質気味
② 淡灰色土
③ 灰黄色土
④ 灰黄色粘質土
⑤ 灰茶色粘質土
⑥ 暗灰褐色土
⑦ 灰色粘質土
⑧ 濁暗灰色粘質土
⑨ ⑦よりやや暗い灰色粘質土
⑩ SDb17　灰黒色粘質土（粗砂が多く混じる）
⑪ 濁暗灰色砂質土
⑫ 濁暗灰色粘質土
⑬ 暗灰色粘質土
⑭ 濁暗灰褐色粘質土
⑮ 濁灰黄色砂
⑯ 暗灰色粘質土
⑰ 暗渠　② + ③
⑱ 暗渠　灰黒色粘質土

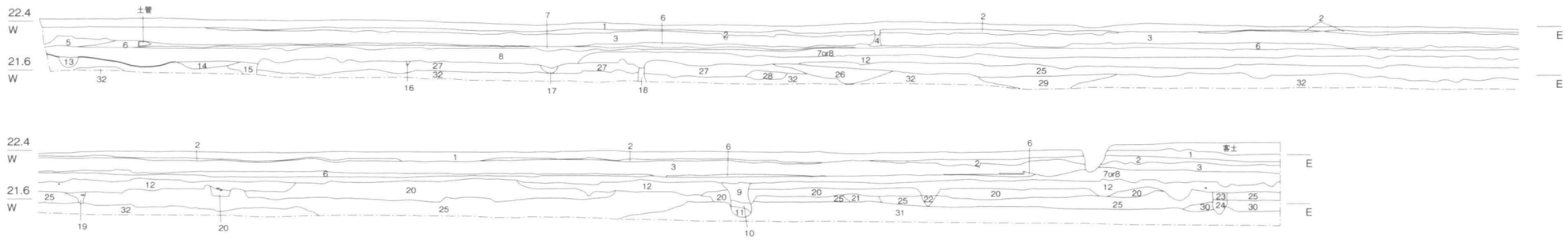
第７図　Ⅶ区西壁土層図

Ⅶ区 東壁土層



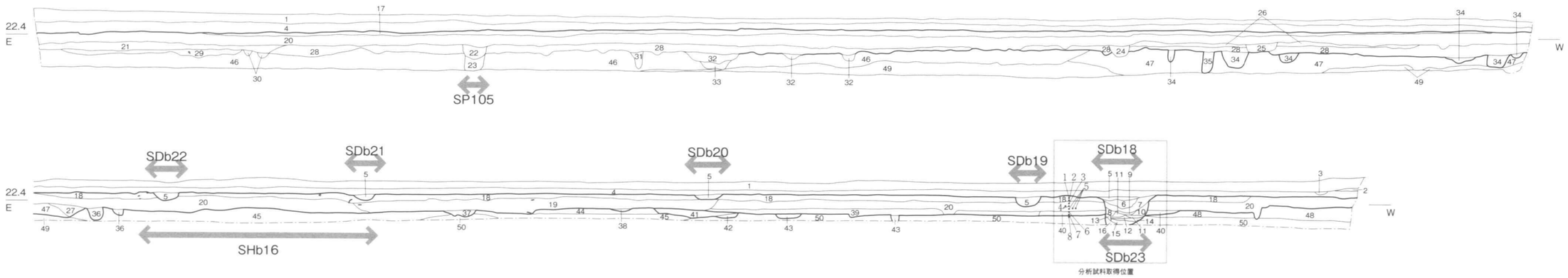
1 耕作土
2 淡灰黄色粘質土
3 淡灰色粘質土
4 灰色粘質土
5 4に6のブロック混じる
6 暗灰茶褐色粘質土
7 暗灰褐色粘質土
8 暗灰茶色粘質土
9 暗灰褐色粘質土
10 黒褐色粘質土
11 暗灰色粘質土
12 暗灰茶褐色粘質土（粗砂混じる）
13 暗灰色粗砂
14 暗灰黄褐色粘質土
15 暗灰茶色粘質土
16 暗灰褐色粘質土
17 暗灰色粘質土
18 暗灰茶褐色粘質土
19 暗灰茶褐色粘質土（砂粒混じる）
20 黒褐色粘質土
21 暗灰褐色粘質土（粗砂多く混じる）
22 暗褐色粘質土（土器片、炭化物多く混じる）
23 暗灰黄褐色粘質土
24 暗灰色粘質土＋暗灰色粗砂質土の混在
25 灰黒色粘質土
26 黒褐色粘質土（粗砂混じる）
27 灰黒色粘質土（粗砂混じる）

Ⅶ区 北壁土層



1 耕作土
2 淡灰色土
3 濁黄灰色土（暗渠埋設の埋め戻し土）
4 淡黄灰色土
5 黒色粘質土
6 灰色粘質土＋植物の茎…暗渠土管の被覆部分
7 灰黄色粘質土
8 灰色粘質土
7or8 灰黄色粘質土
9 濁暗灰色粘質土
10 灰黒色細砂質土（黄褐色細砂混じる）
11 灰黒色細砂質土
12 暗灰色粘質土
13 暗灰色粘質土
14 灰茶色粘質土（砂混じり）
15 暗灰色砂質土
16 灰色粘質土
17 暗灰色粘質土（粗砂多く混じる）
18 暗灰色細砂
19 灰黒色粘質土
20 灰茶色粘質土（砂が多く混じる）
21 灰茶色粘質土（細砂混じる）
22 暗灰黄色粘質土
23 濁暗灰色粘質土
24 灰黒色粘質土
25 茶灰色粘質土
26 暗茶灰色砂
27 濁灰黄色粗砂
28 暗茶灰色細砂
29 淡灰黄色細砂＋青灰色粘質土
30 25と31の中間の黄灰色シルト質
31 青灰色細砂（ややシルト気味）
32 灰黄色細砂

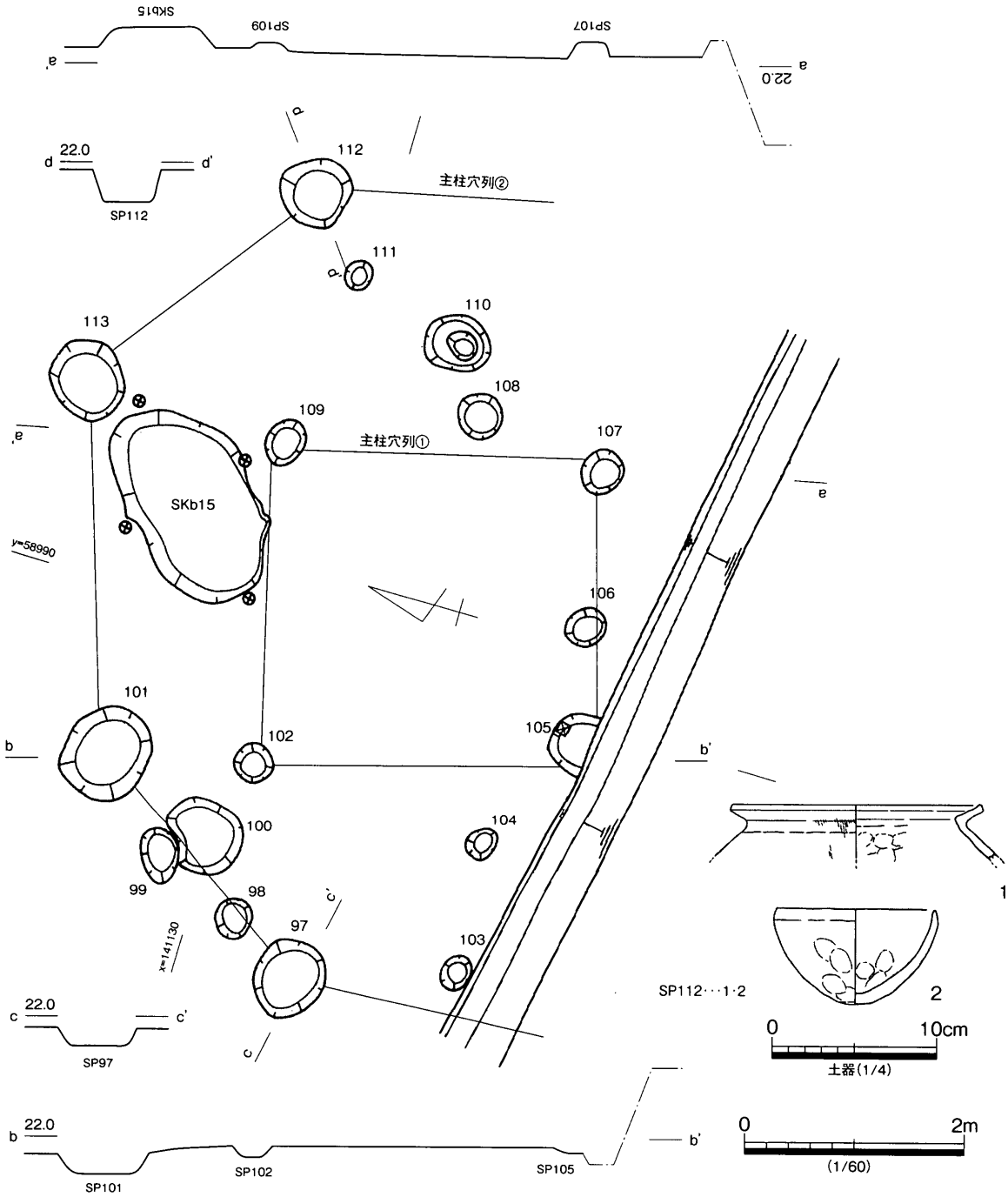
Ⅶ区 南壁土層



1 耕作土
2 灰白色粘質土
3 淡灰茶色土
4 淡灰黄色土
5 淡灰褐色砂質土（同色粘質土混じり）
6 灰茶褐色土
7 灰褐色土
8 灰茶色粘質土
9 灰色粘質土
10 灰褐色土
11 暗灰色砂質土
12 淡灰色細砂
13 暗灰色粘質土（粗砂混じり）
14 灰色粘質土
15 灰黄色粗砂
16 暗灰色粘質土（粗砂混じり）
17 暗黄褐色土
18 暗灰黄褐色土（やや砂質土気味）
19 暗褐色土（4に近い、やや砂質気味）
20 暗灰茶褐色土
21 暗灰茶褐色粘質土
22 暗灰色粘質土
23 灰黒色粘質土
24 暗灰色砂質土
25 濁灰色砂質土
26 灰茶褐色砂質土
27 暗灰茶褐色土
28 暗灰褐色土
28 暗灰褐色土（粗砂混じり）
29 暗灰褐色粘質土
30 暗灰色粘質土
31 暗灰色粘質土＋暗灰色粗砂
32 暗灰褐色砂質土＋暗灰褐色粘質土
33 灰黒色粗砂
34 暗褐色砂質土
35 灰黒色砂質土
36 暗灰黄褐色土
37 暗褐色土
38 淡灰茶色土（焼土部分）
39 灰褐色土
40 濁灰茶色土
41 灰茶色粘質土（砂混じり）
42 濁灰色粘質土
43 濁灰色砂質土
44 暗灰色粘質土
45 灰黄褐色粘質土
46 暗灰色粗砂
47 濁灰黄色砂
48 濁暗灰色粗砂
49 濁灰色細砂
50 暗灰色粗砂

0 2m
(1/80)

第８図　Ⅶ区東・北・南壁土層図



第９図　SHb01 平・断面図、出土遺物

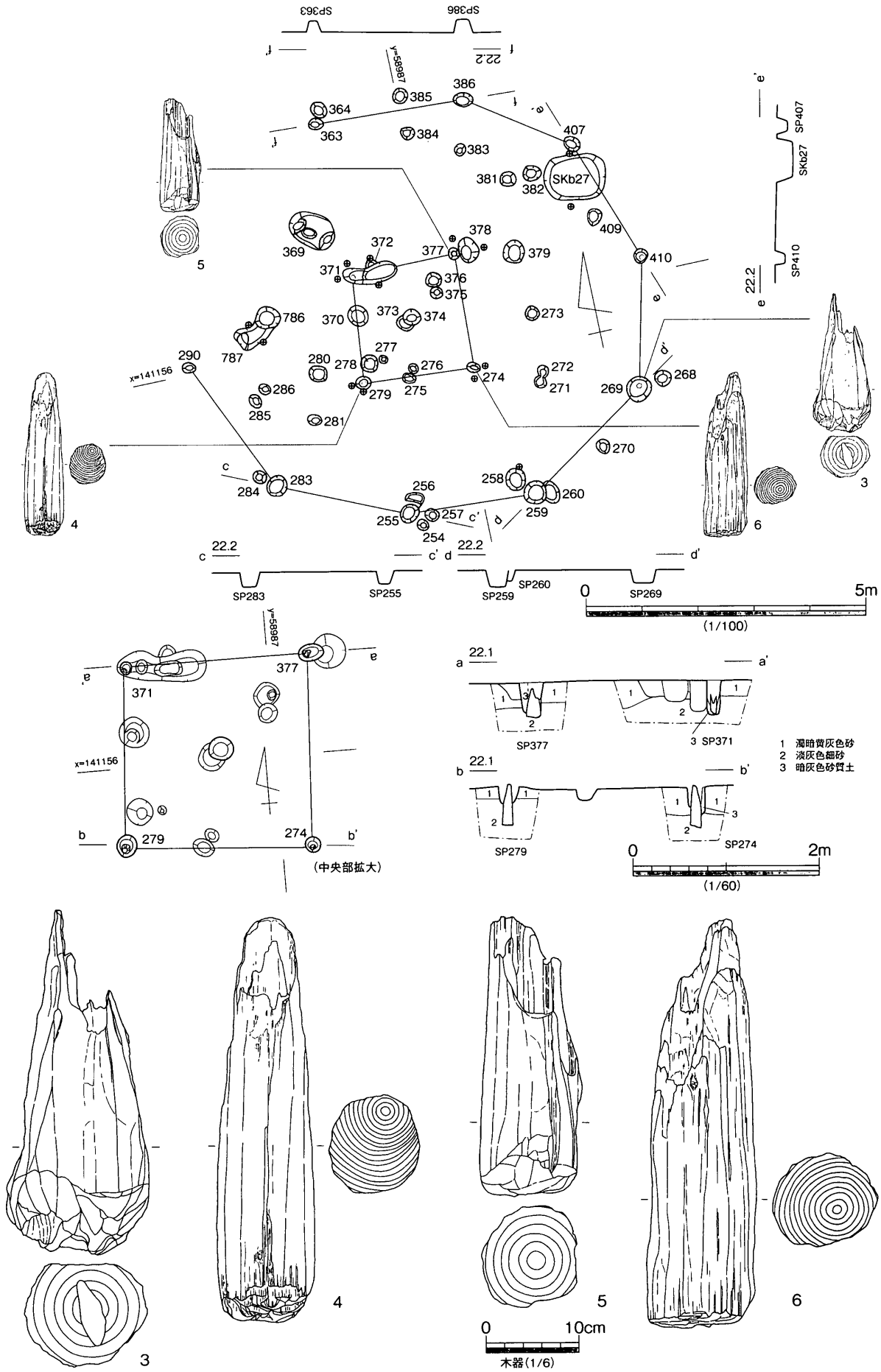
ら出土した、径 11cmを測る、芯持丸太材の基底部で、下端部に切断痕が確認できる。樹種はヒノキである。

SHb03（第 11 図）

Ⅶ東区の南半部第３遺構面上で検出した住居跡である。この住居跡は削平を受けたため、床面上の遺構のみを残している。

平面形は、僅かに北に歪んだ円形を呈し、長径 3.8 m、短径 3.2 m、面積は 10.0㎡を測る。

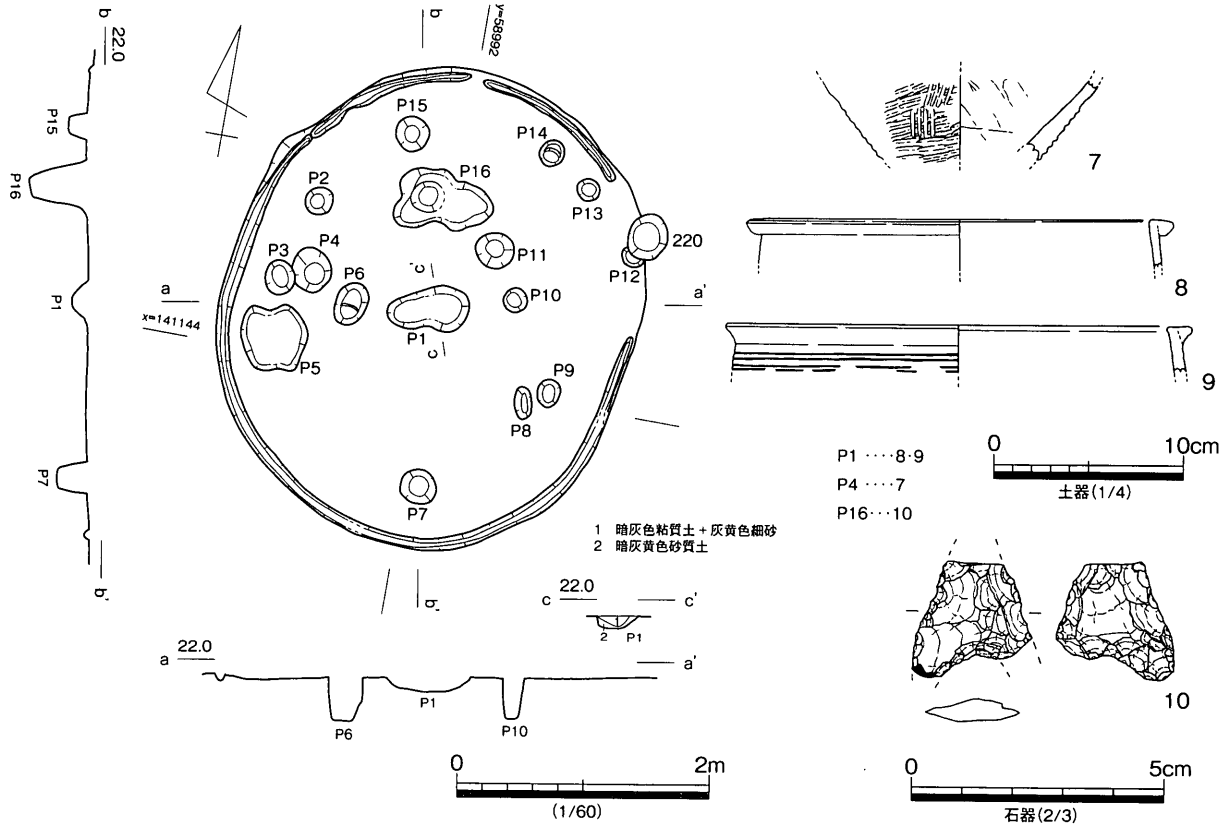
床面上では壁溝跡と、一対の主柱穴と中央土坑を検出した。壁溝跡は一部を除き外周を巡り、幅 0.2 m、深さ 0.1 mを測る。主柱穴跡と考えられるのは、P6･P10 の２柱穴跡である。径約 0.2 ～ 0.4 m、深さ約 0.3



第 10 図　SHb02 平・断面図、出土遺物

mを測る。中央土坑P1は主柱穴間の線上に位置し、その線上に向きを揃えている。平面は不整形な楕円形状を呈し、断面は浅いU字状を呈する。埋土は2層に分けられ、上層は暗灰色粘質土が混ざった灰黄色細砂、下層は暗灰黄色砂質土を呈する。長径0.7 m、短径0.3 m、深さ約0.1 mを測る。

出土遺物としては、弥生時代中期前半と後期後半の土器と石器が出土している。8・9は中央土坑P1から出土した、断面三角形の突帯を貼付けた中期前半の甕の口縁部である。9は口縁部下に2条の



第11図　SHb03平・断面図、出土遺物

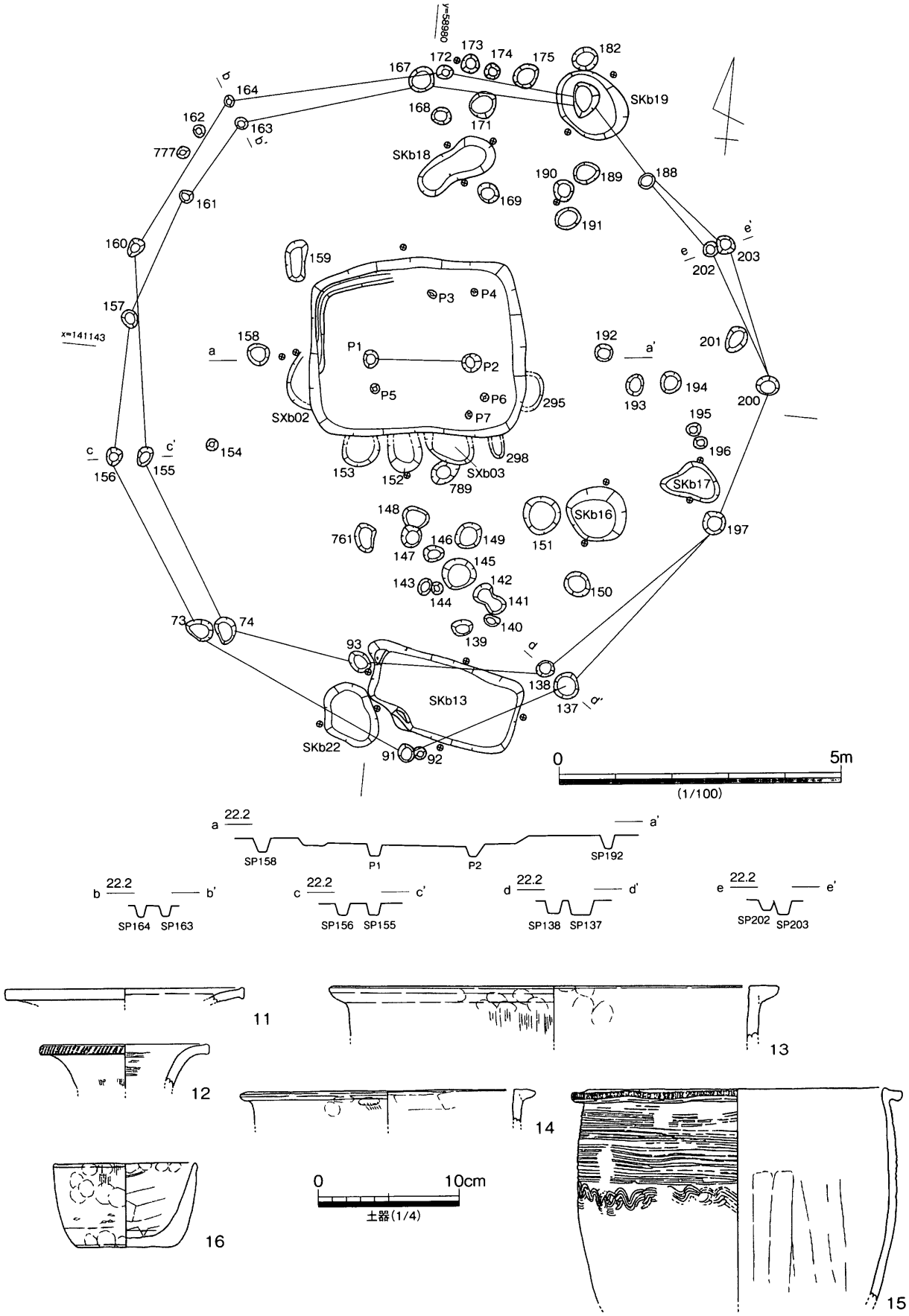
沈線を施す。7はP4から出土した、外面にタタキ調整を施した甕で後期後半に属する。10はサヌカイト製の打製石鏃である。凹基式で先端部及び基部の一部を欠く。

SHb04（第12図）

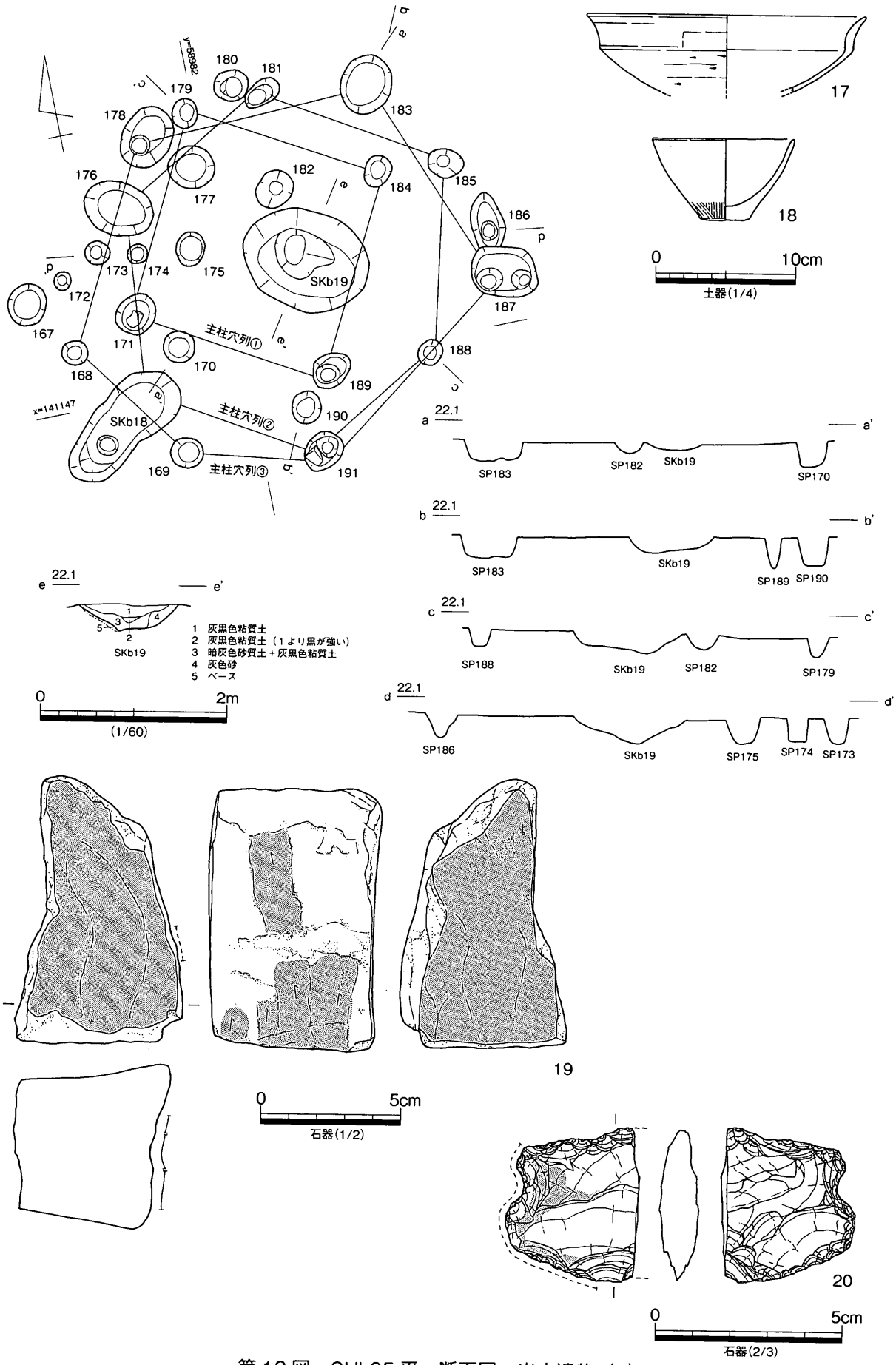
Ⅶ東区の南半部の第3遺構面上で検出した、隅丸方形の住居跡である。周囲には、SHb04を中心にして直径約12 mの円の範囲に、12～13基の柱穴跡により構成される外周柱穴列を2列検出した。この外周柱穴列はSHb04を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性があり、2列あるのは改築により、時期差が表れているものと考えられる。なお、この住居跡は削平により消失したか、外周にベッド状遺構を伴っていた可能性が高い。

住居跡の平面形は、隅丸方形状を呈し、長径3.9 m、短径3.0 m、面積は11.7㎡を測る。床面は貼床で形成されており、ベース上から約0.1 mの貼床層が確認できる。貼床層は3層に細分されるが、概ね、上層は黒色砂混じり粘土、下層は淡黒色砂である。

床面上では壁溝跡と、一対の主柱穴跡を検出した。壁溝跡は北西辺の外周を巡り、幅0.15 m、深さ0.1 mを測る。主柱穴跡と考えられるのは、P1・P2の2柱穴跡である。径約0.2～0.3 m、深さ約0.2 mを測る。



第12図　SHb04 平・断面図、出土遺物



第13図　SHb05平・断面図、出土遺物（1）

外周を廻る柱穴跡の間隔は、かなりバラツキがあり、1.5 ～ 4.0 mを測る。柱穴跡の平面形は円形ないし不整円形を呈し、径 0.2 ～ 0.4 m、深さ約 0.2 mを測る。

出土遺物としては、床面上より弥生時代中期前半と後期中頃の土器が出土した。11 は後期中頃の壺の口縁部である。12 は中期前半の広口壺の口頸部である。端部にはヘラ状工具により斜線刻文を施している。13 ～ 15 は中期前半の甕である。口縁部に突帯を貼付ける瀬戸内型甕で、15 は口縁部下に多条化した櫛描直線文、その下段に櫛描波状文を施している。なお、13・15 は SHb04 に切られた SPb152 から出土している。

SHb05（第 13・14 図）

Ⅶ東区北半部の第 3 遺構面上で検出した住居跡である。南には SHb04 が位置し、その外周柱穴列の柱穴跡と切り合っている。主柱穴跡 14 基と中央土坑 1 基を検出した。

住居跡の平面形は、おそらく円形を呈すものと考えられる。住居跡の最大期の大きさは、長径は 4.9 m以上、短径は 4.6 m以上を測る。2 度の建て替えが行われたものと考えられ、3 組の主柱穴の組み合わせが確認できる。仮にそれを主柱穴列①～③と仮称する。なお、建て替えの順序については、柱穴跡同士が切り合わないため、明らかにすることはできない。

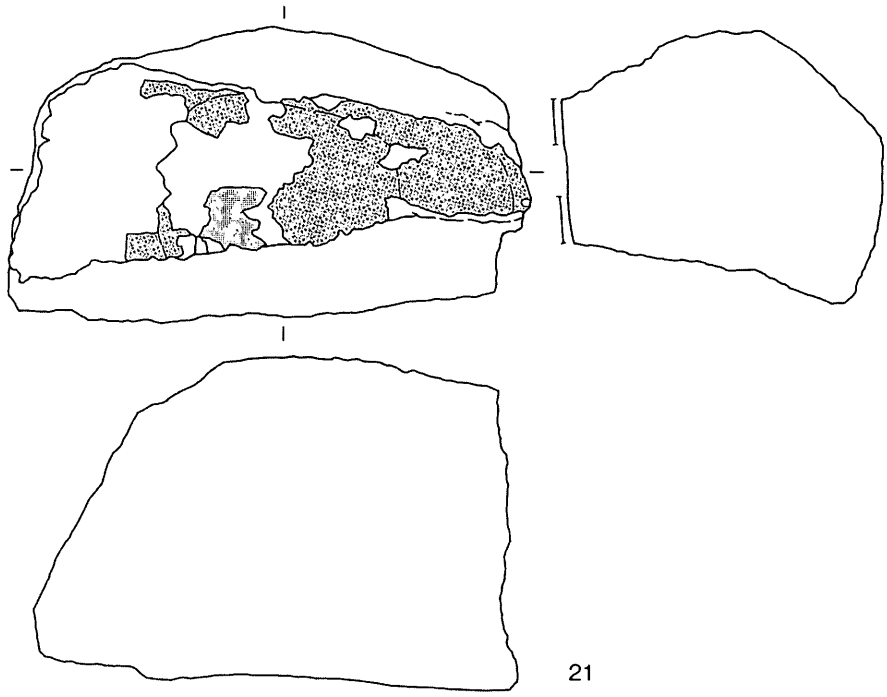
主柱穴列①は、4 柱穴跡が正方形状に組み合う、SPb171・179・184・189 等の柱穴跡があげられる。柱穴跡の平面形は、円形ないし不整円形を呈し、柱間は比較的均一で約 2.2 mを測り、径約 0.3 ～ 0.45 m、深さ約 0.2 mを測る。主柱穴列②は、六角形状に組みあう 6 柱穴跡が考えられるが、南西端部の 1 柱穴跡が SKb18 により切られているため、SPb176・181・185・188・191 等の 5 柱穴跡があげられる。柱穴跡の平面形は、円形ないし不整円形を呈し、柱間は 1.5 ～ 2.0 mを測り、径約 0.3 ～ 0.8 m、深さ約 0.2 mを測る。主柱穴列③は、六角形状に組み合う 6 柱穴跡が考えられ、SPb168・169・178・183・187・191 等の 6 柱穴跡があげられる。柱穴跡の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、大きさにかなりバラツキがある。柱間は 1.6 ～ 2.5 mを測り、径約 0.3 ～ 0.8 m、深さ約 0.2 mを測る。

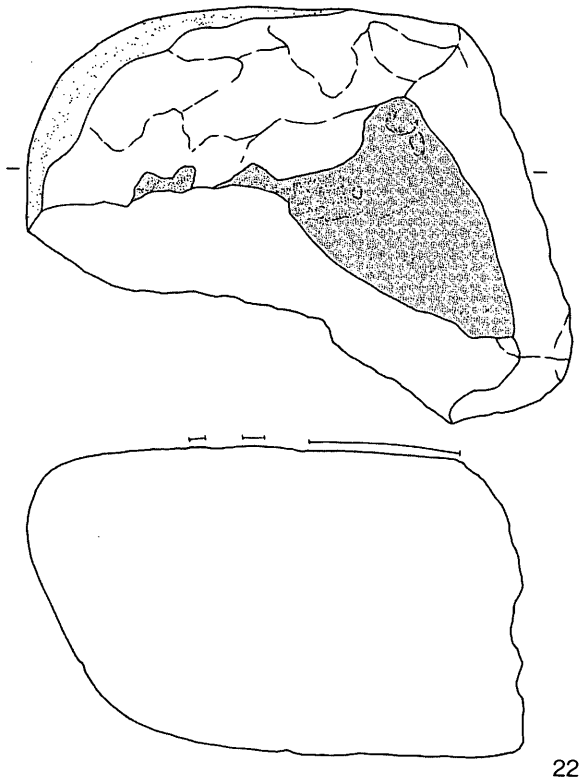
床面中央には、中央土坑 SKb19 が位置する。平面形は楕円形状を呈し、断面は 2 段掘り方の不整形な逆台形状を呈する。埋土は 4 層に細分できるが、概ね上層は灰黒色粘質土、下層は上層の灰黒色粘質土のブロックが混じる暗灰色砂質土を呈する。長径 1.4 m、短径 1.0 m、深さ約 0.3 mを測る。

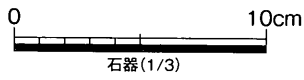
出土遺物としては、主柱穴列①～③の柱穴跡からは弥生時代後期後半の土器と石器等が出土した。主柱穴列①の SPb171 からは 22 の砂岩製の砥石が、主柱穴列③からは 17・18・20・21 の弥生土器、石器が出土している。17 は高杯の杯部である。口縁部は屈曲して外反し、外面にはヘラ削りを施す。18 は平底を明瞭に残した小型の鉢である。20 は SPb191 から出土しているサヌカイト製の石庖丁片である。なお、SPb191 は、主柱穴列②と重複しているため、20 はどちらの柱穴列に属するものか判断できない。19 は中央土坑 SKb19 から出土している砥石である。残存する 3 面とも砥面を形成し、そのうち 1 面には、3 筋の溝状の砥面が形成されている。21・22 は砂岩製の大型の礫石器である。いずれも砥面もしくは磨面を留め、22 は線状の敲打痕が認められる。

SHb06（第 15 図）

Ⅶ東区北半部の第 3 遺構面上で検出した住居跡である。この住居跡は削平により残りが悪く、主柱穴跡 4 基を検出した。周囲には、SHb06 を中心にして直径約 10 mの円内にある、外周柱穴列の一部を





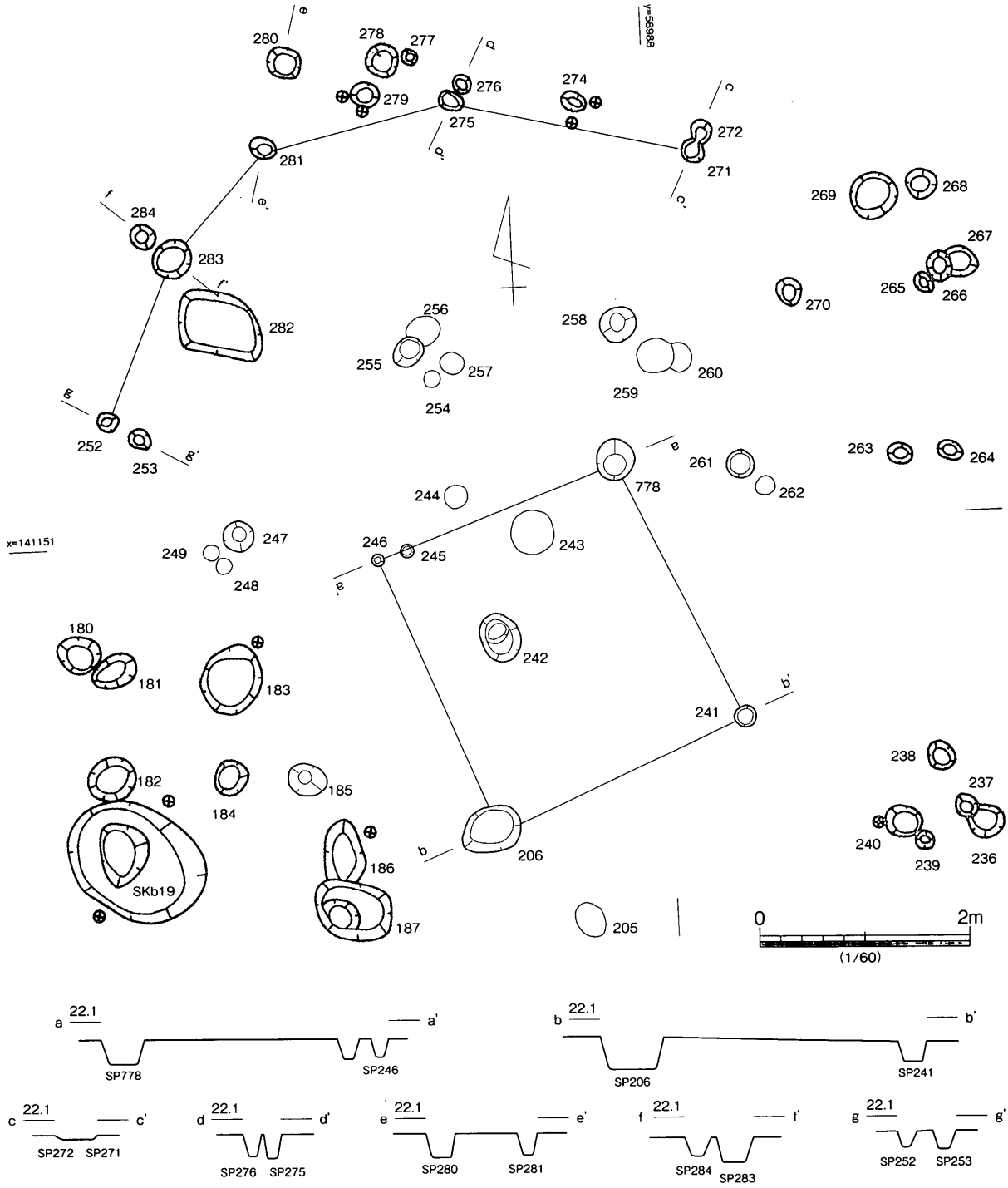


第 14 図　SHb05 出土遺物（2）

検出した。この外周柱穴列はSHb06を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある。ただし、この外周柱穴列は、内側の主柱穴跡との距離が少し開いているため、他の住居跡に伴う柱穴列の可能性がある。

住居跡の平面形は不明であるが、おそらく円形を呈すものと考えられる。住居跡の最大期の長径は、3.6 m以上、短径2.4 m以上を測る。主柱穴は、SPb206・241・246・778の4柱穴跡である。平面は円形ないし楕円形を呈し、径0.1～0.5 m、深さ約0.3 mを測る。

外周柱穴列は、直径約10.0 mの円内の北辺部に当る5基の柱穴跡を検出した。SPb252・283・281・



第15図　SHb06平・断面図

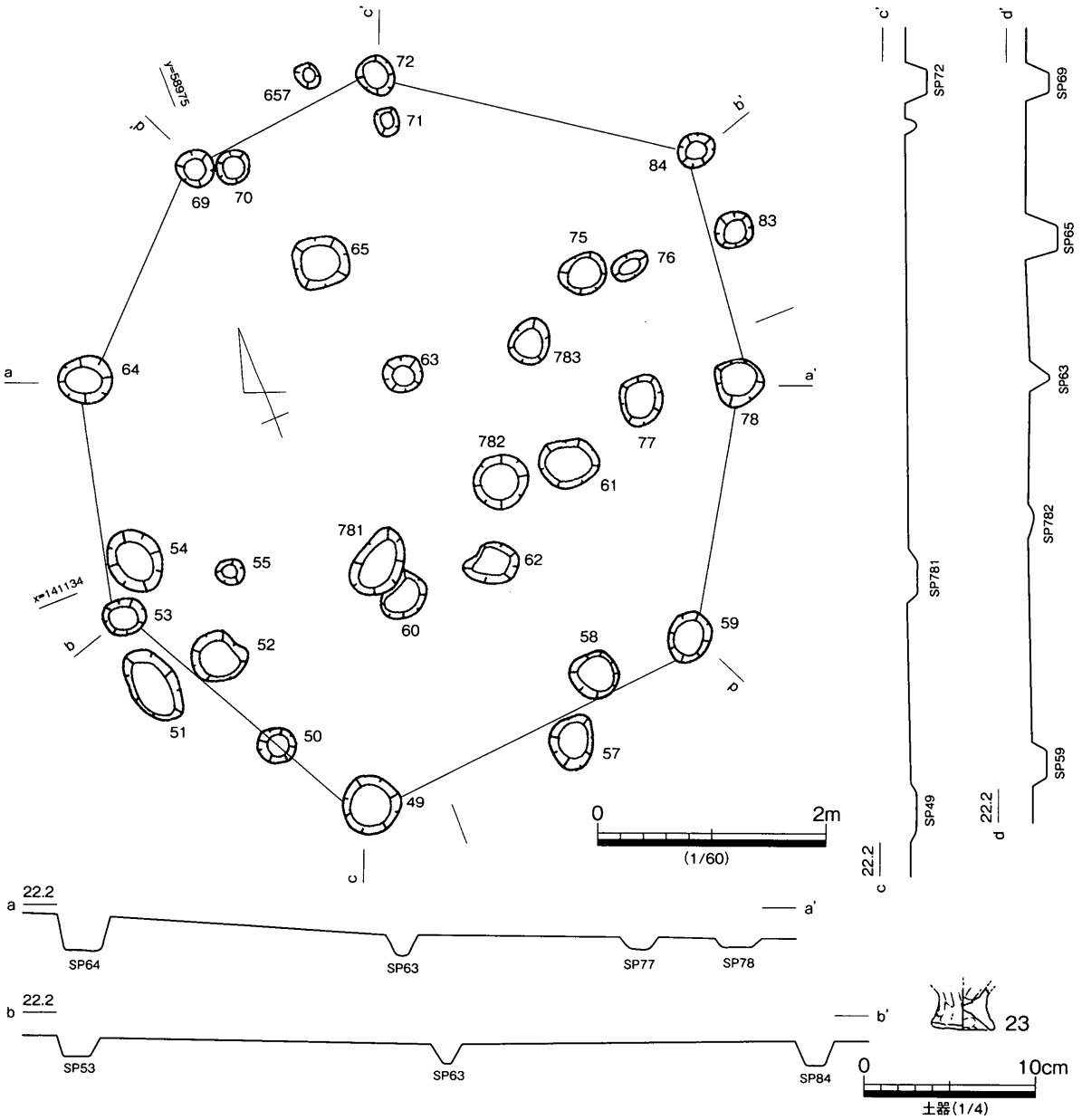
275・271である。柱穴跡の間隔は、1.3～2.3 mを測る。柱穴跡の平面形は円形を呈し、径約0.2 m、深さ約0.2 mを測る。

SHb07（第16図）

Ⅶ東区北端部の第3遺構面上で検出した住居跡である。この住居跡はSHb08、SBb02・03等と重複している。主柱穴跡8基を検出した。また、大きさ直径10.0 m前後の大型の住居跡が推定できる。

住居跡の平面形は不明であるが、主柱穴跡の配置を見る限り、円形を呈すものと考えられる。住居跡の長径は6.0 m以上、短径は5.5 m以上を測る。主柱穴跡は直径約6.0 mの円の中に検出した、SPb49・53・59・64・69・72・78・84である。柱間はかなりバラツキがあり、1.8～3.1 mを測る。柱穴跡の平面形は円形を呈し、径約0.3～0.5 m、深さ約0.2～0.3 mを測る。

出土遺物としては、柱穴跡から弥生時代後期後半以降の土器が少量出土した。23はSPb59から出土



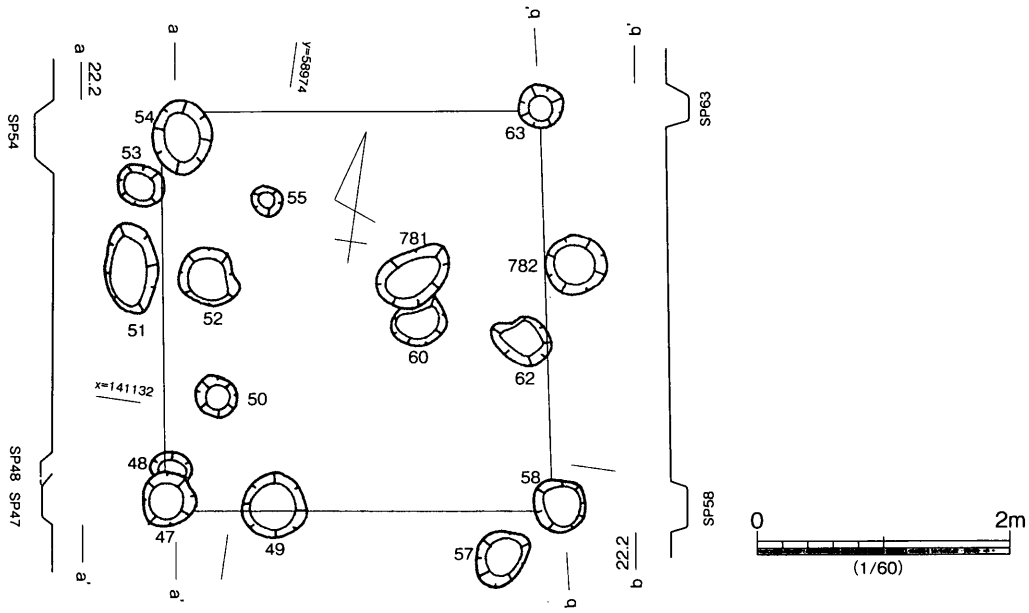
第16図　SHb07平・断面図、出土遺物

した製塩土器の脚台部である。

SHb08（第 17 図）

Ⅶ東区中央の第３遺構面上で検出した住居跡である。この住居跡はSHb07と重複するが、切り合う箇所がないため、その前後関係は不明である。住居跡は削平により残りが悪く、主柱穴跡４基を検出した。

住居跡の平面形は不明である。住居跡の径は、3.4 m以上を測る。主柱穴跡は、SPb47・54・58・63



第 17 図　SHb08 平・断面図

の４柱穴跡である。平面は円形を呈し、径 0.3 ～ 0.5 m、深さ約 0.2 mを測る。出土遺物はSPb54より後掲の第 90 図 166 の弥生土器鉢が出土している。

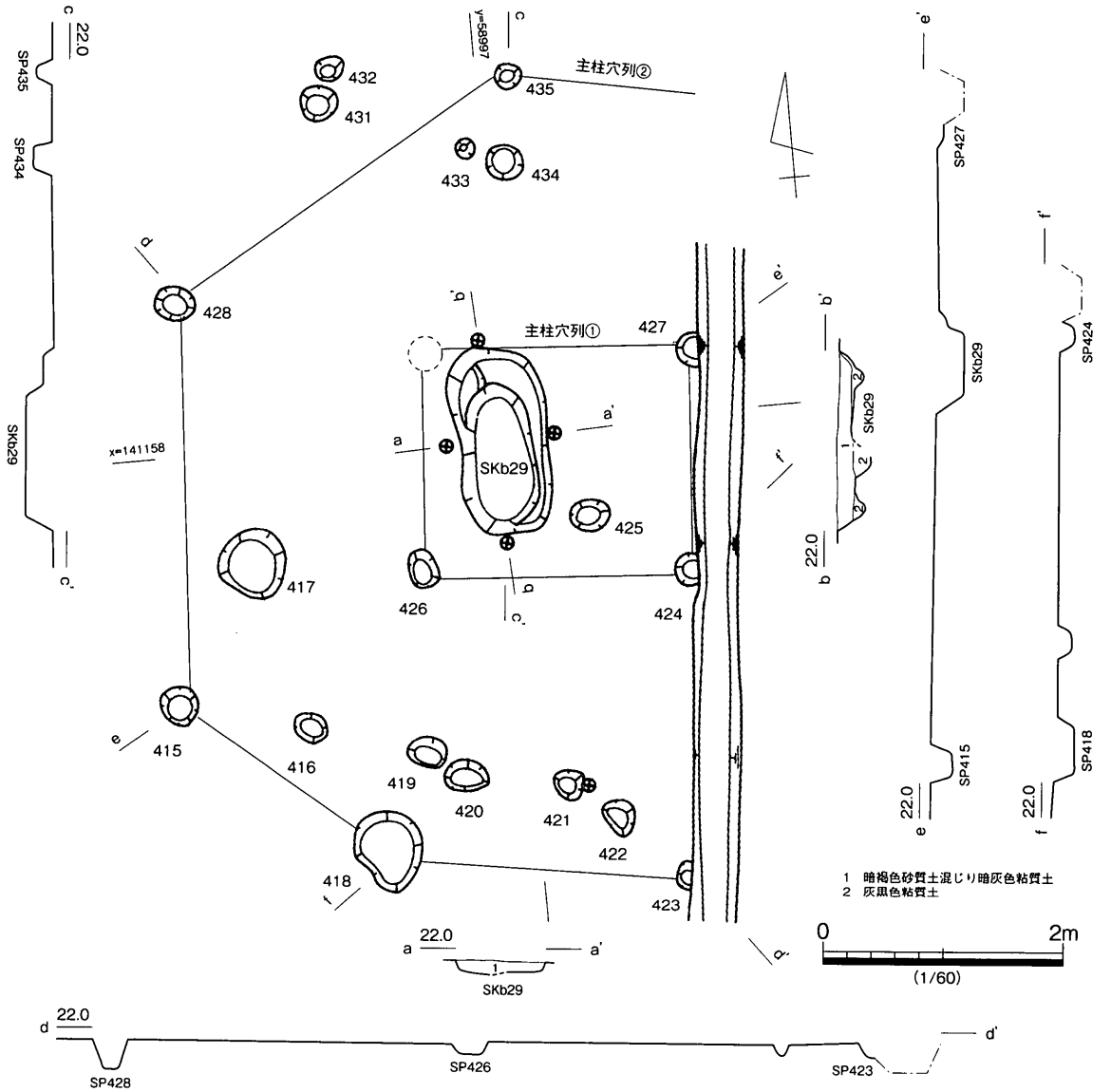
SHb09（第 18 図）

Ⅶ東区中央の東壁際の第３遺構面上で検出した住居跡である。住居跡の東半部は、調査区より外れるため、約 2/3 を検出したのみである。主柱穴跡８基と中央土坑１基を検出した。

住居跡の平面形は不明であるが、おそらく円形を呈すものと考えられる。住居跡の最大期の径は、約 6.4 m以上を測る。主柱穴跡は住居の構造によるものか、２組の主柱穴列を検出した。それを主柱穴列①・②と称する

主柱穴列①は、正方形状に組み合う４主柱穴跡のうち、３柱穴跡を検出した。SPb424・426・427 である。平面形は円形で、径 0.25 ～ 0.3 m、深さ約 0.1 mを測る。主柱穴列②は、主柱穴列①の外側に配され、直径約 6.5 mの円の西半部に、５基の柱穴跡を検出した。SPb415・418・423・428・435 である。柱穴跡の間隔は 2.0 ～ 3.3 mを測り、平面形は円形ないし不整円形を呈し、径 0.2 ～ 0.6 m、深さ約 0.2 mを測る。

床面の西半部には、中央土坑SKb29が位置する。平面形は楕円形状を呈し、底部は若干の凹凸が認められる。断面は２段掘り方の逆台形状を呈する。埋土は２層に分けられ、概ね上層は暗褐色砂質土混じり暗灰色粘質土、下層は灰黒色粘質土を呈する。長径 1.6 m、短径 0.7 m、深さ約 0.3 mを測る。



第 18 図　SHb09 平・断面図

SHb10（第 19 図）

Ⅶ東区中央の第３遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡７基と中央土坑２基を検出した。周囲には、SHb10 を中心にして外周柱穴列を検出した。この外周柱穴列は、SHb10 を取り巻く、周堤の外周に廻らされた柱跡の可能性がある。

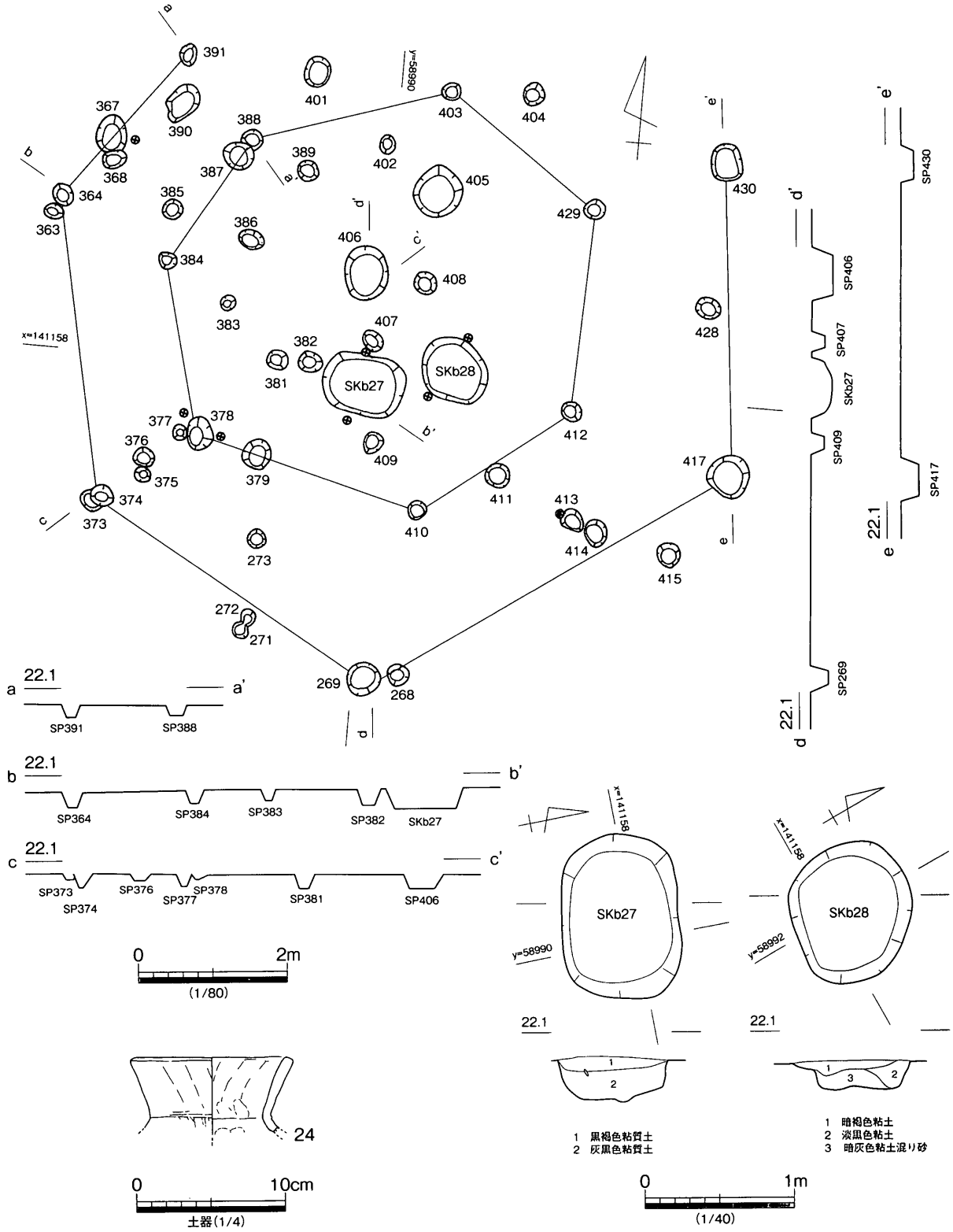
住居跡の平面形は円形を呈すものと考えられ、長径 6.0 m以上、短径 5.5 m以上を測る。

床面上では７基の主柱穴跡を検出した。SPb378・384・388・403・410・429・412 である。各柱穴跡は円形を呈し、柱間は 2.0 ～ 3.0 mを測り、径約 0.2 ～ 0.4 m、深さ約 0.2 mを測る。

床面の南半部には、２基の中央土坑 SKb27・28 を検出した。SKb27 の平面形は、東西に長い楕円形状を呈し、断面は浅いＵ字状を呈する。埋土は２層に分れ、上層は黒褐色粘質土、下層は灰黒色粘質土を呈する。長径 1.1 m、短径 0.8 m、深さ約 0.3 mを測る。SKb28 の平面形は不整形な円形を呈し、断面は凹凸した不整形な逆台形状を呈する。埋土は３層に分かれるが、概ね上層は暗褐色～淡黒色系の粘土、下層は暗灰色粘土混じりの砂である。長径 1.0 m、短径 0.8 m、深さ約 0.2 mを測る。この２基の中央土坑は、時期差が考えられるが、その前後関係については、明らかにできなかった。

外周柱穴列は直径約 10.0 mの円内に、北辺部を除く区間で 6 基の柱穴跡を検出した。SPb269・364・374・391・417・430 である。平面形は円形ないし不整円形を呈し、柱間は 2.5 ～ 5.6 mのバラツキがあり、径約 0.2 ～ 0.5 m、深さ約 0.2 mを測る。

出土遺物としては、弥生時代後期後半以降の土器が少量出土した。24 は中央土坑 SKb27 から出土した壺の口縁部である。



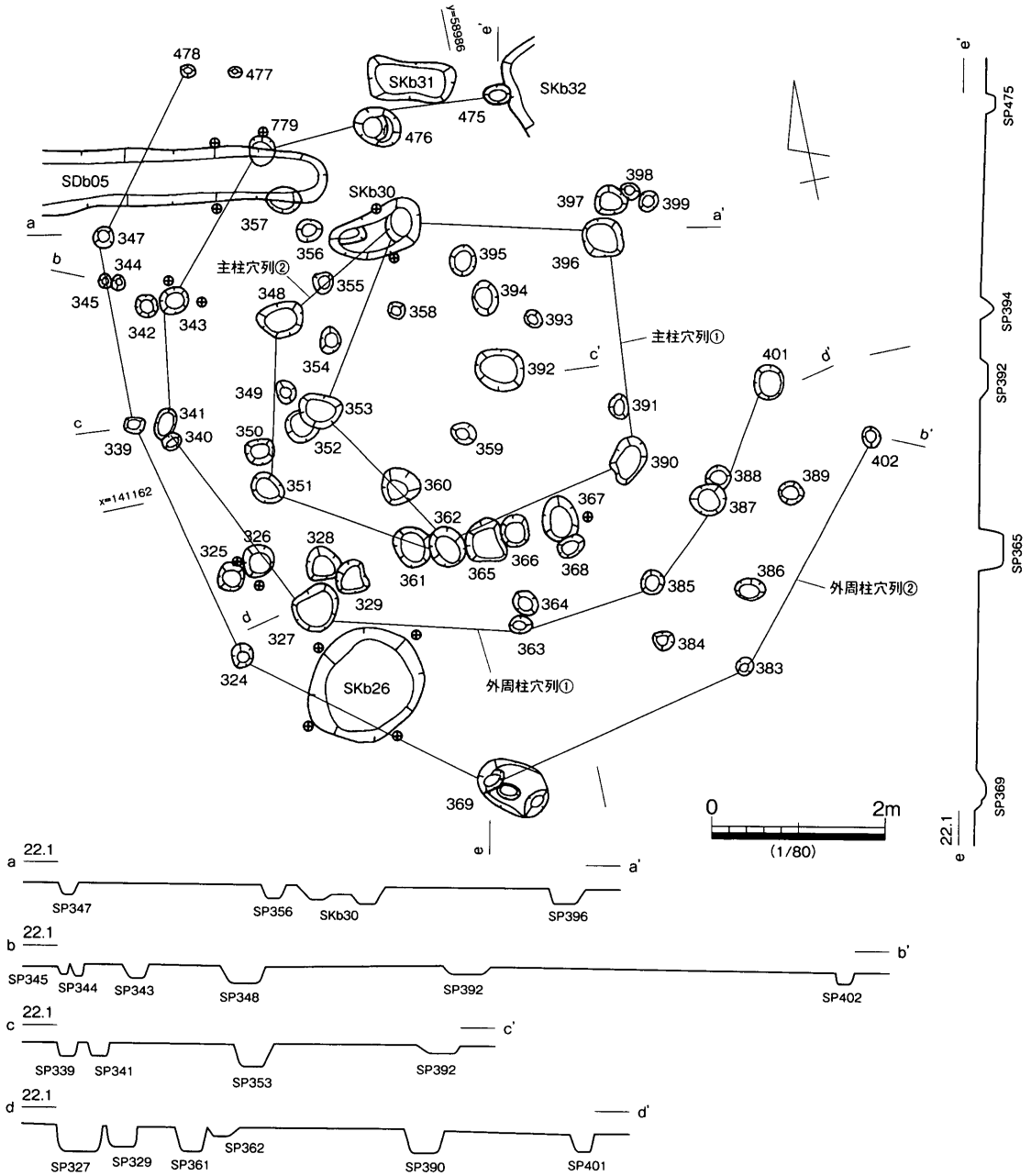
第 19 図　SHb10 平・断面図、出土遺物

SHb11（第 20 図）

Ⅶ東区中央の第３遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡７基と中央土坑１基を検出した。周囲には、SHb11 を中心にして二重の外周柱穴列を検出した。これを外周柱穴列①・②と称する。この外周柱穴列は SHb11 を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある遺構で、二重になっているのは主柱穴跡と同様に、住居の建て替えによるものと考えられる。

住居跡の平面形は円形を呈すものと考えられ、住居跡の最大期の長径は 5.0 m以上、短径 3.5 m以上を測る。この住居跡は建て替えが行われたものと考えられ、２組の主柱穴跡の組み合わせが確認できる。これを主柱穴列①・②と称する。

主柱穴列①は中央土坑を中心にして、５柱穴跡中、北辺部の１柱穴跡を欠く４基の主柱穴跡を検出



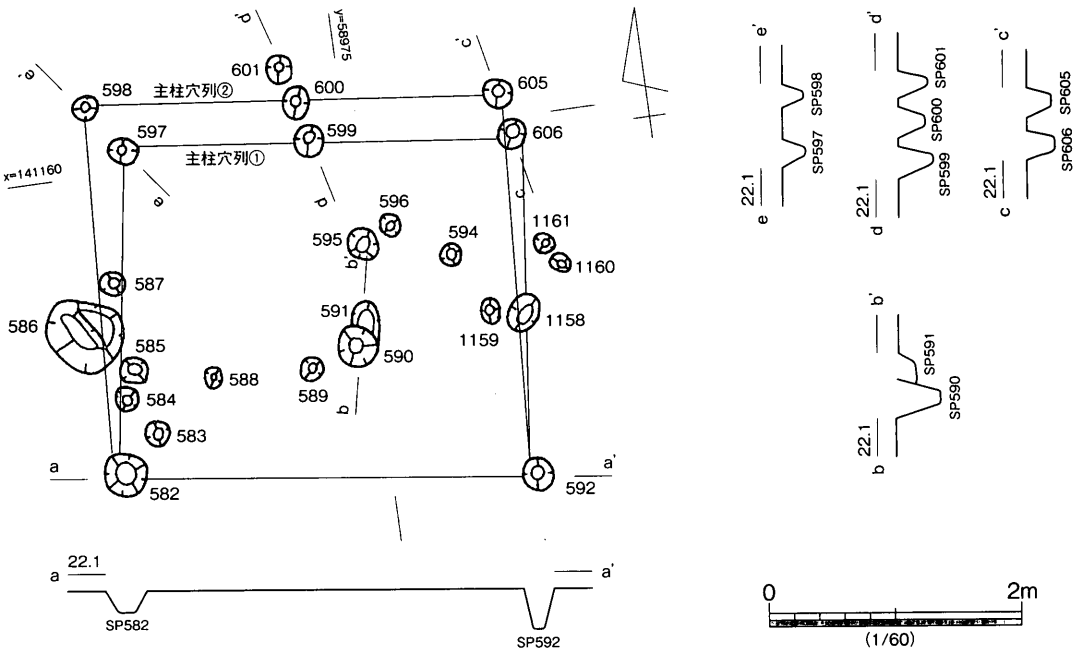
第 20 図　SHb11 平・断面図

した。ただし、北辺部の１柱穴跡については、柱穴跡を切り込んでいるSKb30の底部に柱穴跡の痕跡があり、その箇所に柱穴跡が位置していた可能性が高い。主柱穴列①に伴うのは、SPb353・362・390・396である。平面形は円形ないし不整円形を呈し、柱間は比較的均一で約2.3ｍを測り、径約0.4～0.5ｍ、深さ約0.3ｍを測る。主柱穴列②は、主柱穴列①の東半部の柱穴跡を共有し、主柱穴列①を西に拡張するように楕円形状に６基の柱穴跡で構成される。北辺部の１柱穴跡を欠く、５基の主柱穴跡を検出した。SPb348・351・362・390・396である。平面形は円形ないし不整円形を呈し、柱間は2.0～2.5ｍを測り、柱穴跡の径は約0.3～0.5ｍ、深さ約0.3ｍを測る。

床面では、中央土坑SPb392を検出した。平面形は楕円形を呈し、断面は逆台形状を呈する。長径0.6ｍ、短径0.5ｍ、深さ約0.1ｍを測る。

外周柱穴列①は直径約6.5ｍの円内の、東辺部を除く区間で10基の柱穴跡を検出した。SPb327・341・343・363・385・387・401・475・476・779である。平面形は円形ないし不整円形を呈し、柱間は1.5～2.5ｍとバラツキがあり、柱穴の径は約0.2～0.5ｍ、深さ約0.2ｍを測る。外周柱穴列②は直径約9.0ｍの円内の、東半部を除く区間で７基の柱穴跡を検出した。SPb324・339・347・369・383・402・478である。平面形は円形ないし不整円形を呈し、柱間は2.0～3.0ｍとバラツキがあり、柱穴跡の径は約0.2ｍ、深さ約0.2ｍを測る。

最後に主柱穴列と外周柱穴列の関係を整理すると、その位置関係から、主柱穴列①には外周柱穴列①が伴い、主柱穴列②には外周柱穴列②が伴うことが考えられる。ただし、柱穴跡が切り合わないため、



第21図　SHb13平・断面図

その前後関係は不明である。なお、主柱穴列②は、主柱穴列①を増築した際の柱列の可能性がある。

SHb13（第21図）

Ⅶ西区北半部の第３遺構面上で検出した住居跡である。削平を受けたためか残りが悪く、主柱穴のみを検出した。この住居跡は建て替えが行われたものと考えられ、２組の主柱穴跡の組み合わせが確認できる。仮にこれを主柱穴列①・②と称する。

住居跡の平面形は円形を呈するものか、方形になるか判断できない。住居跡の最大期の長径は3.3 m以上、短径2.9 m以上を測る。

主柱穴列①は、方形に組み合う6柱穴跡を検出した。隅柱のSPb582・592・597・606とSPb599・1158である。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は1.3～3.3 mを測り、柱径0.2～0.3 m、深さ0.2～0.3 mを測る。主柱穴列②は、方形に組み合う6柱穴跡を検出した。隅柱のSPb582・592・598・605である。なお、SPb582・592は、主柱穴列①と共有して使用される。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は1.4～3.3 mを測り、柱径0.2～0.3 m、深さ0.2～0.3 mを測る。

なお、SPb590・591は、床面の中央近くに位置し、中央土坑の可能性がある。

SHb14（第22図）

Ⅶ東・西区中央の第3遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡13基と中央土坑1基を検出した。

住居跡の平面形は円形を呈すものと考えられ、住居跡の最大期の長径は6.8 m以上、短径6.5 m以上を測る。この住居跡は2度の建て替えが行われたものと考えられ、3組の主柱穴跡の組み合わせが確認できる。これを主柱穴列①～③と称する。

主柱穴列①は、五角形状に配した5基の柱穴跡を検出した。SPb608・610・612・615・620である。平面形は円形を呈し、柱間は1.6～3.0 mを測り、各柱穴跡の径は約0.2～0.3 m、深さ約0.2 mを測る。主柱穴列②は、直径約6.5 mの円内で、6基の柱穴跡を検出した。SPb308・334・603・614・621・1162である。各柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は2.0～4.0 mとバラツキがあり、径約0.2～0.4 m、深さ約0.1～0.2 mを測る。主柱穴列③は、直径約7.0 mの円内で、6基の柱穴跡を検出した。SPb308・335・604・613・621・1162である。このうちSPb308・621・1162は主柱穴列②と共有して使用される。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は3.0～4.0 mとバラツキがあり、径約0.2～0.4 m、深さ約0.1～0.2 mを測る。

床面中央には、中央土坑SKb56を検出した。SKb56の平面形は円形状を呈し、断面は浅いU字状を呈する。埋土は3層に分れるが、概ね上層は暗灰褐色粘質土、下層は暗灰色粘質土を呈する。径1.0 m、深さ約0.2 mを測る。

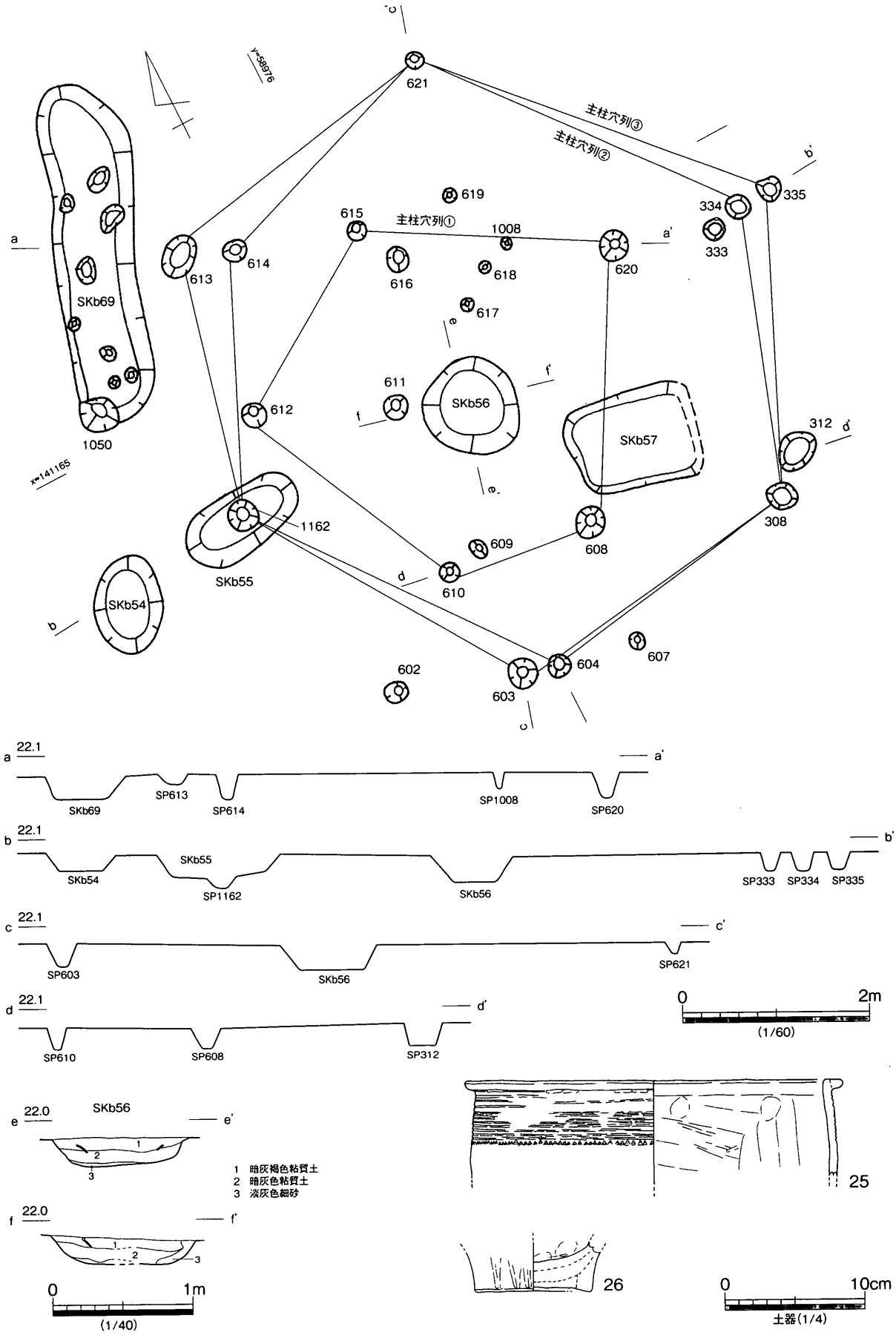
出土遺物としては、弥生時代中期前半の土器が出土している。25・26は中央土坑SKb56から出土した甕である。25は口縁部に突帯を貼付ける瀬戸内型の甕である。口縁部下に多条化した櫛描直線文、その下に三角刺突文1条を施す。26は平底の甕底部である。

SHb15（第23図）

Ⅶ東区中央の東壁際の第3遺構面上で検出した住居跡である。住居跡の東半部は、調査区より外れるため、約2/3を検出したのみである。主柱穴跡16基と中央土坑1基を検出した。

住居跡の平面形は、おそらく円形を呈すものと考えられる。住居跡の最大期の径は6.5 m以上を測る。

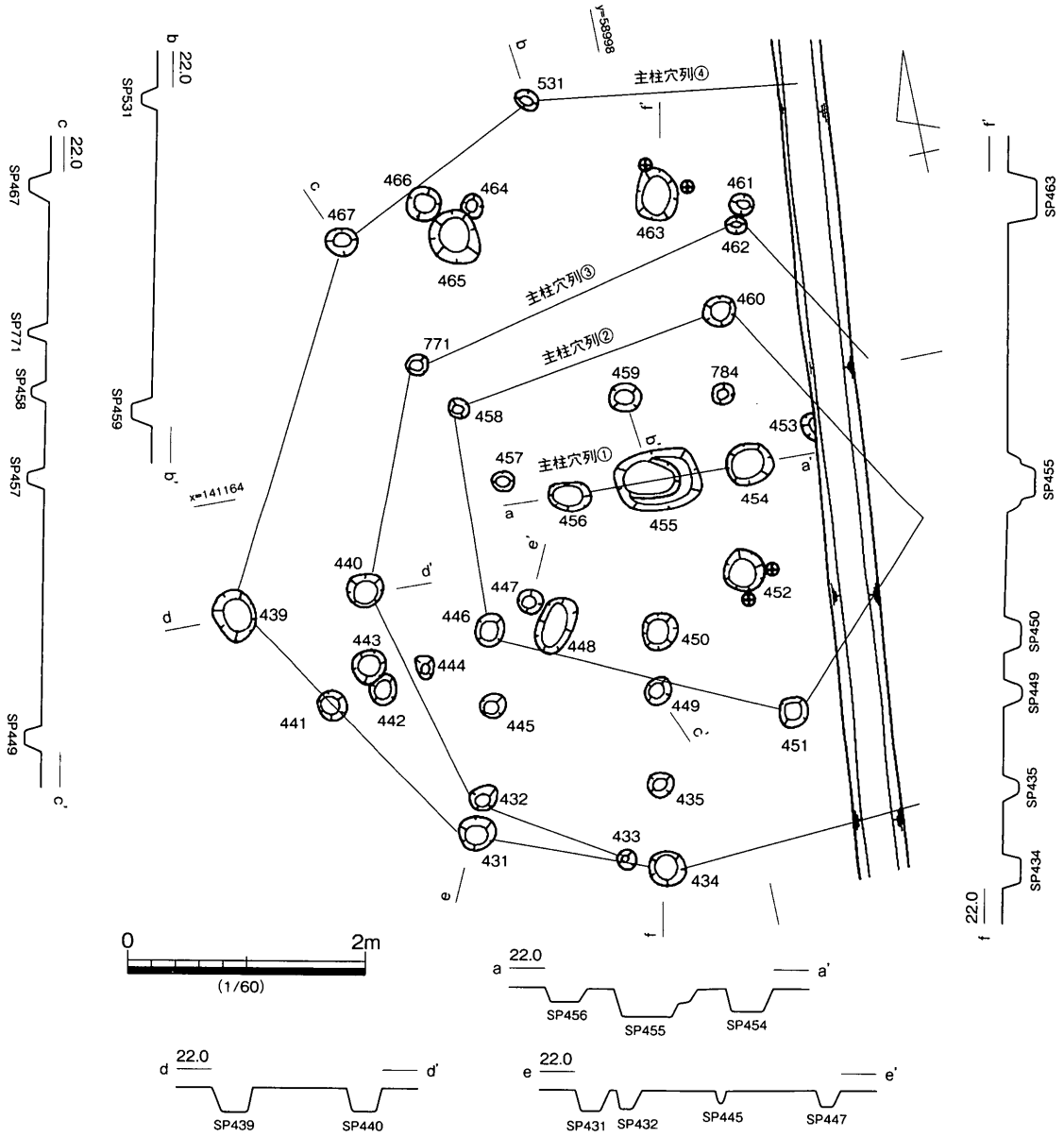
主柱穴列①に伴うのは、中央土坑SPb455を挟んだ両端に位置するSPb454・456の柱穴跡である。平面形は円形を呈し、柱間は約1.5 mを測り、径約0.3～0.4 m、深さ約0.1～0.2 mを測る。この住居跡は3～4回の建て替えが行われたものと考えられ、4組の主柱穴の組み合わせが確認できる。これを主柱穴列①～④と称する。主柱穴列②は、SPb455を中心にして、約3.5 mの円内に5基の柱穴跡が推定できるが、東辺の1基を除く4基の柱穴跡を検出した。SPb446・451・458・460である。平面形は円



第22図　SHb14 平・断面図、出土遺物

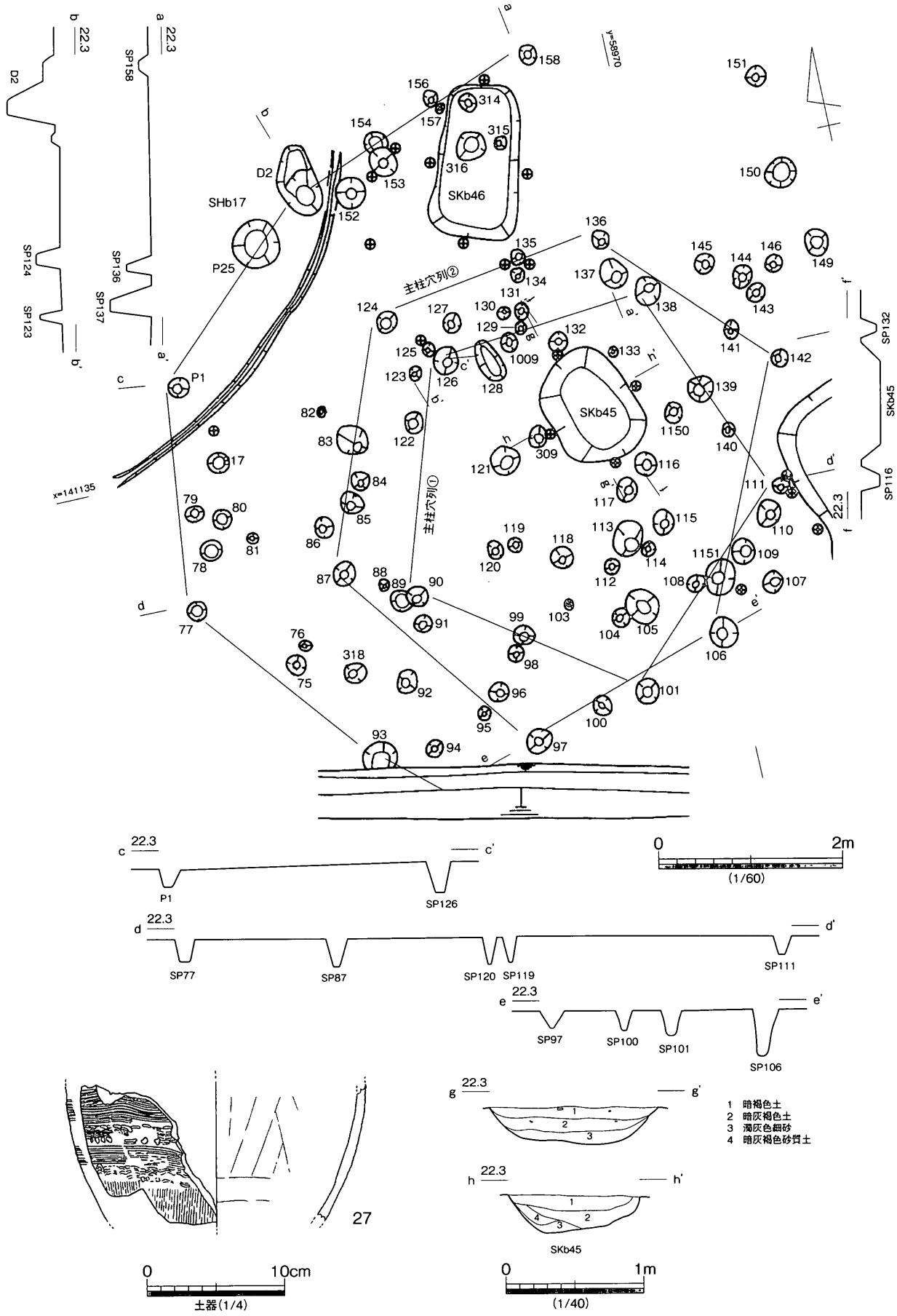
形を呈し、柱間は 1.8 ～ 2.7 mを測り、各柱穴跡の径は約 0.1 ～ 0.2 m、深さ約 0.2 mを測る。主柱穴列③は直径約 5.5 mの円内の、東辺を除く区間で、５基の柱穴跡を検出した。SPb432・433・440・462・771 である。平面形は円形を呈し、柱間は 1.3 ～ 3.0 mを測り、各柱穴跡の径は約 0.1 ～ 0.2 m、深さ約 0.2 mを測る。主柱穴列④は直径約 6.5 mの円内の、東半部を除く区間で、５基の柱穴跡を検出した。SPb431・434・439・467・531 である。平面形は円形を呈し、柱間は 1.5 ～ 3.2 mとバラツキがあり、柱穴跡の径は約 0.2 ～ 0.4 m、深さ約 0.2 mを測る。

床面では、中央土坑 SPb455 を検出した。SPb455 の平面形は隅丸方形状を呈し、断面は２段掘り方



第 23 図　SHb15 平・断面図

の逆台形状を呈する。長径 0.7 m、短径 0.52 m、深さ約 0.26 mを測る。この土坑は、主柱穴列①・②、④のほぼ中央に位置していることから、比較的長期間使用されていた可能性が高い。



第 24 図　SHb16 平・断面図、出土遺物

SHb16（第 24 図）

Ⅶ西区南端部の南壁際の第３遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡 11 基と中央土坑１基を検出した。また、周囲には、SHb16 を中心にして外周柱穴列を検出した。この外周柱穴列は SHb16 を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある。

住居跡の平面形は、おそらく円形を呈すものと考えられる。住居跡の最大期の径は、5.6 m以上を測る。この住居跡は建て替えが行われたものと考えられ、２組の主柱穴の組み合わせが確認できる。これを主柱穴列①・②と称する。

主柱穴列①では、約 4.1 mの円内に５基の柱穴跡を検出した。SPb90・101・111・126・138 である。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は 2.5 ～ 2.7 mを測り、柱穴跡の径は約 0.2 ～ 0.3 m、深さ約 0.3 mを測る。主柱穴列②は、主柱穴列①と重複し、約 5.5 mの円内に６基の柱穴跡を検出した。SPb87・97・106・124・136・142 である。平面形は円形を呈し、柱間は 2.3 ～ 3.1 mを測り、柱穴跡の径は約 0.2 ～ 0.3 m、深さ約 0.2 ～ 0.5 mを測る。

床面には、中央土坑 SKb45 を検出した。SKb45 の平面形は楕円形状を呈し、断面は隅丸の逆台形状を呈する。埋土は４層に細分できるが、概ね３層にまとめられ、上層は暗褐色土、中層は暗灰褐色土、下層は濁灰色細砂である。長径 1.2 m、短径 0.9 m、深さ約 0.3 mを測る。

外周柱穴列は、東半部を除く、直径約 8.4 mの円内で５基の柱穴跡を検出した。SPb77・93・158 及び SHb17 内の２柱穴跡である。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は比較的均一で、2.5 ～ 2.7 mを測り、柱穴跡の径は約 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mを測る。

最後に主柱穴列と外周柱穴列の関係を整理する。主柱穴列①・②については建て替えにより、時期差が考えられるが、その前後関係については両者が切り合わないために判断ができない。また、検出した外周柱穴列が、どの主柱穴列に伴うかについても明らかでない。

出土遺物としては、弥生時代中期前半の土器が出土した。27 は中央土坑 SKb45 から出土した直口鉢である。

SHb17（第 25 図）

Ⅶ西区南端部の第３遺構面上で検出した住居跡である。この住居跡は削平により残りが悪く、埋土は消失しているが、床面上で主柱穴等の遺構を検出した。この住居跡は３度程度の建て替えが行われたものと考えられ、４組の主柱穴跡の組み合わせを確認できる。これを主柱穴列①～④と称する。

円形住居跡の数度の建て替えによるものか、形状は不整形で南西に歪んだ楕円形状を呈している。床面には貼り床を施し、その上面から壁溝跡、主柱穴跡、中央土坑等の諸遺構を検出した。

壁溝跡は、東半部において２時期の遺構を検出した。壁溝①、壁溝②と称する。壁溝①は、北端部で検出した幅広で不整形な壁溝である。検出長約 2.0 m、幅 0.2 ～ 0.5 m、深さ約 0.1 mを測る。壁溝②は東半部で検出した。検出長約 5.3 m、幅 0.1 m、深さ約 0.1 mを測る。両者は切り合わないため、その前後関係については不明である。

検出した主柱穴跡は、先述したように主柱穴列①～④に分けられる。主柱穴列①に伴う遺構としては、約 2.6 mの円内に４基の柱穴跡を検出した。P29・35・38・44 である。柱穴の平面形は円形ないし楕円形状を呈し、柱間は 2.0 mを測り、柱穴の径は約 0.25 ～ 0.7 m、深さ約 0.2 mを測る。主柱穴列②は、主柱穴列①と重複し、約 3.3 mの円内に５基の柱穴跡を検出した。P3・12・19・34・37 である。柱穴

跡の平面形は円形を呈し、柱間は均一で2.0 mを測り、柱穴跡の径は約0.2～0.4 m、深さ約0.5 mを測る。これらの柱穴跡の中で、P3・12・34・37からは柱材を検出した。主柱穴列③は、約4.5 mの円内に6基の柱穴跡を検出した。P9・13・21・25・27・50である。各柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は2.4～3.0 mを測り、各柱穴跡の径は約0.2～0.5 m、深さ約0.4 mを測る。主柱穴列④は、最も外側にある主柱穴列で、主柱穴列③と重複し、約5.5 mの若干南西に歪んだ円内に8基の柱穴跡を検出した。P1・8・15・23・22・25・27・47である。なお、P25・27は主柱穴列③と併用していた可能性がある。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は1.3～2.5 mを測り、柱穴跡の径は約0.2～0.5 m、深さ約0.3～0.4 mを測る。

床面では中央土坑K1を検出した。平面形は不整形な楕円形状を呈し、断面は隅丸の逆台形状を呈する。埋土は4層に細分できるが、概ね2層にまとめられる。上層は暗黄灰褐色粘土、下層は暗灰褐色粘土である。長径1.8 m、短径1.0 m、深さ約0.1 mを測る。この中央土坑は規模及び配置等から、主柱穴列③ないし④の時期に伴うものと考えられる。なお、主柱穴列①、②の時期に伴う中央土坑については、床面中央に位置する、P6の可能性がある。P6の平面は楕円形を呈し、断面は逆台形状を呈する。長径0.6 m、短径0.5 m、深さ0.3 mを測る。

出土遺物としては土器、石器があげられる。28～38は、弥生時代後期前半～後期中頃の弥生土器である。28・29は壺である。30は甕である。口縁部は外上方に短く延びて、端部を平坦に仕上げている。体部は球体気味に底部へ続き、底部は突出気味の平底を呈する。32・33は高杯の杯部、34は高杯の脚部である。35・36は脚台付の製塩土器である。35の外面には、縦方向のヘラ削りを顕著に施している。39～41は中期中頃の土器で、混入したものと考えられる。43はサヌカイト製の平基式の石鏃、44はサヌカイト製の楔形石器の削片である。

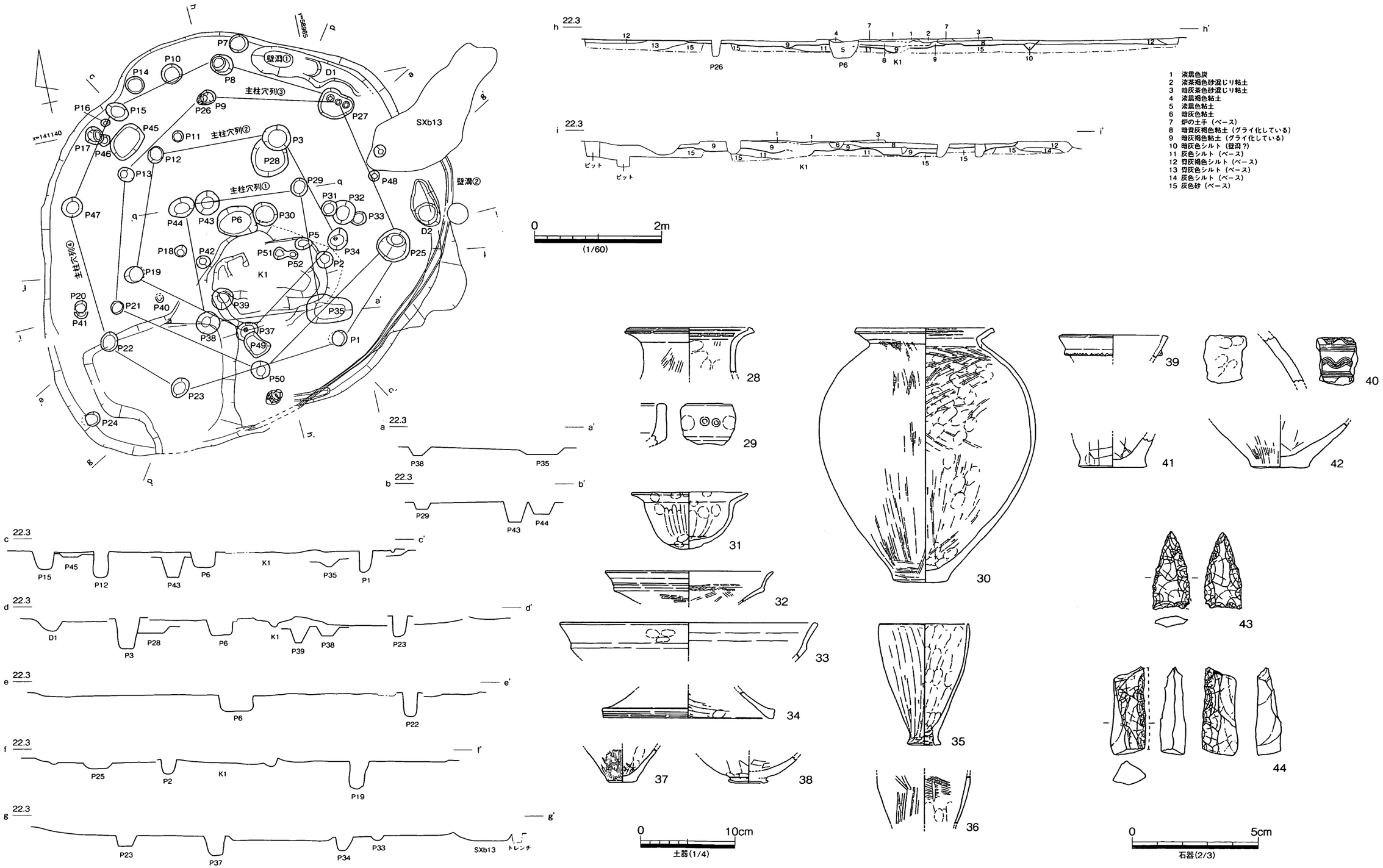
SHb18（第26図）

Ⅶ東区中央の第3遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡10基を検出した。周囲には、SHb18を中心にして外周柱穴列を検出した。この外周柱穴列はSHb18を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある遺構である。

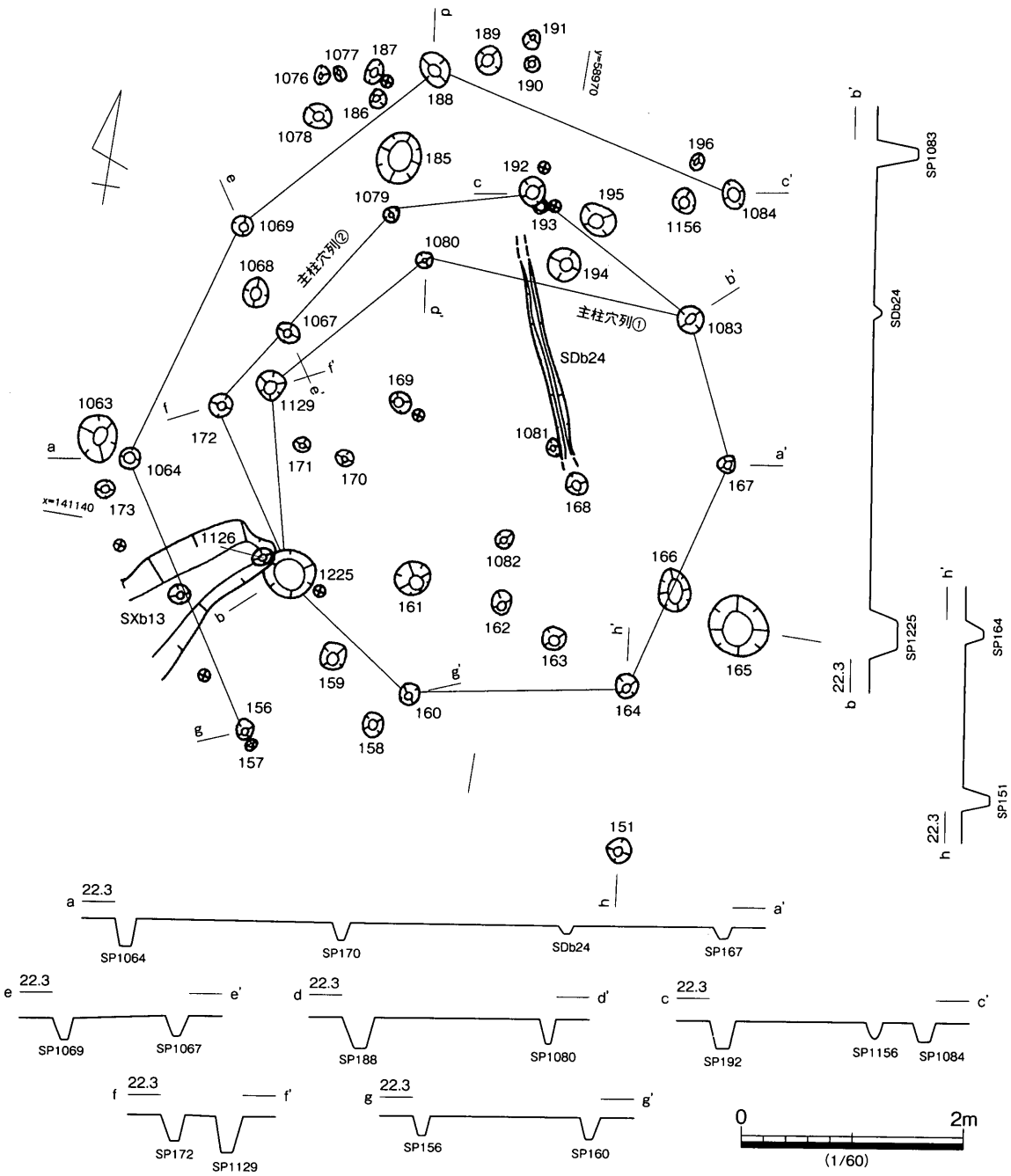
住居跡の平面形は円形を呈すものと考えられる、住居跡の最大期の長径は5.0 m以上、短径4.0 m以上を測る。この住居跡は増築が行われたものと考えられ、2組の主柱穴の組み合わせが確認できる。これを主柱穴列①・②と称する。

主柱穴列①は、直径4.4 mの円内に7基の主柱穴跡を検出した。SPb160・164・167・1080・1083・1129・1225である。平面形は円形を呈し、柱間は1.4～2.5 mを測り、径約0.2～0.5 m、深さ0.2～0.3 mを測る。主柱穴列②は、主柱穴列①の東半部の柱穴跡を共有し、主柱穴列①の西側を拡張するように、楕円形状に8基ないし9基の柱穴跡で構成される。SPb160・164・167・172・192・1067・1079・1083・1225である。平面形は円形を呈し、柱間は1.4～2.2 mを測り、柱穴跡の径は約0.2～0.5 m、深さ0.2～0.3 mを測る。

外周柱穴列は直径約6.5 mの円内の、東半部を除く区間で5基の柱穴跡を検出した。SPb156・188・1064・1069・1084である。平面形は円形を呈し、柱間は2.2～2.9 mを測り、柱穴跡の径は約0.2～0.3 m、深さ0.2～0.3 mを測る。



第25図　SHb17 平・断面図、出土遺物



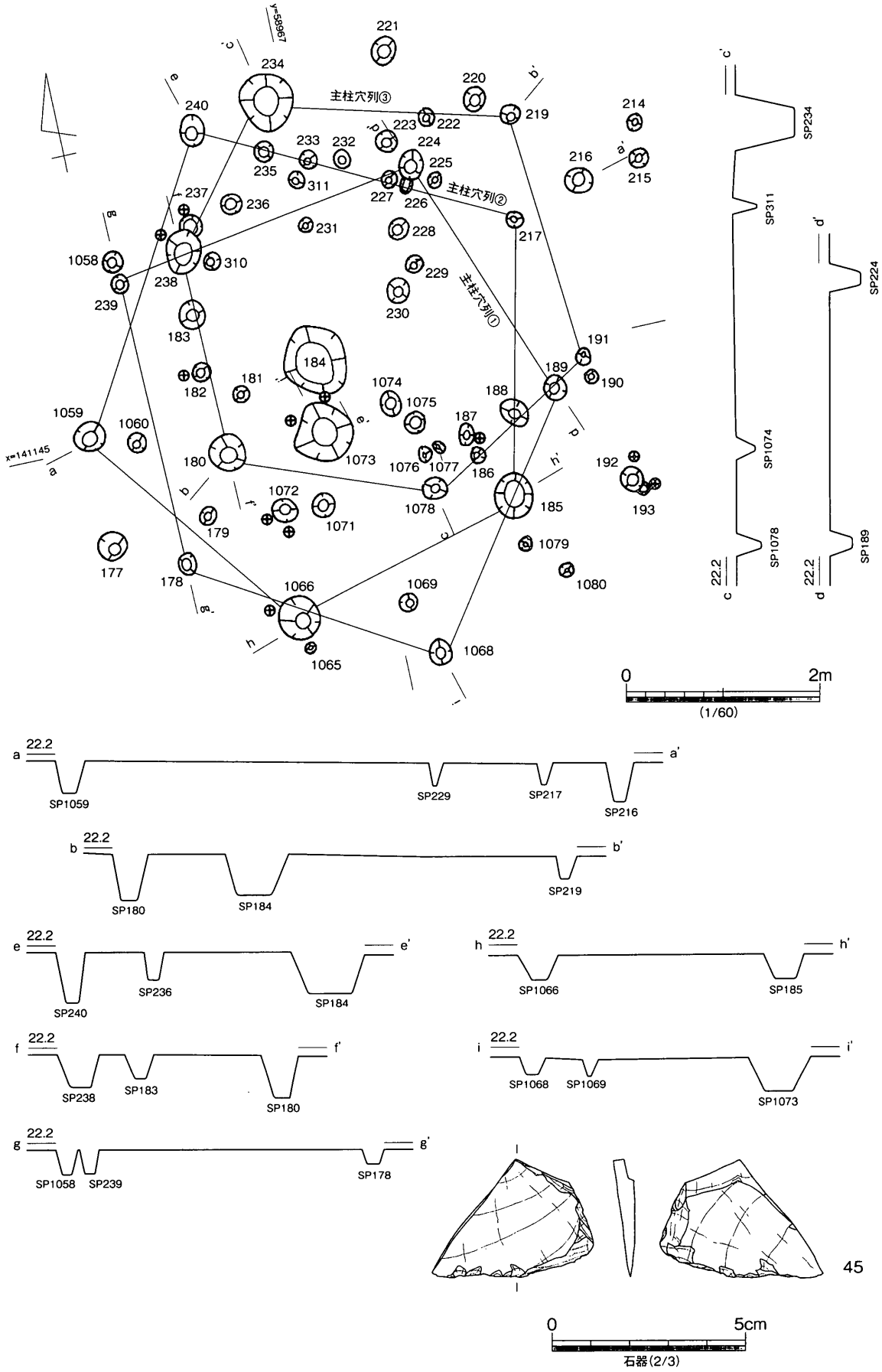
第26図　SHb18平・断面図

SHb19（第27図）

Ⅶ西区南半部の第3遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡16基を検出した。この住居跡は増築が行われたものと考えられ、3組の主柱穴の組み合わせが確認できる。主柱穴列①～③と称する。

住居跡の平面形は円形を呈すものと考えられ、住居跡の最も大きな時期では、長径4.7 m以上、短径4.3 m以上を測る。

主柱穴列①は直径約4.7 mの円内に、5基の柱穴跡を検出した。SPb178・189・224・239・1068である。平面形は円形を呈し、柱間は2.5～3.0 mを測り、柱穴の径は約0.2～0.4 m、深さ約0.2 mを測る。主柱穴列②は、主柱穴列①を北に僅かに増築した後の柱穴跡列である。直径約4.7 mの円内で5基の柱

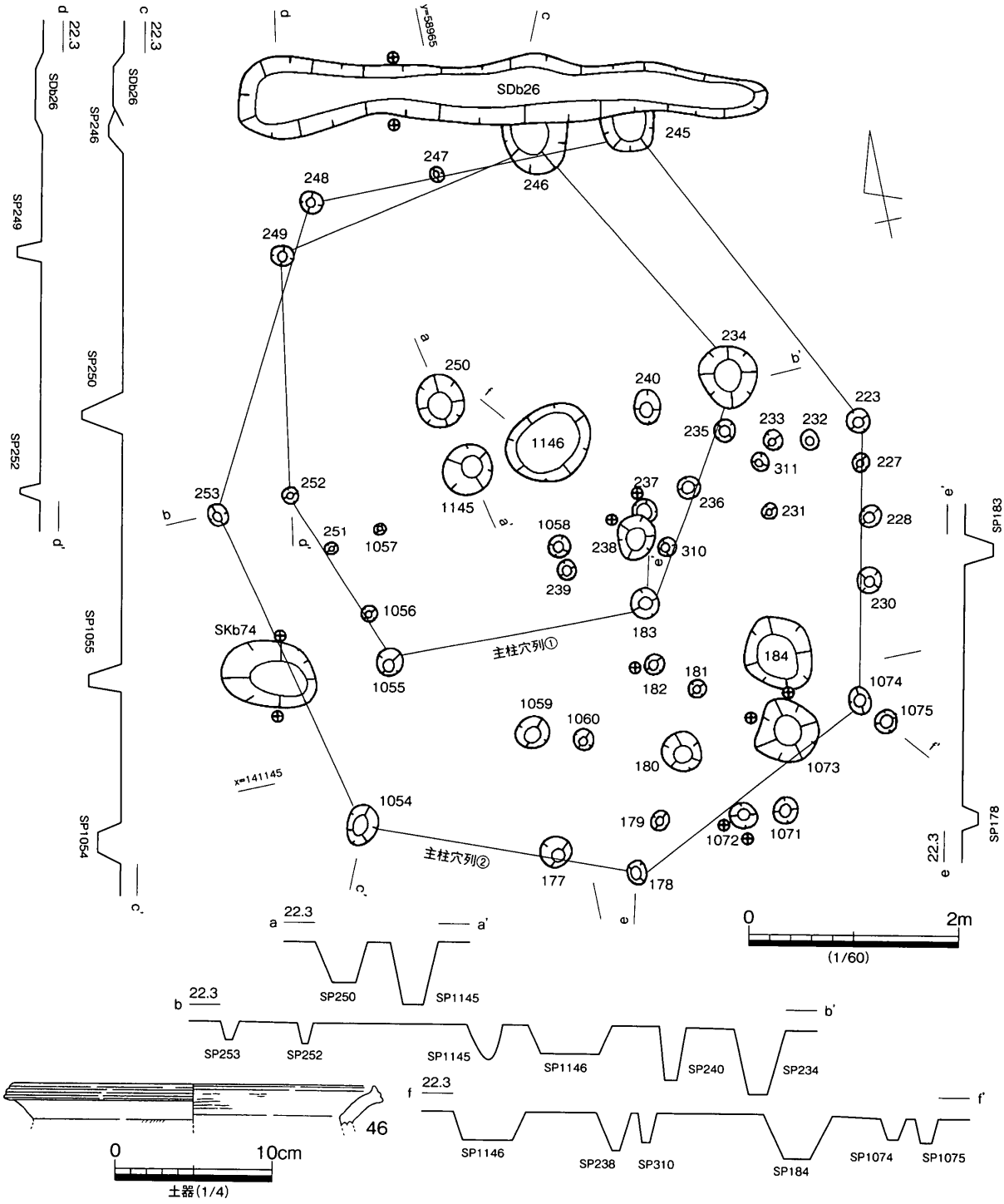


第 27 図　SHb19 平・断面図、出土遺物

穴跡を検出した。SPb185・217・240・1059・1066等が考えられる。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は2.6～3.3 mを測り、径約0.2～0.4 m、深さ約0.2～0.4 mを測る。

出土遺物としては、少量の石器が出土している。45は主柱穴列②のSPb240から出土した、サヌカイト製の楔形石器片ないし削器片である。

SHb20（第28図）



第28図　SHb20平・断面図、出土遺物

Ⅶ西区南半部の第３遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡 13 基と中央土坑３基を検出した。この住居跡は建て替えが行われたものと考えられ、２組の主柱穴の組み合わせが確認できる。

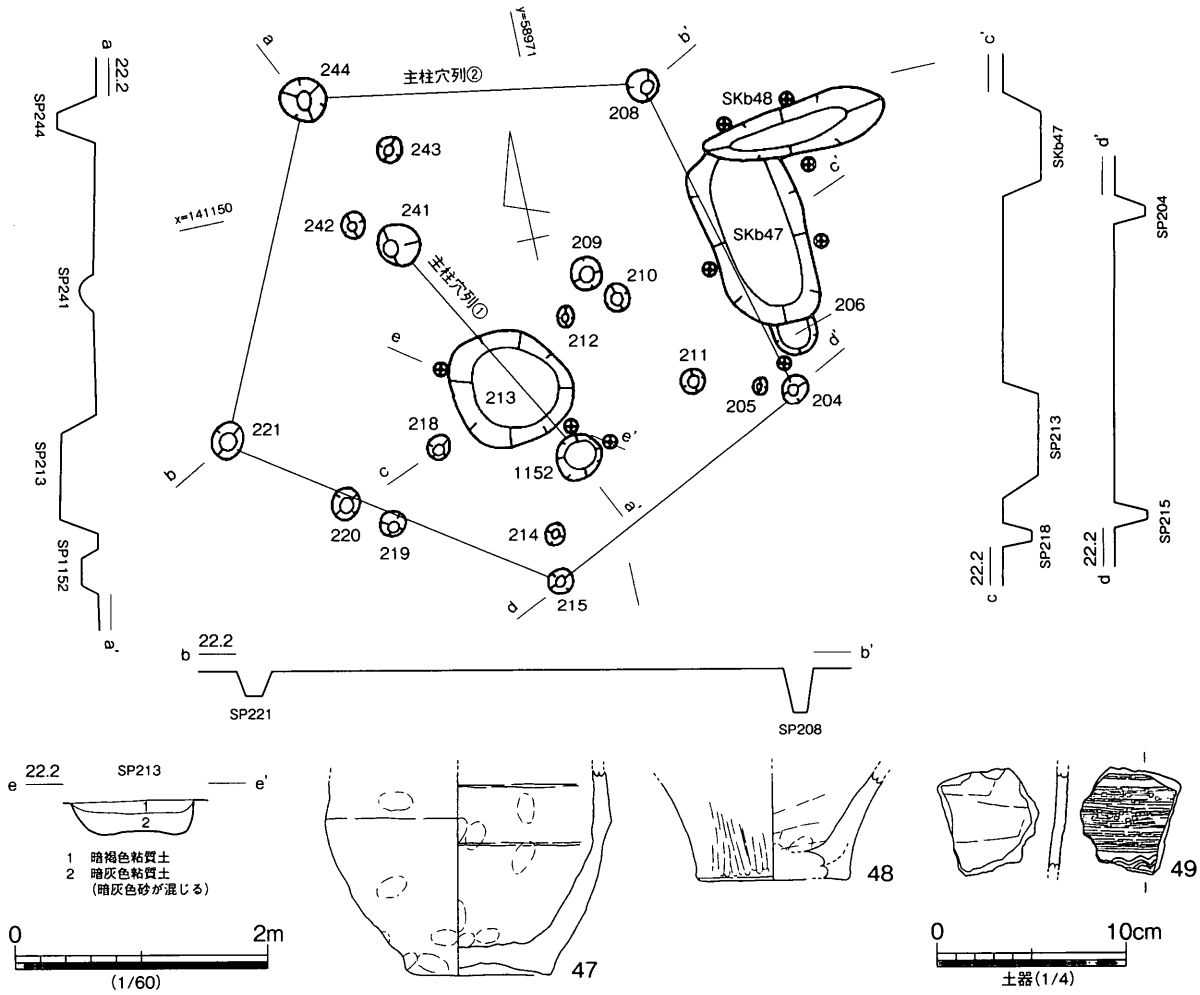
住居跡の平面形は円形を呈すものと考えられ、住居跡の最も大きな時期で、長径 7.0 m以上、短径 6.2 m以上を測る。２組の主柱穴を主柱穴列①・②と称する。

主柱穴列①は、直径 4.5 mの円内に六角形状に配した６基の柱穴跡を検出した。SPb183・234・246・249・252・1055 である。平面形は円形を呈し、柱間は 2.0 ～ 2.8 mを測り、柱穴跡の径は約 0.2 ～ 0.6 m、深さ約 0.3 ～ 0.5 mを測る。主柱穴列②は、直径約 7.0 mの円内で７基の柱穴跡を検出した。SPb178・223・245・248・253・1054・1074 である。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は 2.7 ～ 3.5 mを測り、径約 0.2 ～ 0.5 m、深さ約 0.2 ～ 0.4 mを測る。

床面では、中央土坑 SPb250・1145・1146 を検出した。SPb250 の平面は円形、断面はＵ字状を呈する。径 0.5 m、深さ約 0.4 mを測る。SPb1145 の平面は円形、断面はＵ字状を呈する。径 0.5 m、深さ約 0.6 mを測る。SPb1146 の平面は楕円形、断面は逆台形状を呈する。長径 0.8 m、深さ約 0.3 mを測る。

出土遺物としては、弥生時代後期前半の土器が出土した。46 は、中央土坑 SPb250 から出土した甕の口縁部である。口縁部は外上方に屈曲させ、端部は上下に肥厚し、数条の凹線文を施している。

SHb21（第 29 図）



第 29 図　SHb21 平・断面図、出土遺物

Ⅶ西区南半部の第３遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡７基と中央土坑１基を検出した。

住居跡の平面形は、円形を呈すものと考えられ、径 4.2 m以上を測る。主柱穴は、２組の主柱穴の組み合わせを確認した。これを主柱穴列①・②と称する。

主柱穴列①は、中央土坑を南北に挟むように２基の柱穴跡を検出した。SPb241・1152 である。平面形は円形を呈し、柱間は約 2.2 mを測り、柱穴跡の径は約 0.3 m、深さ約 0.2 mを測る。主柱穴列②は、直径 4.2 mの円内に五角形状に配した５基の柱穴跡を検出した。SPb204・208・215・221・244 である。平面形は円形を呈し、柱間は 2.5 ～ 3.0 mを測り、柱穴跡の径は約 0.2 ～ 0.4 m、深さ約 0.2 ～ 0.4 mを測る。

床面では、中央土坑 SPb213 を検出した。平面は円形、断面は逆台形状を呈する。径 1.0 m、深さ約 0.3 mを測る。

出土遺物としては、弥生時代中期前半の土器が出土した。47 ～ 49 は、中央土坑 SPb213 から出土した弥生土器である。47 は上げ底で、体部の粘土紐接合痕が顕著な壺体部片である。48 は平底の甕底部片、49 は外面に櫛描波状文を顕著に残す、甕体部片である。

SHb22 A（第 30・31 図）

Ⅶ西区南端部の第３遺構面上で検出した住居跡である。この住居跡は建て替えによるものと考えられ、住居が２棟重複した状態で検出した。説明の都合上、北側の住居を SHb22 A、南側を SHb22 B として説明する。SHb22 A は、SHb22 B の僅かに北にずれて位置する。両者の前後関係は、埋土が消失している事と、柱穴が切り合わない点より判断することはできない。

SHb22 A の平面形状は不明瞭であるが、南北に僅かに長い楕円形状を呈するものと考えられる。径は 5.6 m以上を測る。床面上からは壁溝跡、主柱穴跡、焼土面等を検出した。

壁溝跡は北辺の一部で検出した。検出長 3.5 m、幅 0.15 m、深さ 0.1 mを測る。主柱穴跡は五角形状の配置で合計５基の柱穴跡を検出した。P2・6・21・29・27 である。平面形は円形を呈し、柱間は 2.3 ～ 3.4 mを測り、柱穴跡の径は約 0.35 ～ 0.5 m、深さ約 0.3 ～ 0.5 mを測る。柱穴跡の中で、P2・6・27 には柱痕を残している。なお、P27 と僅かに切り合う P 26 も、主柱穴跡の可能性を有する。また、床面の中央では焼土面が、径 1.1 mの範囲で検出した。

出土遺物としては、50 ～ 59 の弥生土器及び石器が出土しているが、切り合う２つの住居跡の内いずれに属するものか判断できない遺物も含んでいる。51 は主柱穴跡の P2 から出土した、弥生時代中期前半の甕上半部である。52・55 ～ 59 はこの住居跡から出土した遺物であるが、A、B いずれの住居に伴うものか判断ができない遺物である。

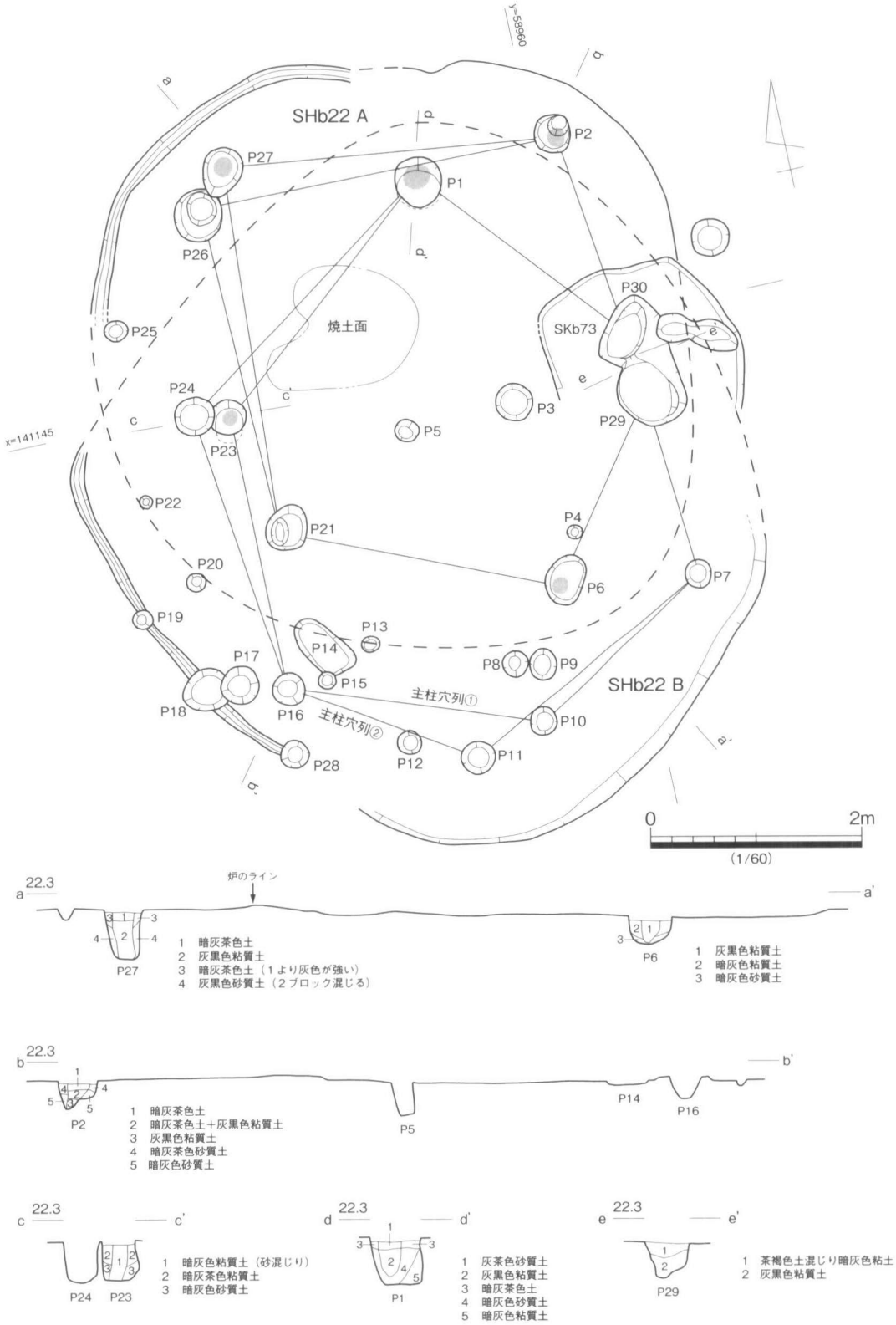
SHb22 B（第 30・31 図）

Ⅶ西区南端部の第３遺構面上で検出した住居跡である。この住居跡は、建て替えによるものと考えられ、２棟が重複している状態で検出した。SHb22 B は、SHb22 A の僅かに南にずれて位置し、両者の前後関係は、埋土が消失している事と、柱穴が切り合わない点から判断することはできない。

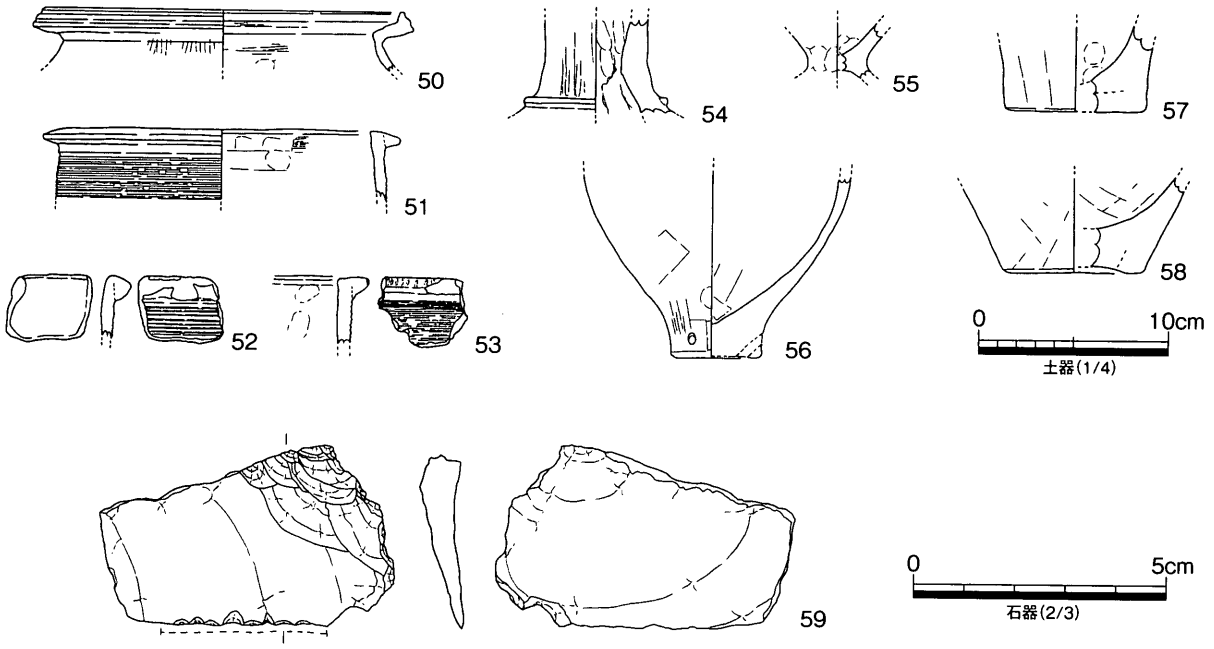
SHb22 B の平面形状は不明瞭であるが、隅丸方形状を呈するものと考えられる。長径は 6.2 m以上、短径は 4.6 m以上を測る。床面上からは壁溝跡、主柱穴跡等を検出した。なおこの住居は、屋根の葺き替え程度の、軽度の修築が行われたものと考えられ、２組の主柱穴跡の組み合わせを確認した。これを主柱穴列①・②と称する。

壁溝跡は西辺で検出した。検出長 3.5 m、幅 0.15 m、深さ 0.1 mを測る。

主柱穴列①は、六角形状の配置で合計 6 基の柱穴跡を検出した。P1・30・7・10・16・23 である。



第 30 図　SHb22 平・断面図



第 31 図　SHb22 出土遺物

平面形は円形を呈し、柱間は 2.1 ～ 2.9 m を測り、柱穴跡の径は約 0.2 ～ 0.5 m、深さ約 0.3 ～ 0.5 m を測る。柱穴跡の中で P1・23 には柱痕を残している。主柱穴列②は、六角形状の配置で合計 6 基の柱穴跡を検出した、P1・29・7・11・16・24 である。P1・7・16 については主柱穴列①の柱穴跡を共有する。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は 1.8 ～ 3.0 m を測り、柱穴跡の径は約 0.2 ～ 0.45 m、深さ約 0.3 ～ 0.5 m を測る。先にも触れたが、柱穴跡の中で P1 には柱痕を残している。

出土遺物としては、50 ～ 59 の弥生土器及び石器が出土しているが、切り合う 2 つの住居跡のうち、いずれに属するものか判断できない遺物も含んでいる。53・54 は主柱穴 P1 から出土した。53 は弥生時代中期前半の瀬戸内型甕の口縁部である。口縁端部に刻目、口縁部下に櫛描直線文を施している。50 は主柱穴 P11 から出土した後期前半の甕である。口縁端部は上位に拡張し、数条の凹線文を施している。なお、先にも触れたが、52・55 ～ 59 は SHb22 から出土した遺物であるがA、Bいずれの住居に伴うものか判断ができない遺物である。

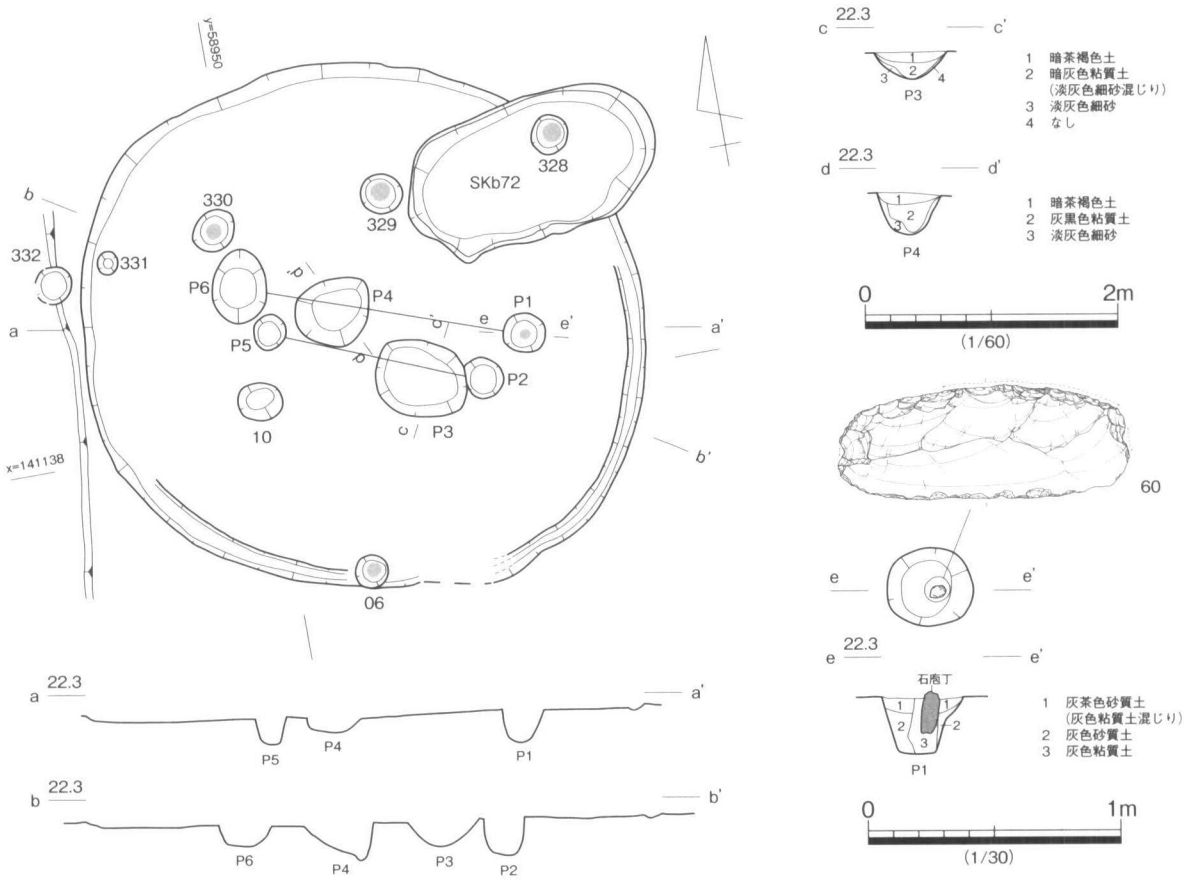
SHb23（第 32・33 図）

Ⅶ西区の南西端部第 3 遺構面上で検出した住居跡である。この住居跡は削平を受け、掘り方や埋土は消失し、床面上の遺構のみを残す。この住居跡は建て替えが行われたものと考えられ、2 組の主柱穴跡の組み合わせが確認できる。

平面形は円形を呈し、長径 4.6 m、短径 4.1 m、面積は 14.9㎡を測る。

床面上では壁溝跡と、2 組の主柱穴と 2 基の中央土坑を検出した。壁溝跡は一部を除き、外周を巡る。幅 0.15 m、深さ 0.05 m を測る。2 組の主柱穴跡と考えられるのは、P1・2・5・6 である。2 柱穴跡で 1 組の主柱穴跡が考えられ、その組み合わせについては 2 案が考えられるが、最終的な判断はできない。具体的には P1 － P6、P2 － P5 の組み合わせか、P1 － P5、P2 － P6 の組み合わせのいずれかである。なお、P1 の柱痕からは、打製石庖丁（60）が長軸方向に直立した状態で出土した。

中央土坑 P3 は P4 の東に位置し、主柱穴跡の P2 と接する。平面は楕円形状を呈し、断面は浅い U



第 32 図　SHb23 平・断面図

字状を呈する。埋土は 4 層に細分できるが、概ね上層は暗茶褐色土、下層は暗灰色粘質土を呈する。長径 0.8 m、短径 0.6 m、深さ約 0.2 m を測る。

中央土坑 P4 は P3 の西に位置する。平面は楕円形状を呈し、断面は U 字状を呈する。埋土は 3 層に細分できるが、概ね上層は暗茶褐色土、下層は灰黒色粘質土を呈する。長径 0.6 m、短径 0.55 m、深さ約 0.3 m を測る。

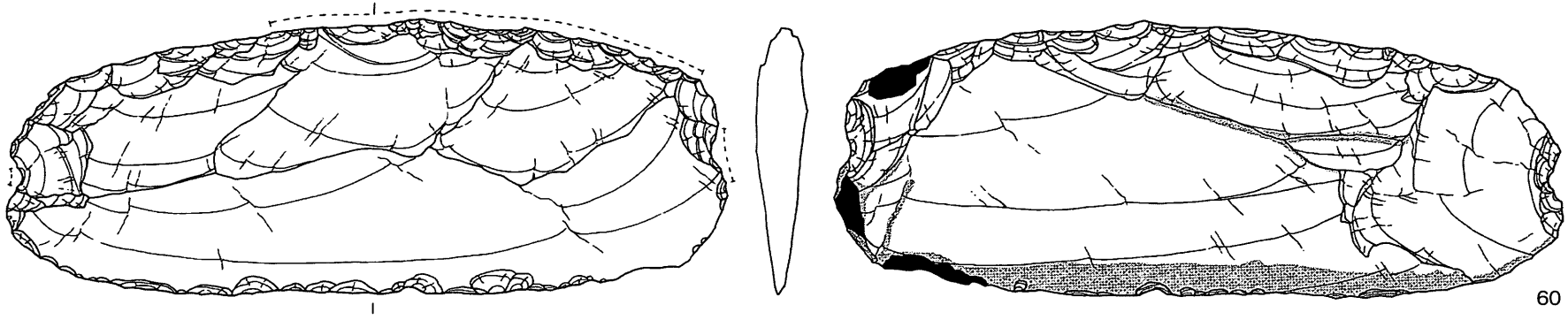
出土遺物としては、60 ～ 63 の石器が出土している。60 はサヌカイト製の打製石庖丁である。61 ～ 63 は P4 から出土したサヌカイト製の石器で、61 ～ 62 は打製石庖丁、63 は平基式の石鏃である。60・61 は、残りが良い優品である。特に 60 は、刃部に使用痕を明瞭に残している。これらは、製作工程を復元する上では良好な資料といえる。

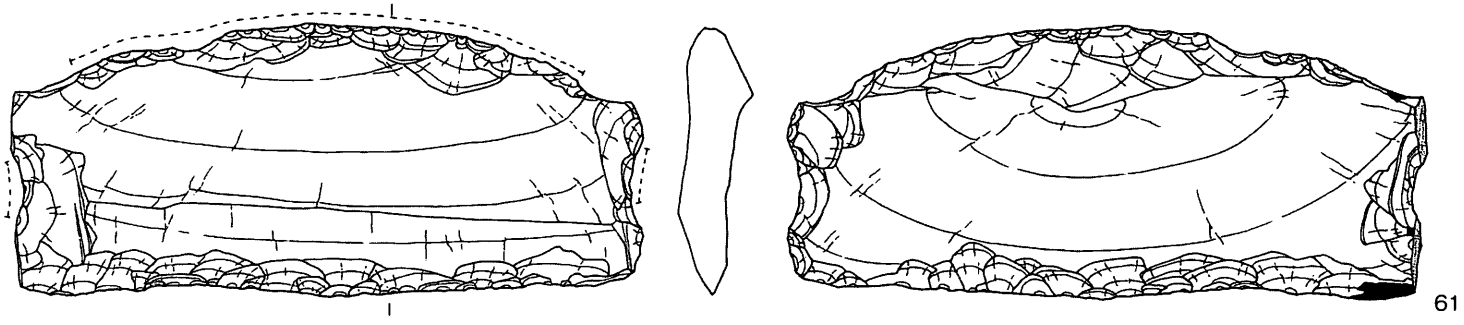
SHb25（第 34 図）

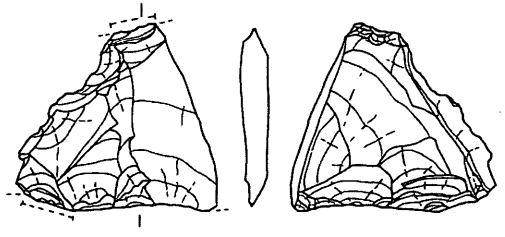
Ⅶ西区北半部の第 3 遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡 7 基と中央土坑 1 基を検出した。また、周囲には、SHb25 を中心にして外周柱穴列を検出した。この外周柱穴列は SHb25 を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある。主柱穴跡は、2 組の主柱穴跡の組み合わせを確認した。これを主柱穴列①・②と称する。

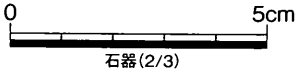
住居跡の平面形は、円形を呈すものと考えられる。住居跡の長径は 3.8 m以上、短径 3.5 m以上を測る。

主柱穴列①は、中央土坑を南北に挟むように 2 基の柱穴跡を検出した。SPb409・411 である。平面形は円形を呈し、柱間は 1.4 m を測り、柱穴跡の径は約 0.2 m、深さ 0.2 ～ 0.3 m を測る。この主柱穴列は

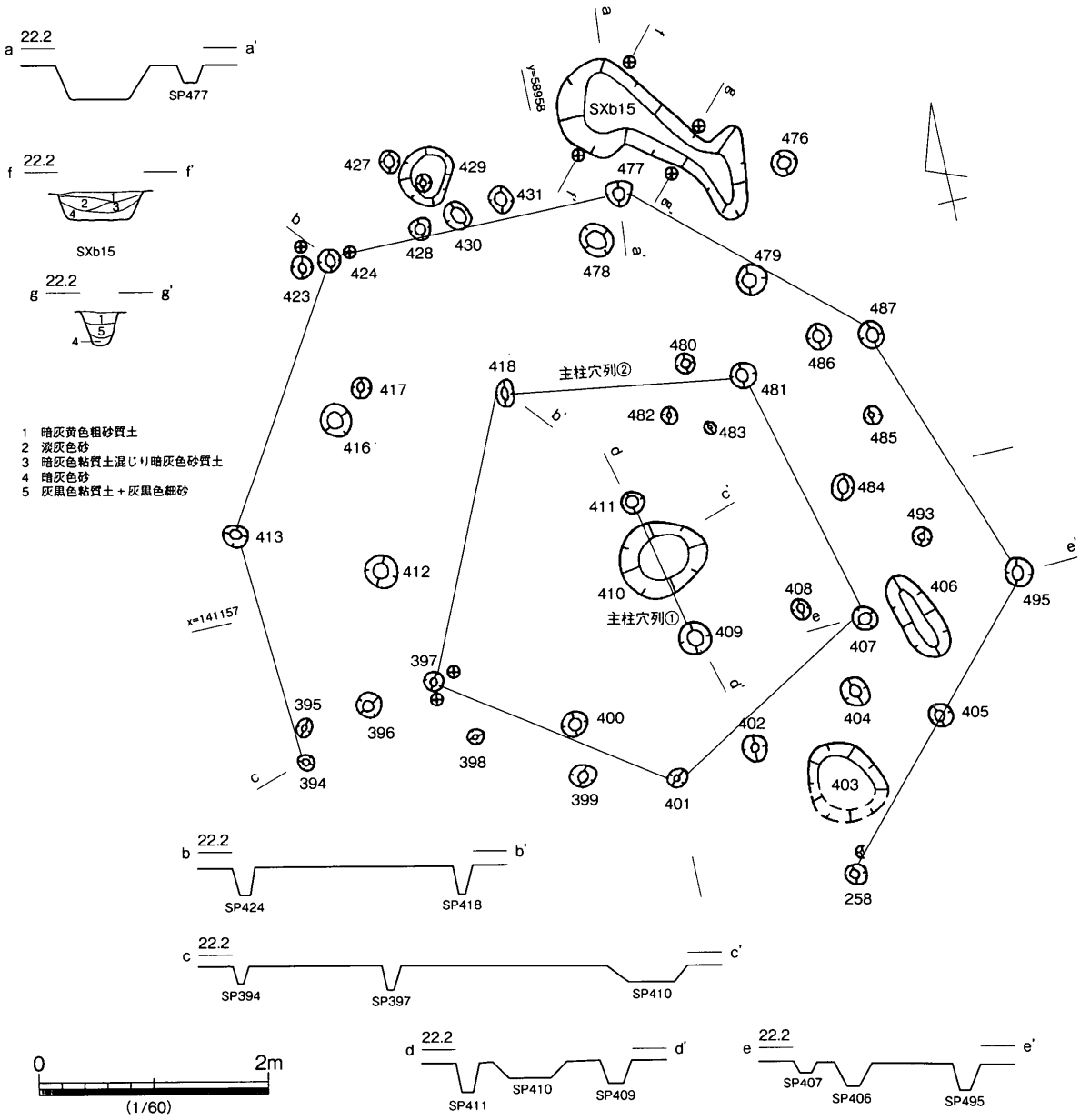








第 33 図　SHb23 出土遺物



第 34 図　SHb25 平・断面図

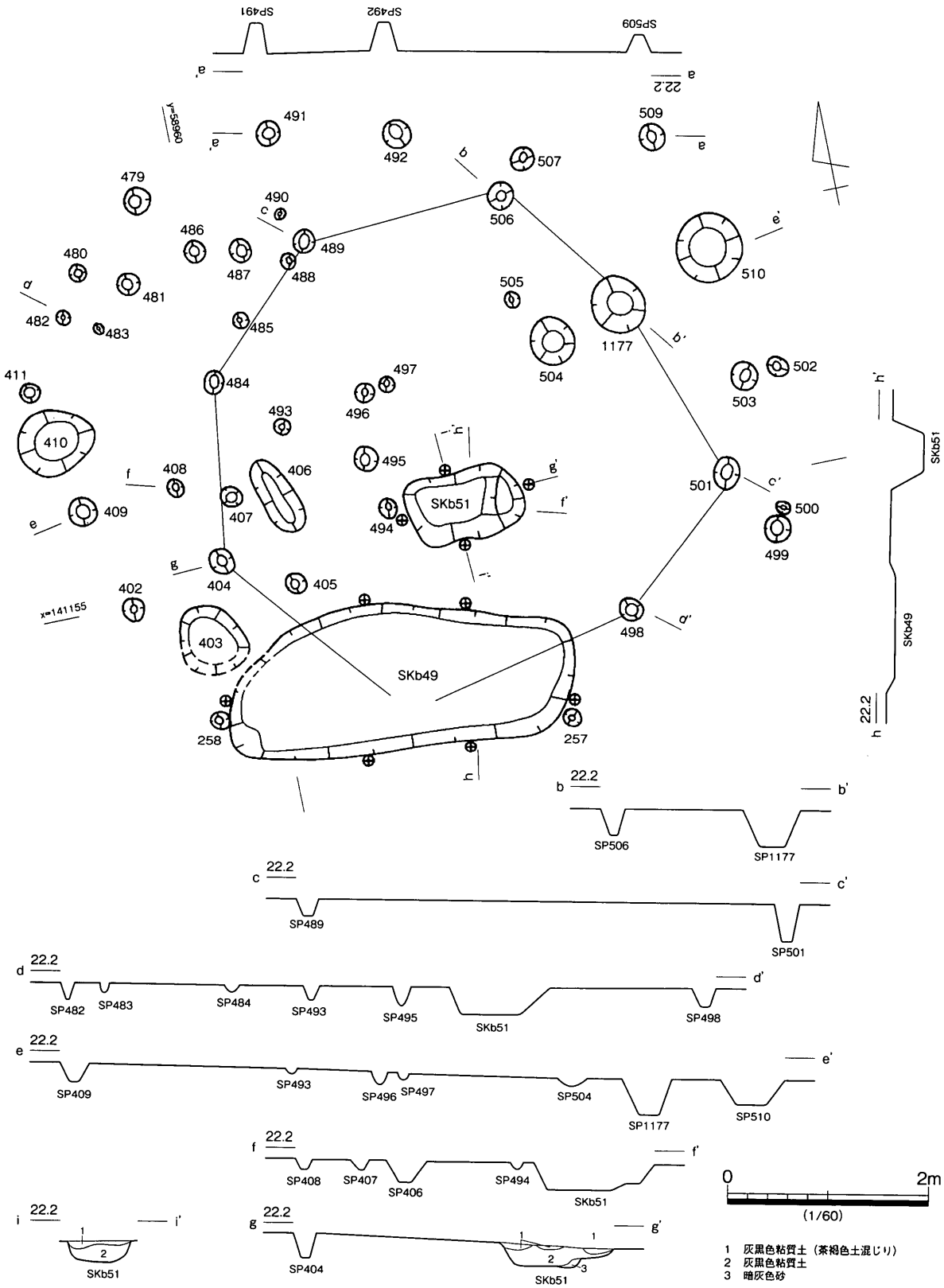
屋根の中心部分を支えた柱列と考えられる。主柱穴列②は、五角形状に配した５基の柱穴跡を検出した。SPb397・401・407・481・418 である。平面形は円形を呈し、柱間は 2.0 ～ 2.5 m を測り、柱穴跡の径は約 0.2 ～ 0.3 m、深さ約 0.2 m を測る。

床面の中央には炉跡と考えられる、中央土坑 SPb410 を検出した。平面形は楕円形状を呈し、断面は幅広な逆台形状を呈する。長径 0.8 m、短径 0.6 m、深さ約 0.15 m を測る。

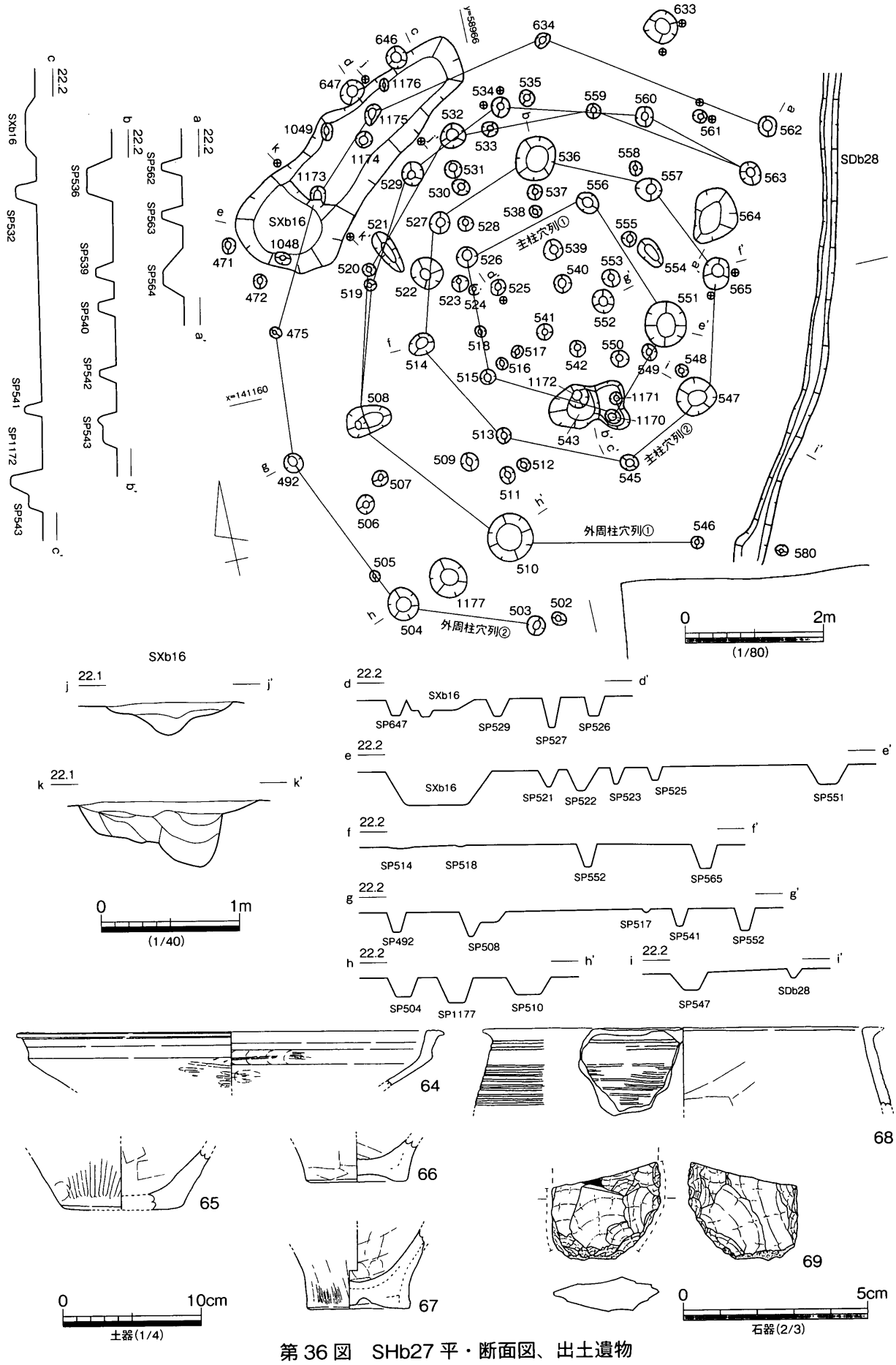
外周柱穴列は、東半部を除く、直径約 7.0 m の円内で７基の柱穴跡を検出した。SPb258・495・487・477・424・413・394 である。柱穴の平面形は円形を呈し、柱間は 2.0 ～ 3.0 m を測り、柱穴跡の径は約 0.2 m、深さ 0.2 m を測る。

SHb26（第 35 図）

Ⅶ西区中央の第３遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡７基と中央土坑１基を検出した。住居



第 35 図　SHb26 平・断面図



第 36 図　SHb27 平・断面図、出土遺物

跡の平面形は、円形を呈すものと考えられ、長径5.2 m以上、短径4.6 m以上を測る。床面上では7基の主柱穴跡を検出した。SPb404・484・489・498・501・506・1177である。柱穴跡は円形を呈し、柱間は1.6～2.0 mを測り、径約0.2～0.5 m、深さ0.2～0.4 mを測る。

床面の南半部には、中央土坑SKb51を検出した。SKb51の平面形は東西に長い楕円形状を呈し、断面は浅いU字状を呈する。埋土は3層に分れるが、概ね灰黒色粘質土が主体である。長径1.2 m、短径0.7 m、深さ約0.2 mを測る。

SHb27（第36図）

Ⅶ西区中央の第3遺構面上で検出した住居跡である。住居跡の平面形は円形を呈すものと考えられ、主柱穴跡13基を検出した。この住居跡は建て替えが行われたものと考えられ、2組の主柱穴跡の組み合わせが確認できる。これを主柱穴列①、主柱穴列②と称する。住居跡の周囲には、SHb27を中心にして2重の外周柱穴列を検出した。これを外周柱穴列①・②と称する。この外周柱穴列はSHb27を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある遺構で、2重になっているのは、主柱穴と同様に、住居の建て替えによるものと考えられる。なお、この住居跡には、住居の外縁に配した周溝跡と考えられる溝状遺構を伴う。

主柱穴列①は、直径3.0 mの円内に五角形状に配した5基の柱穴跡を検出した。SPb556・551・1170・515・526である。平面形は円形を呈し、柱間は1.5～2.0 mを測り、径約0.2～0.6 m、深さ約0.3 mを測る。主柱穴列②は、主柱穴列①より一回り大きく、直径4.5 mの円内に8基の柱穴跡を検出した。SPb513・514・527・536・545・547・557・565である。平面形は円形を呈し、柱間は1.5～1.8 mを測り、径約0.2～0.6 m、深さ0.05～0.5 mを測る。

外周柱穴列①は直径約6.2 mの円内の、東辺部を除く区間で、11基の柱穴跡を検出した。SPb508・510・519・520・529・532・534・546・559・560・563である。平面形は円形ないし不整円形を呈し、柱間は1.5～2.7 mとバラツキがあり、柱穴跡の径は約0.2～0.7 m、深さ約0.3 mを測る。外周柱穴列②は、外周柱穴列①の外側の直径約8.3 mの円内の、東半部を除く区間で8基の柱穴跡を検出した。SPb492・475・503・504・562・634・1173・1175である。平面形は円形を呈し、柱間は1.5～3.2 mとバラツキがあり、柱穴跡の径は約0.2～0.5 m、深さ約0.3 mを測る。

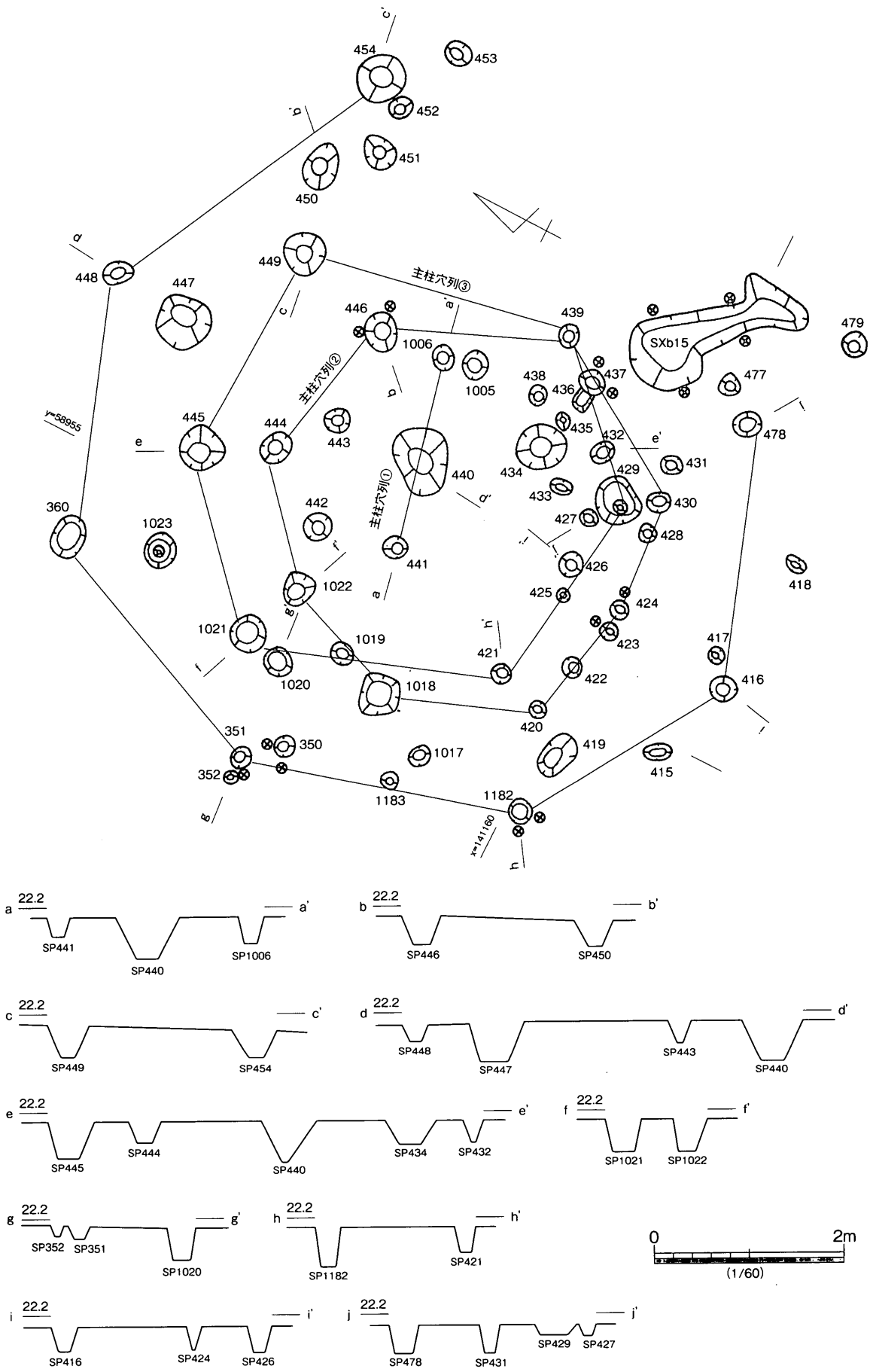
この住居跡に伴う周溝跡は、外周柱穴列①の北西辺に位置するSXb16である。検出長4.2 m、幅1.4 m、深さ0.2～0.5 mを測る。位置関係からこの溝状遺構は、外周柱穴列①の時期に伴う周溝跡と考えられる。

最後に主柱穴列と外周柱穴列の位置関係から、主柱穴列①には外周柱穴列①が伴い、主柱穴列②には外周柱穴列②が伴う関係が考えられる。ただし、柱穴跡が切りあわないため、その前後関係は今後の課題になる。

出土遺物としては、弥生時代中期前半と後期前半の弥生土器と石器が出土している。64・65は外周柱穴列②のSPb504から出土した、後期前半の高杯杯部と壺か甕の底部である。64は下川津B類の高杯と考えられる。66～68は外周柱穴列①の時期に伴う周溝跡と考えられるSXb16から出土した。弥生時代中期前半頃の瀬戸内型甕の上半部等であるが、混入品の可能性が高い。

SHb28（第37図）

Ⅶ西区中央の第3遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡15基、中央土坑1基を検出した。こ



第 37 図　SHb28 平・断面図

の住居跡は２度の建て替えが行われたものと考えられ、数組の主柱穴跡の組み合わせが確認できる。これを主柱穴列①～③と称する。周囲には、SHb28 を中心にして外周柱穴列を検出した。この外周柱穴列は SHb28 を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある遺構である。

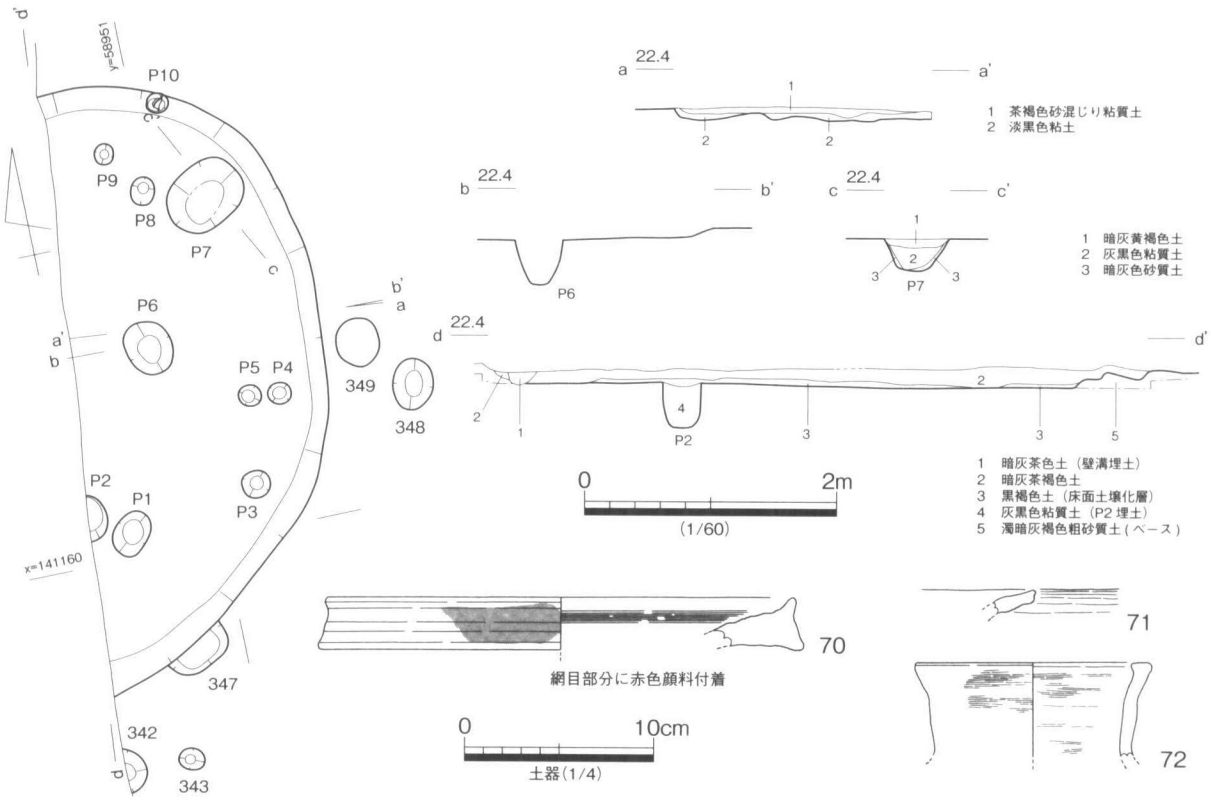
住居跡の平面形は、円形を呈すものと考えられる。住居跡の最大期の長径は 5.0 m以上、短径 3.6 m以上を測る。

主柱穴列①に伴うのは、中央土坑 SPb440 を挟んだ両端に位置する SPb441・1006 である。平面形は円形を呈し、柱間は約 2.0 mを測り、径約 0.2 m、深さ約 0.2 mを測る。主柱穴列②は、直径 4.2 mの円内に８基の柱穴跡を検出した。SPb444・446・439・430・424・420・1018・1022 等である。平面形は円形を呈し、柱間は 1.2 ～ 2.0 mを測り、径約 0.2 ～ 0.4 m、深さ約 0.3 mを測る。主柱穴列③は、主柱穴列②より一回り大きく、直径 4.8 mの円内に六角形に配した６基の柱穴跡を検出した。SPb445・449・439・429・421・1021 である。平面形は円形を呈し、柱間は 1.8 ～ 2.8 mを測り、径約 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.3 ～ 0.4 mを測る。

外周柱穴列は、直径約 7.7 mの円内の、東辺部を除く区間で７基の柱穴跡を検出した。SPb351・360・416・448・454・478・1182 である。平面形は円形ないし不整円形を呈し、柱間は 2.5 ～ 3.5 mを測り、柱穴の径は約 0.2 ～ 0.5 m、深さ約 0.2 ～ 0.3 mを測る。

中央土坑 SPb440 は主柱穴列①の中間に位置する。平面は楕円形状を呈し、断面は逆台形状を呈する。長径 0.7 m、短径 0.6 m、深さ約 0.4 mを測る。

最後に主柱穴列と外周柱穴列の位置関係から、主柱穴列①は主柱穴列③に伴って、屋根の中心部分を支えた柱列と考えられる。また、外周柱穴列は、主柱穴列③の時期の住居に伴うものと考えられる。



第 38 図　SHb29 平・断面図、出土遺物

SHb29（第 38 図）

Ⅶ西区中央、西壁際の第３遺構面上で検出した住居跡である。西半部が調査区より外れているため、約 1/2 を検出した。

平面形は円形を呈し、径は 5.1 mを測る。床面には貼床を施し、壁溝跡、柱穴跡、土坑等を検出した。

壁溝跡は平面的には明瞭に検出できなかったが、断面に僅かに確認できる。幅 0.2 m、深さ 0.1 mを測る。調査範囲が狭いため、主柱穴跡は特定できないが、P1・6 等が候補としてあげられる。径約 0.35 ～ 0.45 m、深さ約 0.35 mを測る。

住居跡の床面上では、小型の土坑 P7 を検出した。平面は不整形な楕円形状を呈し、断面は逆台形状を呈する。埋土は３層に分けられ、概ね上層は暗灰黄褐色土、下層は灰黒色粘質土を呈する。長径 0.65 m、短径 0.5 m、深さ約 0.25 mを測る。

出土遺物としては、柱穴跡から弥生時代後期中頃以降の土器が出土した。70･71 は P10 から出土した、壺と甕の口縁部である。70 は端部を上下に拡張し、外面に退化した凹線文を施している広口壺の口縁部である。72 は P6 から出土した、直口壺の口縁部である。

SHb30（第 39・40 図）

Ⅶ西区中央の第３遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡 15 基と中央土坑１基を検出した。この住居跡は建て替えが行われたものと考えられ、数組の主柱穴跡の組み合わせが確認できる。これを主柱穴列①～③と称する。また、周囲には SHb30 を中心にして外周柱穴列を検出した。この外周柱穴列は SHb30 を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある遺構である。なお、この住居跡の外周柱穴列の北で検出された、２条の不整形な溝状遺構 SDb29 等は、住居跡に伴う周溝の可能性が考えられる。

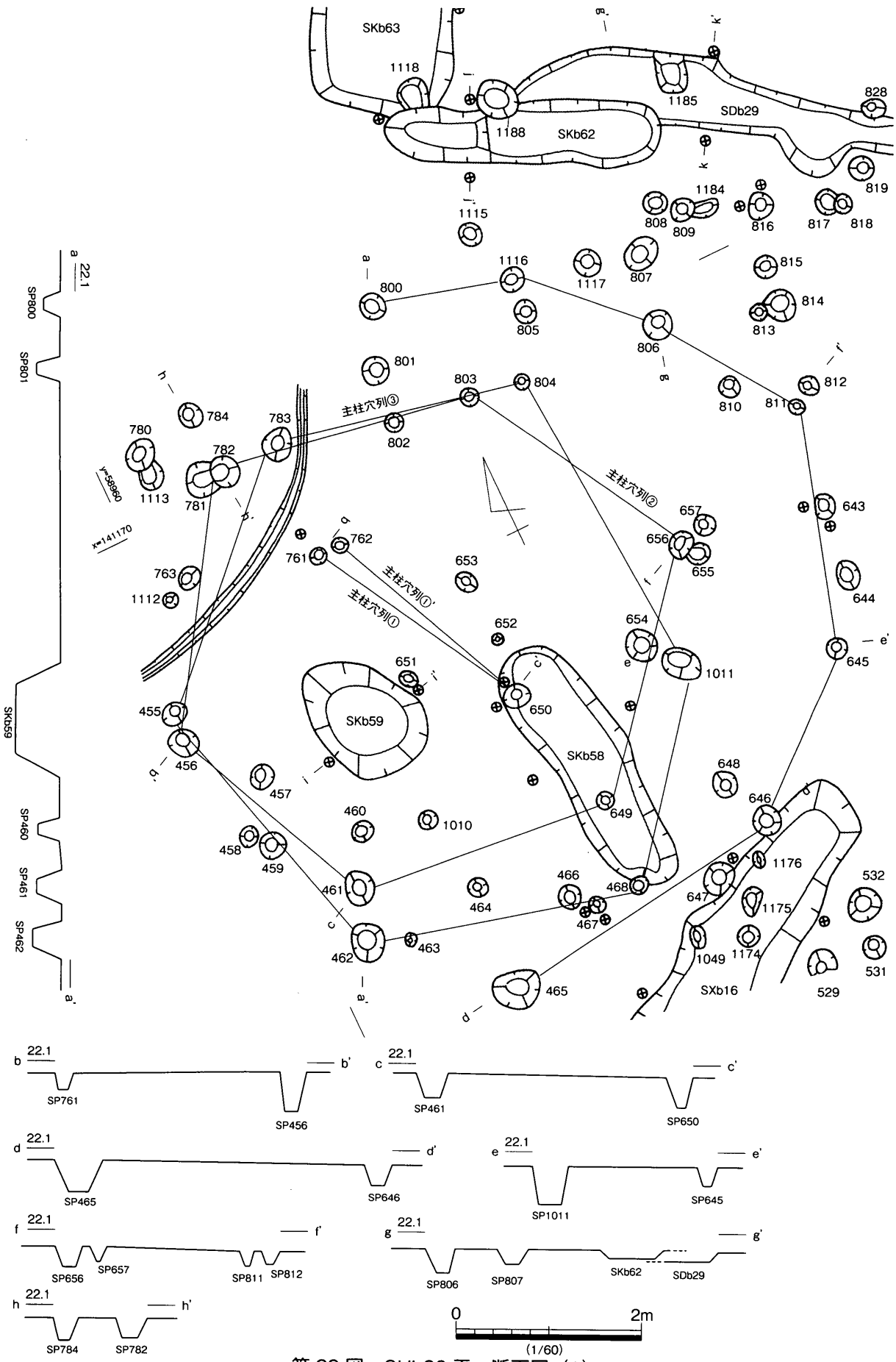
住居跡の平面形は円形を呈すものと考えられ、住居跡の最大期の長径は 6.1 m以上、短径 4.5 m以上を測る。

主柱穴列①・①'は、床面上の南北両端部で検出した、SPb650・761・762 である。この柱穴列は、主柱穴列②・③の、２時期の屋根の中央部分を支えた柱列と考えられる。南端の SPb650 を共有し、SPb761 は主柱穴列①の時期に、SPb762 は主柱穴列①'の時期に伴うものと考えられる。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は 2.5 ～ 2.6 mを測り、径約 0.2 ～ 0.3 m、深さ約 0.2 ～ 0.3 mを測る。主柱穴列②は、直径 5.5 mの円内に六角形状に配した６基の柱穴跡を検出した。SPb456･461･649･656･782･803 である。平面形は円形を呈し、柱間は 2.5 ～ 3.0 mを測り、径約 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mを測る。主柱穴列③は、主柱穴列②より一回り大きく、直径 6.0 mの円内に六角形状に配した６基の柱穴跡を検出した。SPb455・462・468・783・804・1011 である。平面形は円形を呈し、柱間は 2.5 ～ 3.5 mを測り、径約 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mを測る。

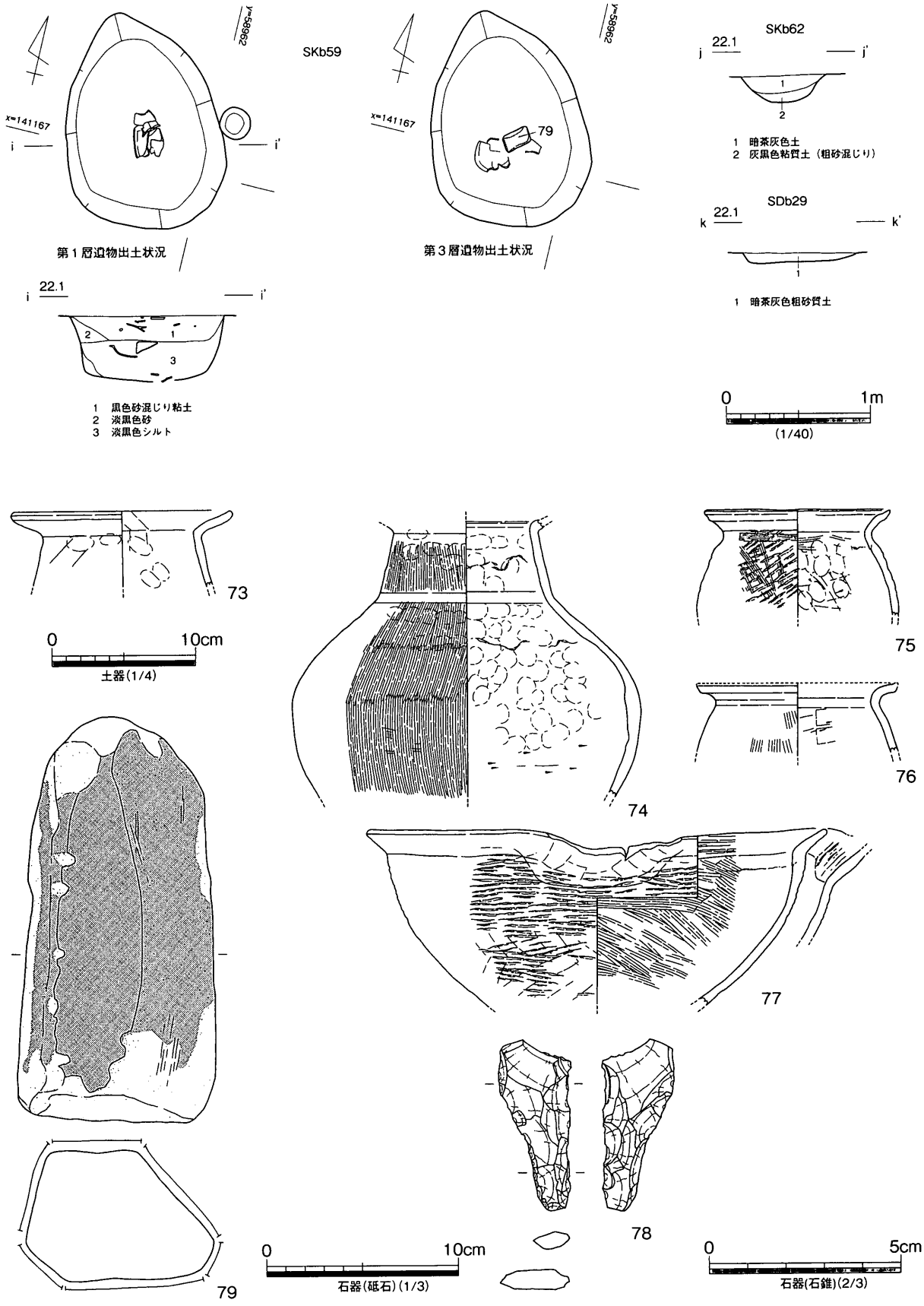
中央土坑 SKb59 は床面の西半部に位置する。平面は楕円形状を呈し、断面は浅い U 字状を呈する。長径 1.5 m、短径 1.0 m、深さ約 0.2 mを測る。

外周柱穴列は直径約 7.0 mの円内の、西半部を除く区間で、７基の柱穴跡を検出した。SPb465・646・645・811・806・1116・800 である。平面形は円形を呈し、柱間は 1.5 ～ 3.3 mとバラツキがあり、柱穴跡の径は約 0.2 ～ 0.5 m、深さ約 0.2 ～ 0.3 mを測る。

周溝跡の可能性をもつ SDb29 は、外周柱穴列の北辺に位置し、柱穴列を巡るように東西に延びる。



第 39 図　SHb30 平・断面図（1）



第40図　SHb30平・断面図（2）、出土遺物

検出長 4.8 m、幅 0.7 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mを測る。SKb62 は、SDb29 を切り込んでいる短い溝状遺構である。検出長 3.0 m、幅 0.5 ～ 0.7 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mを測る。本来この二つの遺構は、主柱穴列②・③の時期に分けられるものと考えられる。

最後に主柱穴列と外周柱穴列の関係を整理する。先にも触れたが、主柱穴列①・①'は、主柱穴列②・③に伴い、屋根の中心部分を支えた柱列と考えられる。外周柱穴列は、南端部で主柱穴列③と接しており、主柱穴列③の時期に伴うものとは考えられない。そのため、主柱穴列②の時期の住居に伴うものと考えられる。

出土遺物としては、弥生時代後期中頃以降の土器と石器が出土した。73 は広口壺の口頸部である。74・75・77・79 は中央土坑 SKb59 から出土した遺物である。74・75・77 は後期中頃以降の土器である。74 は口縁部と底部を欠く長頸壺で、外面には縦方向のハケ、内面にはオサエの痕跡を顕著に残し、柱穴跡から出土した 73 と同タイプの土器である。75 は下半部を欠く甕である。外面にタタキを顕著に施し、形状より平底を呈するものと考えられる。77 は口縁部を外上方に折り曲げた、大型の片口鉢である。79 は砂岩製の砥石である。断面は不整形な六角形状を呈し、全ての面を砥面として用いている。78 はサヌカイト製で棒状の石錐である。

SHb31（第 41 図）

Ⅶ西区中央の第 3 遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡 16 基を検出した。この住居跡は建て替えが行われたものと考えられ、2 組の主柱穴跡の組み合わせが確認できる。これを主柱穴列①・②と称する。また、周囲には、SHb31 を中心にして外周柱穴列を検出した。この外周柱穴列は SHb31 を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある遺構である。なお、この住居跡の外周柱穴列の北には周溝の可能性が考えられる SDb33 が所在している。

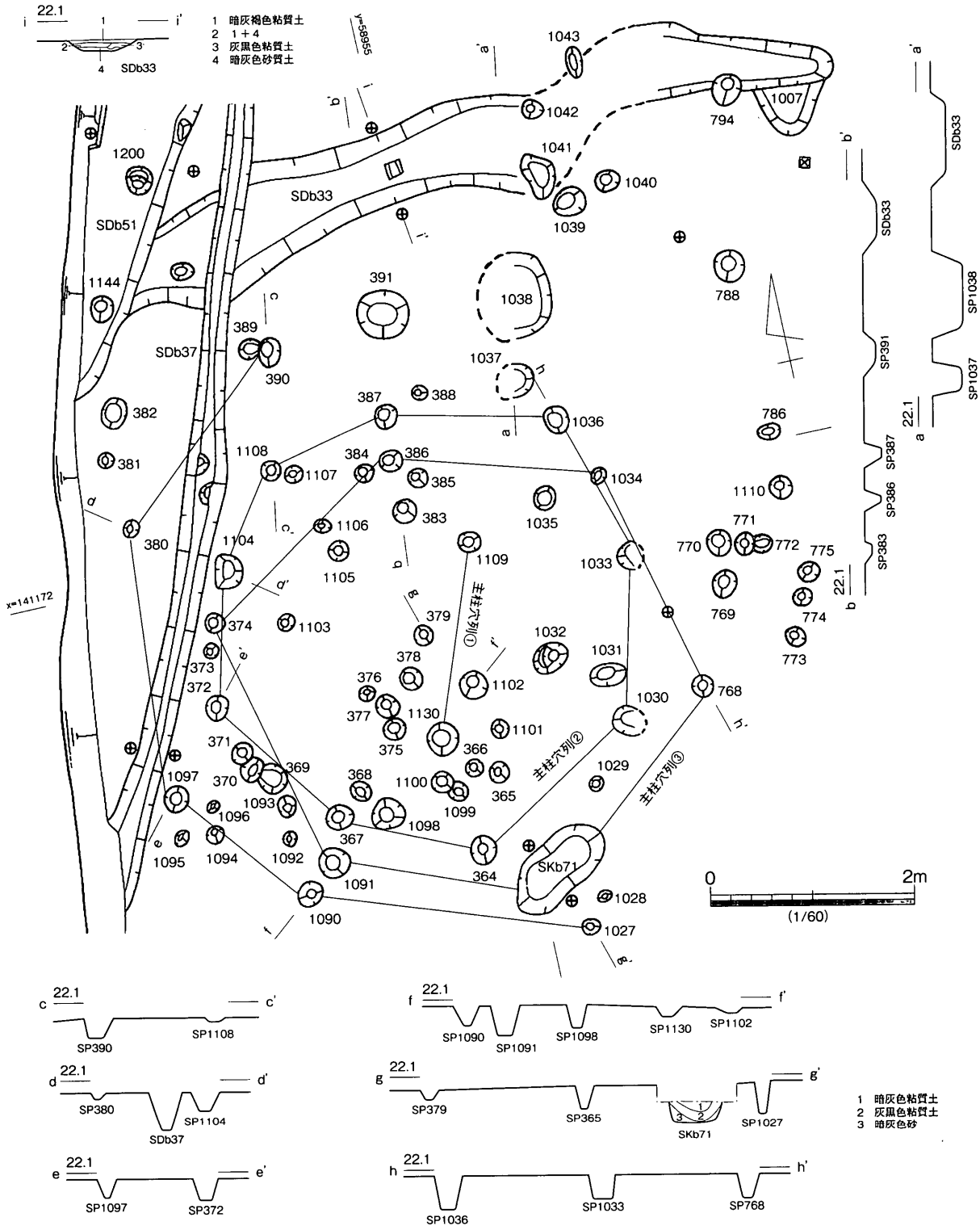
住居跡の平面形は円形を呈すものと考えられ、住居跡の最大期の長径は 4.7 m以上、短径 4.0 m以上を測る。

主柱穴列①は、床面中央で南北に配された 2 柱穴跡、SPb1109・1130 である。この柱穴列は主柱穴列②・③の、2 時期の屋根の中央部分を支えた柱列と考えられる。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は 2.0 mを測り、径約 0.2 ～ 0.3 m、深さ約 0.2 mを測る。主柱穴列②は、直径 4.5 mの円内に 9 基の柱穴跡を検出した。SPb364・372・387・367・1033・1030・1036・1104・1108 である。平面形は円形を呈し、柱間は 1.0 ～ 2.0 mを測り、径約 0.2 ～ 0.3 m、深さ約 0.2 mを測る。主柱穴列③は、主柱穴列②と同規模で、直径 5.0 mの円内に六角形状に配した、6 基のうち 1 基を欠く 5 基の柱穴跡を検出した。SPb374・386・768・1034・1091 である。平面形は円形を呈し、柱間は 2.0 ～ 2.5 mを測り、径約 0.2 ～ 0.3 m、深さ約 0.2 mを測る。

外周柱穴列は直径約 6.3 mの円内の、東半部を除く区間で約 5 基の柱穴跡を検出した。SPb380・390・1027・1090・1097 である。平面形は円形を呈し、柱間は 1.6 ～ 2.8 mとバラツキがあり、柱穴跡の径は約 0.1 ～ 0.2 m、深さ約 0.2 mを測る。

周溝跡の可能性をもつ SDb33 は、外周柱穴列の北辺に位置し、柱穴列を巡るように東西に延びる。検出長 7.3 m、幅 0.9 m、深さ約 0.2 mを測る。なお、この周溝跡は東に延びて SHb32 の周溝とも兼ねている。

最後に主柱穴列と外周柱穴列の関係を整理すると、主柱穴列①は、主柱穴列②、③に伴って、屋根の

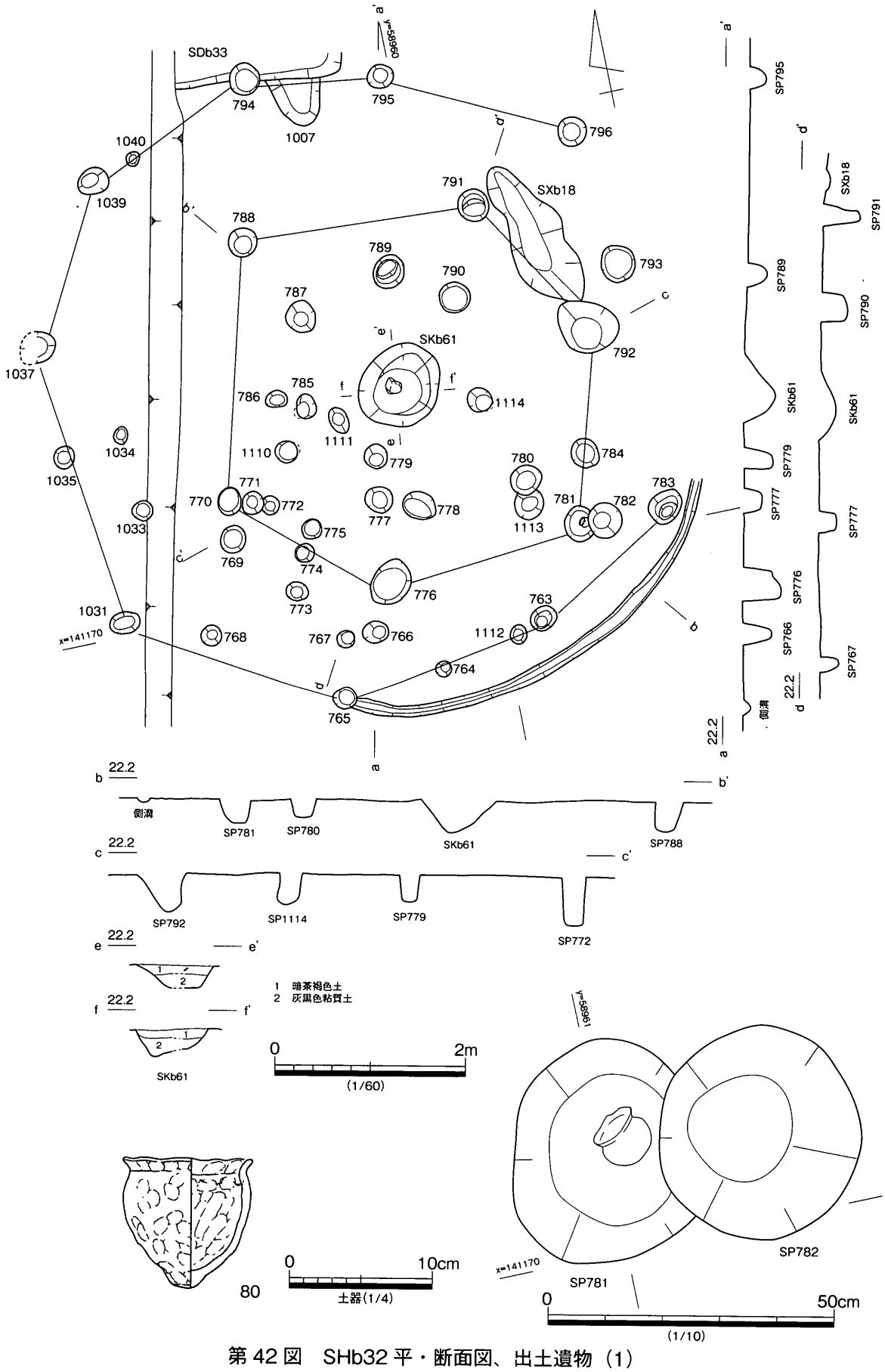


第41図　SHb31 平・断面図

中心部分を支えた柱列と考えられる。外周柱穴列は、距離的な点で主柱穴②の時期の住居に伴うものと考えられる。

SHb32（第42・43図）

Ⅶ西区中央の第3遺構面上で検出した住居跡である。削平を受けて残りが悪く、壁溝跡、主柱穴跡6



第 42 図　SHb32 平・断面図、出土遺物（1）

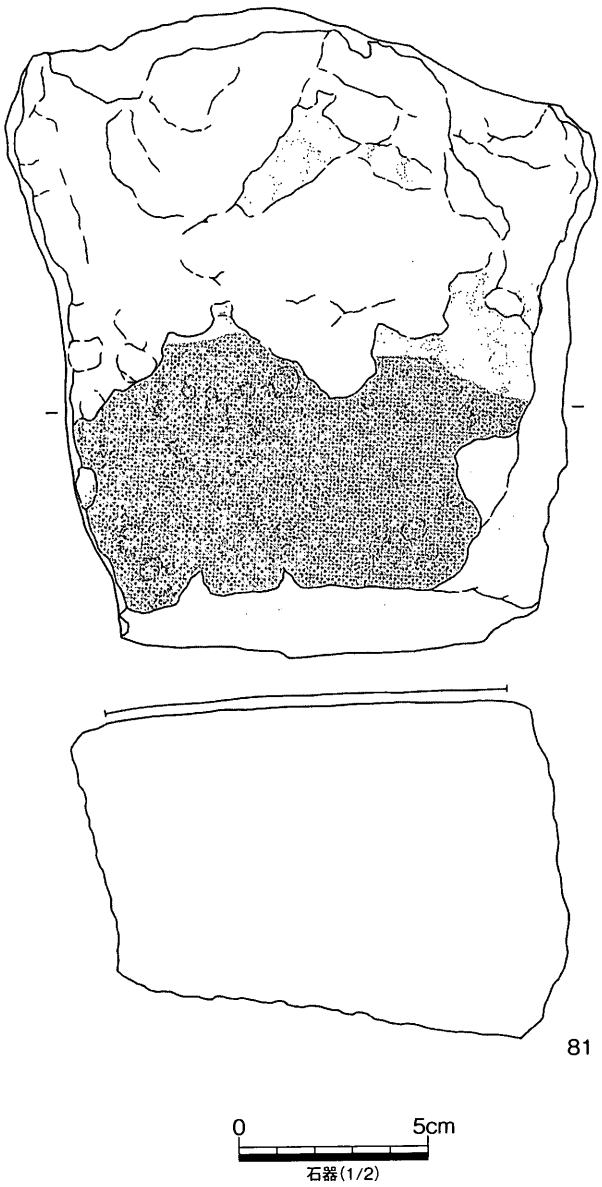
基と中央土坑１基を検出した。周囲には、SHb32を中心にして外周柱穴列を検出した。この外周柱穴列はSHb32を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある遺構である。また、検出した壁溝と外周柱穴列は切り合っており、そのため、この住居跡は建て替えが行われたものと考えられる。

なお、この住居跡の外周柱穴列の北辺には、SHb31で報告したように、不整形な溝状遺構SDb33を検出しており、住居跡に伴う周溝跡の可能性が考えられる。

住居跡の平面形は、円形を呈すものと考えられる。住居跡の最大期の長径は4.7 m以上、短径4.0 m以上を測る。

壁溝跡は住居の南辺部で、全体の約1/5を検出した。西端部では、外周柱穴列のSPb765により切り込まれており、外周柱穴列とは共存しない。検出長約5.0 m、幅約0.15 m、深さ約0.05 mを測る。

主柱穴跡は、直径約4.5 mの円内に六角形状に配した６基の柱穴跡を検出した。SPb770・776・781・788・791・792である。平面形は円形を呈し、柱間は1.8～2.7 mを測り、径約0.2～0.5 m、深さ0.2～0.3 mを測る。



第43図　SHb32出土遺物（2）

中央土坑SKb61は床面の中央に位置する。平面は楕円形状を呈し、断面は逆台形状を呈する。埋土は２層に分けられ、上層は暗茶褐色土、下層は灰黒色粘質土である。長径0.9 m、短径0.85 m、深さ約0.4 mを測る。

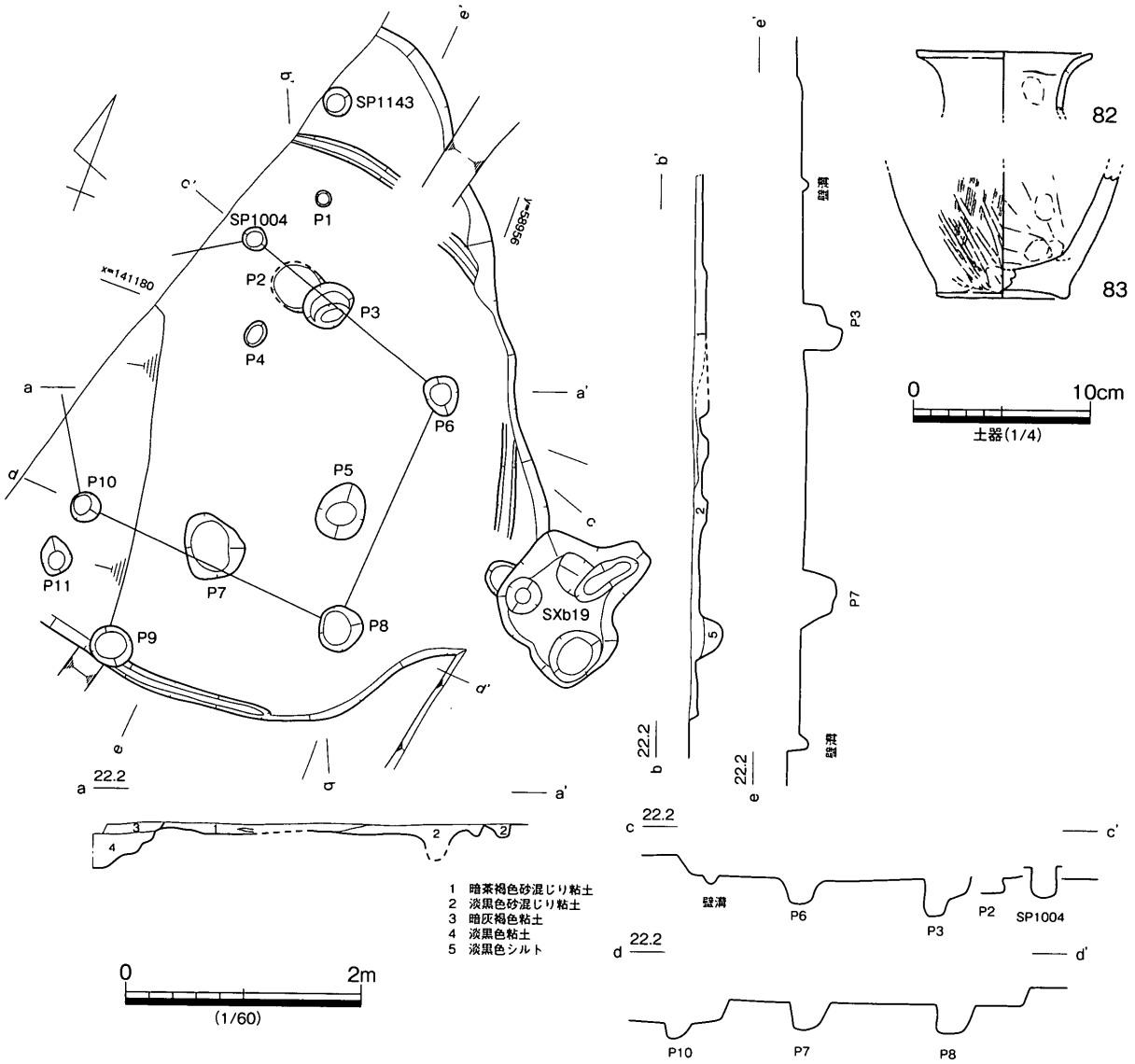
外周柱穴列は直径約6.5 mの円内の、東辺及び西辺部の一部を除く区間で、約７基の柱穴跡を検出した。SPb763・765・783・794・795・796・1031等である。平面形は円形を呈し、柱間は1.4～3.0 mとバラツキがあり、柱穴跡の径は約0.2～0.3 m、深さ約0.2 mを測る。なお、この柱穴列の柱穴跡の一部は、周溝跡の可能性を持つSDb33を切り込んでいる。そのため、この柱穴列は周溝跡には伴わない。

周溝跡の可能性があるSDb33は、外周柱穴列の北辺に位置し、柱穴列を廻るように東西に延びる。

最後に住居跡を構成する諸遺構を整理しておく。この住居跡は、平面状の配置及び切り合いから、少なくとも２時期の住居跡に分けられる。外周柱穴列を除く諸遺構は、まとまり良く配置されており、同一時期の住居を構成する遺構と考えられるが、外周柱穴列は壁溝跡及び周溝跡を切り込んでおり、この住居の建て替え後の施設と考えられる。

出土遺物としては、弥生時代後期後半以降

の土器及び石器が少量出土した。80 は主柱穴跡 SPb781 から出土した、粗製のミニチュア甕である。81 は台石と考えられる、不整形な直方体状を呈する礫石器である。使用によるものか、磨面が認められる。石材は閃緑岩の可能性がある。



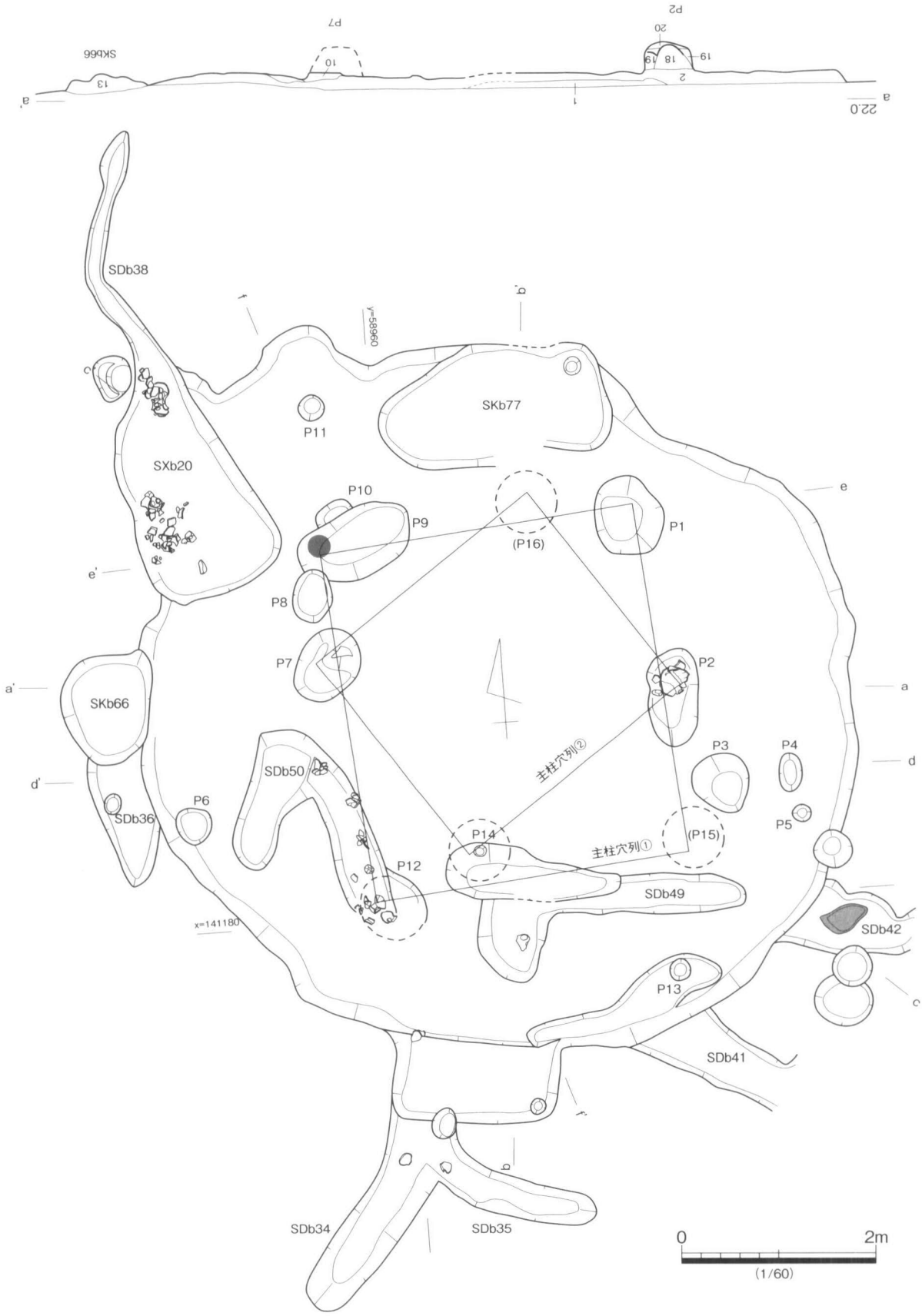
第 44 図　SHb33 平・断面図、出土遺物

SHb33（第 44 図）

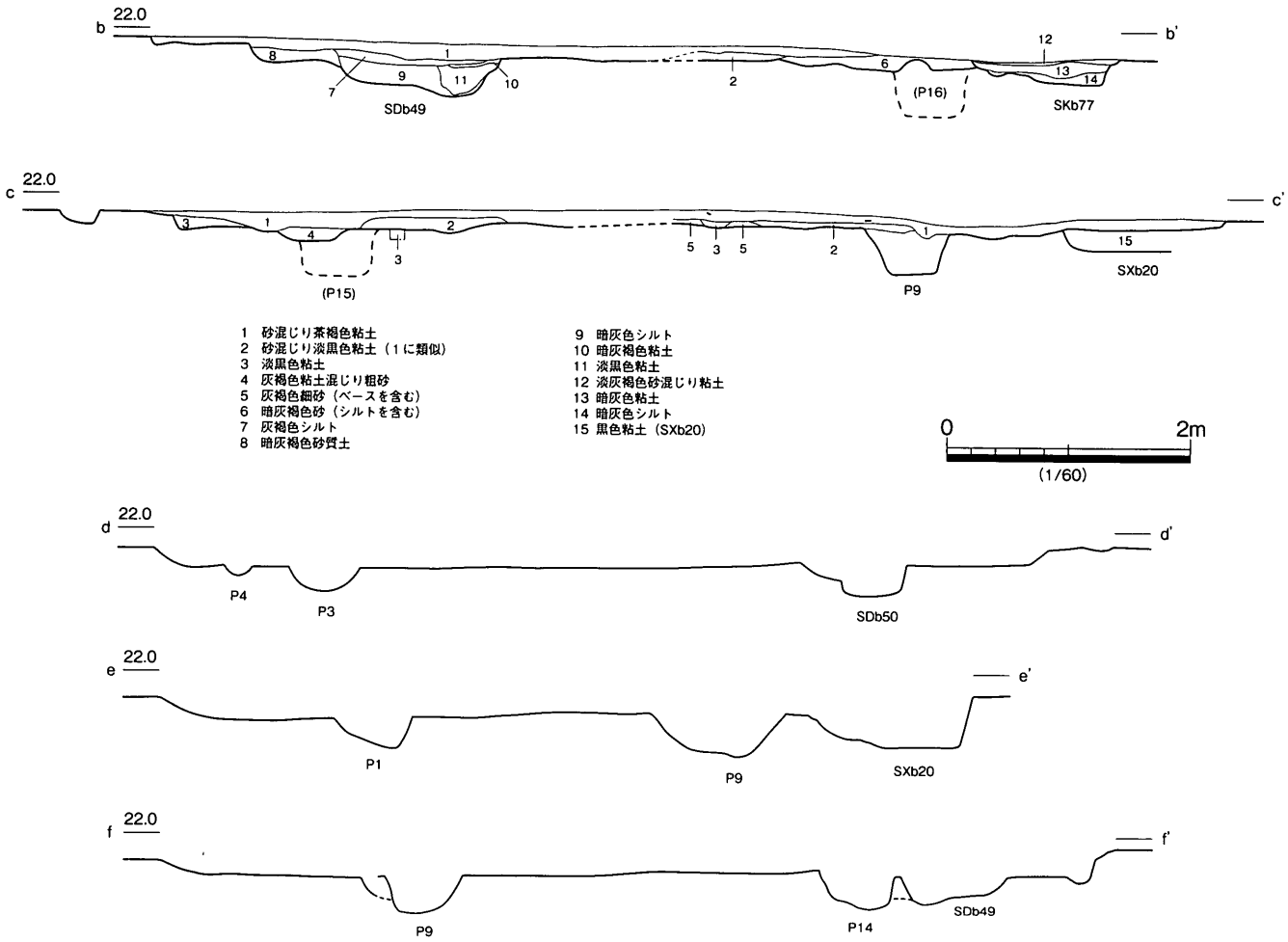
Ⅶ西区北半部、西壁際の第 3 遺構面上で検出した住居跡である。西半部が調査区より外れていることと、SDb51 に切り込まれているため、約 2/3 を検出した。

平面形は円形を呈し、径は 4.9 m、深さ 0.1 m を測る。床面には壁溝跡、柱穴跡等を検出した。壁溝跡は東辺部を除き、ほぼ全周する。幅 0.15 m、深さ 0.1 m を測る。主柱穴跡は特定し難いが、五角形状の 5 柱穴跡を想定した場合、SPb1004・P6・8・10 等が考えられる。これらの柱穴跡は、平面は円形を呈し、径 0.25 ～ 0.4 m、深さ約 0.3 m を測る。なお、同一面上の P3・P7 についても主柱穴跡の可能性がある。

出土遺物としては、柱穴跡から弥生時代後期中頃以降の土器が出土した。82 は P5 から出土した広口



第 45 図　SHb34 平・断面図（1）



第46図　SHb34 断面図（2）

壺の口頸部である。83 は P7 から出土した壺か甕の底部である。

SHb34（第 45 ～ 48 図）

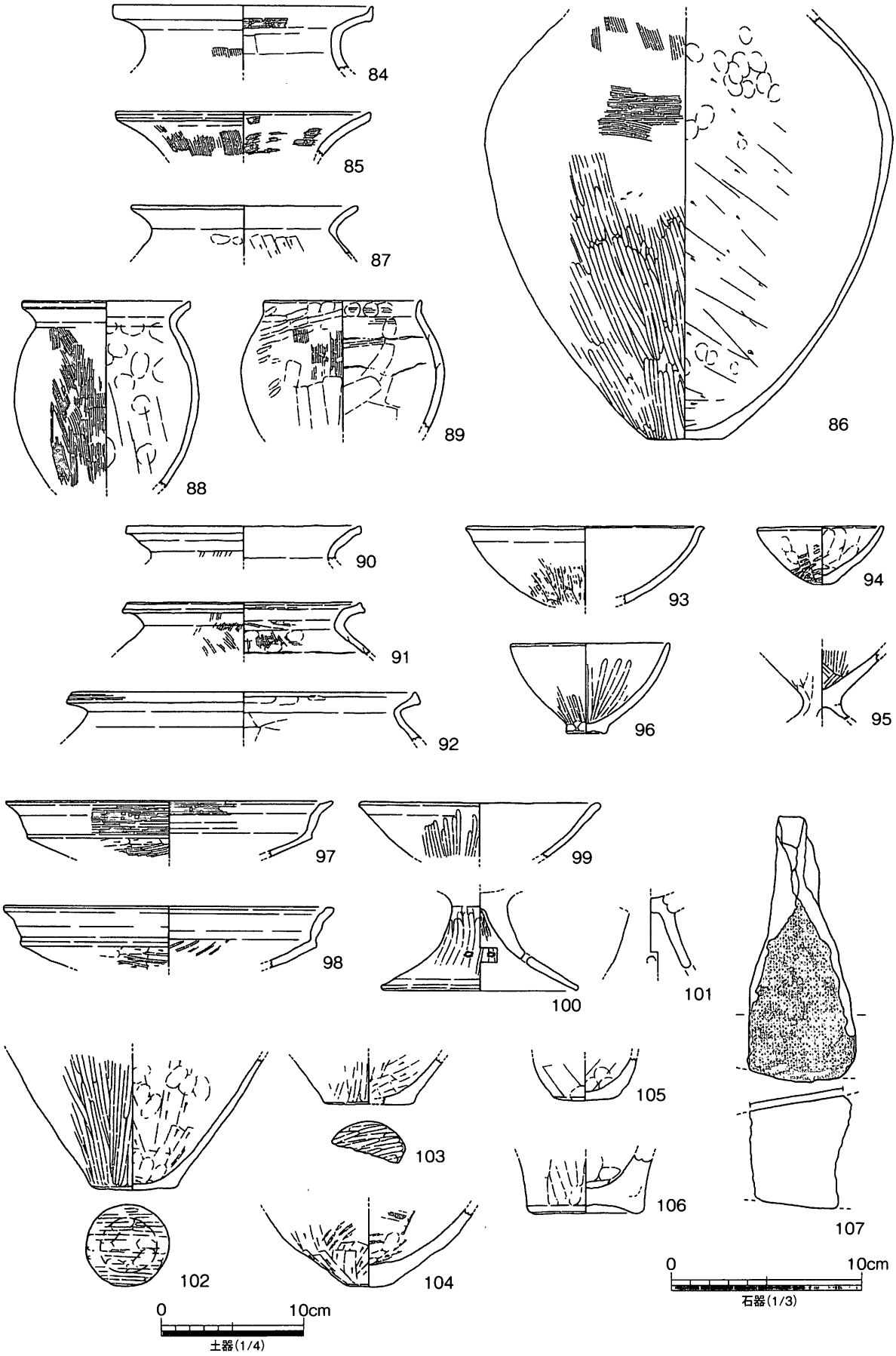
Ⅶ西区の北半部第３遺構面上で検出した住居跡である。この住居跡は建て替えが行われたものと考えられ、２組の主柱穴の組み合わせが確認できる。これを主柱穴列①・②と称する。

平面形は削平によるためか、不整形な円形を呈し、南辺に方形の張り出し部が付く。また、SXb20、SDb34・41・42・49・50 等を切り込み、SKb77 に切られている。長径 8.1 m、短径 6.8 m、面積は 44㎡を測る。

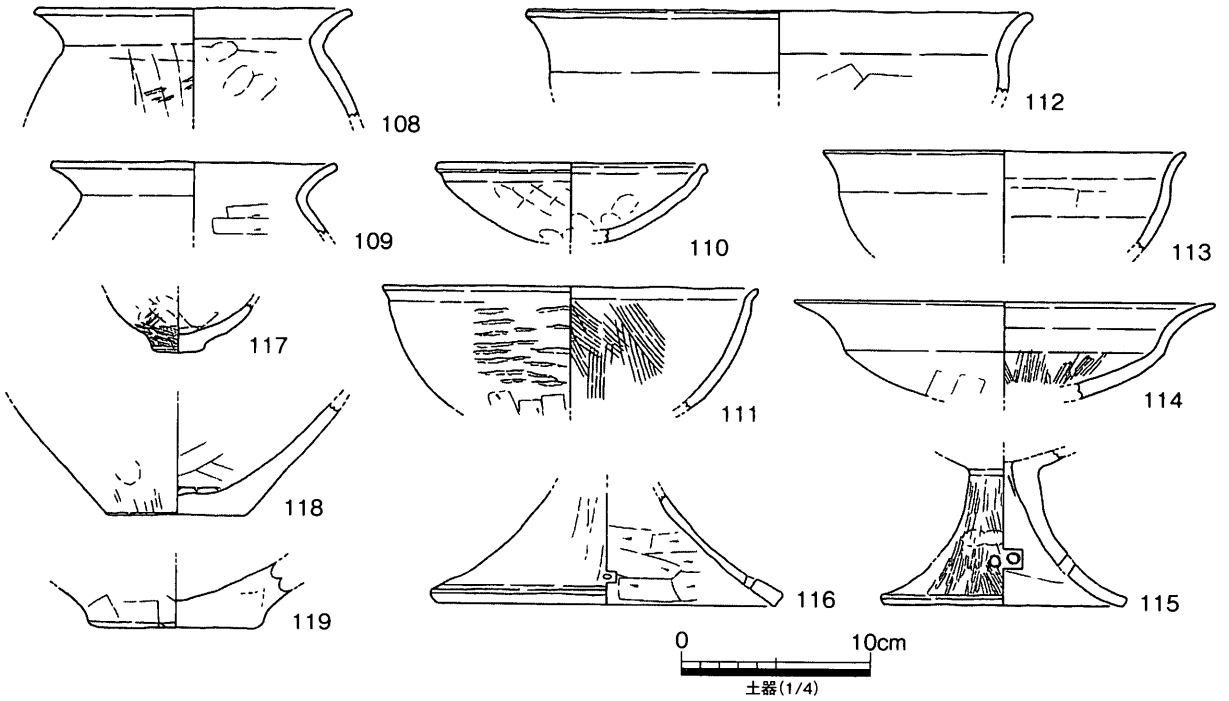
床面上では、２組の主柱穴跡と不整形な溝状遺構を検出した。主柱穴列①は、方形状に配した４基の柱穴跡を検出した。P 1･9･12･15 である。平面形は円形ないし楕円形を呈し、柱間は 3.3 ～ 3.6 mを測り、径約 0.8 ～ 1.2 m、深さ 0.3 mを測る。主柱穴列②は、主柱穴列①より一回り小さく、方形状に配した４基の柱穴跡を検出した。P 2・7・14・16 である。平面形は楕円形状を呈し、柱間は 2.5 ～ 2.9 mを測り、径約 0.7 ～ 1.0 m、深さ約 0.3 mを測る。

張り出し部は南辺に付き、形状は方形を呈し、底部は平坦である。長径 1.2 m以上、短径 0.8 m、深さ 0.1 mを測る。

床面上では、SDb49･50 等の幅広で浅い溝状遺構を検出した。これらの溝状遺構は、その検出状況から、



第 47 図　SHb34 出土遺物（1）



第48図　SHb34 出土遺物（2）

住居跡と切り合うSDb34・41・42等に繋がる溝状遺構の可能性がある。また、その先端は、SXb20の水溜め状の遺構まで繋がる排水用の溝跡と見ることもできるが、詳細な点は問題を残す。

出土遺物としては、弥生時代後期中頃～終末期の土器が出土した。84～119は、SHb34及びSDb49・50から出土した遺物である。SDb49から出土したものは、85・90・95・102の土器である。SDb50から出土したものは84・88・99・100の土器である。他はSHb34から出土した土器と石器である。SHb34の遺物の中で、主柱穴跡P2から出土したのは、86・89・96・97・103・104・107である。これらの土器は、後期中頃以降の土器である。86は口縁部を欠く甕で、調整手法及びその形状より、おそらく下川津B類に類似する甕と判断される。97は高杯杯部である。この土器も同様に、調整及び形状から、下川津B類に類似する土器と考えられる。

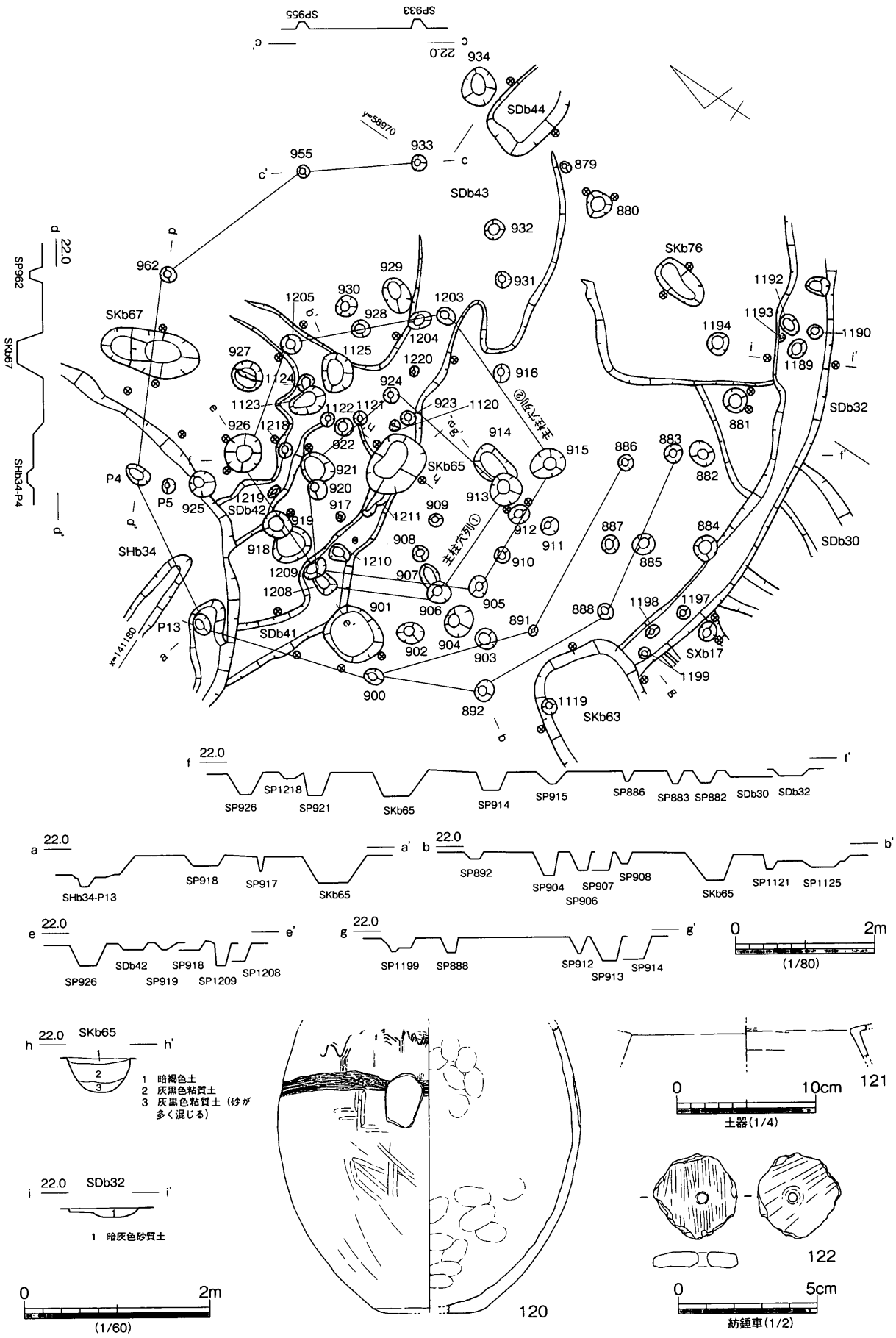
108～119は、SHb34の上層から出土した土器である。108・109は甕の上半部である。口縁部は「く」の字状に外上方に延び、端部は丸みをもつ。体部の残りは悪いが、おそらく球体気味に形成されているものと考えられる。114は終末期の高杯杯部である。口縁部は外上方に反り返り、端部は尖り気味に仕上げている。115・116は高杯脚部である。116は形状より下川津B類に類似する。

SHb35（第49図）

Ⅶ西区北半部の第3遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡12基と中央土坑1基を検出した。この住居跡は建て替えが行われたものと考えられ、2組の主柱穴跡の組み合わせが確認できる。これを主柱穴列①・②と称する。また、周囲には、SHb35を中心にして外周柱穴列を検出した。この外周柱穴列はSHb35を取り巻く、周堤の外周に廻らした柱跡の可能性がある遺構である。

なお、この住居跡の外周柱穴列の南には、外周柱穴列を廻るように配した、溝状遺構SDb32を検出しており、この溝状遺構は住居跡に伴う周溝跡の可能性が考えられる。

住居跡の平面形は、円形を呈すものと考えられる。住居跡の最大期の長径は4.5 m以上、短径3.7 m



第 49 図　SHb35 平・断面図、出土遺物

以上を測る。

主柱穴列①は、直径3.0 mの円内に、五角形状に配した5基の柱穴跡を検出した。SPb906・913・924・921・1208である。平面形は円形を呈し、柱間は1.6～2.2 mを測り、径約0.2～0.4 m、深さ0.2～0.3 mを測る。主柱穴列②は、主柱穴列①より一回り大きく、直径4.5 mの円内に、六角形状に配した6基の柱穴跡を検出した。SPb905・915・926・1205・1203・1209である。平面形は円形を呈し、柱間は1.5～2.5 mを測り、径約0.2～0.5 m、深さ約0.3 mを測る。

中央土坑SKb65は、平面は楕円形状を呈し、断面はU字状を呈する。埋土は3層に分けられ、上層は暗褐色土、中層は灰黒色粘質土、下層は砂が多く混じる灰黒色粘質土である。長径0.9 m、短径0.7 m、深さ約0.35 mを測る。

外周柱穴列は直径約7.6 mの円内の、東半部を除く区間で、約9基の柱穴跡を検出した。SPb886・891・900・(13)・(4)・962・955・933等である。平面形は円形を呈し、柱間は1.6～2.9 mとバラツキがあり、柱穴跡の径は約0.2～0.3 m、深さ約0.2 mを測る。なお、南半部の柱穴跡については、SPb886・891を使う考え方もできる。おそらく、この柱穴列に伴うのは、主柱穴列②の段階の住居の可能性が高い。

周溝跡の可能性をもつSDb32は、外周柱穴列の南辺に位置し、柱穴列を廻るように東西に延びる。検出長約8.3 m、幅0.4～0.7 m、深さ0.1～0.2 mを測る。

出土遺物としては、弥生時代中期前半の土器が出土した。120は主柱穴列②のSPb915から出土した壺で、体部中央には櫛描文を施している。121・122は中央土坑SKb65から出土した、瀬戸内型甕の口縁部と紡錘車である。

SHb39（第50図）

Ⅶ西区北半部の第3遺構面上で検出した住居跡である。主柱穴跡7基と中央土坑1基を検出した。この住居跡はSHb40と重複している。

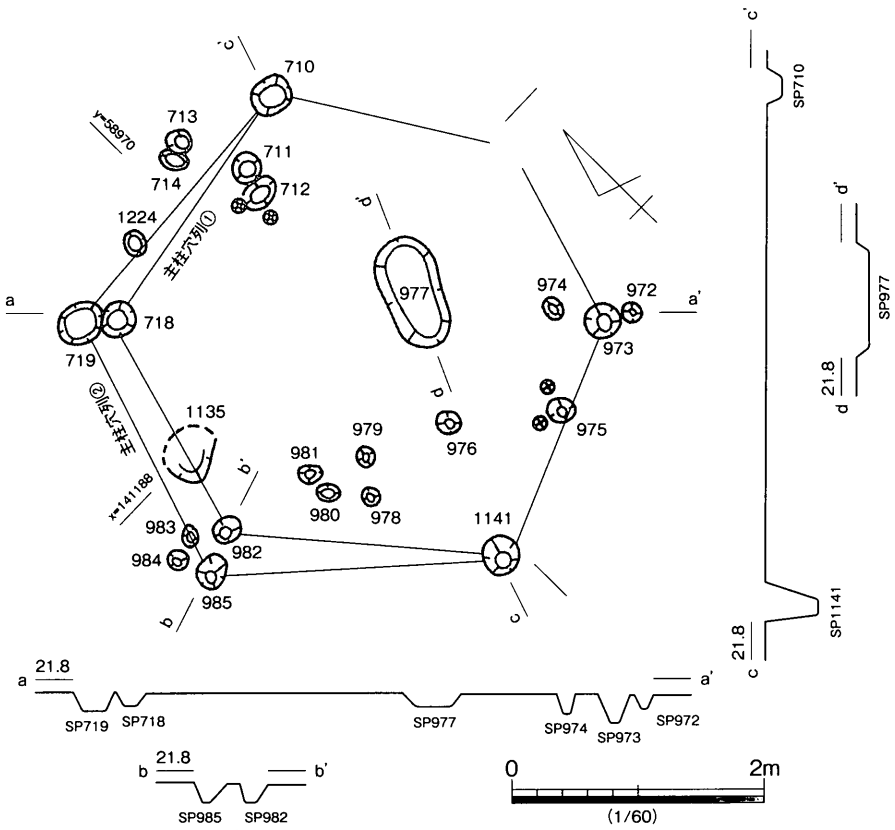
住居跡の平面形は、円形を呈すものと考えられ、住居跡の最大期の長径は4.2 m以上、短径3.5 m以上を測る。2組の主柱穴跡の組み合わせを確認した。これは増築によるものと考えられ、これを主柱穴列①・②と称する。

主柱穴列①は、直径4.0 mの円内に、六角形状の6基の柱穴跡のうち1基を欠く5基の柱穴跡を検出した。SPb710・718・973・982・1141である。平面形は円形を呈し、柱間は2.0～2.2 mを測り、柱穴跡の径は約0.2～0.3 m、深さ約0.2～0.4 mを測る。主柱穴列②は、主柱穴列①の東半部の柱穴跡を共有し、西半部を僅かに広げて配されている。直径4.2 mの円内に、六角形状に配した6基の柱穴跡のうち、5基の柱穴跡を検出した。SPb710・719・973・985・1141である。平面形は円形を呈し、柱間は2.0～2.2 mを測り、柱穴の径は約0.2～0.4 m、深さ約0.2 mを測る。

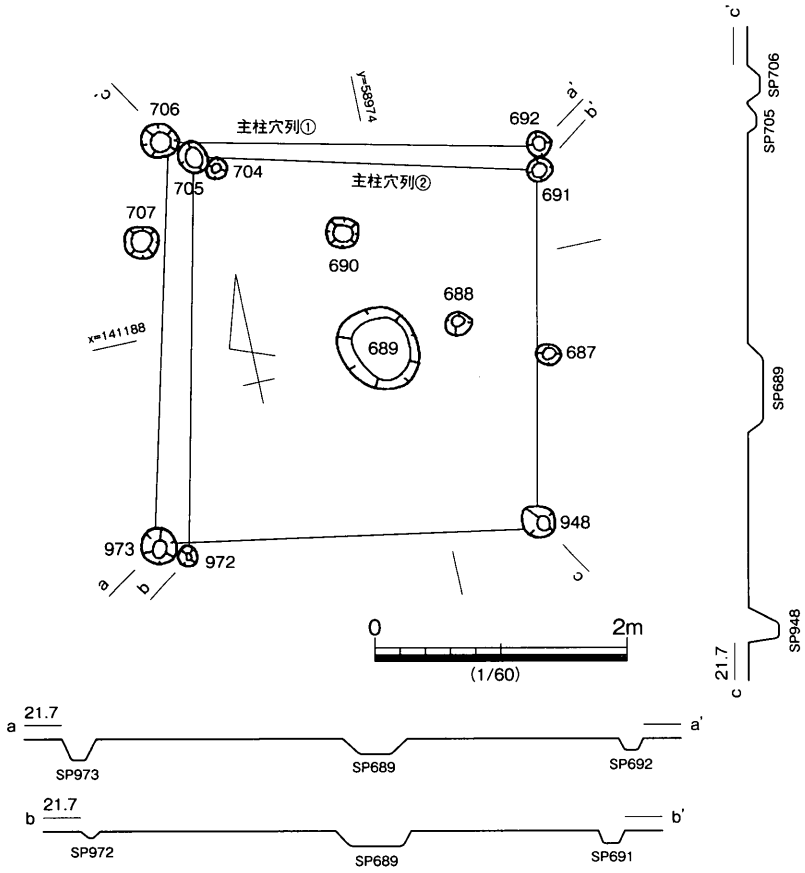
床面では、中央土坑SPb977を検出した。平面は南北に長い楕円形状を呈し、断面は逆台形状を呈する。長径0.9 m、深さ約0.1 mを測る。

SHb40（第51図）

Ⅶ西区北半部の第3遺構面上で検出した住居跡である。削平を受けたためか残りが悪く、主柱穴跡と中央土坑1基を検出した。この住居跡は建て替えが行われたものと考えられ、2組の主柱穴の組み合わ



第50図　SHb39平・断面図



第51図　SHb40平・断面図

せが確認できる。これを主柱穴列①・②と称する。

住居跡の平面形は、円形、方形かの判断ができない。住居跡の長径は3.4m以上、短径3.0m以上を測る。

主柱穴列①は、方形に組み合う4柱穴跡を検出した。SPb692・706・948・973である。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は3.0～3.2mを測り、柱径0.2m、深さ0.1～0.2mを測る。東辺のSPb692・948の中間に位置するSPb687は、柱間の中間に位置し、住居跡に伴う可能性が高い。主柱穴列②は、方形に組み合う4柱穴跡を検出した。SPb691・705・948・972である。なお、SPb948は、主柱穴列①と共有して使用される。柱穴跡の平面形は円形を呈し、柱間は2.8～3.2mを測り、柱径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。

中央土坑SPb689は、床面中央に位置する。平面は楕円形状を呈し、断面は逆台形状を呈する。長径0.7m、短径0.6m、深さ約0.1

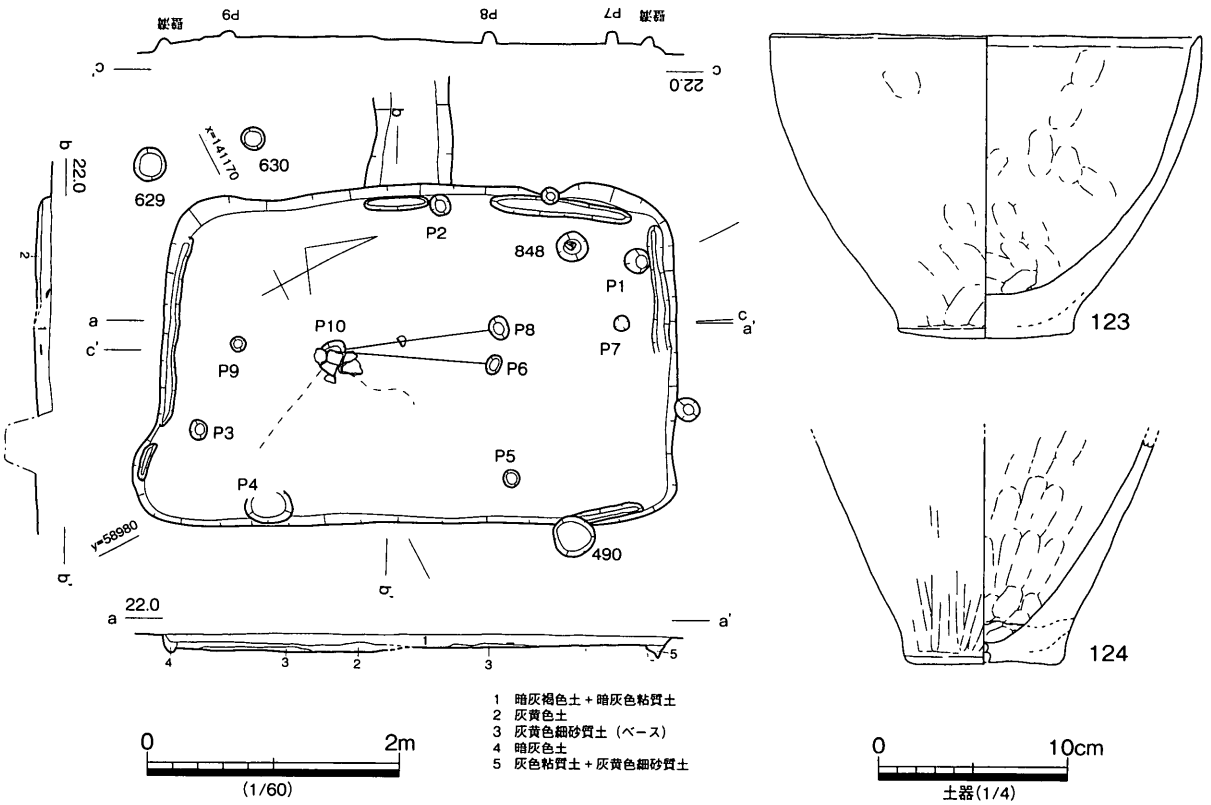
mを測る。

SHb41（第52図）

Ⅶ東・西区北半部の第3遺構面上で検出した、長方形状の住居跡である。住居跡の平面形は、長方形状を呈し、長径4.3 m、短径2.7 m、面積は11.6㎡を測る。南半部の床面は貼床で形成されているものと考えられ、基盤土上から約0.05 mの貼床層が確認できる。

床面上では壁溝跡と、一対の主柱穴跡を検出した。壁溝跡は途切れ気味ながら、ほぼ全周で検出した。幅0.15 m、深さ0.1 mを測る。主柱穴跡と考えられるのは、P6·8·10の3柱穴跡が候補としてあげられる。改築等で時差があるものと考えれば、南端のP10を2時期に併用して使用しているものと考えて、P10を起点にして、P6 − P10、P8 − P10の関係が成り立つ可能性がある。これらの柱穴跡の平面は、円形を呈し、径約0.1 ～ 0.2 m、深さ約0.1 mを測る。

出土遺物としては、弥生時代後期前半頃の土器が出土した。123は平底を呈する鉢である。124は甕の下半部で、外面にはヘラ磨き、内面には指ナデを明瞭に残している。



第52図　SHb41 平・断面図、出土遺物

SHb42（第53図）

Ⅶ東区北半部の第3遺構面上で検出した小型の住居跡である。削平を受けたためか残りが悪く、主柱穴跡4基のみを検出した。この住居跡はSHb41に隣接し、向きを揃えて配されていることから、関係する時期の住居跡の可能性が高い。

住居跡の平面形は、円形か、方形か判断できない。住居跡の長径は2.4 m以上、短径1.9 m以上を測る。

主柱穴跡は、方形に組み合う4柱穴跡を検出した。SPb843・846・850・853である。柱穴跡の平面形

は円形を呈し、柱間は1.9～2.4 mを測り、柱径0.2 m、深さ約0.2 mを測る。

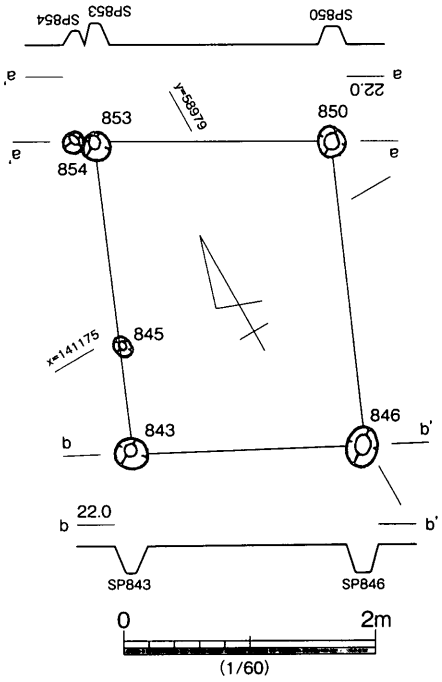
SHb43（第54図）

Ⅶ東区北半部の第3遺構面上で検出した住居跡である。削平を受けたためか残りが悪く、主柱穴跡4基と中央土坑の可能性がある、不整形な落ち込みを1基検出した。なお、住居跡の西辺には、この住居跡と主軸を揃えたSDb16が配されており、この溝状遺構は住居に伴う周溝等の可能性がある。

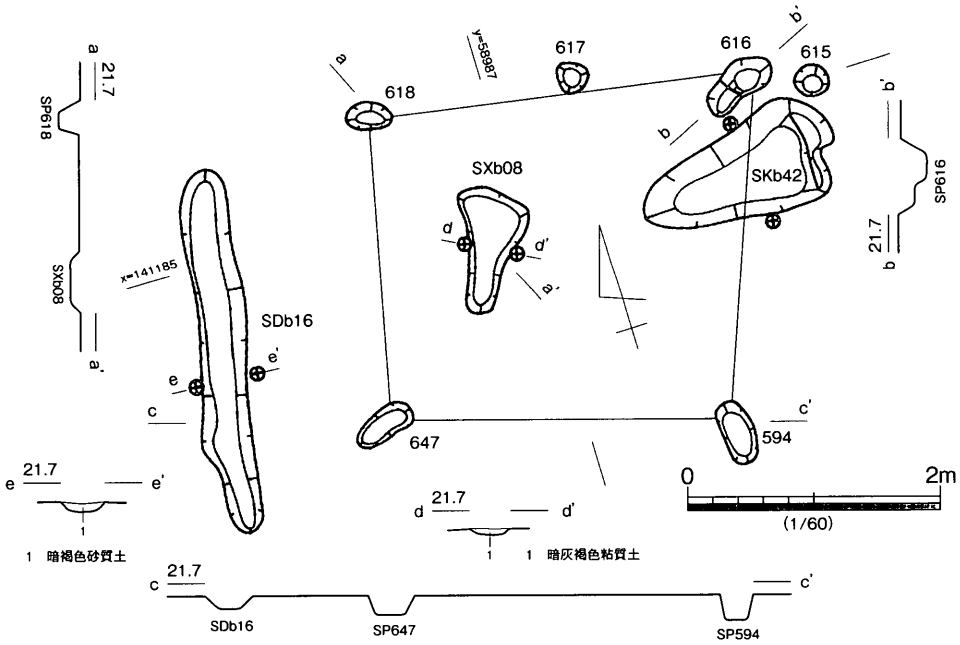
住居跡の平面形はおそらく、方形を呈すものと考えられ、住居跡の長径は3 m以上、短径2.4 m以上を測る。主柱穴跡は、方形に組み合う4柱穴跡を検出した。SPb594・616・618・647である。柱穴跡の平面形は、楕円形状を呈し、柱間は2.4～3 mを測り、柱径0.2～0.6 m、深さ約0.2 mを測る。なお北辺のSPb616・618の中間に位置するSPb617は、柱間の中間に位置することから、住居跡に伴う可能性が高い。

落ち込みSXb08は、床面の西半部に位置する。平面形は、不整形な楕円形状を呈し、断面は浅い皿状を呈する。埋土は単層で、暗灰褐色粘質土を呈する。長径1.0 m、短径0.3 m、深さ約0.1 mを測る。

周溝跡等の可能性があるSDb16は、住居跡の主軸方向に合致し、南北に配されている。断面形は浅い皿状、埋土は単層で、暗褐色砂質土を呈している。検出長2.9 m、幅約0.4 m、深さ0.1 mを測る。



第53図　SHb42平・断面図



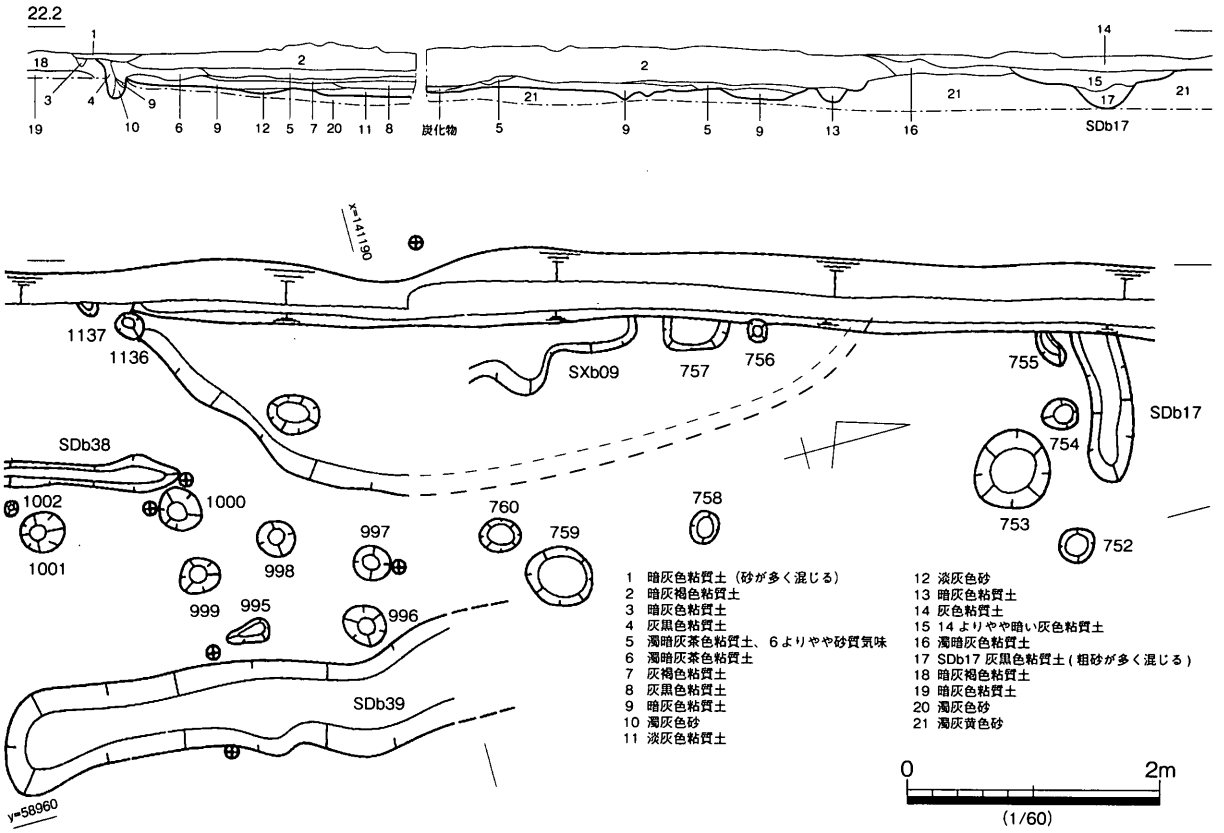
第54図　SHb43平・断面図

SHb44（第 55 図）

Ⅶ西区北半部、西壁際の第 3 遺構面上で検出した住居跡である。西半部が調査区より外れているため、約 1/3 を検出した。なお、この住居跡の東側には、溝状遺構 SDb39 等を検出しており、この溝状遺構は住居跡に伴う周溝跡の可能性が考えられる。

平面形は不明瞭であるが、おそらく円形を呈するものと考えられる。径は6.0 m以上、深さ 0.2 mを測る。床面は貼床が認められ、基盤土上から約 0.15 mの貼床層が確認できる。床面からは柱穴跡、不整形な落ち込み等を検出したが、主柱穴跡と特定できるものは検出できなかった。また、壁溝跡は平面では検出できなかったが、西壁の断面を見ると、南北両端で確認できる。幅 0.2 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mを測る。炉跡と考えられる中央土坑は、平面では検出できていないが、西壁の断面に炭化物を含む落ち込みがあるため、調査区のすぐ西方にある可能性が高い。

周溝跡の可能性をもつSDb39は、削平を受けたものと考えられ、残りが悪く、検出長は3.8 m、幅は約0.7 mを測る。断面は浅い皿状を呈し、深さは約 0.15 mを測る。埋土は 2 層に分けられ、上層が灰色粘質土、下層が灰色粗砂である。



第 55 図　SHb44 平・断面図

2．掘立柱建物跡

SBb01（第 56 図）

Ⅶ東区南東部の第３遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。この建物跡は調査区の東端に位置し、東半部は調査区より外れるため約 1/2 を検出した。

梁間２間（3.0m）、桁行１間（1.7m）以上の構造で、柱間は梁間で 1.5 m、桁行で 1.7 mを測る。主軸方位は北から 69°東に向く。柱穴跡の形状は円形を呈し、径 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.2 m～ 0.3 mを測る。

SBb02（第 57 図）

Ⅶ東区南端部の第３遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡は SHb07・08、SBb03 と重複する。また、南西隅柱穴跡は SKb44 に切られ、消失している。

梁間１間（4.4m）、桁行３間（6.3m）の構造で、桁行の柱間は 2.0 ～ 2.5 mを測る。面積は約 27.7㎡を測り、主軸方位は北から 68°西に向く。柱穴跡は削平を受けて残りが悪いが、形状は円形ないし不整円形を呈し、径 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.1 m～ 0.3 mを測る。

出土遺物としては SPb65 から、弥生時代後期後半頃の甕上半部が出土している。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平坦に仕上げている。外面にはハケ、内面にはオサエを施している。

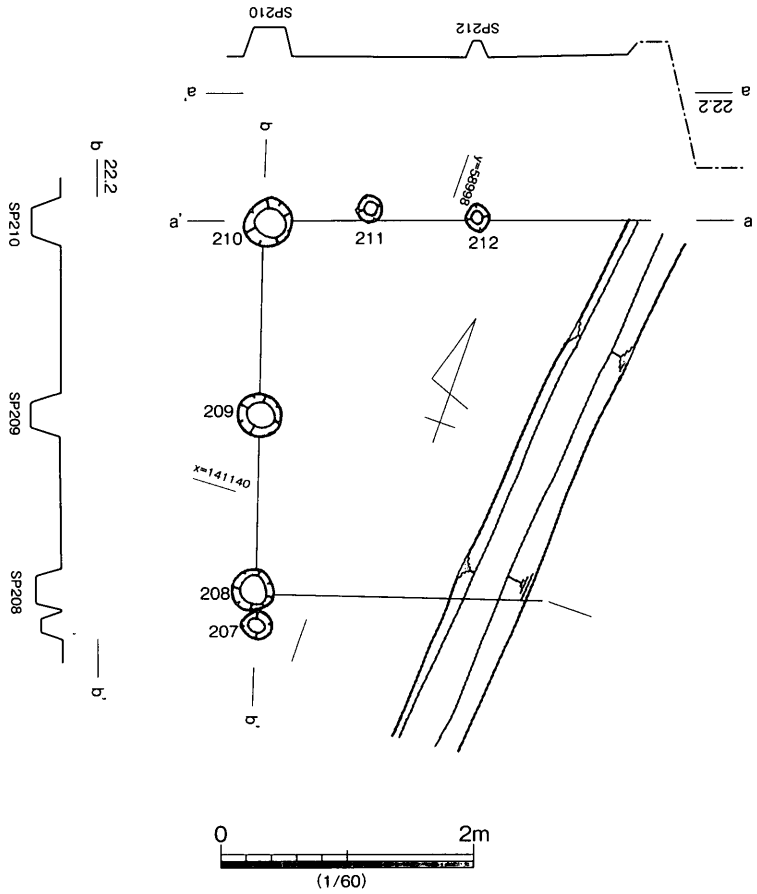
SBb03（第 58 図）

Ⅶ東区南端部の第３遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡は SHb07・08、SBb02 と重複する。また、南西隅柱穴跡は SKb44により切られ、消失している。

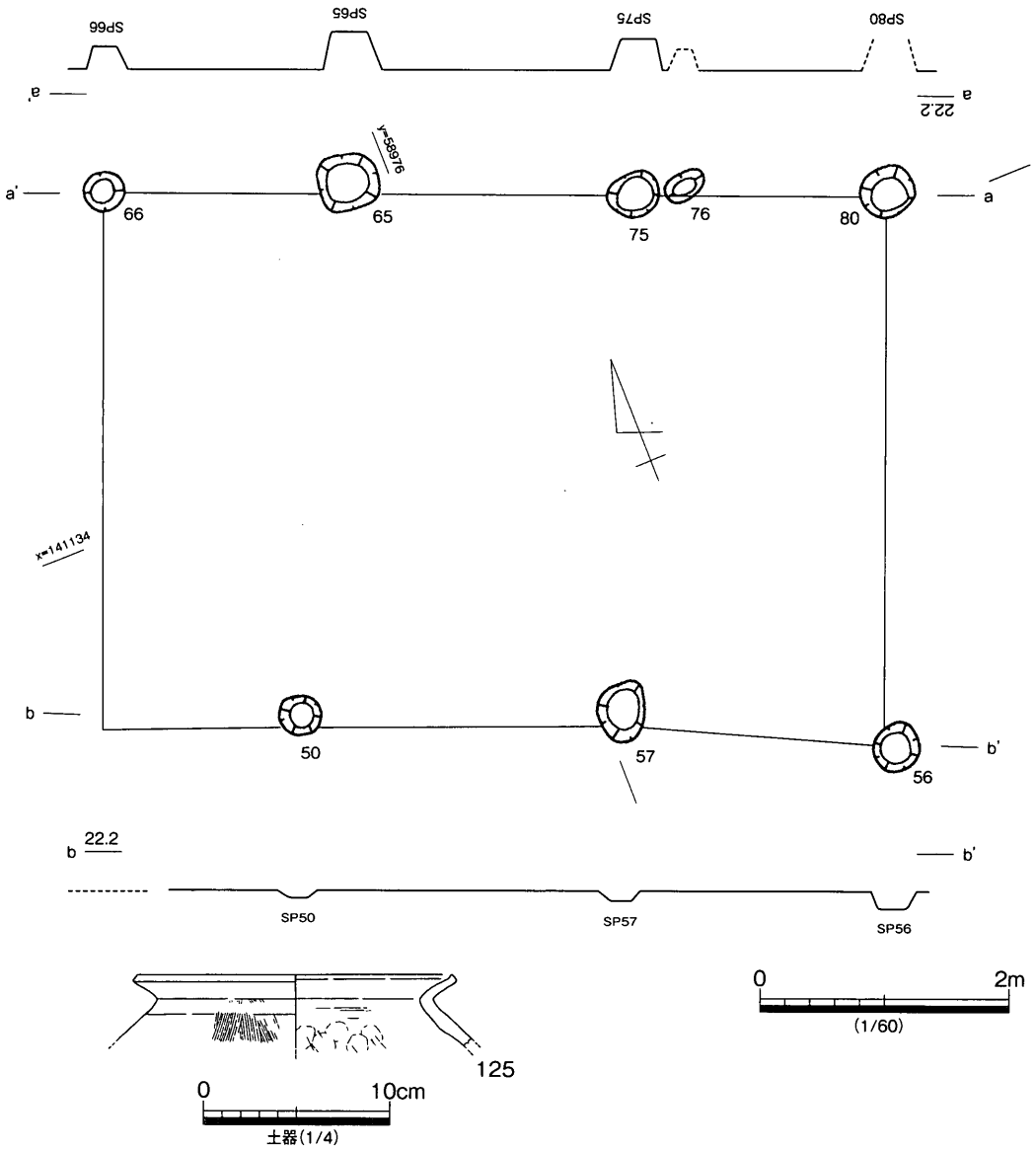
梁間１間（3.8m）、桁行３間（5.3m）の構造で、桁行の柱間は比較的均一で約 1.7 mを測る。面積は約 20㎡を測り、主軸方位は北から 85°東に向く。柱穴跡は削平を受けて残りが悪いが、形状は円形ないし不整円形を呈し、径 0.3 ～ 0.6 m、深さ 0.1 m～ 0.2 mを測る。

SBb04（第 59 図）

Ⅶ東区南端部の第３遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、



第 56 図　SBb01 平・断面図



第 57 図　SBb02 平・断面図、出土遺物

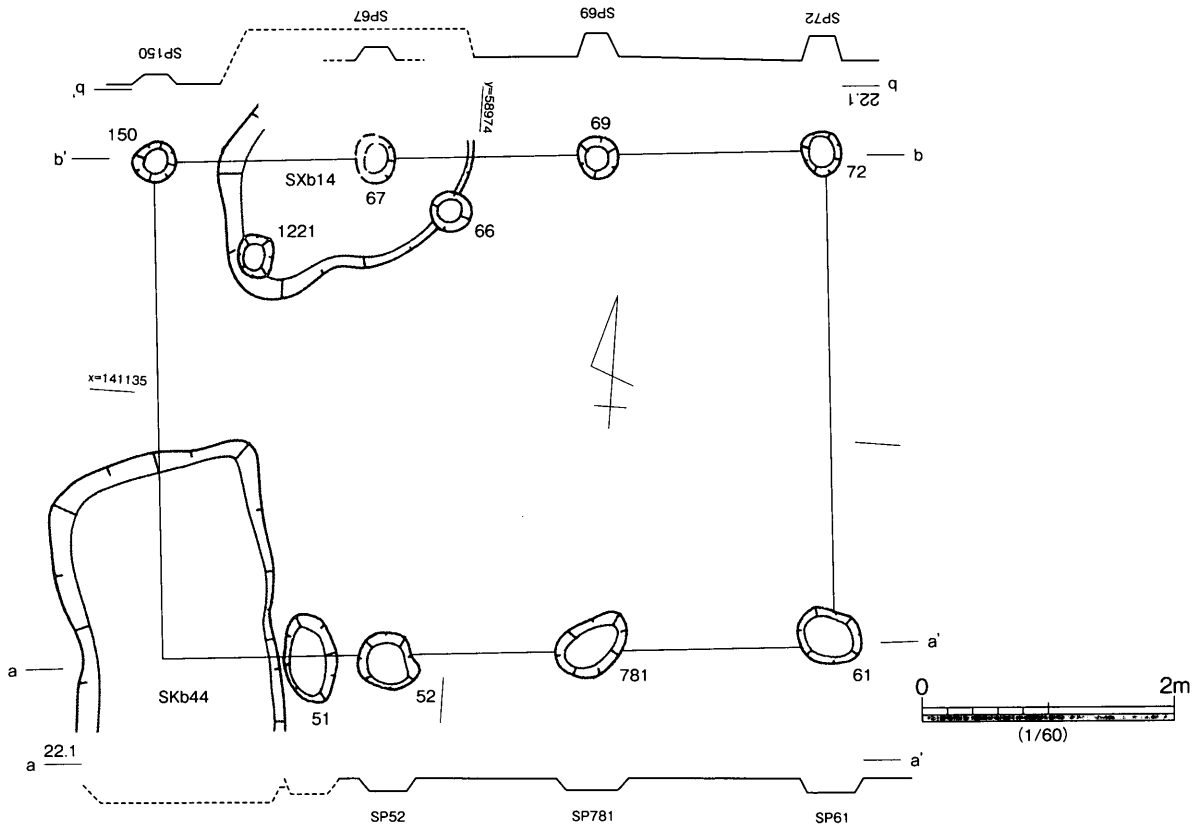
この建物跡は SBb32、SKb45 と重複し、SHb16・SKb44 に隣接する。

梁間 2 間（3.1m）、桁行 3 間（5.1m）の構造で、柱間は比較的均一で、梁間では約 1.5 m、桁行では約 1.6 m を測る。面積は約 16㎡を測り、主軸方位は北から 71° 東に向く。柱穴跡は削平を受けて残りが悪いが、形状は円形ないし楕円形を呈し、径 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.1 m～ 0.5 m を測る。

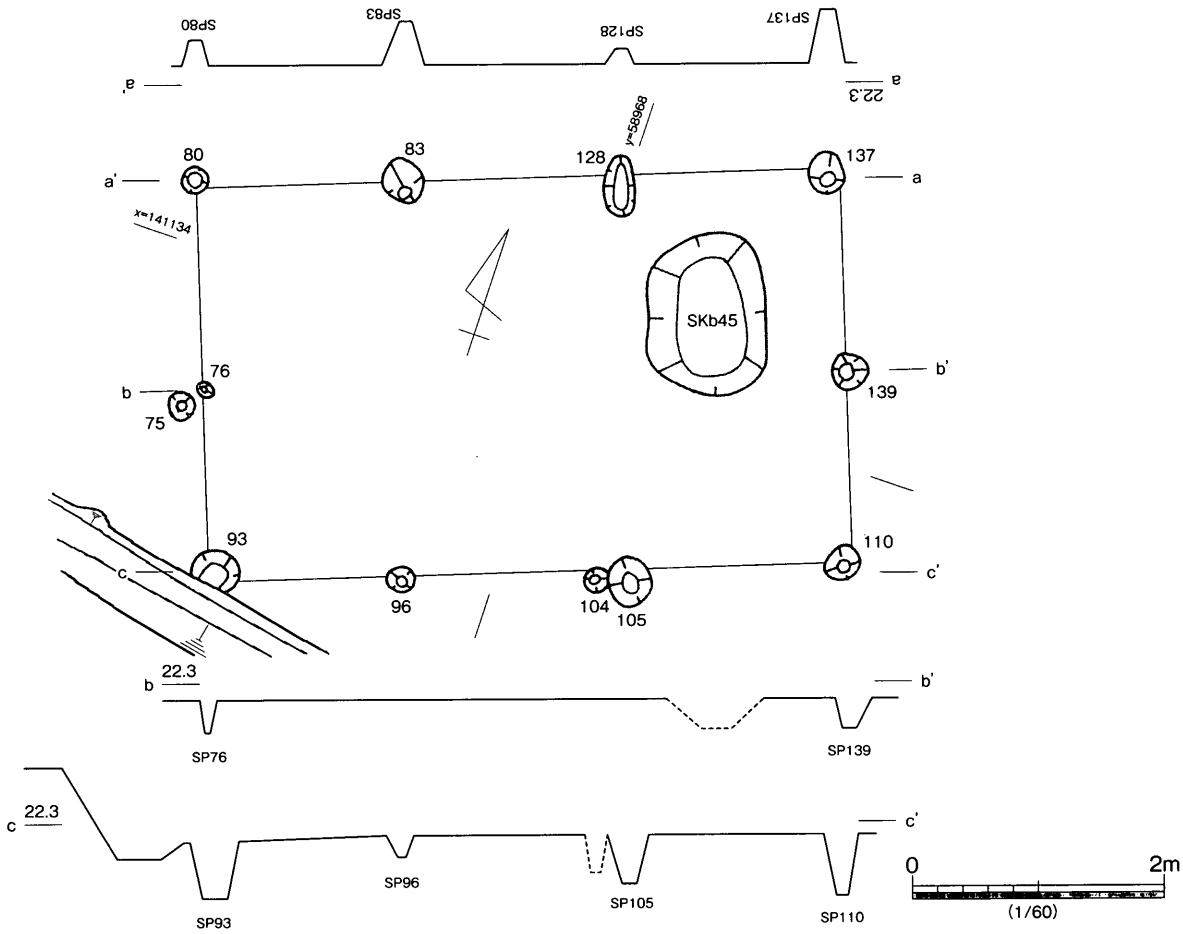
SBb05（第 60 図）

Ⅶ西区南端部の第 3 遺構面上で検出した、南北棟で総柱の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡は SHb18、SBb32 等と重複する。

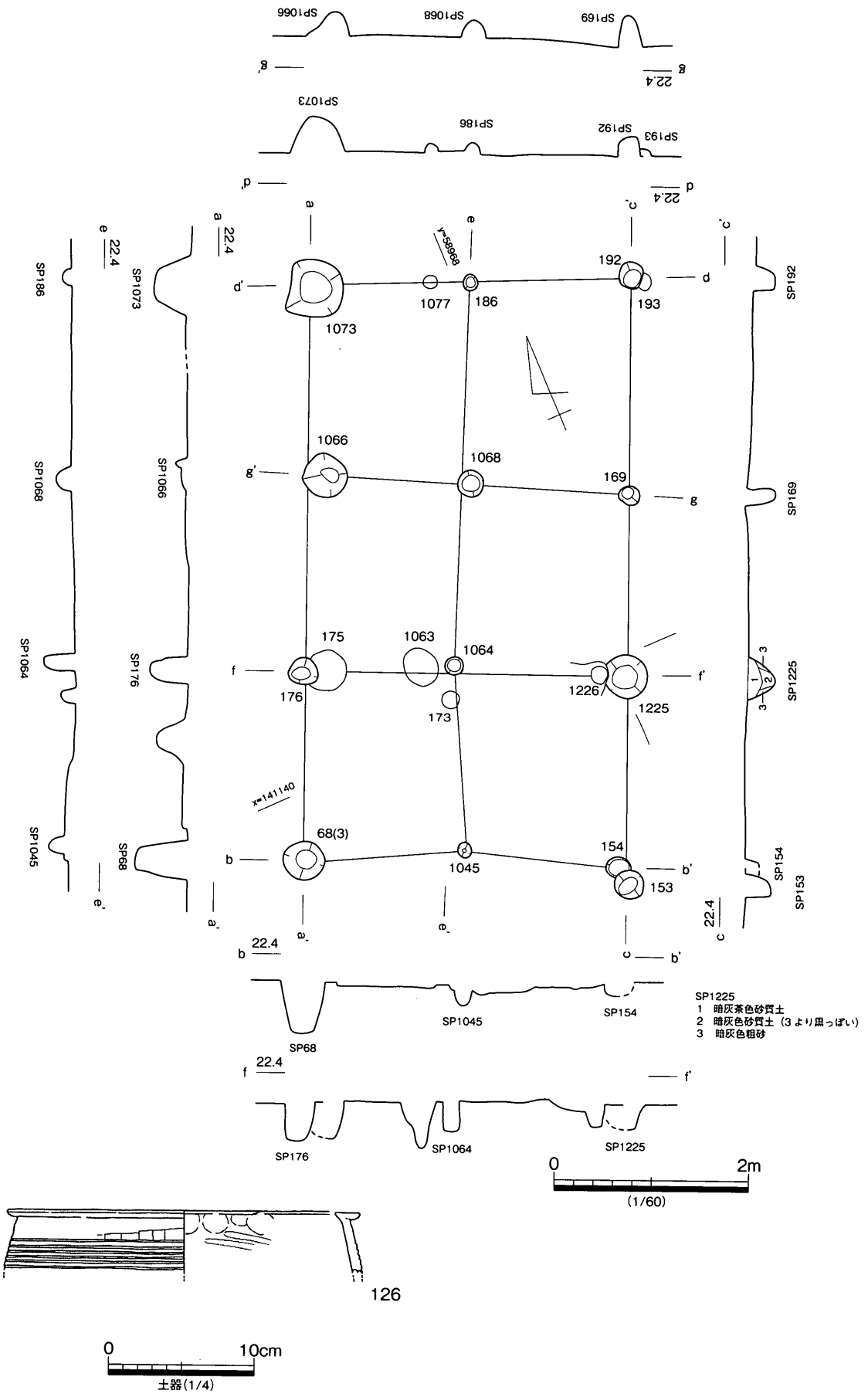
梁間 2 間（3.2m）、桁行 3 間（6.0m）の総柱の構造で、西辺の側柱列が東辺に比べ短く、そのため柱筋は若干歪んでいる。柱間は桁行で 1.9 ～ 2.2 m、梁間で約 1.6 m を測る。面積は約 19㎡を測り、主軸方位は北から 23° 東に向く。柱穴跡は円形ないし不整円形を呈し、径は 0.2 ～ 0.5 m とバラツキがあり、深さ 0.1 m～ 0.6 m を測る。



第 58 図　SBb03 平・断面図



第 59 図　SBb04 平・断面図



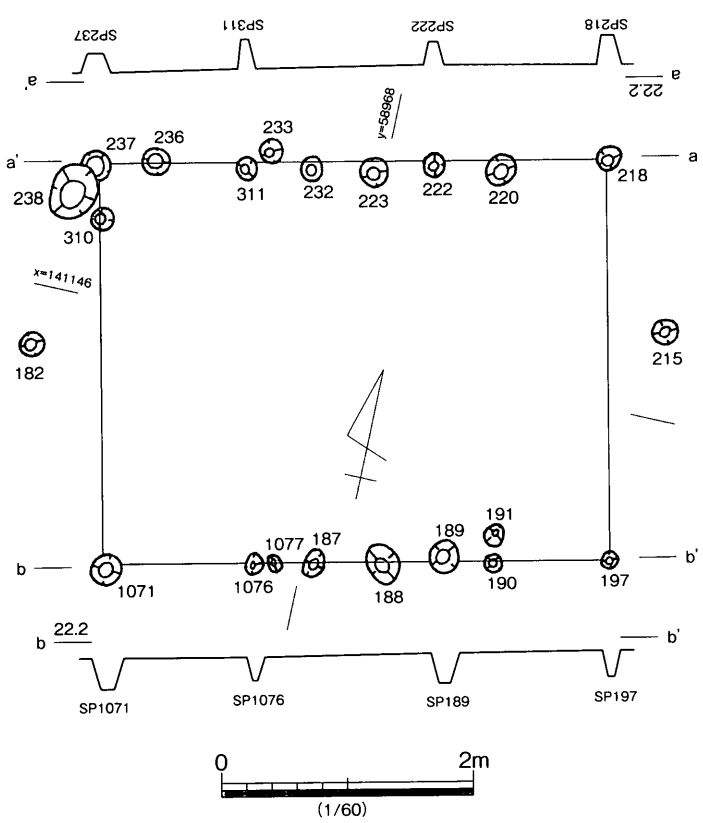
第 60 図　SBb05 平・断面図、出土遺物

出土遺物としてはSPb153から、弥生時代中期前半の甕上半部が出土している。126は口縁部に突帯を貼付ける瀬戸内型甕で、口縁部下にヘラ描直線文を施している。

SBb07（第61図）

Ⅶ西区南半部の第3遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡はSHb19と重複する。

梁間1間（3.0m）、桁行3間（4.0m）の構造である。桁行の柱間は1.2～1.5mを測る。主軸方位は北から75°東に向く。柱穴跡は削平を受けたものと考えられ、かなり小さい。柱穴跡の形状は円形を呈し、径は約0.2～0.3m、深さ約0.2～0.3mを測る。



第61図　SBb07平・断面図

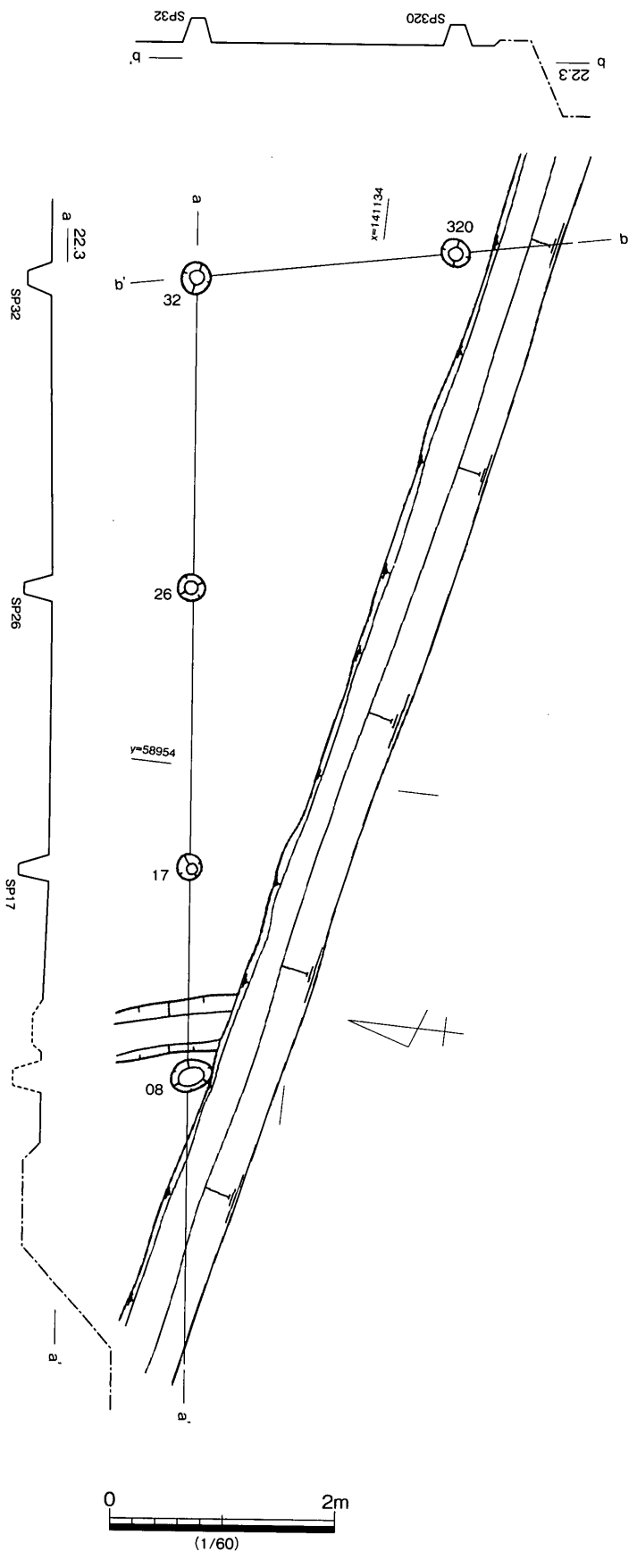
SBb08（第62図）

Ⅶ西区南西端部の第3遺構面上で検出した、大型で東西棟の掘立柱建物跡である。この建物跡は調査区の南西端部に位置し、南半部は調査区より外れるため約1/2を検出した。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡はSDb23と重複し、SHb23、SBb09等と隣接する。なお、北に隣接するSBb09は、SBb08と形状及び配置等でかなり類似していることと、両者の間はかなり隣接することから、同時期に並存していた可能性は少なく、両者は建て替え関係にあるものと考えられる。

梁間1間（2.3m）以上、桁行3間（7.0m）以上の構造で、桁行の柱間は2.4～2.7mを測る。主軸方位は北から83°東に向く。柱穴跡は削平を受けたものと考えられ、建物跡規模に比べかなり小さい。柱穴跡の形状は円形を呈し、径は約0.2～0.3m、深さ約0.2～0.3mを測る。

SBb09（第63・64図）

Ⅶ西区南西端部の第3遺構面上で検出した、大型で東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡はSHb23、SKb72等と重複し、SBb08等と隣接する。なお、SBb08で報告したように、南に隣接するSBb08とSBb09は、建て替え関係にあるものと考えられる。



第62図　SBb08平・断面図

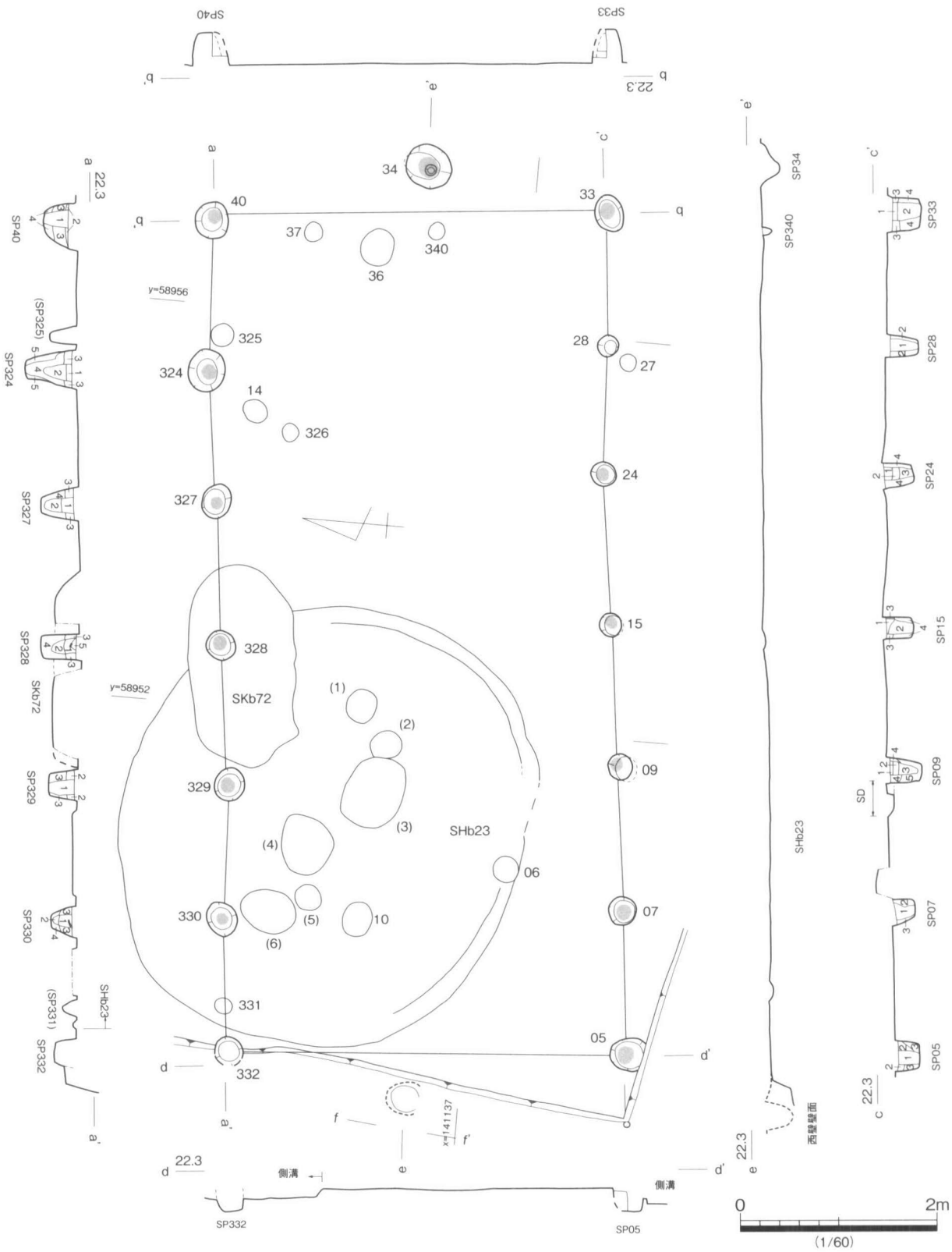
梁間1間（4.0m）、桁行6間（8.5m）の構造で、梁間中央には独立棟持柱を持つ。桁行の柱間は比較的均一で約1.3mを測る。面積は約34㎡を測り、主軸方位は北から84°東に向く。柱穴跡は削平を受けたものと考えられ、建物跡規模に比べて小さい。柱穴跡の形状は円形を呈し、ほぼ全ての柱穴跡で柱痕を検出した。柱穴跡の径は0.2～0.4m、深さ0.2m～0.6mを測る。

出土遺物としては、弥生時代後期中葉以降の土器が出土している。127～129は、SPb05・07・330から出土した土器である。127は広口壺の口縁部である。端部は僅かに拡張している。128・129は平底を呈する壺の底部である。

SBb10（第65図）

Ⅶ東区南半部の第3遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡はSHb02等と重複し、SBb12等と隣接する。なお、北に隣接するSBb12は、SBb10と向きを揃えて隣接することから、両者は建て替え関係にあるものと考えられる。

梁間1間（3.8m）、桁行3間（4.6m）の構造で、桁行の柱間は1.4～1.6mを測る。面積は約18㎡を測り、主軸方位は北から80°東に向く。柱穴跡は削平を受けて残りが悪い。柱穴跡の形状は円形を呈し、径は0.2～0.4m、深さ約0.2～0.3mを測る。



SP330
1 暗灰色粘質土（砂混じり）
2 灰黒色粘質土
3 暗灰褐色粘質土
4 暗灰褐色粘質土（砂混じり）

SP329
1 灰黒色粘質土
2 灰黒色粘質土（粗砂混じる）
3 灰黒色粘質土（砂が多く混じる）

SP328
1 灰黒色粘質土
2 灰黒色粘質土
3 暗褐色粘質土
4 暗灰色粘質土（砂混じり）
5 暗茶褐色砂質土

SP327
1 灰黒色粘質土（砂混じり）
2 灰黒色粘質土
3 暗茶褐色砂質土
4 灰黒色粘質土（砂が多く混じる）

SP324
1 暗茶褐色砂質土
2 灰黒色粘質土
3 暗灰茶褐色砂質土
4 灰黒色粘質土（2より軟かい）
5 暗灰色砂質土

SP40
1 暗灰色粘質土
2 暗灰色粘質土（砂混じり）
3 暗灰色粘質土（1より軟かく粘い）
4 暗灰色砂質土

SP05
1 暗灰色粘質土
2 暗灰色粘質土（砂混じり）
3 灰色砂質土

SP07
1 暗灰色粘質土
2 灰黒色粘質土
3 灰茶色砂質土

SP09
1 暗灰黄褐色土
2 暗灰黄色粘質土
3 暗灰色粘質土
4 暗灰黄色土（砂混じり）
5 暗灰色粘質土（砂が多く混じる）

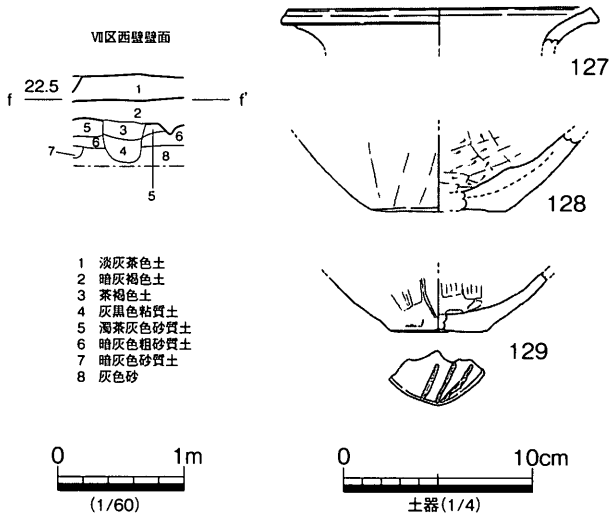
SP15
1 暗茶褐色土
2 暗灰色粘質土
3 暗茶褐色土（暗灰色粘質土混じり）
4 暗灰色粘質土（砂混じり）

SP24
1 暗茶褐色土
2 （1＋3）
3 暗灰色粘質土
4 暗灰色粘質土（砂混じり）

SP28
1 暗灰色粘質土
2 暗灰色粘質土（砂が多く混じる）

SP33 土層注記なし

第63図　SBb09 平・断面図



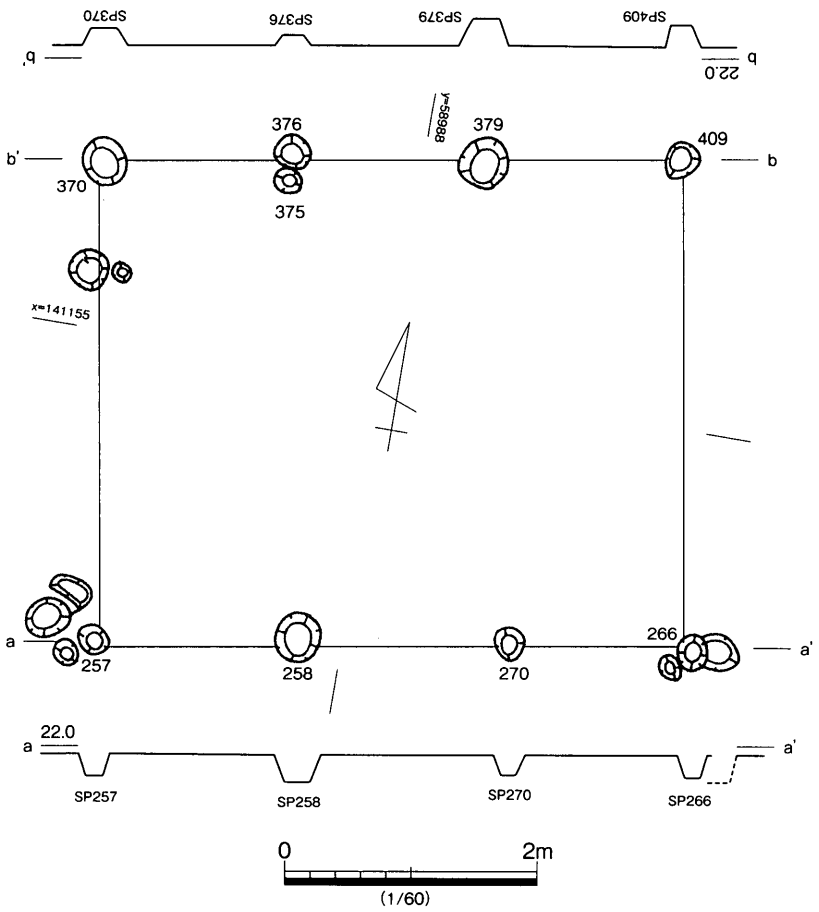
第 64 図　SBb09 断面図、出土遺物

SBb12（第 66 図）

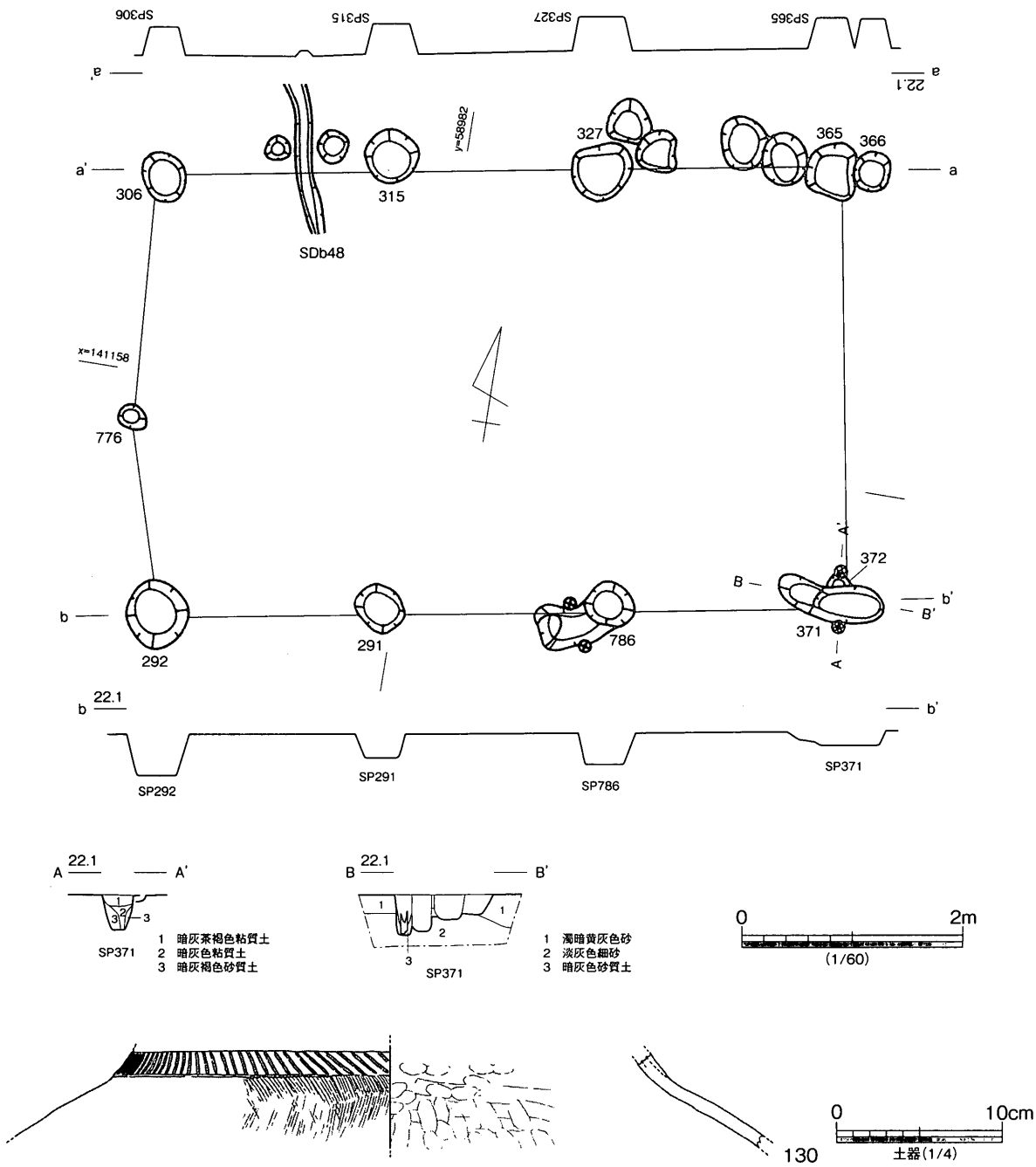
Ⅶ西区中央の第 3 遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡は SHb02、SBb13・14 等と重複し、SBb10 等と隣接する。なお、SBb10 でも報告したが、SBb12 の南に隣接する SBb10 は、SBb12 と向きを揃えて隣接することから、両者は建て替え関係にあるものと考えられる。

梁間 2 間（4.0m）、桁行 3 間（6.2m）の構造で、梁間の柱間は 1.8 ～ 2.2 m、桁行の柱間は 2.0 ～ 2.1 m を測り、比較的均一である。面積は約 25㎡を測り、主軸方位は北から 80° 東に向く。柱穴跡は円形ないし不整円形を呈し、柱穴跡の径は 0.4 ～ 0.5 m、深さ 0.1 m ～ 0.3 m を測る。なお、南東隅の SPb371 からは柱材を検出した。

出土遺物としては、柱穴跡から弥生時代後期後半頃の土器が出土した。130 は SPb291 から出土した、壺の肩部片である。頸部との境には幅広の突帯を施している。この壺は、かなり大型の壺で、土器棺に利用することも可能と考えられる。



第 65 図　SBb10 平・断面図

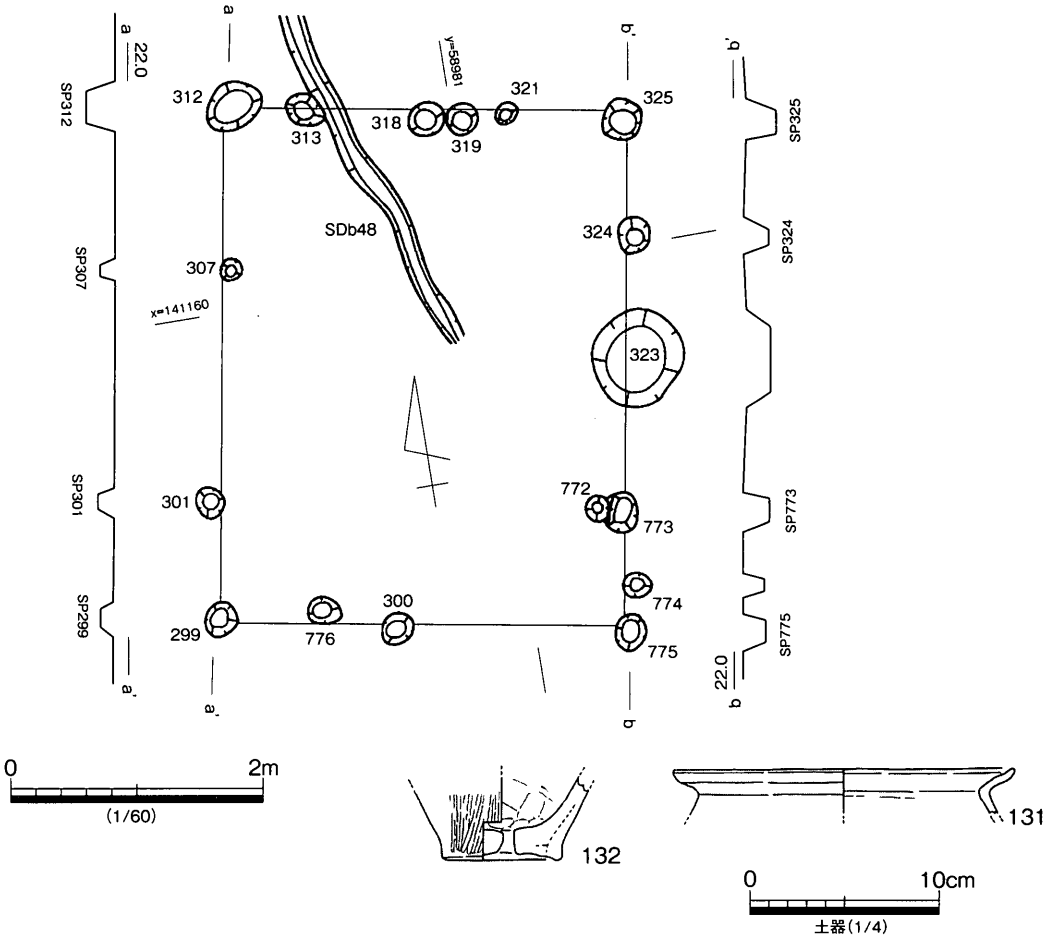


第66図　SBb12平・断面図、出土遺物

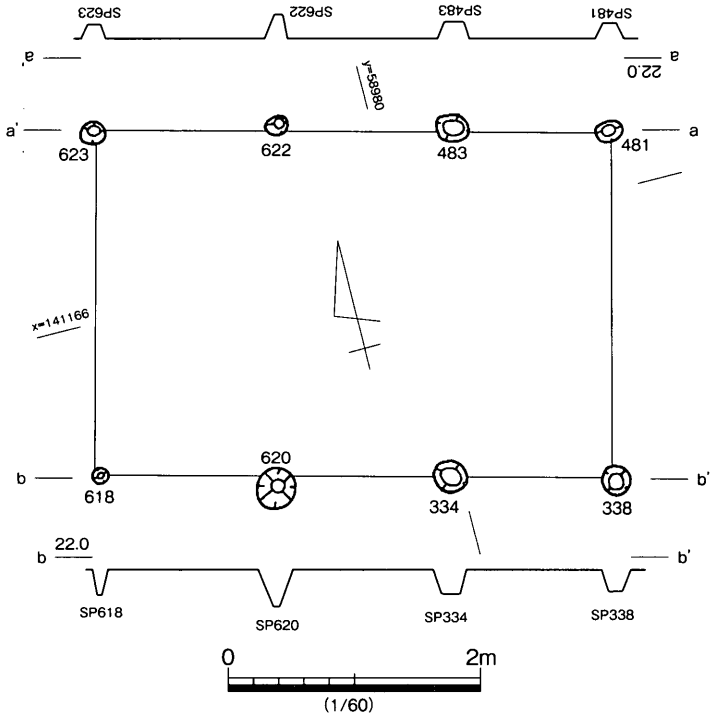
SBb13（第67図）

Ⅶ西区中央の第3遺構面上で検出した、南北棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡はSHb11、SBb12等と重複する。

梁間2間（3.2m）、桁行3間（4.0m）の構造である。この建物跡は桁行の柱間に特徴があり、隅柱から第1柱穴跡までの間隔が短く（約1.0 m）、第2柱穴跡から第3柱穴跡までの間隔が長い（約2.1 m）。なお、梁間の柱間は1.5～1.8 mを測る。面積は約13㎡を測り、主軸方位は北から12°東に向く。柱穴跡は円形を呈し、径は0.2～0.4 m、深さ0.2 m～0.3 mを測る。



第 67 図　SBb13 平・断面図、出土遺物



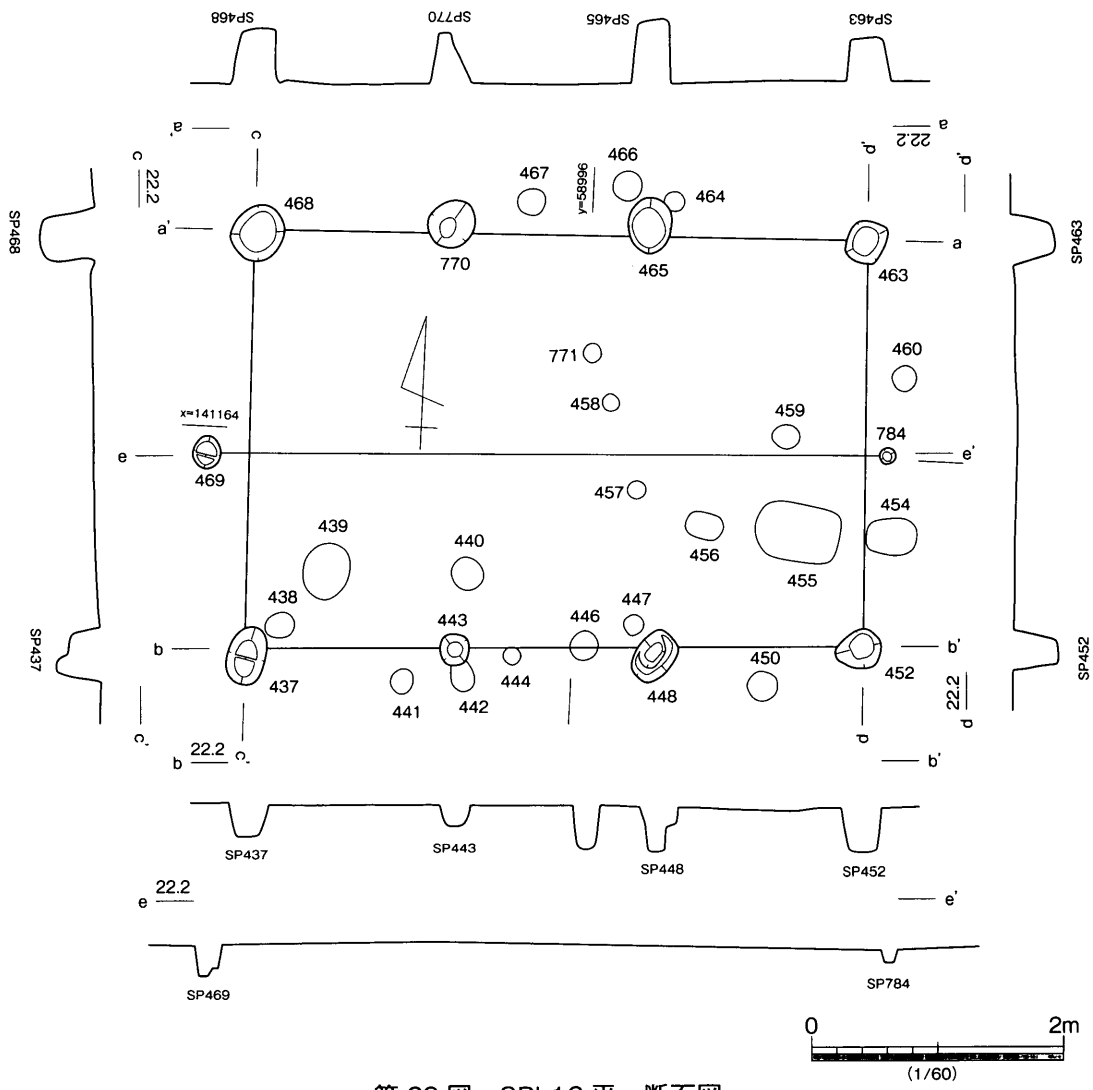
第 68 図　SBb15 平・断面図

出土遺物としては、弥生時代後期頃の土器が出土した。131 は SPb318 から出土した、甕の口縁部である。132 は SPb301 から出土した、甕型の甑の底部である。また、後掲する第 90 図 169 は SPb773 から出土したサヌカイト製打製石鏃である。

SBb15（第 68 図）

Ⅶ東・西区中央の第 3 遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。この建物跡は SHb14、SDb05 等と重複する。削平を受け、柱穴跡の残りが悪い。

梁間 1 間（2.8m）、桁行 3 間（4.1m）の構造で、梁間の柱間は約 1.5 m、桁行の柱間は約 1.4 m を測り、比較的均一である。面積は約 12㎡を測り、主軸方位は北から 76° 西に向く。柱穴跡は削平を受けたものと考えられかなり小さい。柱穴跡の形状は円形を呈し、径は 0.1 ～ 0.3 m、深さ 0.1 m～ 0.3 m を測る。

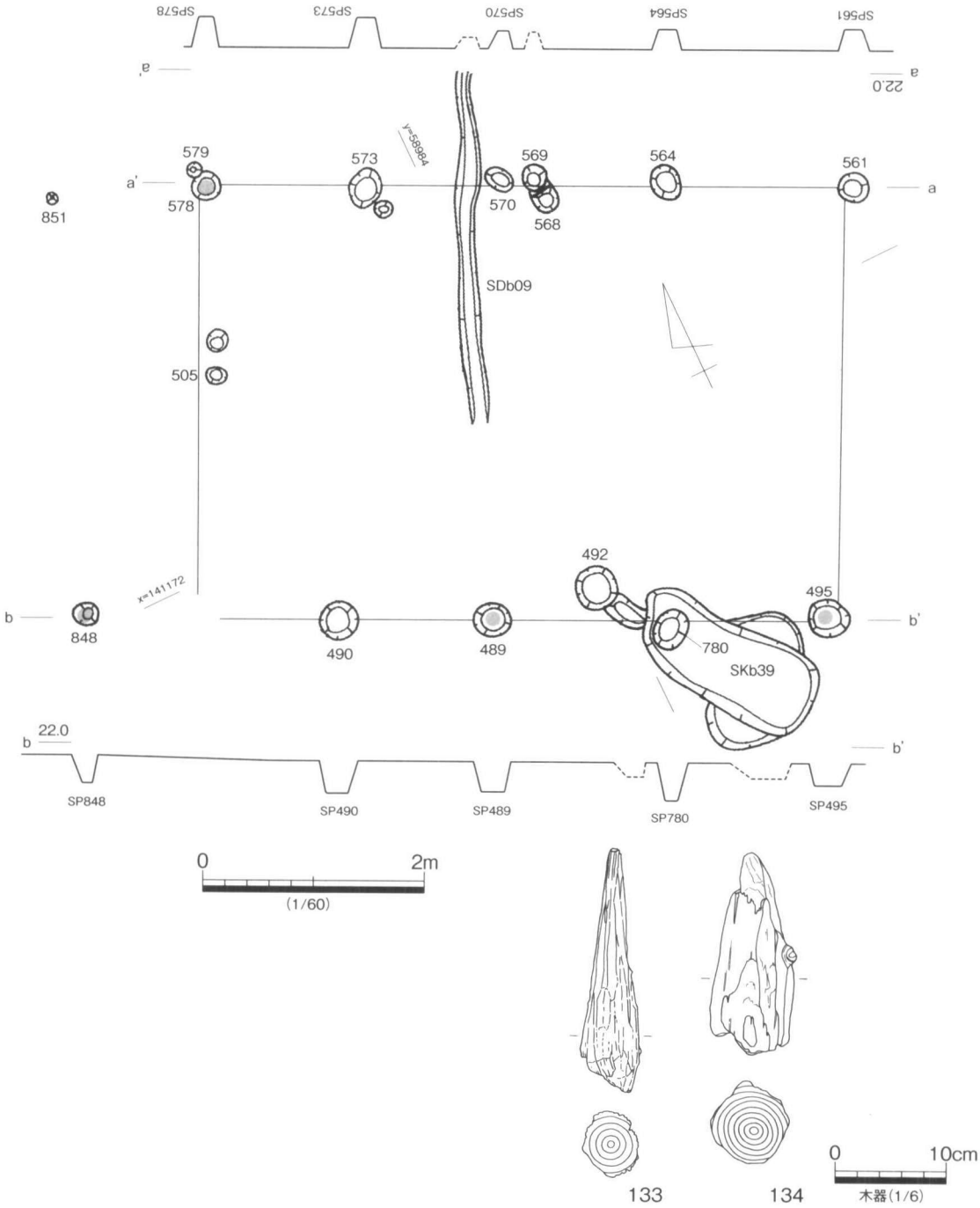


第 69 図　SBb16 平・断面図

SBb16（第 69 図）

Ⅶ東区中央の第 3 遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡は SHb15 と重複し、SHb09、SAb07 等と隣接する。

梁間１間（3.3m）、桁行３間（5.0m）の構造で、梁間中央には独立棟持柱を持つが、小規模な柱穴跡であり、疑問を残す。桁行の柱間は比較的均一で約 1.7 mを測る。面積は約 17㎡を測り、主軸方位は北から 88° 東に向く。柱穴跡は削平を受けたものと考えられ、不揃いである。柱穴跡の形状は円形ないし不整円形を呈し、径は 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.2 m～ 0.5 mを測る。



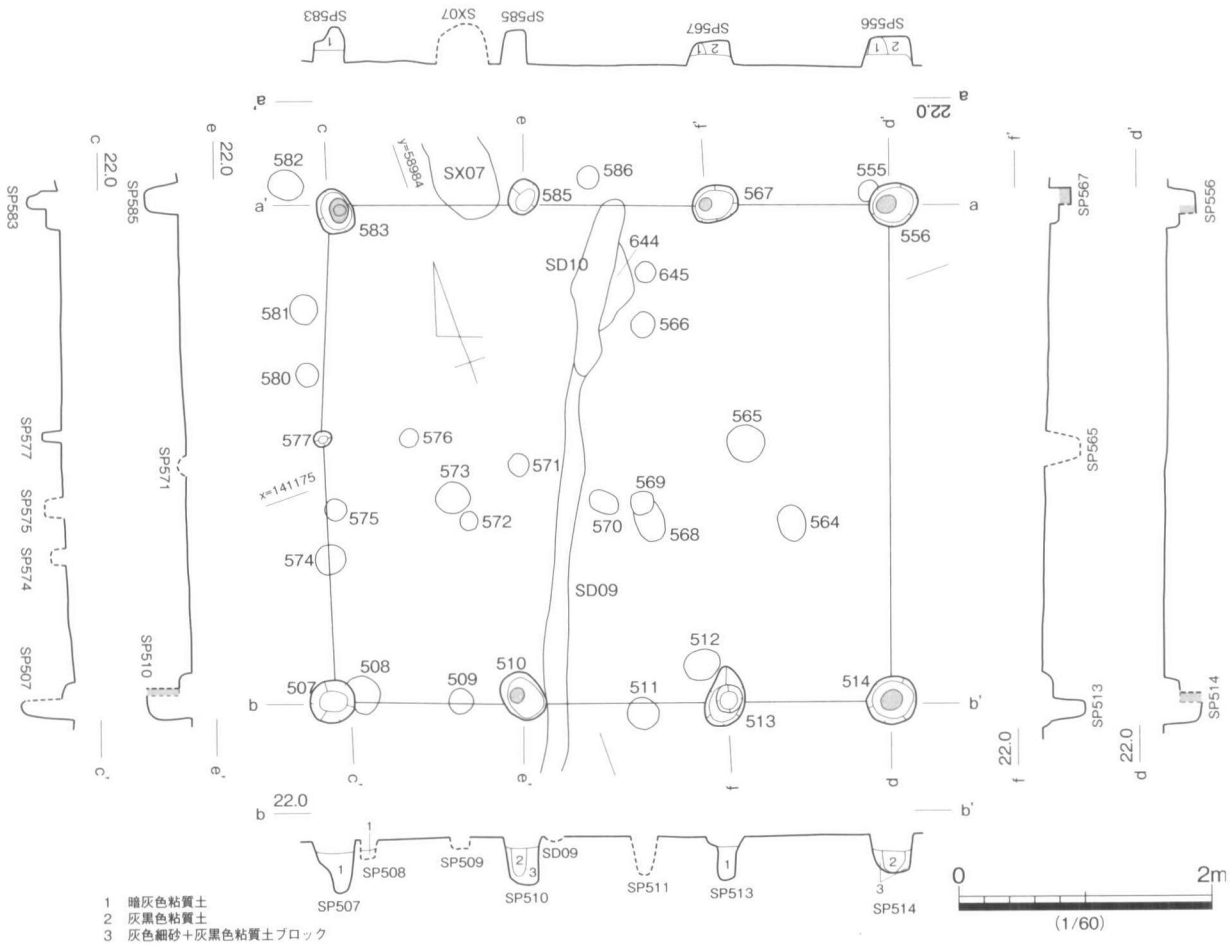
第 70 図　SBb17 平・断面図、出土遺物

SBb17（第 70 図）

Ⅶ東区北半部の第３遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡は SBb18・19 等と重複し、SHb41 に切られている。重複する SBb18・19 は、SBb17 と向きや構造も類似することより、同一地点で建物跡の建て替えを行い、その結果３棟が重複したものと考えられる。

梁間１間（3.9m）、桁行４間（5.8m）の構造で、桁行の柱間は比較的均一で約 1.5 m を測る。面積は約 23㎡を測り、主軸方位は北から 64°西に向く。柱穴跡は削平を受けたものと考えられ、残りが悪く、南西の隅柱穴跡は検出できなかった。 柱穴跡の形状は円形を呈し、径は 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.1 m～ 0.3 m を測る。なお、この建物跡の SPb495・848 からは柱材（133・134）を検出した。

出土遺物としては、２点の柱材がある。133 は SPb495 から出土した柱材である。樹種はツガ属である。134 は SPb848 から出土した柱材である。樹種はモミ属である。



第 71 図　SBb18 平・断面図

SBb18（第 71 図）

Ⅶ東区北半部の第３遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡は SBb17・19、SXb07 等と重複し、SHb41、SKb38 等と隣接する。SBb17 でも報告したが、SBb18 と重複する SBb17・19 は、SBb18 と向きや構造も類似することより、同一地点で建物跡の建て替えを行い、その結果３棟が重複したものと考えられる。

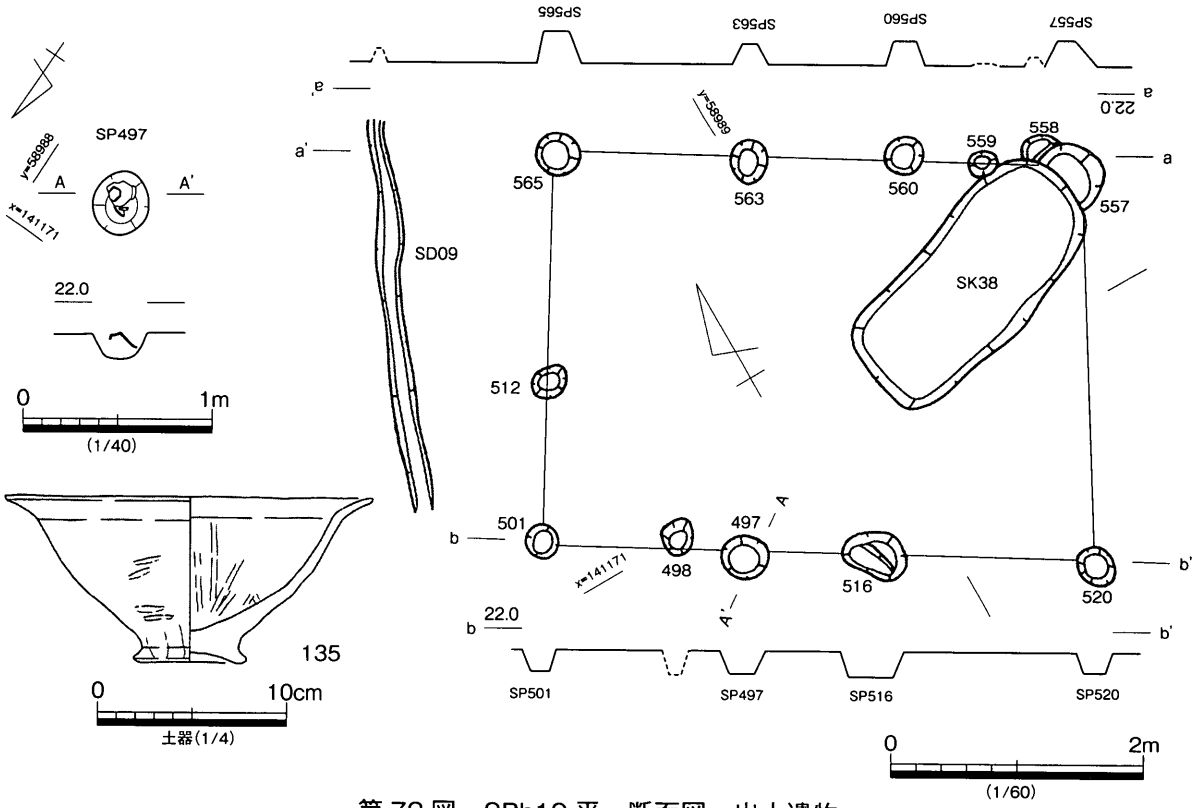
梁間と桁行の長さがほぼ同一で、全体の形状は正方形に近い。削平を受けたものか、棟持柱の残りが悪く、東辺の梁間では検出できなかった。梁間２間（4.0m）、桁行３間（4.4m）の構造で、梁間の柱間は約 2.0 m、桁行の柱間は比較的均一で約 1.4 mを測る。面積は約 18㎡を測り、主軸方位は北から 71°西に向く。柱穴跡は削平を受けたものと考えられ、不揃いである。柱穴跡の形状は円形ないし不整円形を呈し、５基の柱穴跡から柱痕を検出した。柱穴跡の径は 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.2 m～ 0.5 mを測る。

SBb19（第 72 図）

Ⅶ東区北半部の第３遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡は SBb17・18 等と重複し、SKb38 に切られている。SBb17・18 でも報告したが、重複する SBb17･18 は､SBb19 と向きを揃え構造も類似することより､同一地点で建物跡の建て替えを行い、その結果３棟が重複したものと考えられる。

梁間１間（3.0m）、桁行３間（4.3m）の構造で、桁行の柱間は不揃いで 1.0 m～ 1.7 mまでのバラツキがある。面積は約 13㎡を測り、主軸方位は北から 58°西に向く。柱穴跡の形状は円形ないし不整円形を呈し、柱穴跡の径は 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.2 m～ 0.3 mを測る。

出土遺物としては、弥生時代後期中頃の土器が出土した。135 は SPb497 から出土した台付鉢である。口縁部は外上方に折り曲げ、底部に低い脚台を付ける。外面には僅かにタタキの痕跡を残している。



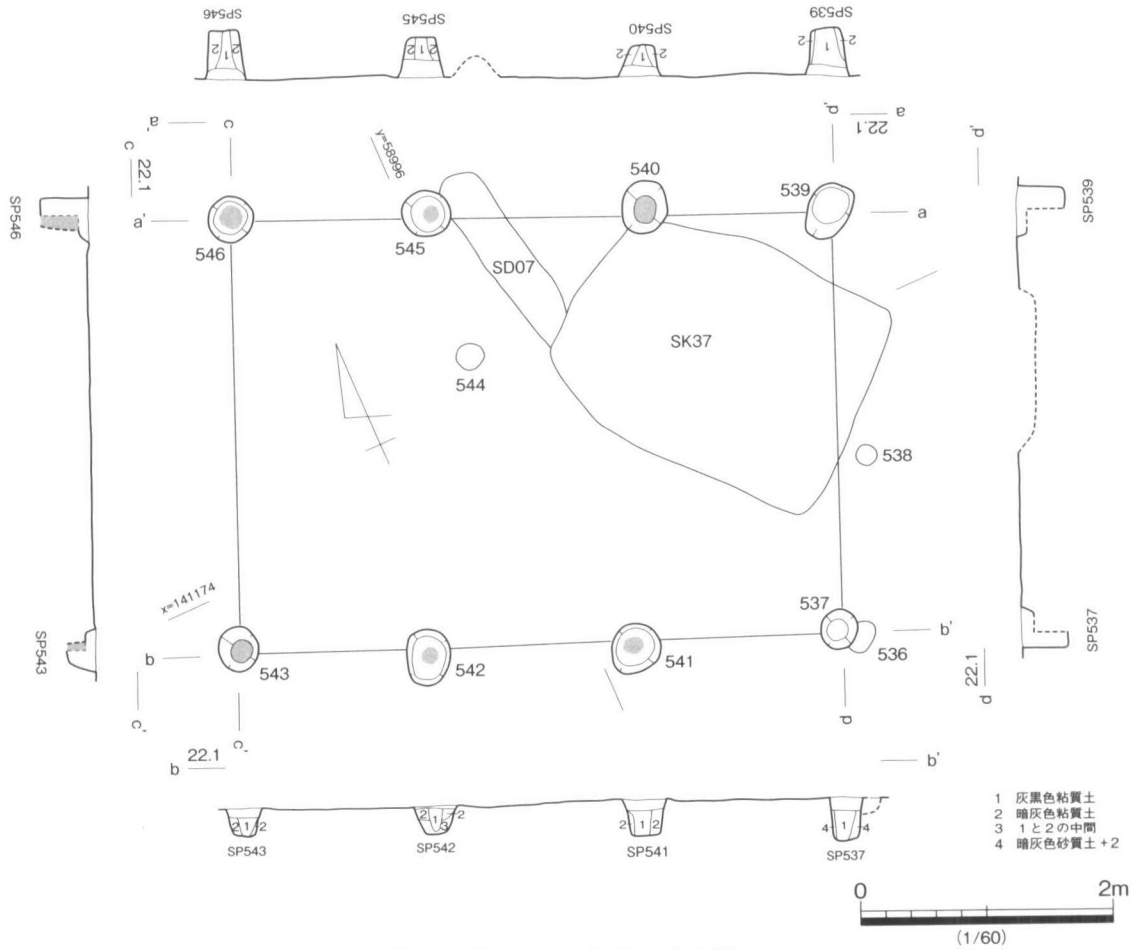
第 72 図　SBb19 平・断面図、出土遺物

SBb20（第 73 図）

Ⅶ東区北半部の第３遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。この建物跡は SKb37 に切られている。

梁間１間（3.3m）、桁行３間（4.7m）の構造で、桁行の柱間は比較的均一で約 1.6 mを測る。面積は

約 16㎡を測り、主軸方位は北から 66° 西に向く。柱穴跡の形状は円形ないし不整円形を呈し、ほぼ全ての柱穴跡から柱痕を検出した。柱穴跡の径は 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.3 m～ 0.4 mを測る。



第 73 図　SBb20 平・断面図

SBb21（第 74 図）

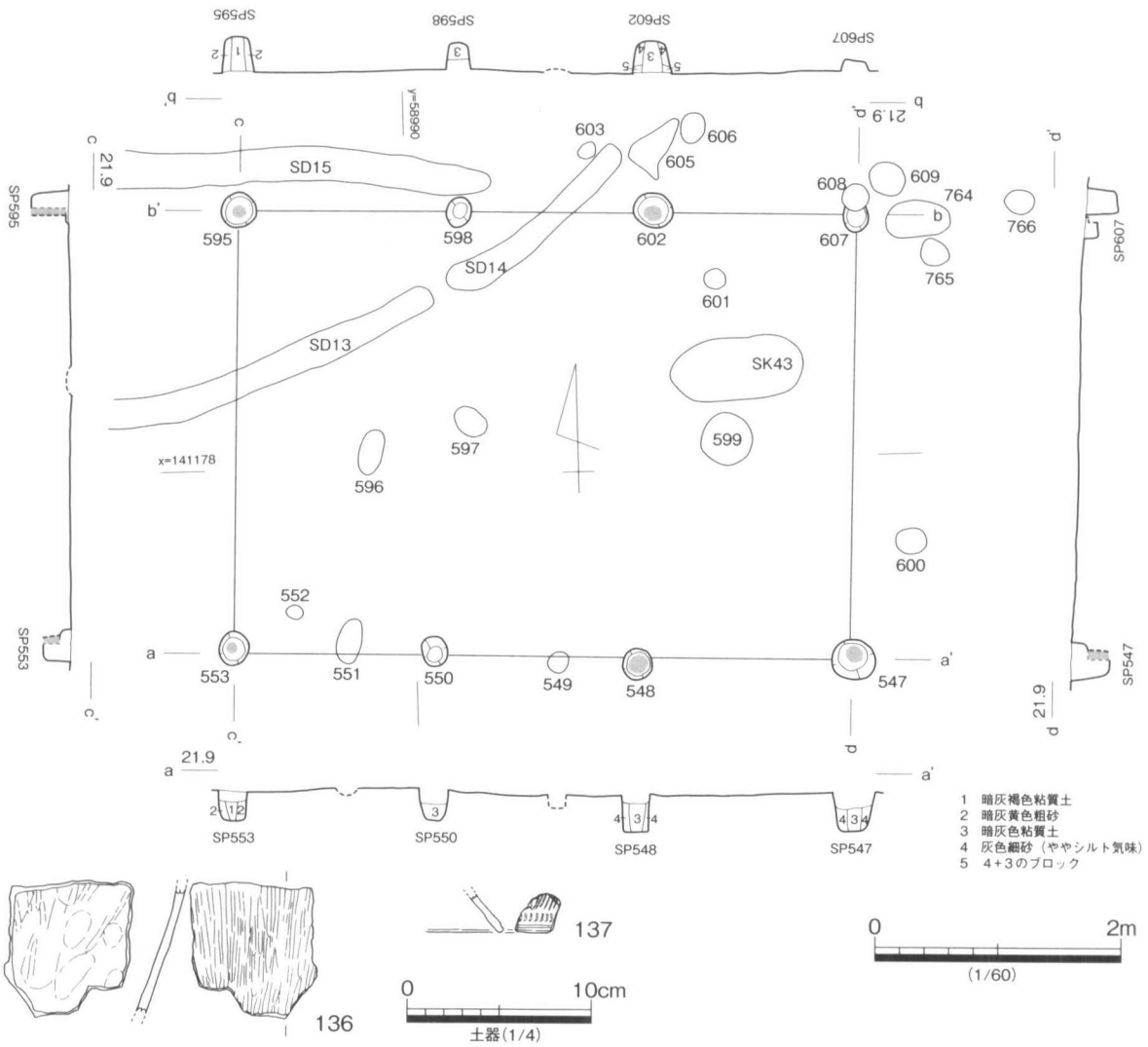
Ⅶ東区北半部の第 3 遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡は SKb43、SDb13・14・15 等と重複し、SBb18・20 に隣接する。

梁間 1 間（3.5m）、桁行 3 間（5.0m）の構造で、桁行の柱間は比較的均一で約 1.7 mを測る。面積は約 18㎡を測り、主軸方位は北から 88° 西に向く。柱穴跡は円形を呈し、ほぼ 5 基の柱穴跡で柱痕を検出した。柱穴跡の径は 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.1 m～ 0.3 mを測る。

出土遺物としては、柱穴跡から弥生時代後期頃の土器が出土した。136 は SPb602 から出土した甕の下半部である。外面にはヘラミガキを顕著に施している。137 は SPb548 から出土した土器片である。細片のため詳細は解らないが、おそらく、高杯の脚部片と考えられる。

SBb22（第 75 図）

Ⅶ西区中央部の第 3 遺構面上で検出した、平面形は正方形に近い、南北棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡は SHb27・30、SXb16 等と重複している。削平を受けたためか残りが悪く、南西の隅柱等は検出できなかった。



第 74 図　SBb21 平・断面図、出土遺物

梁間 2 間（4.4m）、桁行 2 間（5.2m）の構造で、柱間にはバラツキがあり、梁間の柱間は約 2.3 m、桁行の柱間は 2.2 ～ 2.8 m を測る。面積は約 23㎡を測り、主軸方位は北から 3°東に向く。柱穴跡は円形ないし不整円形を呈し、柱穴跡の径は 0.2 ～ 0.7 m、深さ 0.1 m～ 0.4 m を測る。

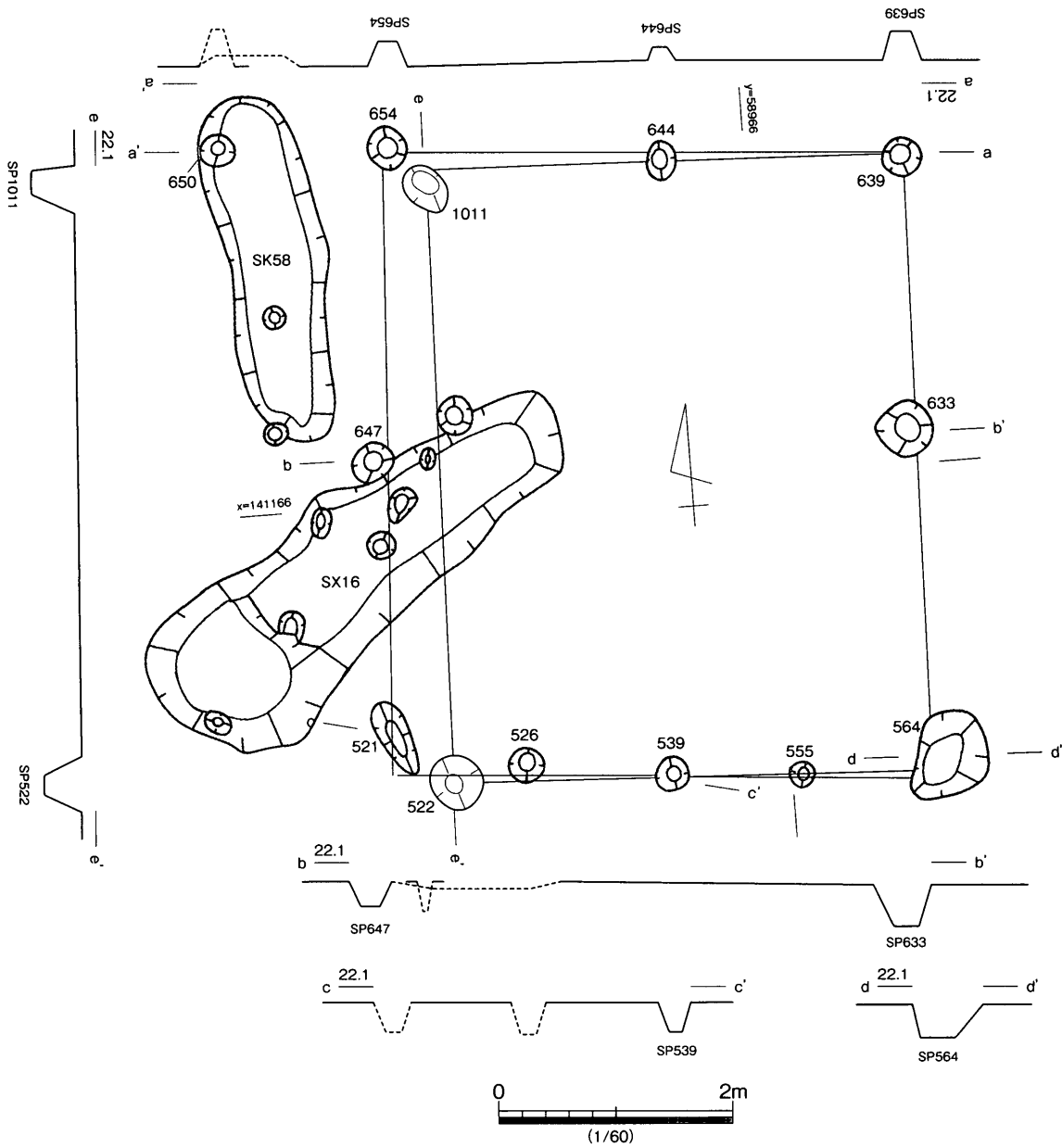
SBb23（第 76 図）

Ⅶ西区中央部の第 3 遺構面上で検出した、平面は正方形に近い、東西棟の掘立柱建物跡である。SBb23 と周辺の遺構との関係では、SBb22、SKb69、SDb28 等と重複し、SKb54 に切られている。削平と他遺構の切り込みにより残りが悪く、南東の隅柱は SKb54 に切られているため、検出できなかった。

梁間 1 間（3.7m）、桁行 2 間（5.3m）の構造で、桁行の柱間は比較的均一で約 2.5 m を測る。面積は約 20㎡を測り、主軸方位は北から 57°西に向く。柱穴跡は円形を呈し、柱穴跡の径は 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.1 m～ 0.3 m を測る。

SBb25（第 77 図）

Ⅶ西区北半部の第 3 遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が



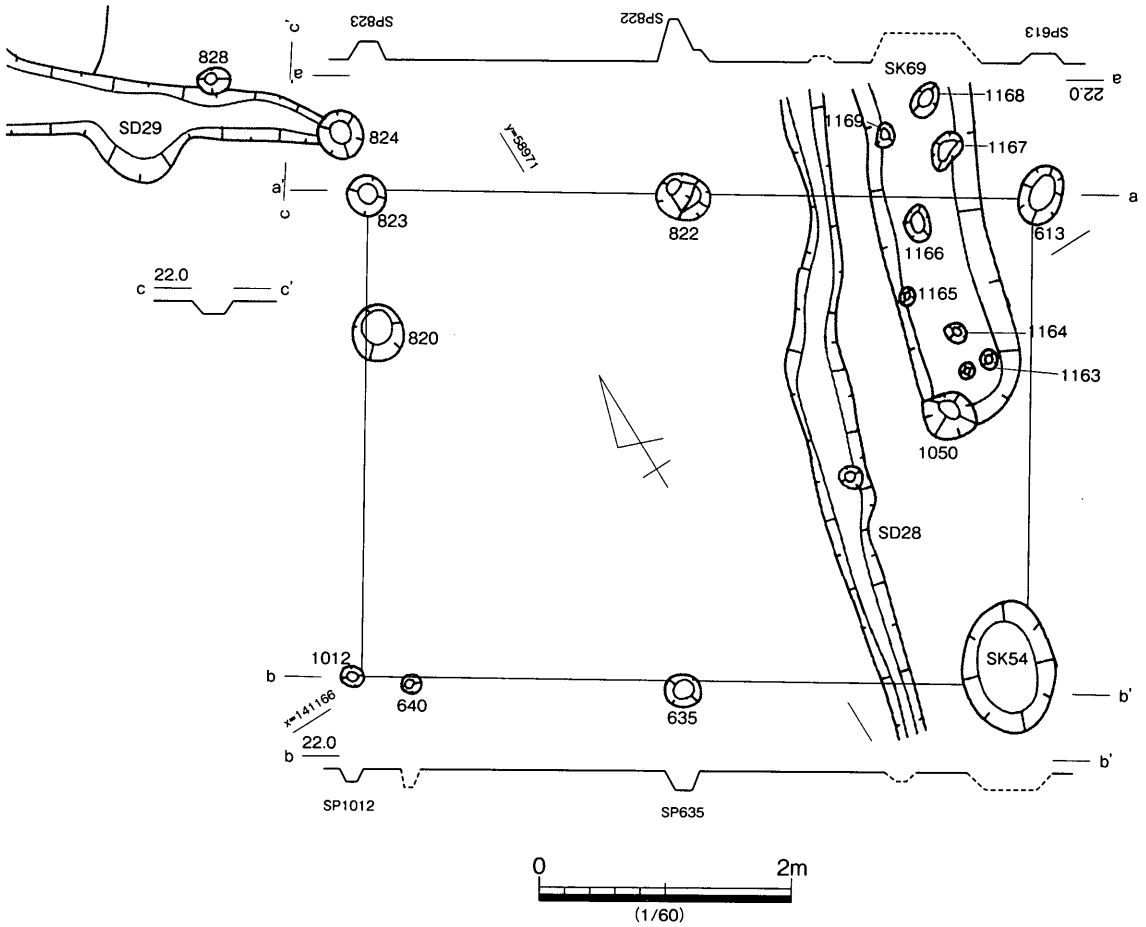
第75図　SBb22平・断面図

高く、この建物跡はSHb32・35、SBb26、SDb32等と重複し、SKb63、SXb18に切られている。削平と他遺構の切り込みにより残りが悪く、南西の隅柱はSXb18に切られ、柱穴跡の底部だけを、SXb18の底で検出した。

梁間1間（3.2m）、桁行3間（5.5m）の構造で、桁行の柱間は比較的均一で約1.8mを測る。面積は約18㎡を測り、主軸方位は北から86°東に向く。柱穴跡は削平を受けたためか不揃いで、柱穴跡の形状は円形ないし不整円形を呈し、径は0.3～0.6m、深さ0.3m～0.5mを測る。

SBb26（第78図）

Ⅶ西区北半部の第3遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡はSHb35、SBb25、SKb65等と重複する。削平により残りが悪く、検出した柱穴跡もかなり小さい。



第76図　SBb23平・断面図

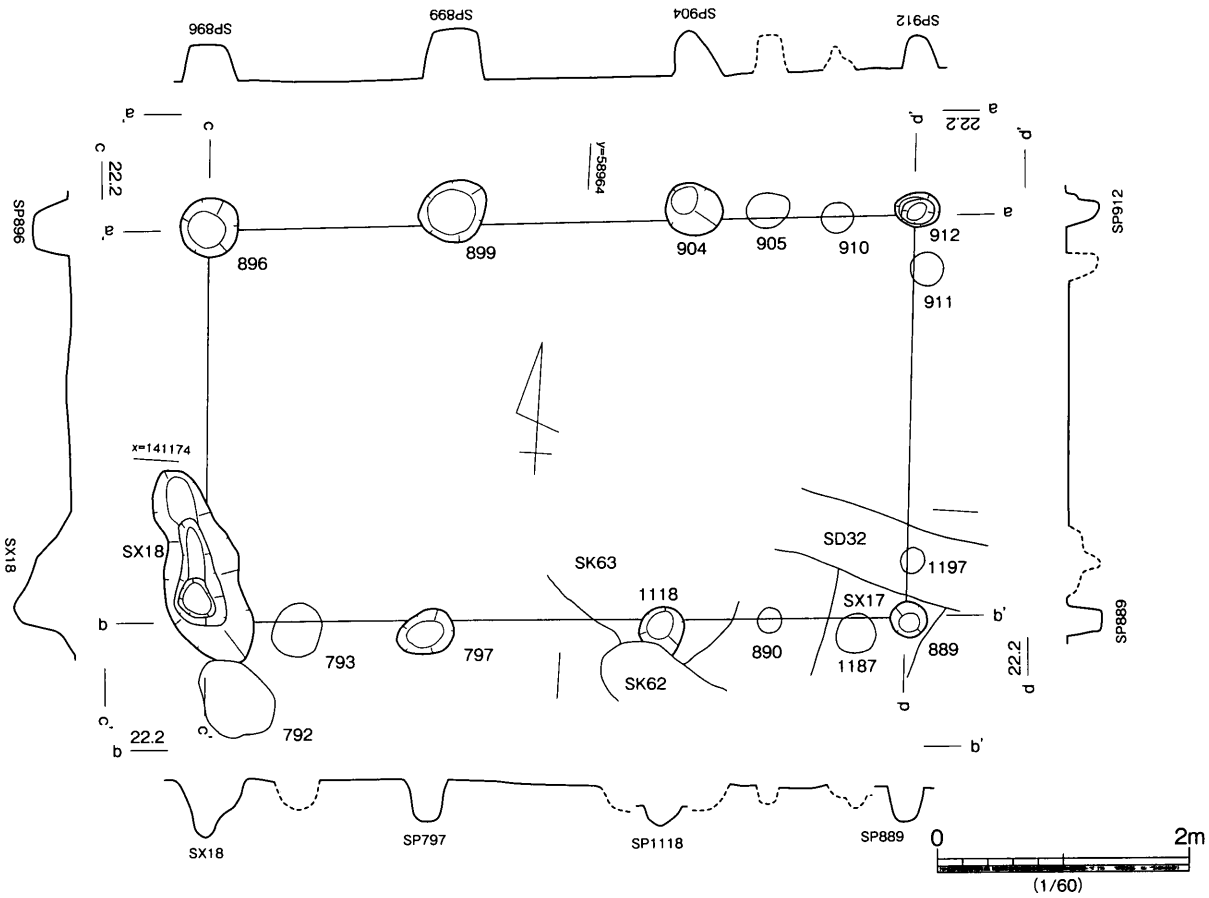
梁間1間（3.4m）、桁行3間（5.0m）の構造で、桁行の柱間1.3～2.0mを測る。面積は約17㎡を測り、主軸方位は北から68°西に向く。柱穴跡は削平を受けたためか不揃いで、柱穴跡の形状は円形ないし不整円形を呈し、径は0.3～0.5m、深さ0.2m～0.3mを測る。

SBb27（第79図）

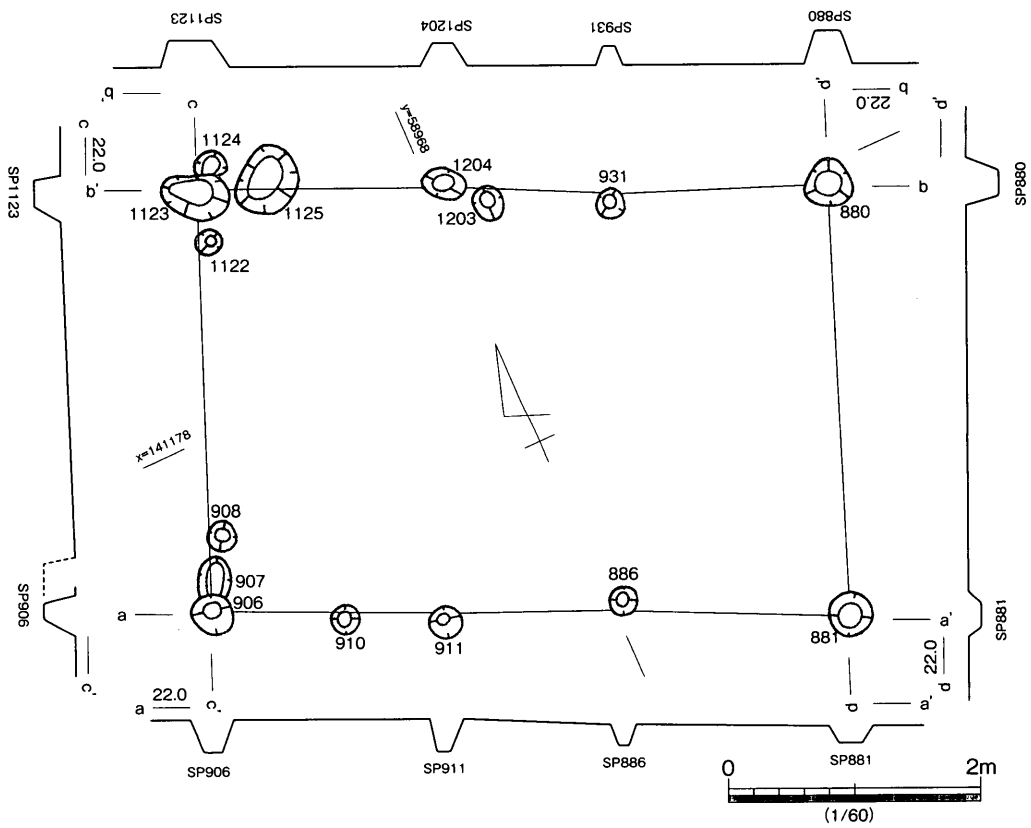
Ⅶ西区北半部の第3遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。SBb27と周辺の遺構との関係では、SHb39・40等と重複し、SHb35等に隣接する。

梁間1間（3.2m）、桁行3間（5.4m）の構造で、桁行の柱間は比較的均一で約1.8mを測る。面積は約17㎡を測り、主軸方位は北から68°西に向く。柱穴跡は円形を呈し、ほぼ全ての柱穴跡で柱痕を検出した。柱穴跡の径は0.2～0.5m、深さ0.2m～0.3mを測る。

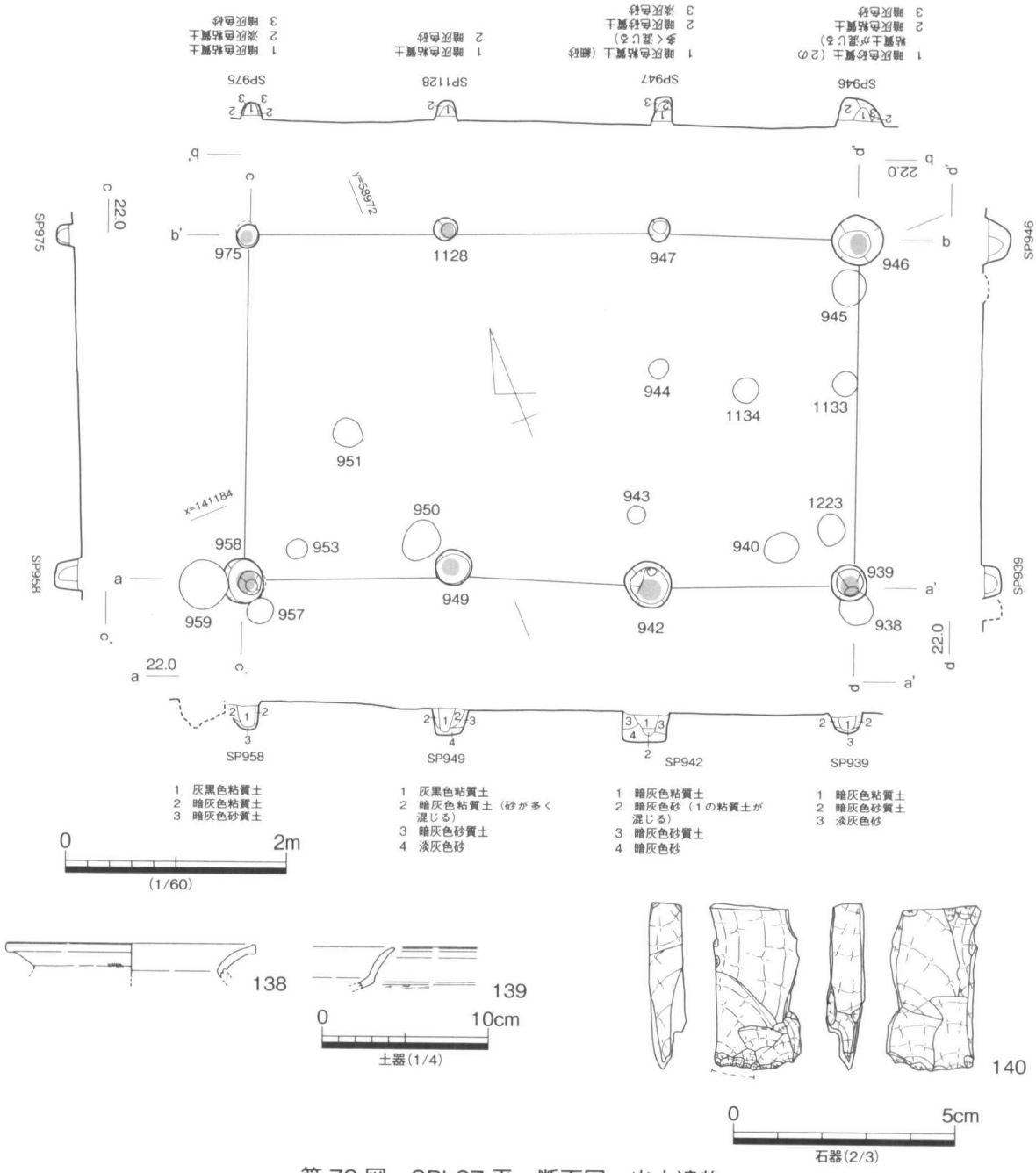
出土遺物としては、柱穴跡から弥生時代後期中頃の土器が出土した。138はSPb975から出土した、甕の口縁部である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平坦に仕上げている。140はSPb958から出土した、サヌカイト製の楔形石器である。上端部に打面状の平坦面をもつタイプで、両側縁に裁断面をもつ。139はこの建物跡と直接には関連しないが、北西隅柱のSPb958を切り込む、SPb959から出土した、弥生時代後期中頃の高杯である。そのため、139はSBb27の時期を決める上で貴重な資料になる。



第 77 図　SBb25 平・断面図



第 78 図　SBb26 平・断面図



第 79 図　SBb27 平・断面図、出土遺物

SBb28（第 80 図）

Ⅶ西区北端部の第 3 遺構面上で検出した、比較的大型で東西棟の掘立柱建物跡である。SBb28 と周辺の遺構との関係では、SHb39・40、SAb13 等と重複し、SHb35、SBb29 に隣接する。削平を受けたためか残りが悪く、北辺の側柱列の柱穴跡の 1 基及び西辺の棟持柱は検出できなかった。

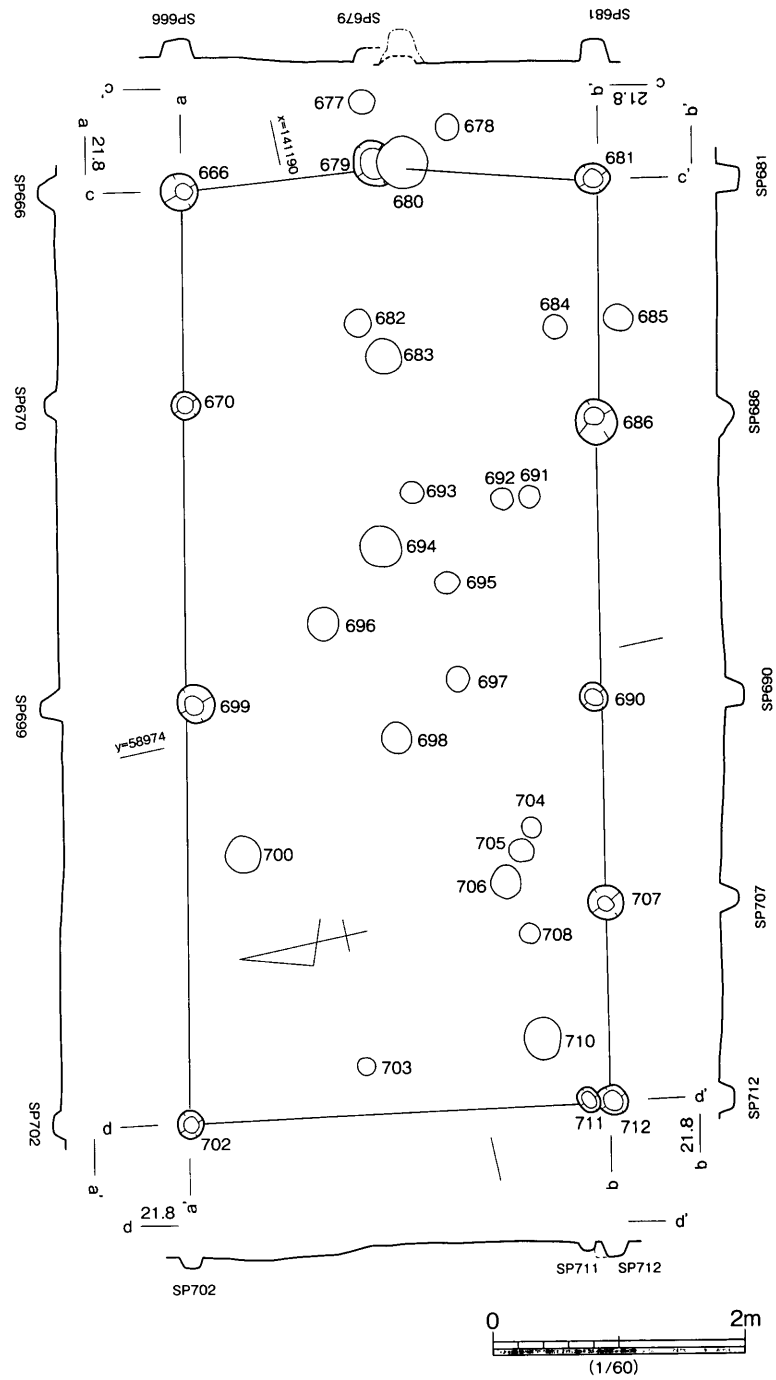
梁間 2 間（3.4m）、桁行 4 間（7.2m）の構造で、梁間は約 1.6 m、桁行の柱間は 1.6 ～ 2.3 m を測る。面積は約 25㎡を測り、主軸方位は北から 79° 西に向く。柱穴跡は円形を呈し、柱穴跡の径は 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.1 m ～ 0.2 m を測る。

SBb29（第 81 図）

Ⅶ西区北端部の第 3 遺構面上で検出した、比較的大型で東西棟の掘立柱建物跡である。SBb29 と周辺の遺構との関係では、SHb39、SBb28 等に隣接する。

梁間 2 間（3.8m）、桁行 4 間（8.0m）の構造で、桁行の柱間は比較的均一で約 2.0 m を測る。面積は約 30.4㎡を測り、主軸方位は北から 63° 西に向く。柱穴跡は円形ないし不整円形を呈し、5 基の柱穴跡で柱痕を検出した。検出した 1 対の棟持柱のうち、西辺の棟持柱は西に僅かにずれる。そのため、西辺梁間の柱筋は僅かに歪む。側柱列の柱穴跡に対し、棟持柱は小さく、径約 0.2 m、深さ 0.2 m を測る。側柱列の柱穴跡は比較的均一で、柱穴跡の径は 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.2 m ～ 0.3 m を測る。なお、この建物跡の SPb724・732・736 からは柱材を検出した。

出土遺物としては、柱穴跡から弥生時代後期前半の土器と柱材を検出している。141 は SPb736 から出土した、長頸壺の口縁部である。端部を上下に拡張し、細い凹線文を施している。142・143 は SPb720・724 から出土した、平底を呈する壺の底部である。144 は SPb750 から出土したサヌカイト製の削器である。剥片のエッジに軽度の調整を施している。145 ～ 147 は、SPb724・732・736 から出土した柱材の底部である。芯持丸太材ないし芯持半裁材を径約 11.0 cmの柱材に整形し、下端部には伐採痕を残す。樹種は全てヒノキである。

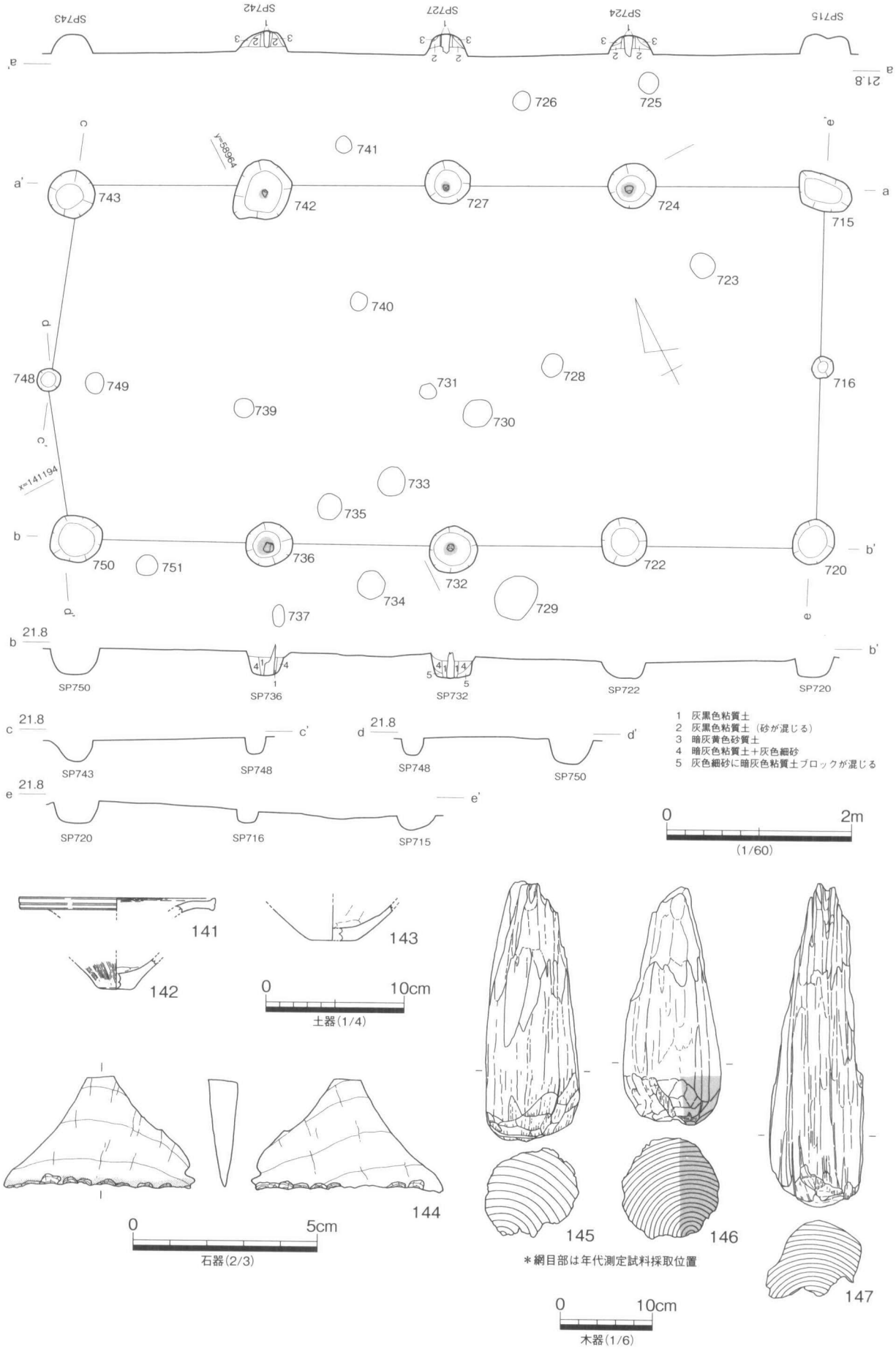


第 80 図　SBb28 平・断面図

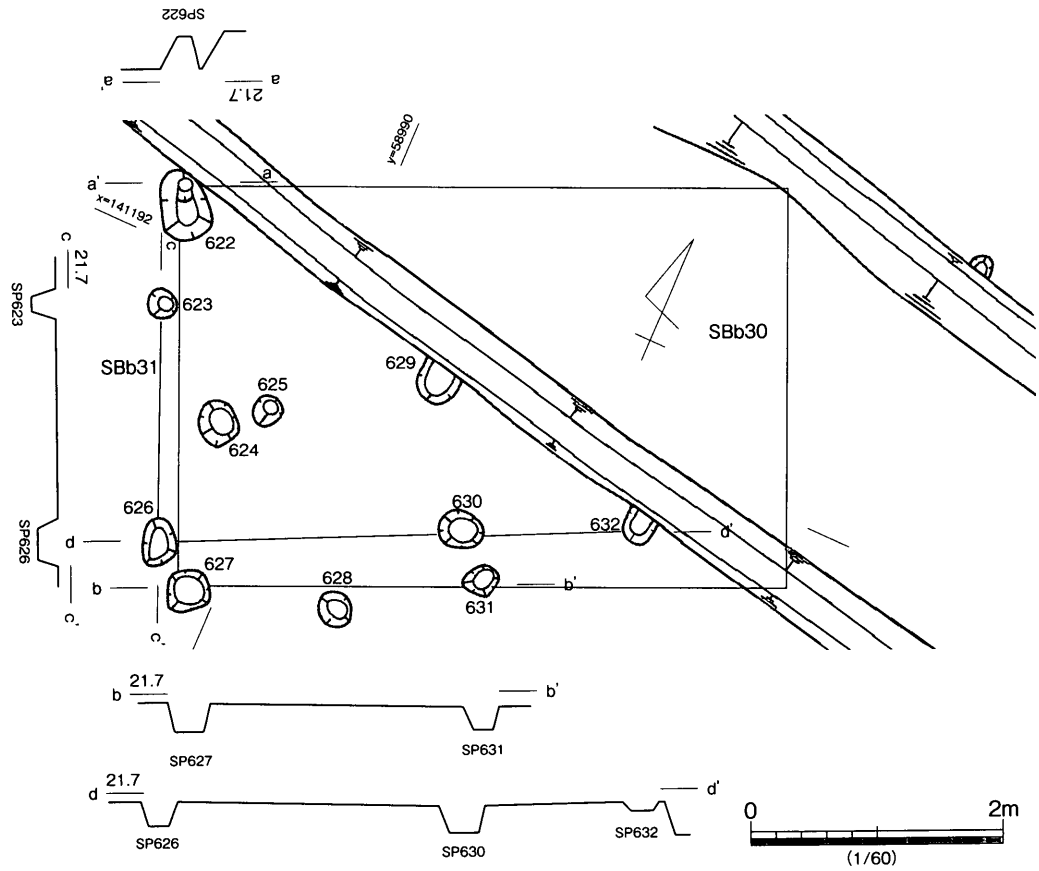
SBb30（第 82 図）

Ⅶ東区北端部の第 3 遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。この建物跡は調査区の東端に位置し、東半部は調査区より外れるため約 1/2 を検出した。

梁間 1 間（3.1m）、桁行 1 間（2.4m）以上の構造で、桁行の柱間は



第 81 図　SBb29 平・断面図、出土遺物



第82図　SBb30・31平・断面図

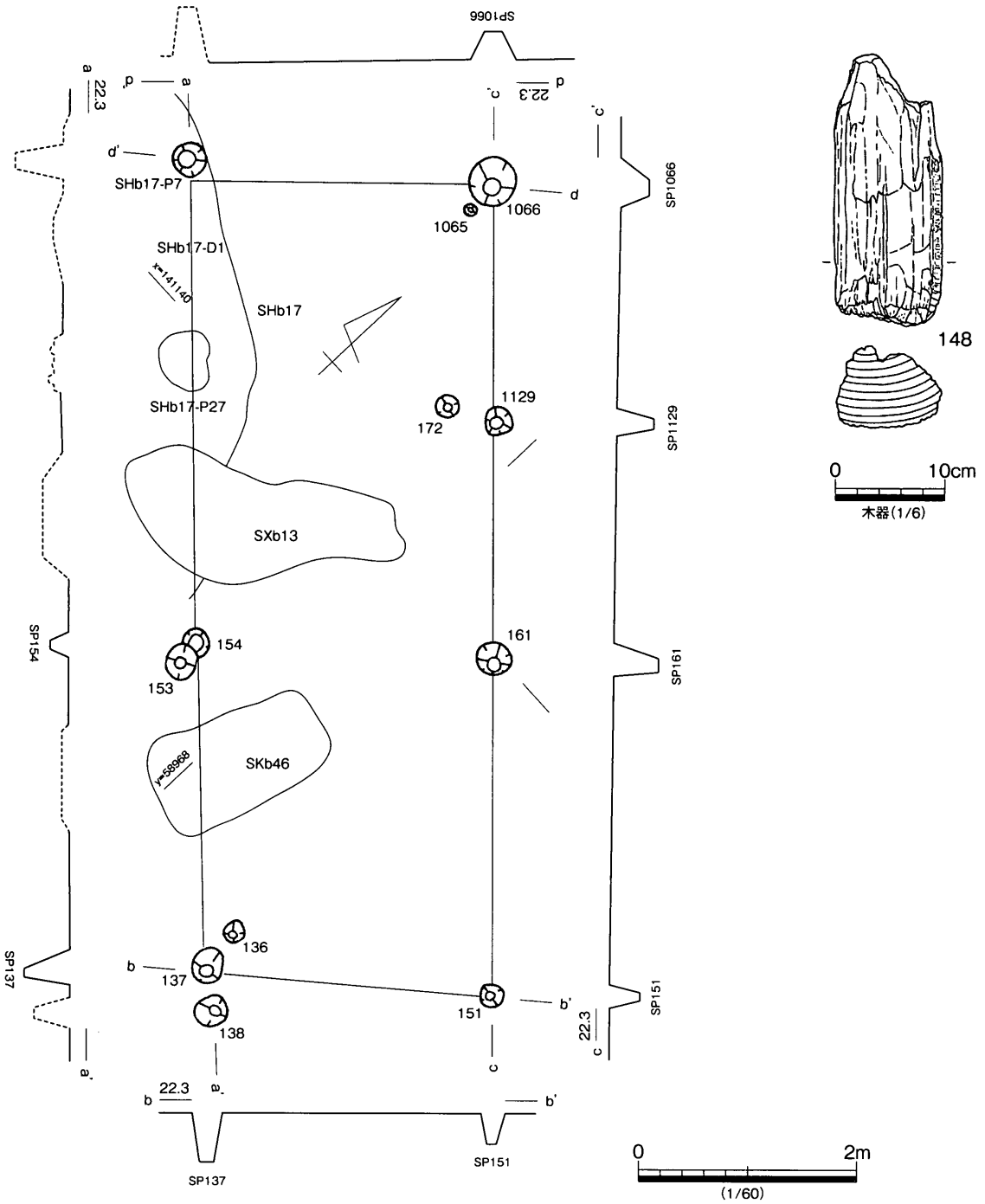
比較的広い。主軸方位は北から64°東に向く。柱穴跡の形状は円形ないし不整円形を呈し、径0.3～0.5m、深さ0.2m～0.3mを測る。

SBb32（第83図）

Ⅶ西区南端部の第3遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の周辺は遺構密度が高く、この建物跡はSHb17・18・19、SBb04・05等と重複し、SHb17により切られている。また、SBb02・03・06等と隣接する。

南西隅の柱穴跡が、SHb17により切られているため、形状が不明瞭な点があるが、梁間1間（2.6m）、桁行3間（7.5m）の構造で、狭い梁間に対して、桁行が長い建物跡である。桁行の柱間は2.0～3.0mを測る。面積は約20㎡を測り、主軸方位は北から47°西に向く。柱穴跡は円形を呈し、柱穴跡の径は0.2～0.4m、深さ0.3m～0.5mを測る。なお、北東隅のSPb151からは柱材を検出した。

出土遺物としては、SPb151から検出した柱材があげられる。148は残りが悪く不明瞭なところがあるが、15cm弱の芯持丸太材ないし芯持半裁材を用いて柱材に加工している。樹種はクヌギである。



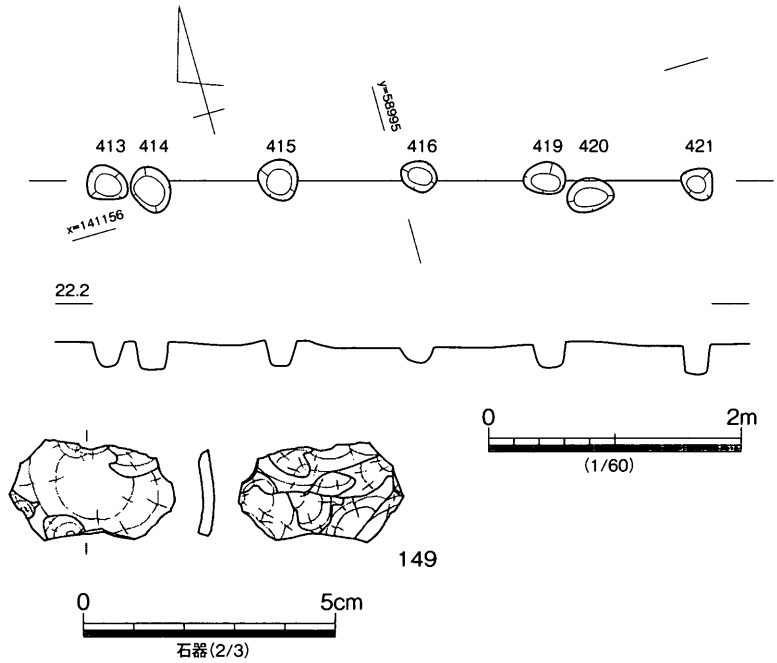
83　S⊠b32　・　、

3．柵列跡

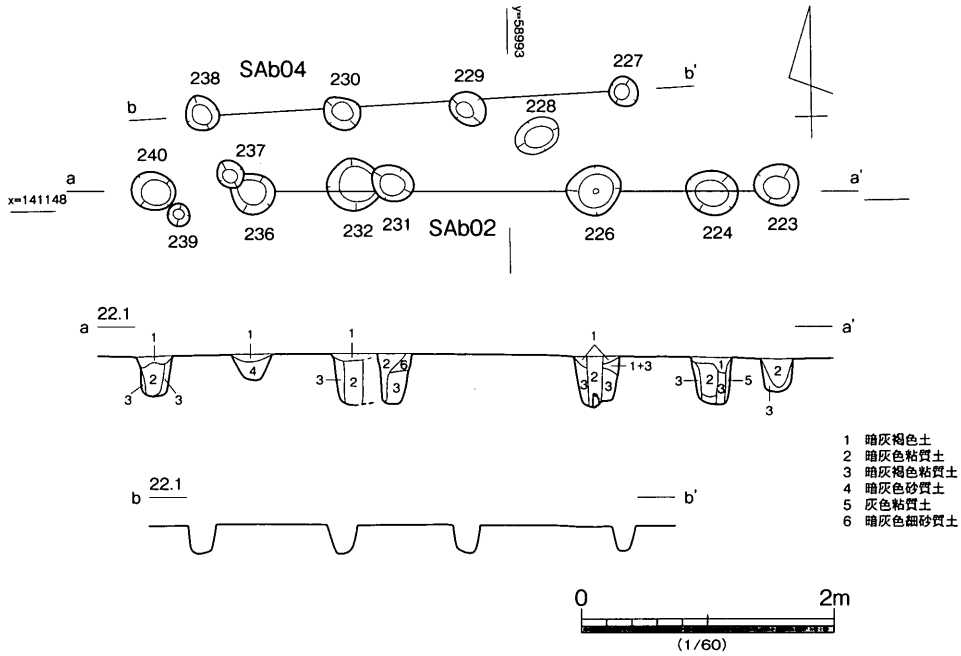
SAb01（第 84 図）

Ⅶ東区中央部の第 3 遺構面上で検出した柵列跡である。SAb01 の周辺には SHb09・10、SBb10・16 等が隣接している。柵列跡は 4 間（4.4m）の構造で、柱間は 1.6 ～ 2.0 m を測る。主軸方位は北から 75° 西に向く。柱穴跡は円形を呈し、柱穴跡の径は 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.2 m を測る。

出土遺物としては、柱穴跡から石器が出土している。149 は SPb421 から出土した、サヌカイト製の



第 84 図　SAb01 平・断面図、出土遺物



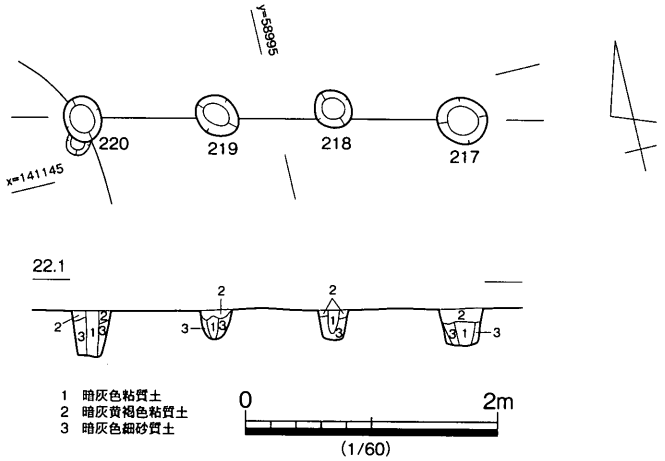
第 85 図　SAb02・04 平・断面図

剥片である。腹面はポジテイブな主要剥離面である。背面には剥離痕が顕著に見られ、石器製作時における最終段階での剥片と考えられる。

SAb02（第 85 図）

Ⅶ東区南半部の第 3 遺構面上で検出した柵列跡である。SAb02 の周辺には SAb04 が向きを揃えて北に隣接しており、両者は建て替え関係の可能性がある。柵列跡は 3 間（4.2m）の構造で、柱間は 1.1 ～ 1.6 m を測る。主軸方位は北から 87° 西に向く。柱穴跡は円形を呈し、全ての柱穴跡で柱痕を検出した。柱

穴跡の径は 0.2 ～ 0.4 m、深さ約 0.2 ～ 0.4 mを測る。



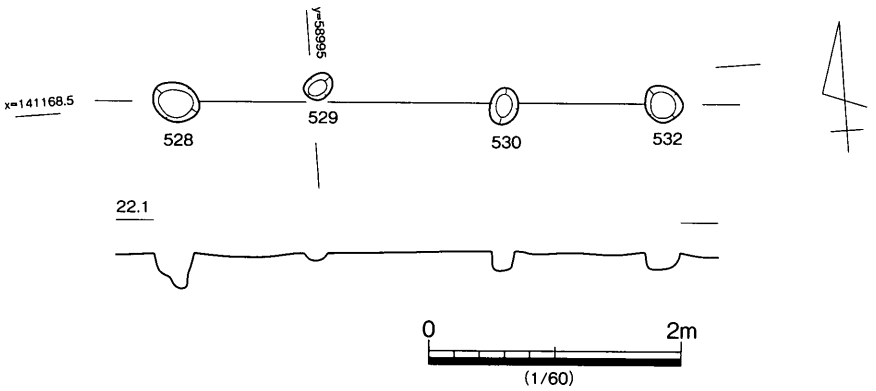
第 86 図　SAb03 平・断面図

SAb03（第 86 図）

Ⅶ東区南半部の第 3 遺構面上で検出した柵列跡である。SAb03 の西には SHb03 が位置し、SAb03 は SHb03 を切り込んでいる。柵列跡は 3 間（3.0m）の構造で、柱間は約 1.1 mを測る。主軸方位は北から 76° 西に向く。柱穴跡は円形を呈し、全ての柱穴跡で柱痕を検出した。柱穴跡の径は 0.2 ～ 0.4 m、深さ約 0.2 ～ 0.4 mを測る。

SAb04（第 85 図）

Ⅶ東区南半部の第 3 遺構面上で検出した柵列跡である。SAb04 の周辺には SAb02 が向きを揃えて南に隣接しており、両者は建て替え関係の可能性がある。柵列跡は 3 間（3.3m）の構造で、柱間は約 1.1 mを測る。主軸方位は北から 88° 東に向く。柱穴跡は円形を呈し、柱穴跡の径は 0.2 ～ 0.3 m、深さ約 0.2 mを測る。

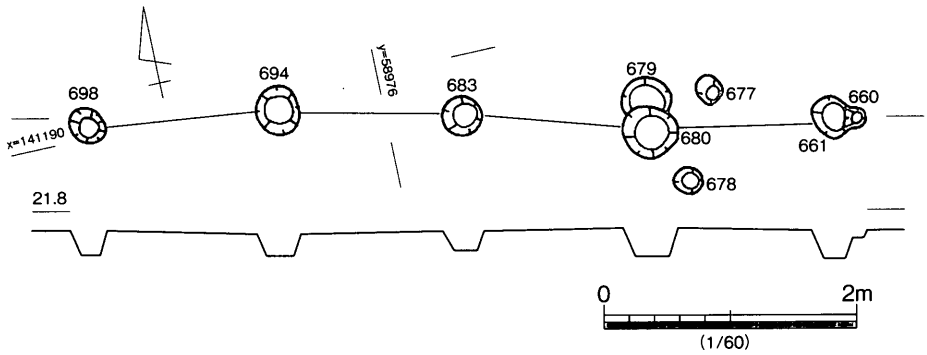


第 87 図　SAb07 平・断面図

SAb07（第 87 図）

Ⅶ東区中央部の第 3 遺構面上で検出した柵列跡である。SAb07 の南には SBb16 が向きを揃えて配さ

れている。柵列跡は3間（3.9m）の構造で、柱間は1.2～1.5mを測る。主軸方位は北から86°西に向く。柱穴跡は円形を呈し、柱穴跡の径は0.2～0.4m、深さ約0.1～0.3mを測る。



第88図　SAb13平・断面図

SAb13（第88図）

Ⅶ西区北端部の第3遺構面上で検出した柵列跡である。この柵列はSBb28と切り合う。柵列跡は4間（6.0m）の構造で、柱間は比較的均一で1.5mを測る。主軸方位は北から78°西に向く。柱穴跡は円形を呈し、柱穴跡の径は0.2～0.4m、深さ約0.25mを測る。

4．柱穴跡（第89図・90図）

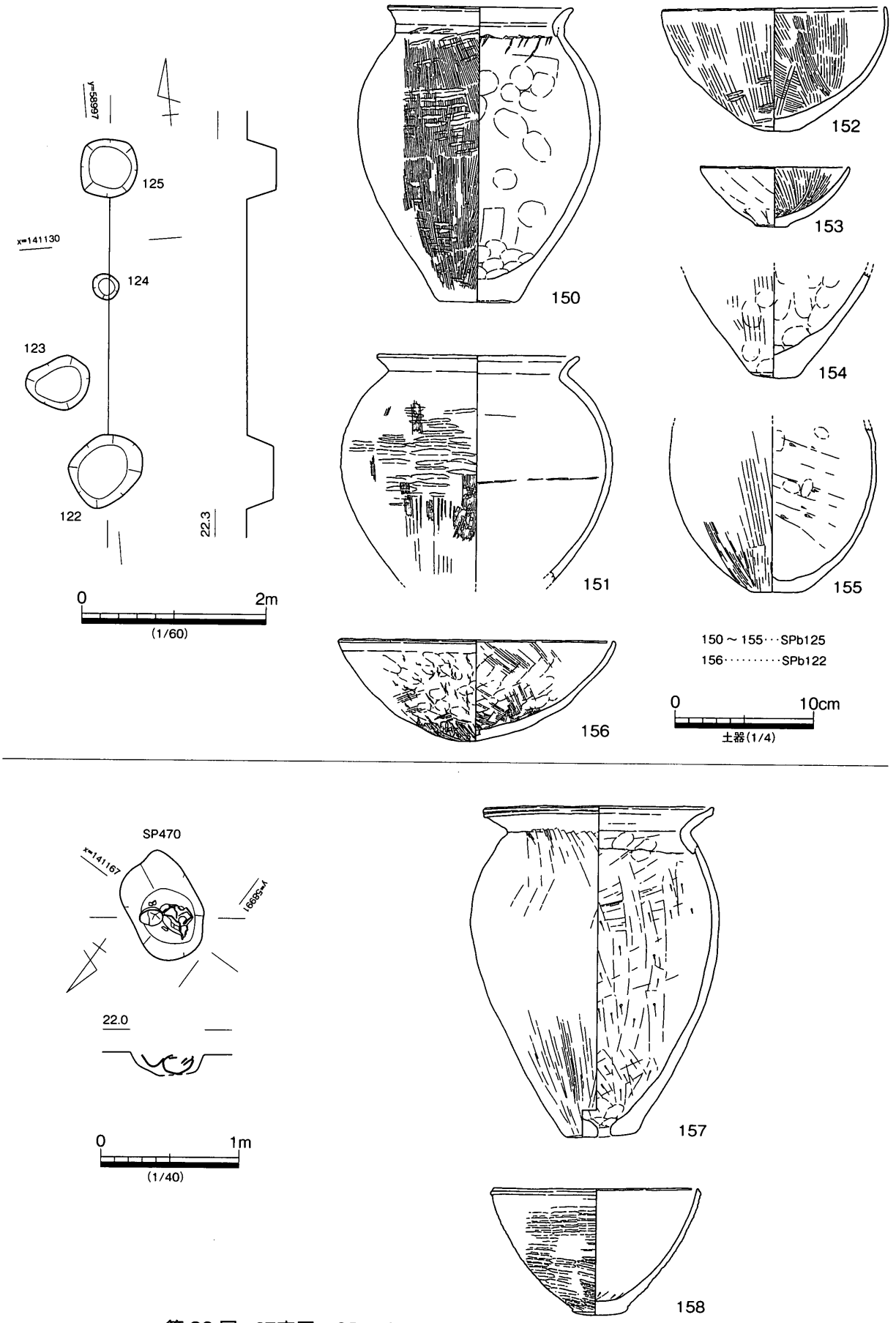
Ⅶ区からは多数の柱穴跡を検出している。柱穴跡からは弥生時代中期前半～終末期の遺物が多量に出土しているが、それらの中から代表的な遺物を報告する。

150～155はⅦ東区のSPb125から出土した、後期中頃の土器である。150・151・155は甕である。150の口縁部は短く外反し、端部を尖り気味に仕上げている。体部は丸みをもち、底部はしっかりとした平底を呈する。外面にはタタキ後タテ方向のハケを施している。151・155の体部は丸みを帯び新段階の特徴をもつ。152・153は鉢である。

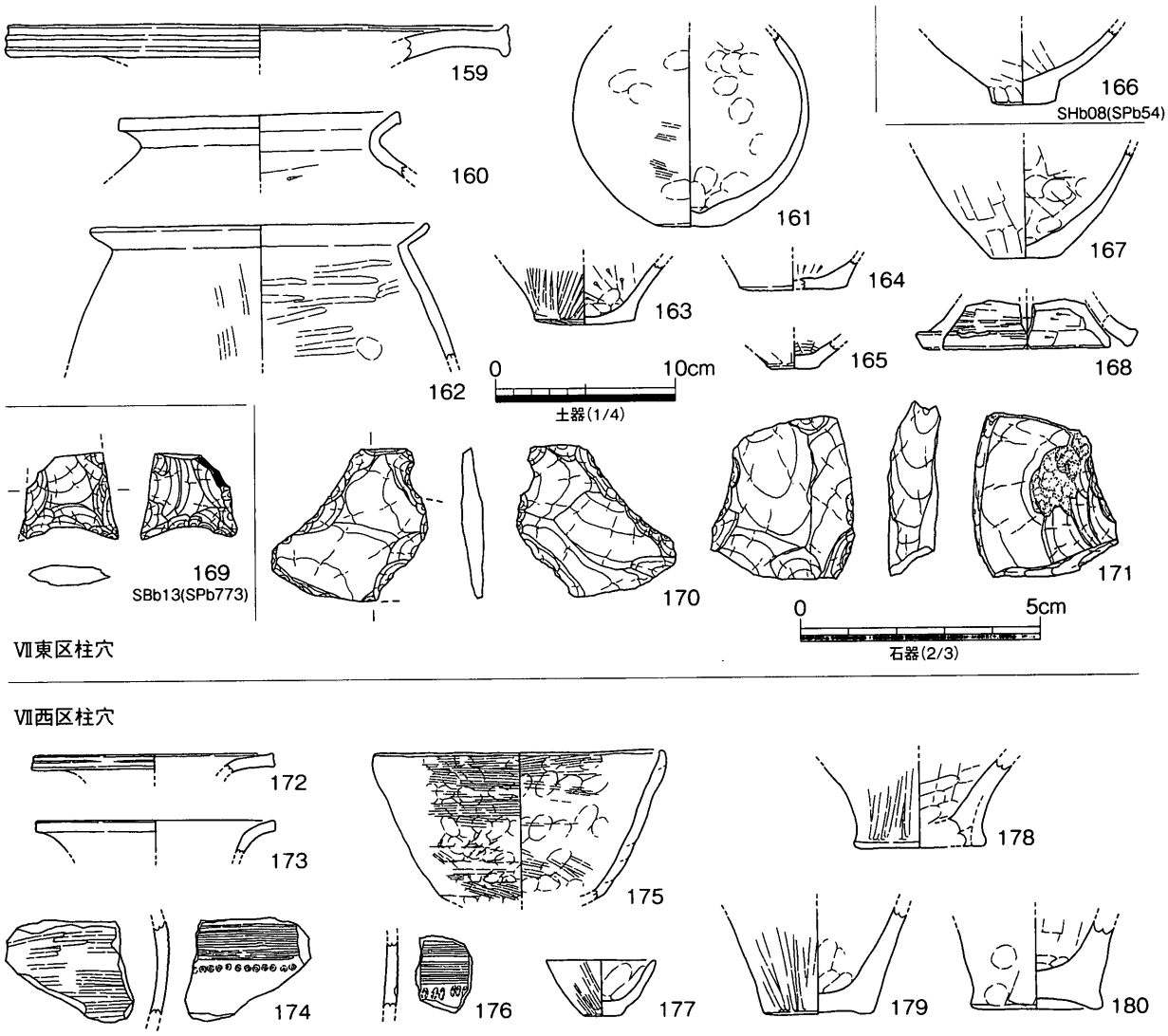
157・158はSPb470から出土した、後期中頃の土器である。157の口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平坦に仕上げている。体部は長胴気味で、底部には穿孔を施し、甑として使用している。158は鉢である。底部は平底を呈し、口縁部は平坦に仕上げ、外面にはタタキを顕著に施している。

159～171はⅦ東区のその他の柱穴跡より出土した、土器と石器である。159は後期前半の広口壺の口縁部である。口縁終部は「ハ」の字状に開き、端部は上下に拡張し凹線文を施している。161は体部の球体化が進んだ後期末頃の壺である。底部には僅かに平底を呈する。160・162～164は甕である。169は、SBb13（SPb773）出土のサヌカイト製打製石鏃で、上半部を欠く。凹基式の石鏃で比較的大型の部類に属する。170は打製のサヌカイト製の石器で、形状から石匙に分類した。171はサヌカイト製の楔形石器である。側縁部に裁断面が認められる。

172～180は、Ⅶ西区のその他の柱穴跡より出土した、土器である。172・173は壺の口縁部である。174・176・178～180は中期前半の甕である。174・176は瀬戸内甕の上半部片で、外面には櫛描文及び刺突文を施している。175は粗製の鉢、177はミニチュアの鉢である。



第89図　Ⅶ東区　SPb122・125・470平・断面図、出土遺物



第 90 図　Ⅶ区 SP 出土遺物

5．土坑

SKb04（第 91 図）

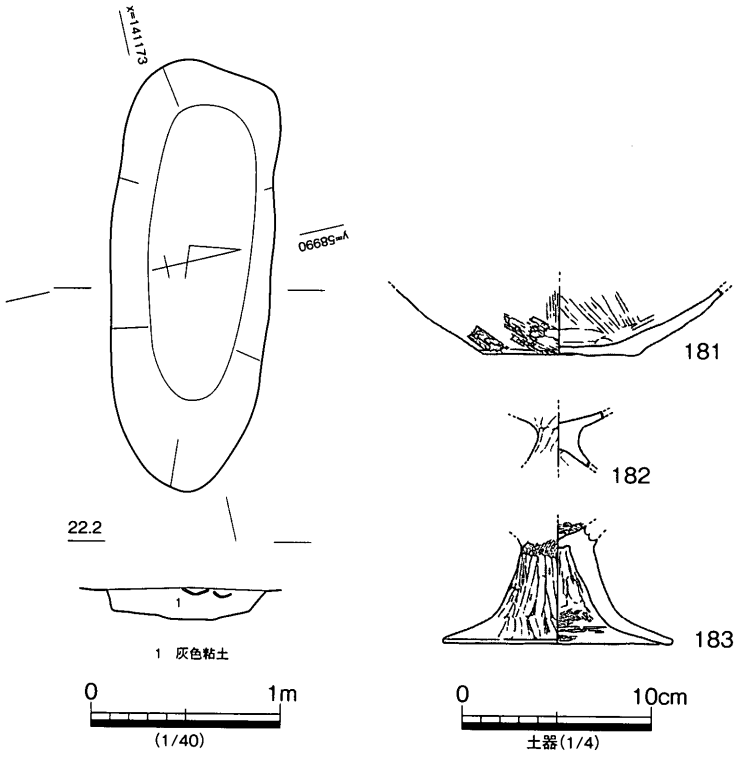
Ⅶ東区北半部の第 1 遺構面上で検出した土坑である。平面は不整形な長楕円形状を呈し、断面は浅い逆台形状を呈する。長径 2.2 m、短径 0.8 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は灰色粘土の単層である。

出土遺物としては、埋土の上位付近から弥生土器が少量出土した。181 は弥生時代後期後半頃の壺底部である。底部は平底を残している。182・183 は弥生時代後期後半頃の高杯脚部である。

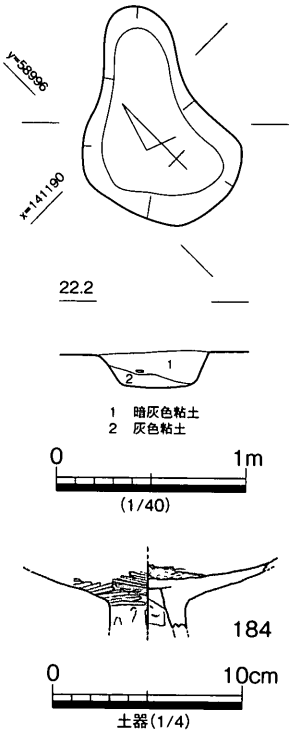
SKb06（第 92 図）

Ⅶ東区北端部の第 1 遺構面上で検出した土坑である。平面は不整形な達磨型をした楕円形状を呈し、断面は逆台形状を呈する。長径 1.2 m、短径 0.5 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は 2 層に分れ、上層は暗灰色粘土、下層は灰色粘土を呈する。

出土遺物としては、弥生土器が少量出土した。184 は弥生土器の高杯脚部で、弥生時代後期中頃以降の土器である。



第 91 図　SKb04 平・断面図、出土遺物

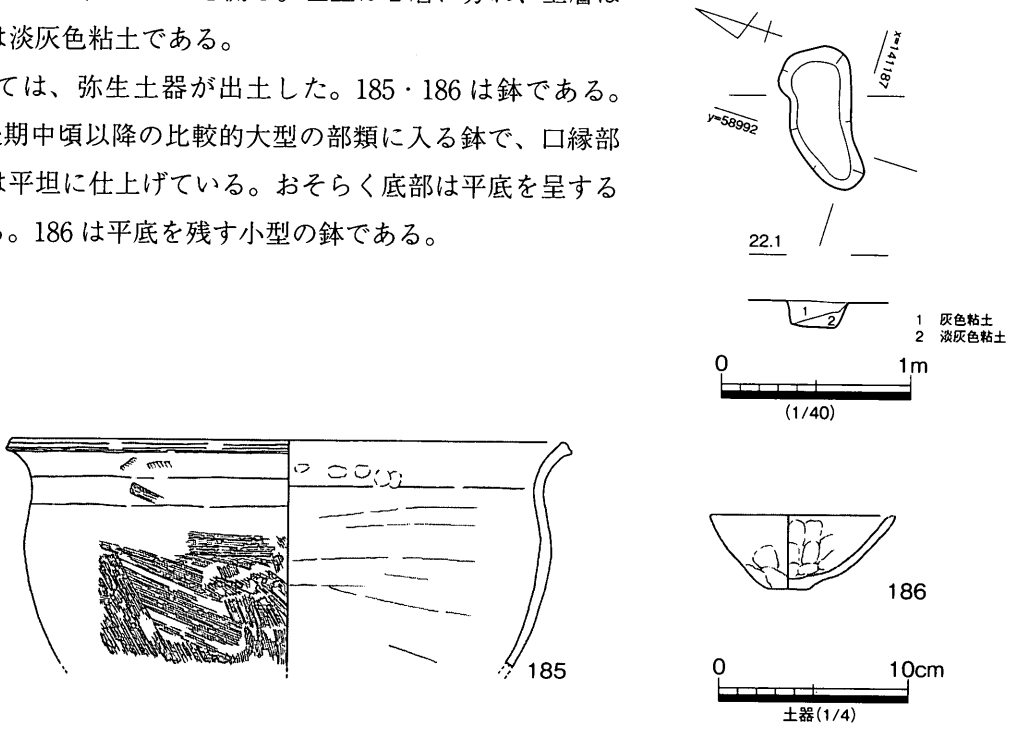


第 92 図　SKb06 平・断面図、出土遺物

SKb08（第 93 図）

Ⅶ東区北端部の第 1 遺構面上で検出した小型の土坑である。平面は不整形な長楕円形状を呈し、断面は箱型に近い逆台形状を呈する。長径 0.8 m、短径 0.3 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は 2 層に分れ、上層は灰色粘土、下層は淡灰色粘土である。

出土遺物としては、弥生土器が出土した。185・186 は鉢である。185 は弥生時代後期中頃以降の比較的大型の部類に入る鉢で、口縁部は外反し、端部は平坦に仕上げている。おそらく底部は平底を呈するものと考えられる。186 は平底を残す小型の鉢である。

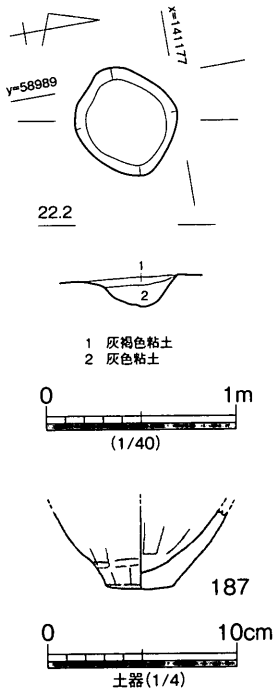


第 93 図　SKb08 平・断面図、出土遺物

SKb10（第 94 図）

Ⅶ区東区北部の第 1 遺構面上で検出した小型の土坑である。平面は方形気味の円形を呈し、断面は浅いＵ字状を呈する。長径 0.6 m、短径 0.5 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は 2 層に分れ、上層は灰褐色粘土、下層は灰色粘土である。

出土遺物としては、弥生時代後期中頃以降の土器が出土した。187 は小型で、明瞭な平底を残している鉢の底部である。



第 94 図　SKb10 平・断面図、出土遺物

SKb13（第 95 図）

Ⅶ東区北半部の第 3 遺構面上で検出した土坑である。この土坑は隣接する SHb04 と重複し、SKb22 と隣接する。平面は南西辺が凹んだ、不整形な長方形状を呈し、底部は比較的平坦である。断面は隅丸の逆台形状を呈し、東半部が僅かに下がる。長径 2.7 m、短径 1.4 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は 4 層に分れ、上層は暗灰色系の砂、下層は淡黒色系の砂である。

出土遺物としては、弥生土器と石器が出土した。188 は前期ないし中期頃の甕の底部、189 は顕著に櫛描波状文を施した、中期中頃の口頸部を欠く壺の上半部である。190 は器種を特定できなかったため、調整ある剥片に分類したサヌカイト製の石器である。表裏両面に顕著に調整を施し、エッジが広範囲に認められる。形状より削器ないし石篦様の機能が考えられる。

SKb16（第 96 図）

Ⅶ東区北半部の第 3 遺構面上で検出した土坑である。この土坑は SKb17 の西に位置し、SHb04 と重複する。平面は西へ僅かに突出した円形を呈し、断面はＵ字形で、東側中程に幅 0.1m のテラスを持つ。長径 1.1 m、短径 1.0 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は 3 層に分れる。上層は暗灰色系の粘土、下層は淡黒色系の砂である。

出土遺物としては、石鏃 1 点、楔形石器 1 点が出土した。いずれもサヌカイト製の石器である。

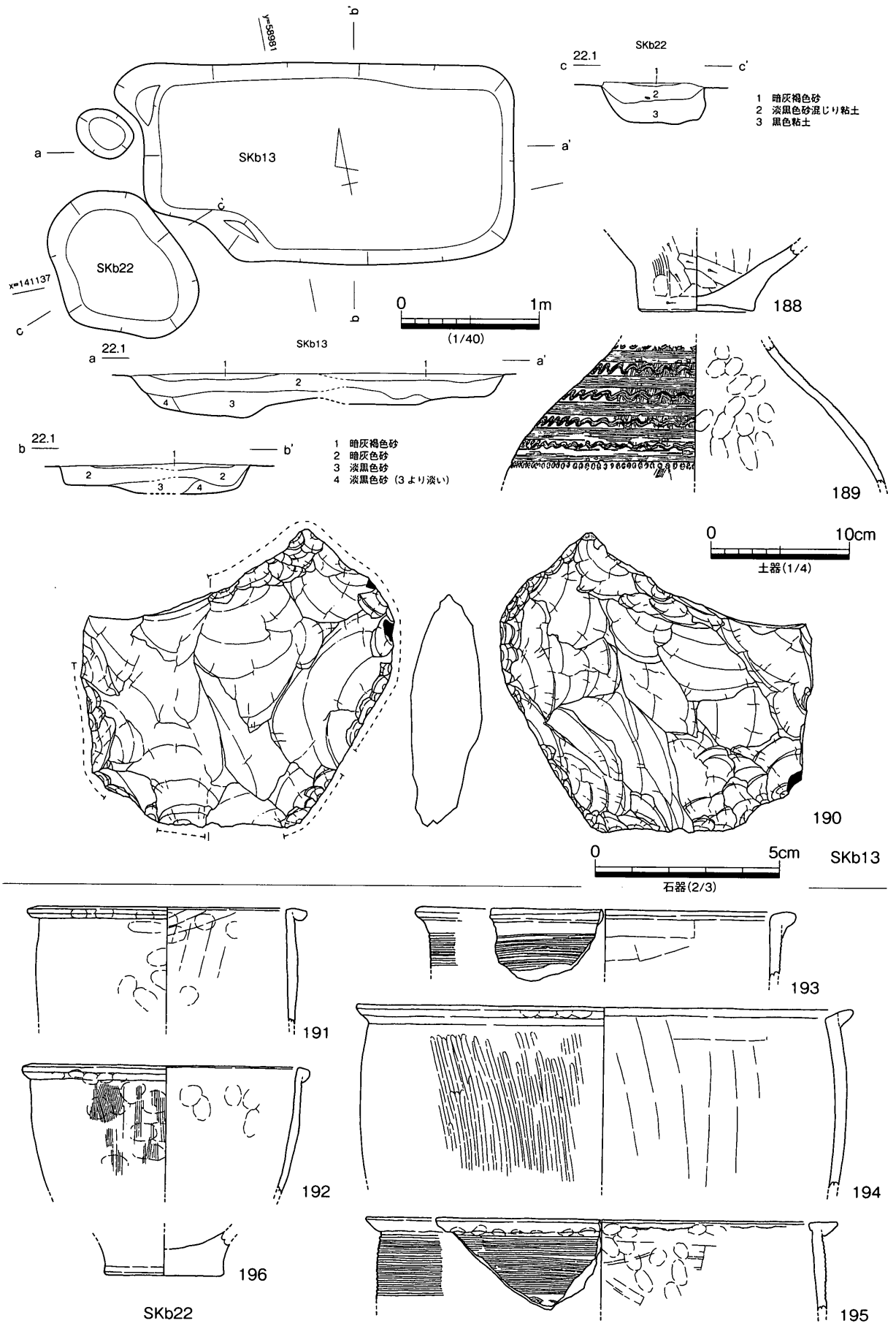
SKb17（第 97 図）

Ⅶ東区北半部の第 3 遺構面上で検出した土坑である。この土坑は SKb16 の東に位置し、SHb04 と重複する。平面は西へ突出した不整形な楕円形状を呈し、断面はＵ形状を呈する。長径 1.1 m、短径 0.7 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は 4 層に分れる。なお、この土坑は形状等より柱の抜き取り穴の可能性も考えられる。

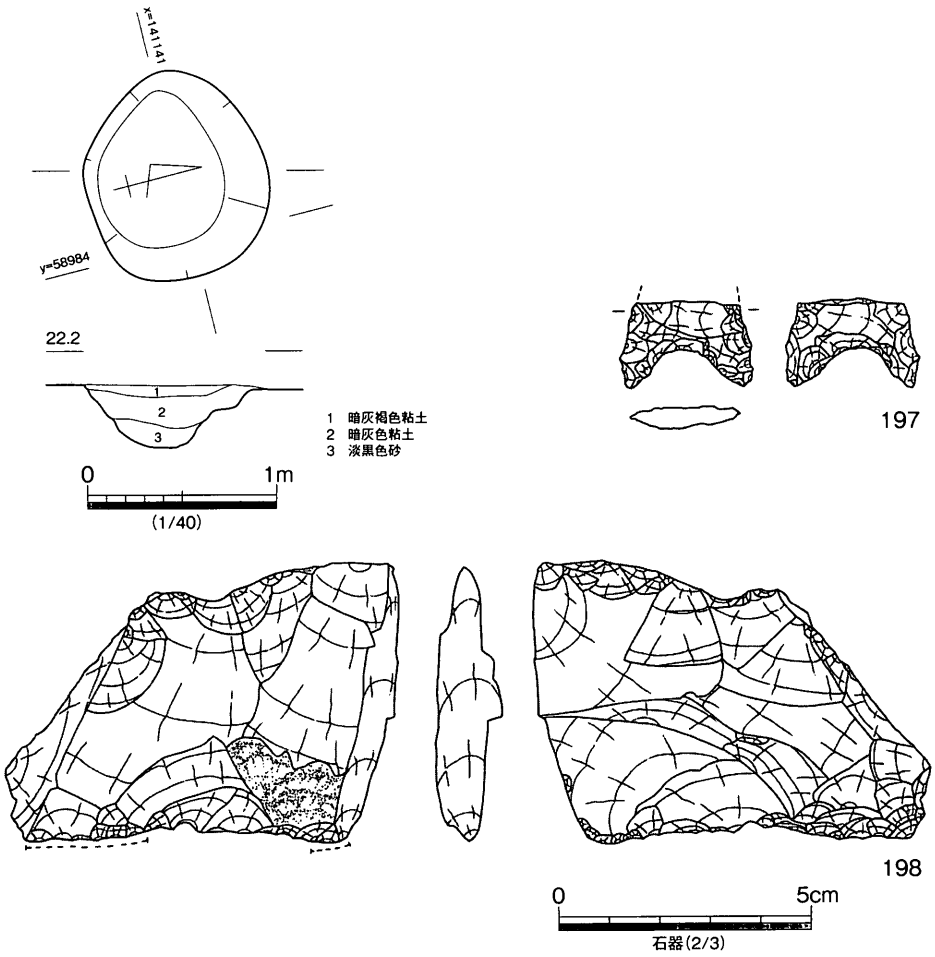
出土遺物としては、弥生土器が出土した。199 は後期後半頃の甕の上半部である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く仕上げている。調整は内外面ともにハケを顕著に施している。

SKb20（第 98 図）

Ⅶ東区北半部の第 3 遺構面上の、SKb21 の西方で検出した土坑である。削平を受けたためか、平面は不整形な長楕円形状を呈し、断面は浅い皿状を呈する。長径 2.5 m、短径 0.8 m、深さ 0.15 mを測る。埋土は淡黒色砂混じり粘土の単層である。

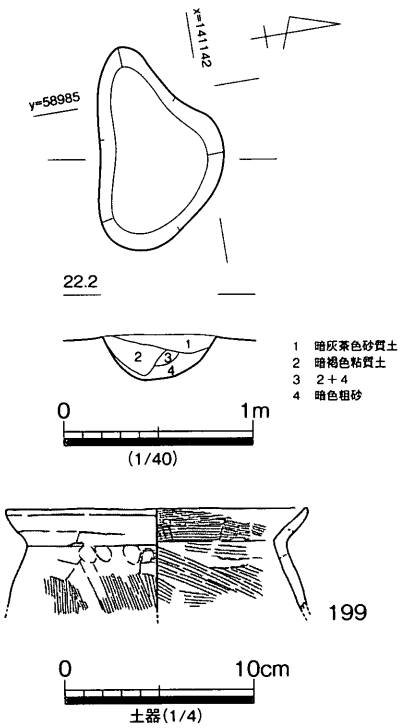


第95図　SKb13・22平・断面図、出土遺物



第96図　SKb16平・断面図、出土遺物

出土遺物としては、底から僅かに浮いた状態で弥生後期中頃～終末期の土器が出土した。200は複合口縁の広口壺の口縁部である。202は壺の底部である。僅かに平底を残し、丸底に変わる直前の段階の底部である。204は甕の底部である。202同様に僅かに平底を残し、丸底に変わる直前の段階のものである。



第97図　SKb17平・断面図、出土遺物

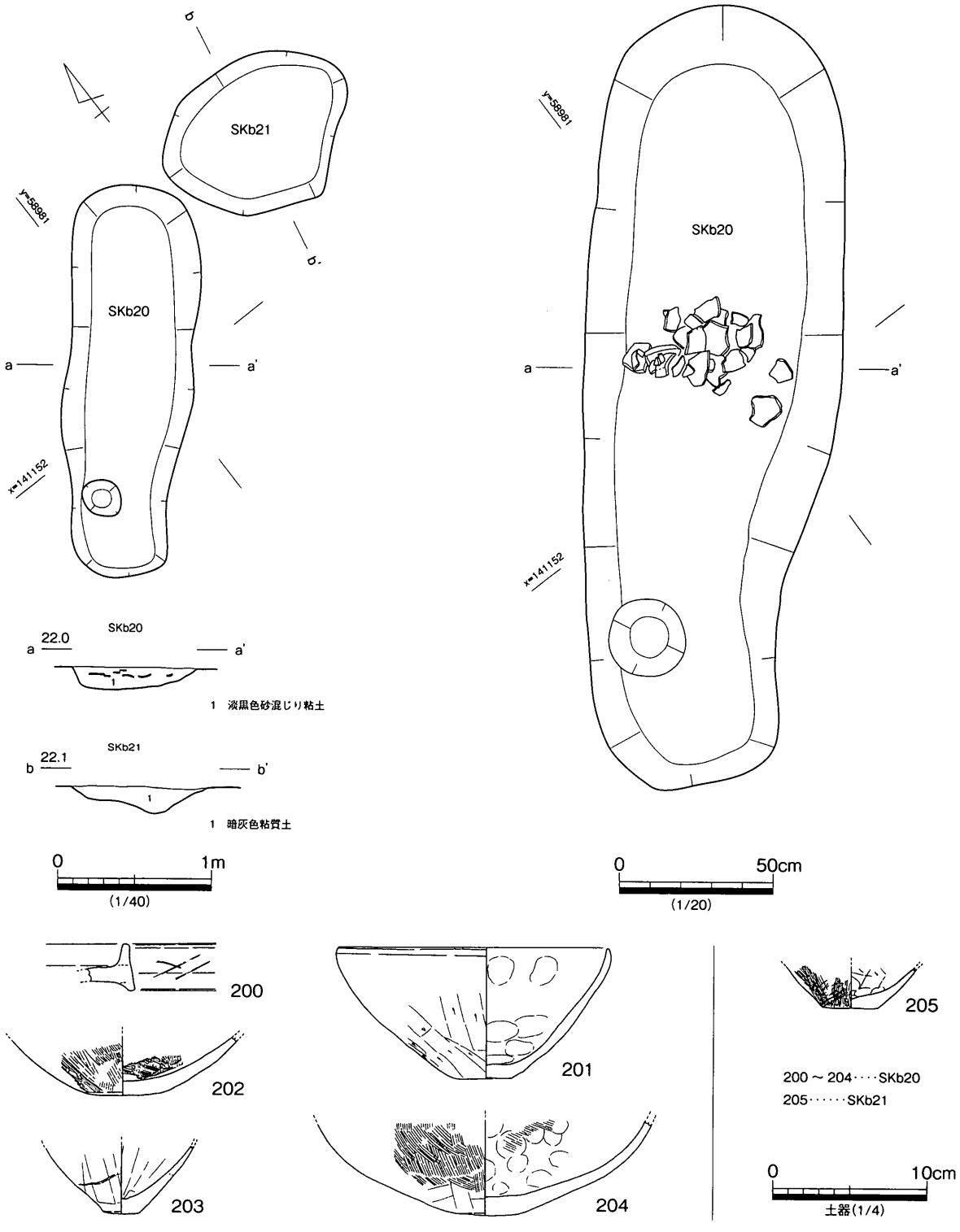
SKb21（第98図）

Ⅶ東区北半部の第3遺構面上の、SKb20の東で検出した土坑である。削平を受けたためか、平面は不整形な楕円形状を呈し、断面は浅くて不整形な皿状を呈する。長径1.3 m、短径1.0 m、深さ0.2 mを測る。埋土は暗灰色粘質土の単層である。

出土遺物としては、弥生後期中頃以降の土器が出土した。205は甕の底部である。底部は平底を呈し、外面にはタタキとハケを施している。

SKb22（第95図）

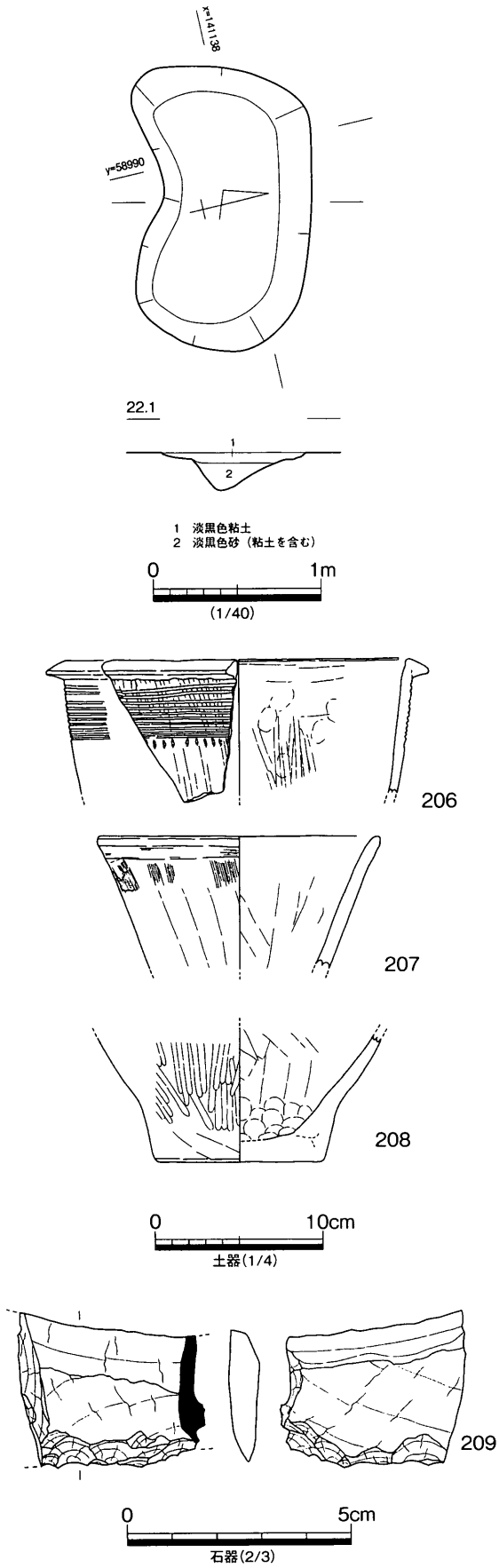
Ⅶ東区北半部の第3遺構面上で検出した土坑である。この土



第98図　SKb20・21平・断面図、出土遺物

坑はSKb13の南西辺に隣接する。平面は不整形な円形状を呈し、底部は比較的平坦である。断面は隅丸の逆台形状を呈し、長径1.2 m、短径0.9 m、深さ0.3 mを測る。埋土は3層に分れ、上層は淡黒色系の砂混じり粘土、下層は黒色の粘土である。

出土遺物としては、弥生土器が出土した。191～196は中期前半の甕である。196を除き191～195



第99図　SKb23平・断面図、出土遺物

は甕の上半部である。

SKb23（第99図）

Ⅶ東区北半部の第3遺構面上で検出した土坑である。この土坑は削平を受けたものと考えられ、かなり残りが悪い。平面は南辺が窪んだ不整形な楕円形状を呈し、断面はV字状を呈する。長径1.7m、短径0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は2層に分れ、上層は淡黒色粘土、下層は淡黒色砂である。

出土遺物としては、少量の弥生土器、石器が出土した。207は後期の壺の口頸部、206・208は中期前半頃の甕の上半部と底部であり、混入したものと考えられる。209はサヌカイト製の削器である。

SKb26（第100図）

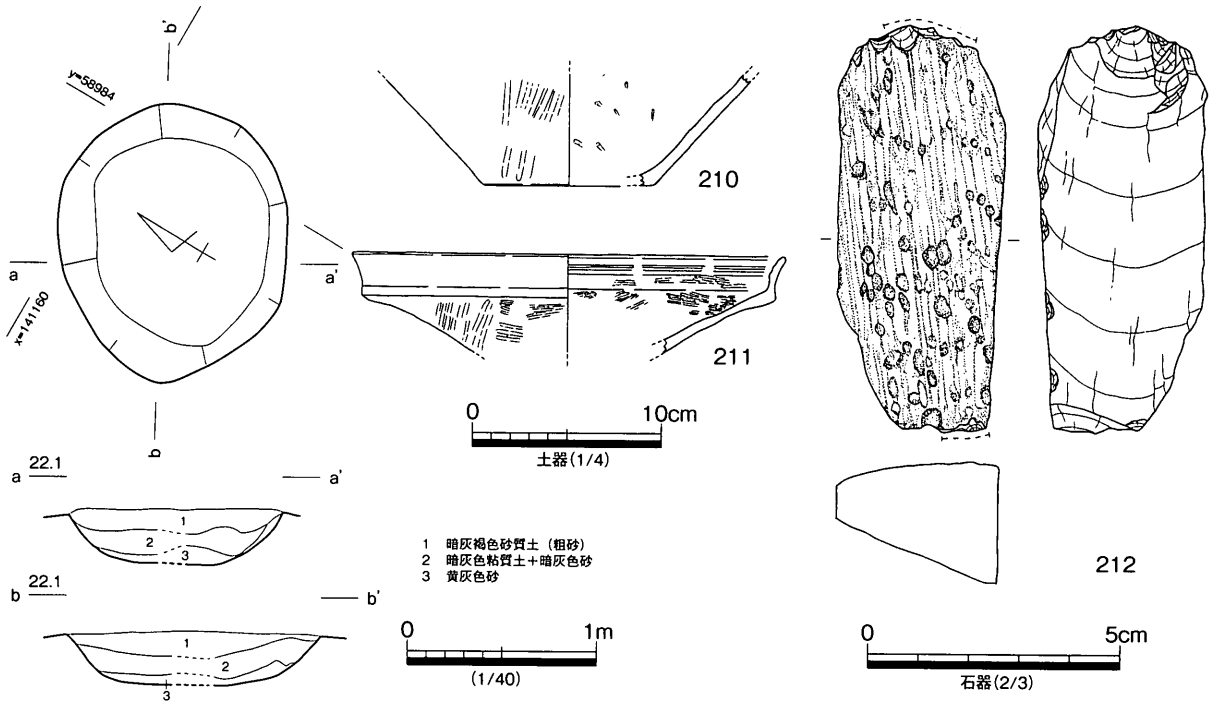
Ⅶ東区北半部の第3遺構面上で検出した土坑である。平面は不整形な円形を呈し、断面はU字状を呈する。長径1.4m、短径1.2m、深さ0.3mを測る。埋土は3層に分れる。

出土遺物としては、弥生時代後期前半頃の土器と、サヌカイト製の石器が出土した。210は比較的大型の壺の底部である。211は高杯杯部である。口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部は尖り気味に丸く仕上げている。外面にはヘラミガキ、内面にはヨコナデを顕著に施している。212はサヌカイトの角礫の角を打ち欠いた、縦長状の剥片である。背面から側面にかけて礫面を顕著に残し、腹面は、上端に明瞭なバルブが認められる。

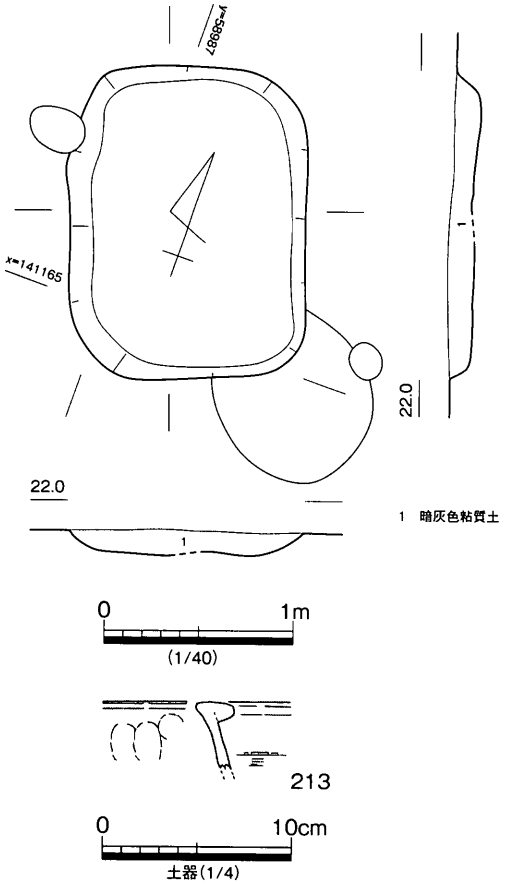
SKb32（第101図）

Ⅶ東区北半部の第3遺構面上で検出した土坑である。この土坑は隣接するSKb33を切り込んでいる。削平を受けたためか、平面は隅丸方形状を呈し、断面は浅い皿状を呈する。長径1.6m、短径1.2m、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰色粘質土の単層である。

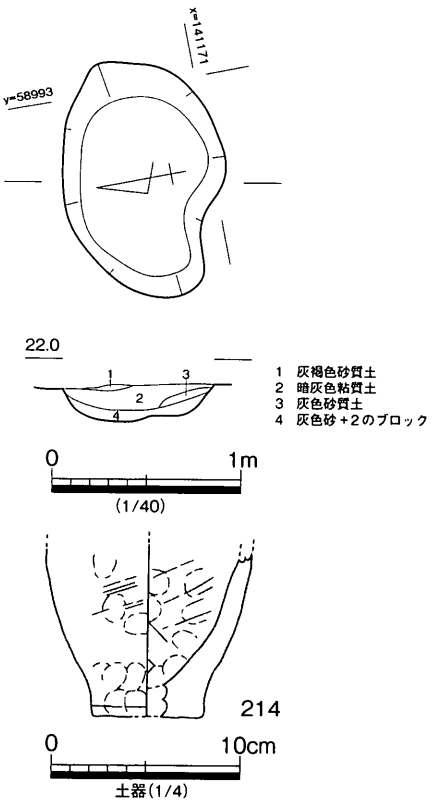
出土遺物としては、少量の弥生土器が出土した。



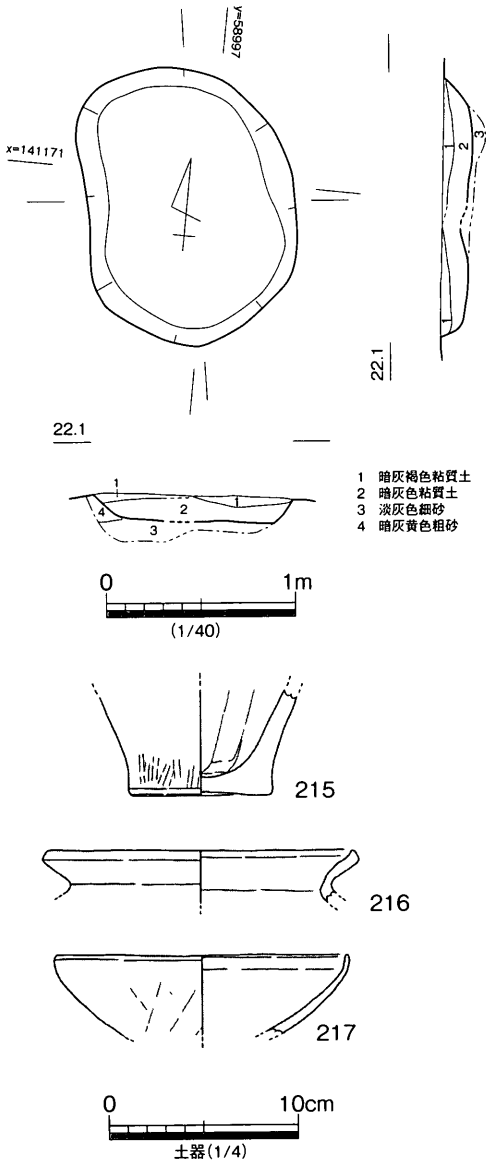
第 100 図　SKb26 平・断面図、出土遺物



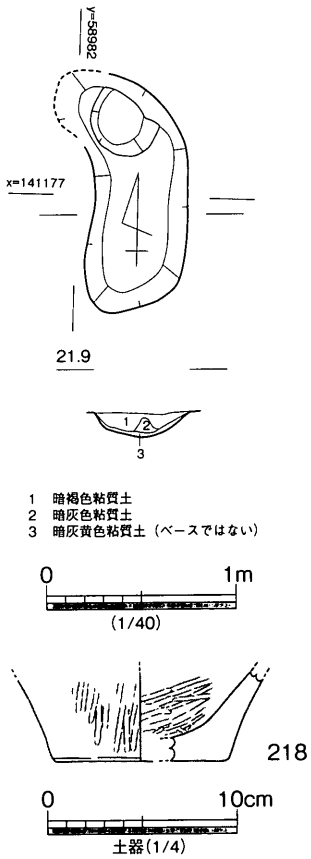
第 101 図　SKb32 平・断面図、出土遺物



第 102 図　SKb35 平・断面図、出土遺物



第 103 図　SKb36 平・断面図、出土遺物



第 104 図　SKb41 平・断面図、出土遺物

213 は甕の口縁部で、前期末～中期前半頃の土器と考えられる。

SKb35（第 102 図）

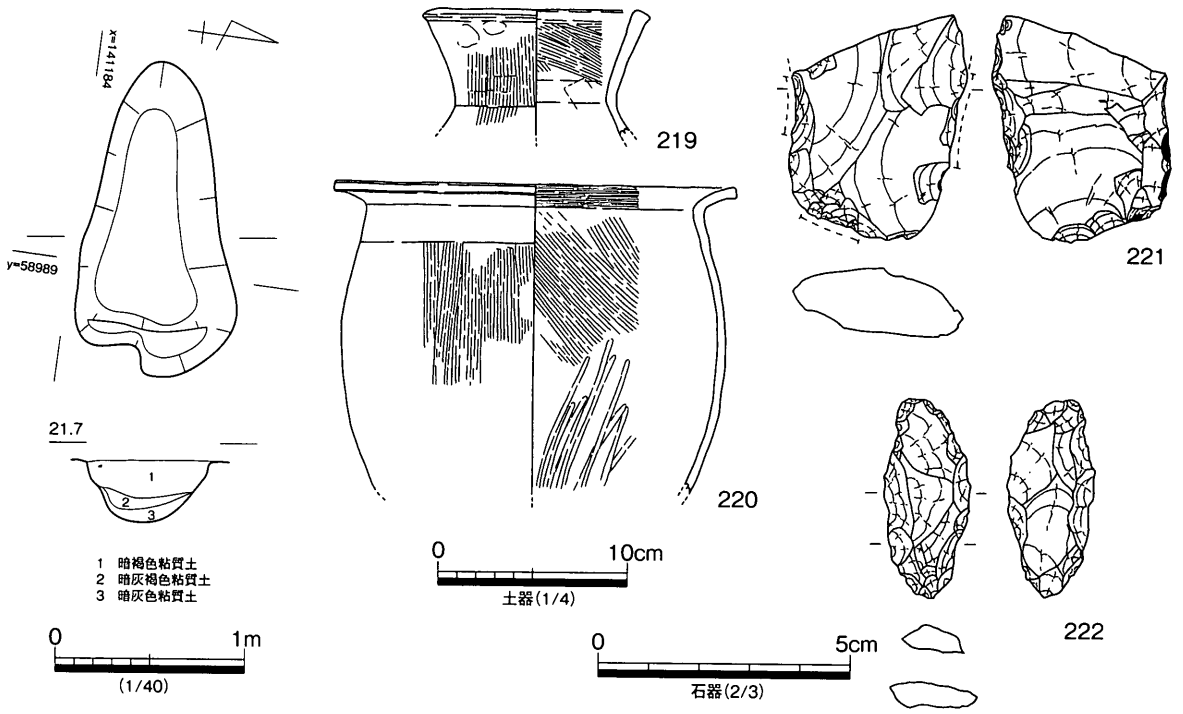
Ⅶ東区北半部の第 3 遺構面上で検出した土坑である。削平を受けたためか、平面は不整形な楕円形状を呈し、断面は浅くて不整形な U 字状を呈する。長径 1.3 m、短径 0.9 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は 4 層に分れる。

出土遺物としては、少量の弥生土器が出土した。214 は口縁部を欠く小型の甕で、前期末～中期前半頃の土器と考えられる。

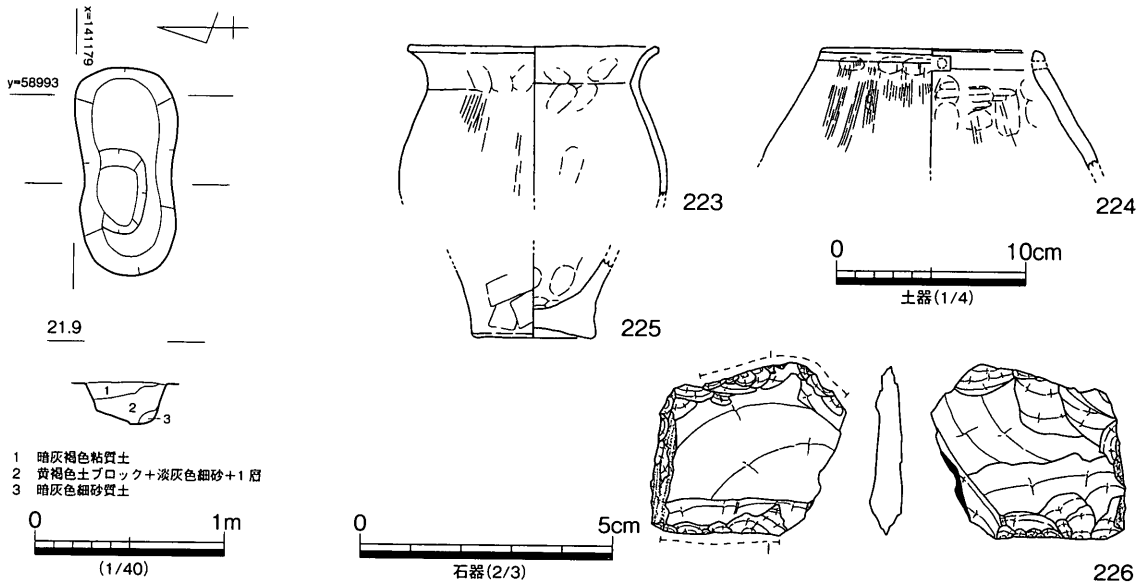
SKb36（第 103 図）

Ⅶ東区北半部の第 3 遺構面上で検出した土坑である。削平を受けたためか、平面は不整形な楕円形状を呈し、断面は浅くて不整形な U 字状を呈する。長径 1.4 m、短径 1.1 m、深さ 0.15 mを測る。埋土は 2 層に分れ、上層は暗灰褐色粘質土、下層は暗灰色粘質土である。

出土遺物としては少量の弥生土器が出土した。215 は前期ないし中期の甕の底部で、おそらく混入したものであろう。216・217 は後期後半の土器で、216 は甕の口縁部、217 は底部を欠く鉢である。



第 105 図　SKb42 平・断面図、出土遺物



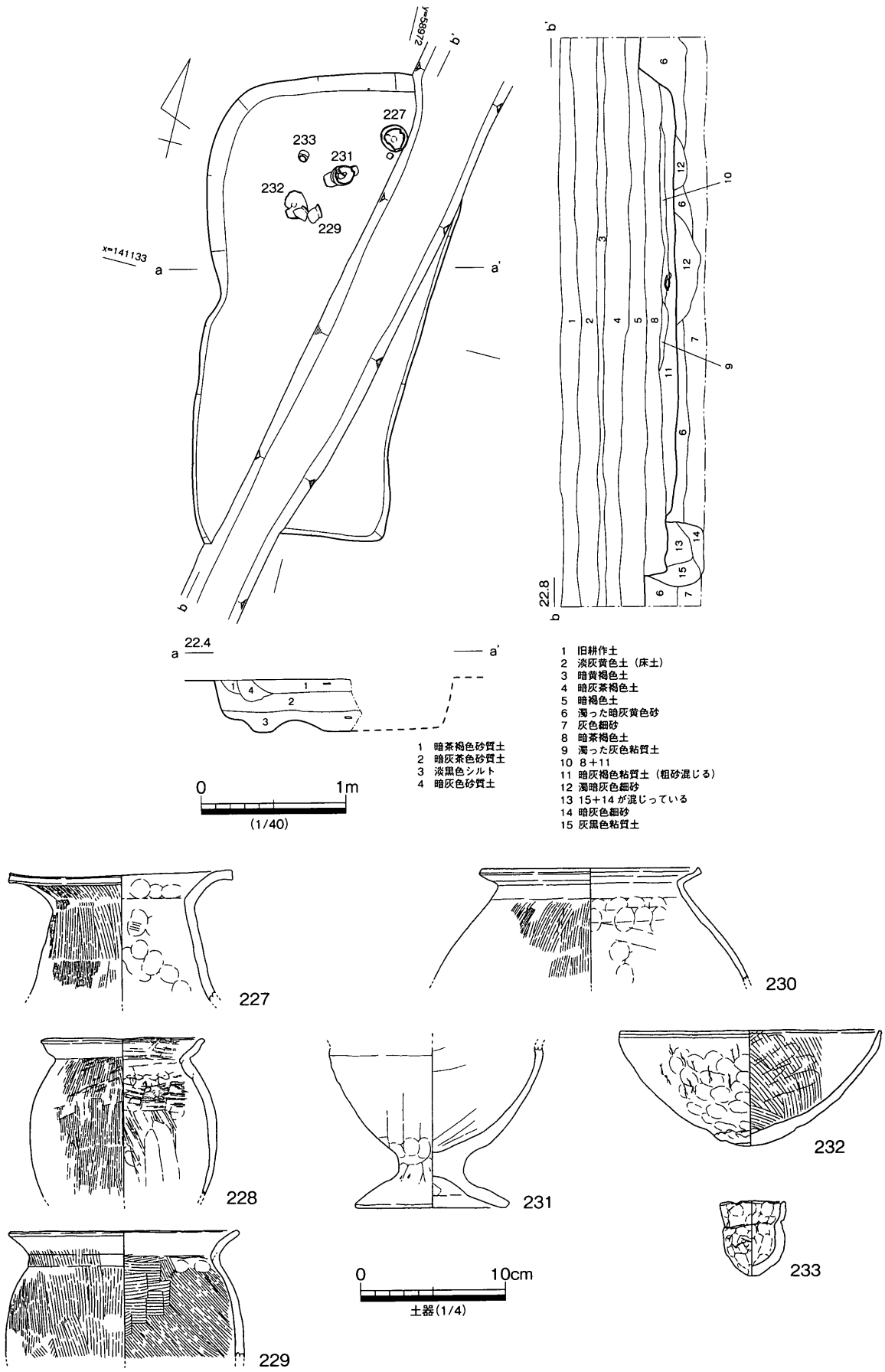
第 106 図　SKb43 平・断面図、出土遺物

SKb41（第 104 図）

Ⅶ東区北半部の第 3 遺構面上で検出した土坑である。削平を受けたためか、平面は北辺が西に曲がった不整形な楕円形状を呈し、断面は北辺部が円形に窪んでいるが、全体的には浅くて不整形な U 字状を呈する。長径 1.2 m、短径 0.5 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は 2 層に分れる。

北辺部の不整形な平面の形状と、底部の円形の窪み等から、この土坑は、柱の抜き取り穴の可能性が考えられる。

出土遺物としては少量の弥生土器が出土した。218 は中期以降の甕の底部である。



第 107 図　SKb44 平・断面図、出土遺物

SKb42（第 105 図）

Ⅶ東区北半部の第３遺構面上で検出した土坑である。この土坑はSHb43の床面に位置することから、SHb43に係わる遺構の可能性がある。平面は西辺が尖り気味の不整形な三角形状を呈し、断面は不整形なＵ字状を呈する。長径1.6 m、短径0.75 m、深さ0.35 mを測る。埋土は３層に分れる。

出土遺物としては、少量の弥生土器とサヌカイトの石器が出土した。219は壺の口頸部で、220は底部を欠く甕である。いずれも中期中頃以降の時期が考えられる。221は槍先形石器の下半部、222は石鏃である。221・222ともに完成度は低く、未製品と考えられる。

SKb43（第 106 図）

Ⅶ東区北半部の第３遺構面上で検出した土坑である。平面は不整形な楕円形状を呈し、底部の中央は円形に僅かに窪んでいる。断面は不整形な逆台形状を呈する。長径1.1 m、短径0.5 m、深さ0.2 mを測る。埋土は３層に分れる。底部の円形の窪みは柱穴跡とも考えられ、この土坑は柱穴の抜き取り穴の可能性が考えられる。

出土遺物としては少量の弥生土器と石器が出土している。224は無頸壺の上半部で、端部には穿孔が認められる。226はサヌカイト製の削器片である。

SKb44（第 107 図）

Ⅶ東・西区南端部の第３遺構面上で検出した土坑である。Ⅶ東区とⅦ西区の境界に位置するため、東西に分けて調査を実施した不明瞭な部分もある。

平面は不整形な長方形状を呈し、断面は不整形な逆台形状を呈する。長径3.2 m、短径1.5 m、深さ0.4 mを測る。埋土は４層に分れ、上層は砂質土で下層は淡黒色のシルトである。

出土遺物としては227～233の、弥生時代後期中頃以降の土器が出土している。227は広口壺の口頸部、228～230は甕の上半部である。230は下川津Ｂ類に類似する甕の上半部である。口縁部は体部から屈曲させ短く延び、端部を平坦に仕上げている。外面には縦方向のハケ、内面にはオサエを顕著に施している。231は台付鉢、232は平底を僅かに残す鉢である。233はミニチュアの壺である。

SKb62（第 39 図）

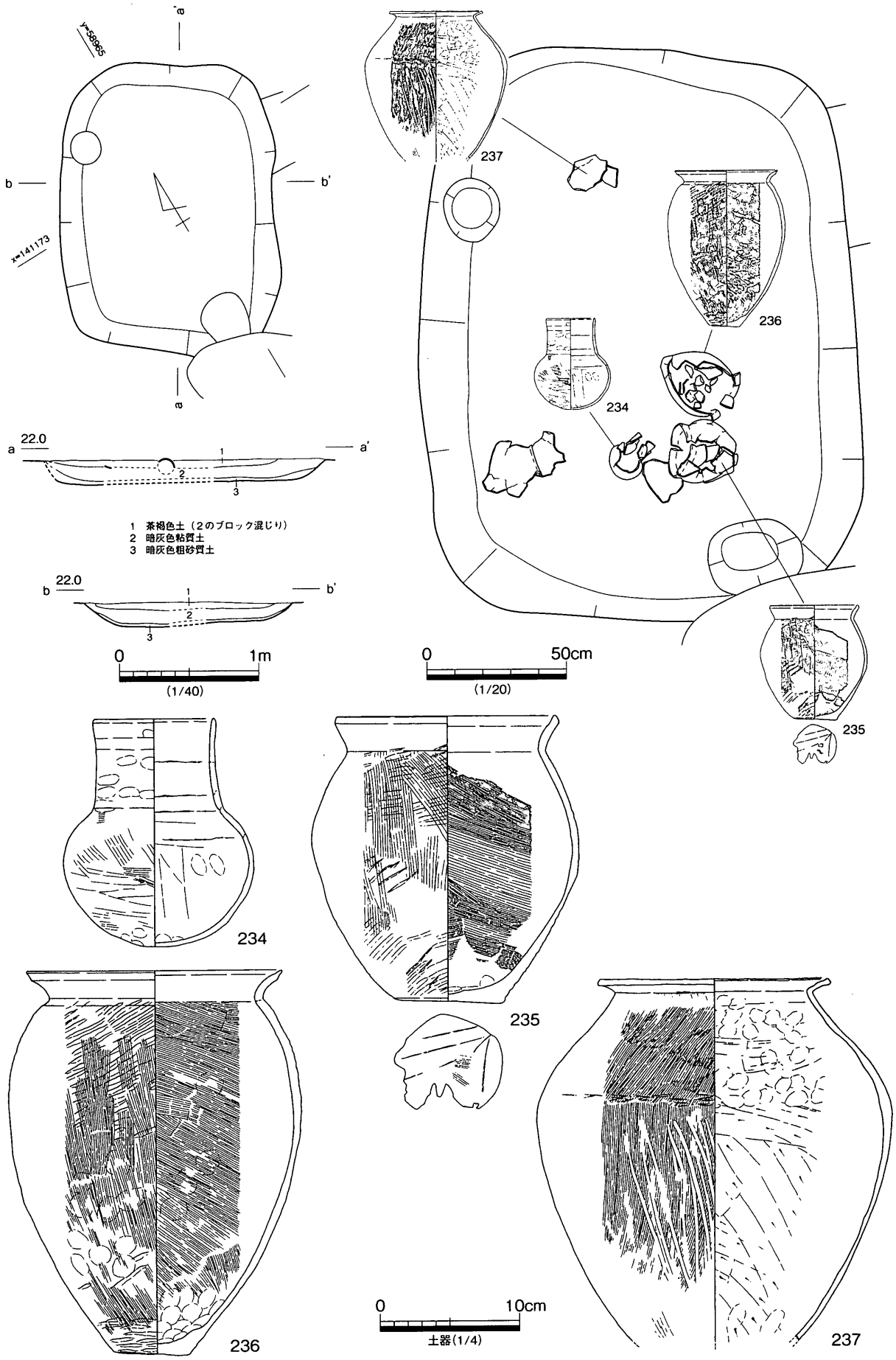
Ⅶ西区SHb30外周で検出した不定形な溝状の土坑である。詳細はSHb30と合わせて報告した。

SKb63（第 108 図）

Ⅶ西区中央部の第３遺構面上で検出した土坑である。隣接するSBb25、SKb62に切られ、SDb32を切り込んでいる。この土坑の北にはSBb26が隣接し、SKb63はSBb26に向きを揃えているようにも見られる。

平面は隅丸長方形状を呈し、断面は浅い逆台形状を呈する。長径2.0 m、短径1.5 m、深さ0.2 mを測る。埋土は３層に分れる。

出土遺物としては比較的一括性の高い、弥生後期中頃の土器が出土している。234は丸底の直口壺である。235～236は甕の上半部である。口縁部は短く外反し、端部は平坦に仕上げている。底部は平底を呈している。内外面伴にハケを顕著に施し、外面にはタタキの跡を残す。237は形状及び調整手法よ



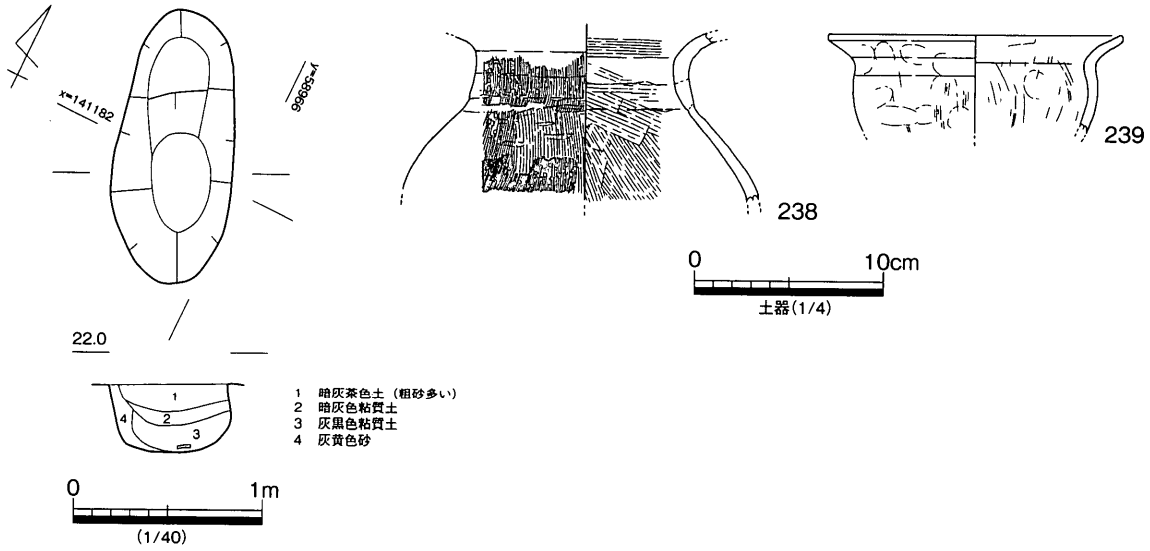
第108図　SKb63平・断面図、出土遺物

り下川津Ｂ類に類似する甕である。口縁部は体部から屈曲させ短く延び、端部を平坦に仕上げている。体部は長胴気味で、上位に最大径が位置する。外面には縦方向のハケ及びヘラミガキ、内面上位にはオサエ、下半部にはヘラ削りを顕著に施している。

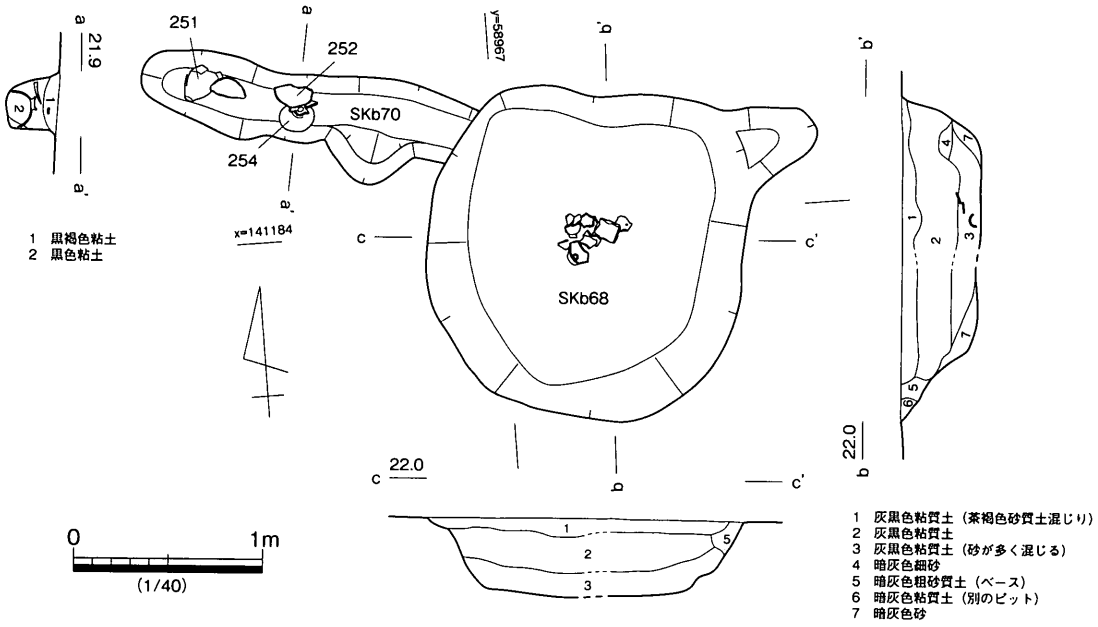
SKb67（第 109 図）

Ⅶ西区北半部の第３遺構面上で検出した土坑である。この土坑の周辺は遺構密度も高く、SHb34・35 等に隣接する。平面は不整形な楕円形状を呈し、北半部にはテラス状の平坦面がある。断面はＵ字状を呈する。長径 1.4 m、短径 0.6 m、深さ 0.4 mを測る。埋土は４層に分れる。

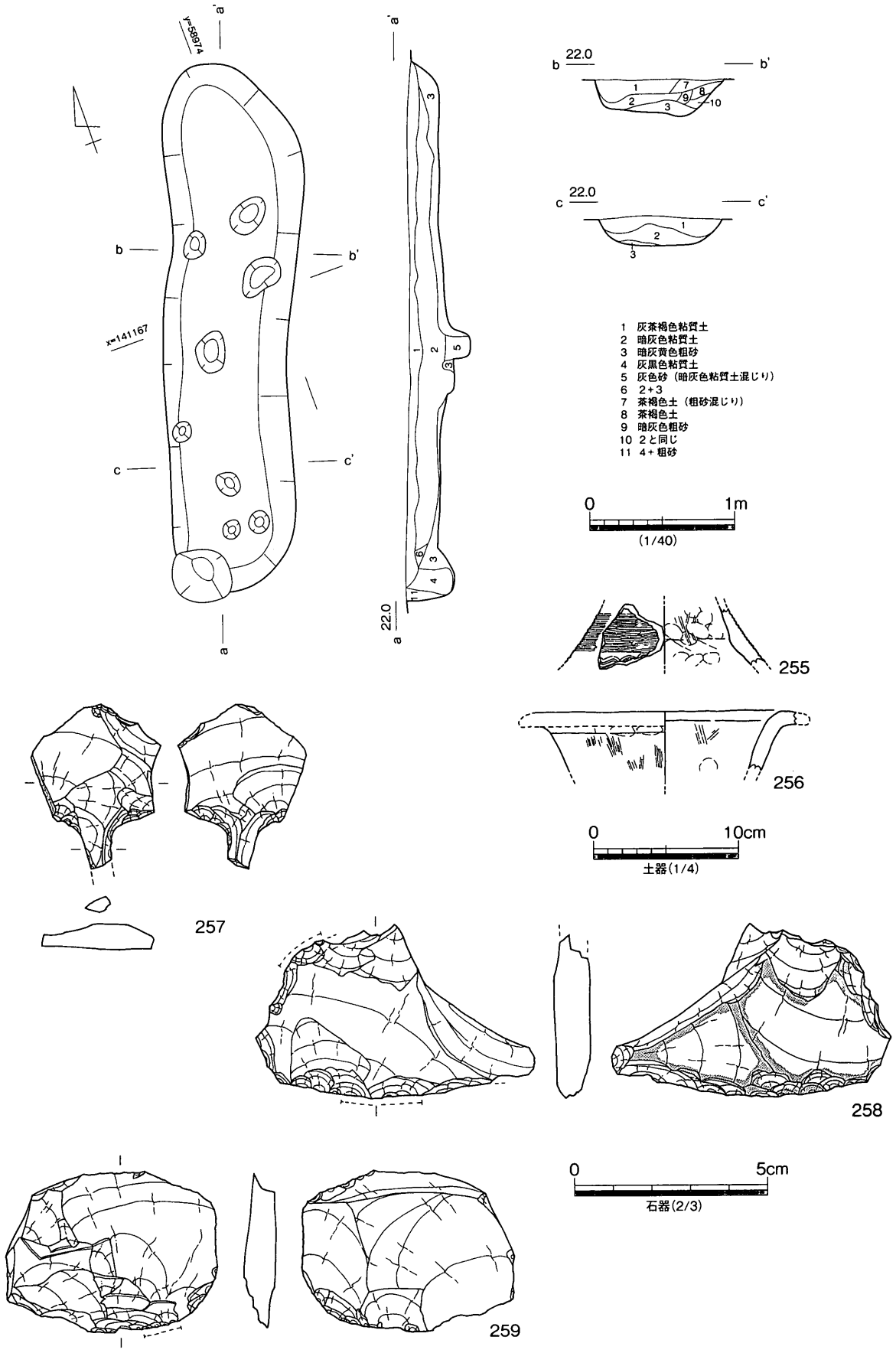
出土遺物としては、弥生時代後期中頃以降の、少量の土器が出土している。238 は広口壺の上半部である。239 は下半部を欠く鉢である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部を平坦に仕上げている。



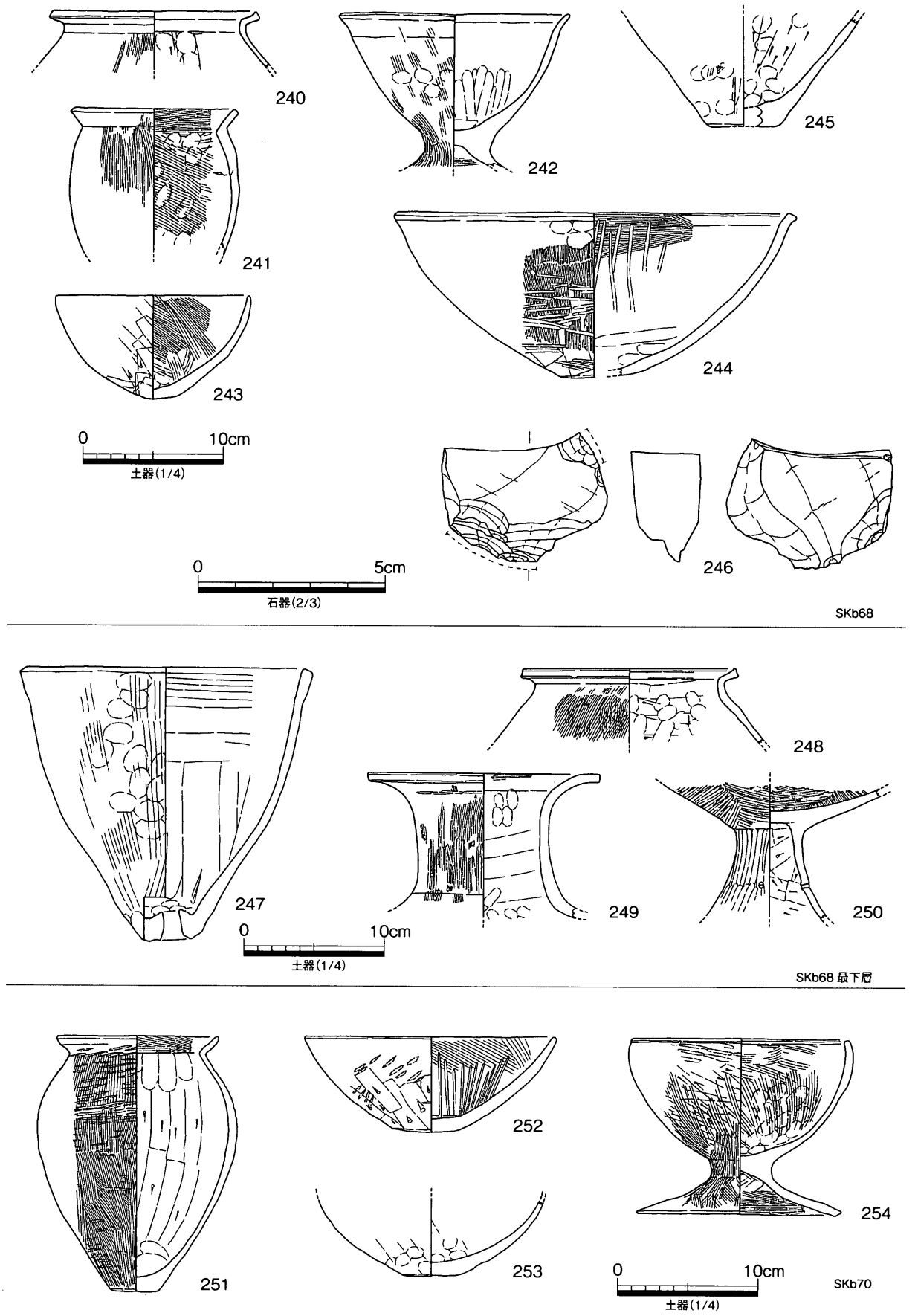
第 109 図　SKb67 平・断面図、出土遺物



第 110 図　SKb68・70 平・断面図



第 111 図　SKb69 平・断面図、出土遺物



第 112 図　SKb68・70 出土遺物

SKb68（第 110・112 図）

Ⅶ西区北半部の第３遺構面上で検出した土坑である。この土坑は隣接する SKb70 を切り込む。

平面は東に僅かに突出する箇所はあるが、全体的には不整形な円形状を呈し、断面は逆台形状を呈する。長径 2.1 m、短径 1.7 m、深さ 0.4 mを測る。埋土は灰黒色系の粘質土で、僅かな違いで３層に分層できる。

出土遺物としては弥生時代後期中頃以降の土器が出土した。240・241 は甕の上半部、245 は甕の下半部である。242 は台付鉢、244 は比較的大型の鉢である。

247 ～ 250 は最下層から出土した土器である。247 は深鉢形を呈する甑、249 は広口壺の口頸部である。248 は甕の上半部で、形状・調整手法等から下川津Ｂ類に類似する土器と考えられる。250 は高杯の脚部である。この土器も 248 同様に下川津Ｂ類に類似する土器と考えられる。

SKb69（第 111 図）

Ⅶ西区中央の第３遺構面上で検出した土坑である。この土坑は SBb23 と重複している。形状は溝状遺構に近い長楕円形状を呈し、断面は隅丸の逆台形状を呈する。長径 3.6 m、短径 0.9 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は 11 層に分れ、傾向として上層は灰～茶色系の粘質土、下層は灰黄色系の粗砂からなる。

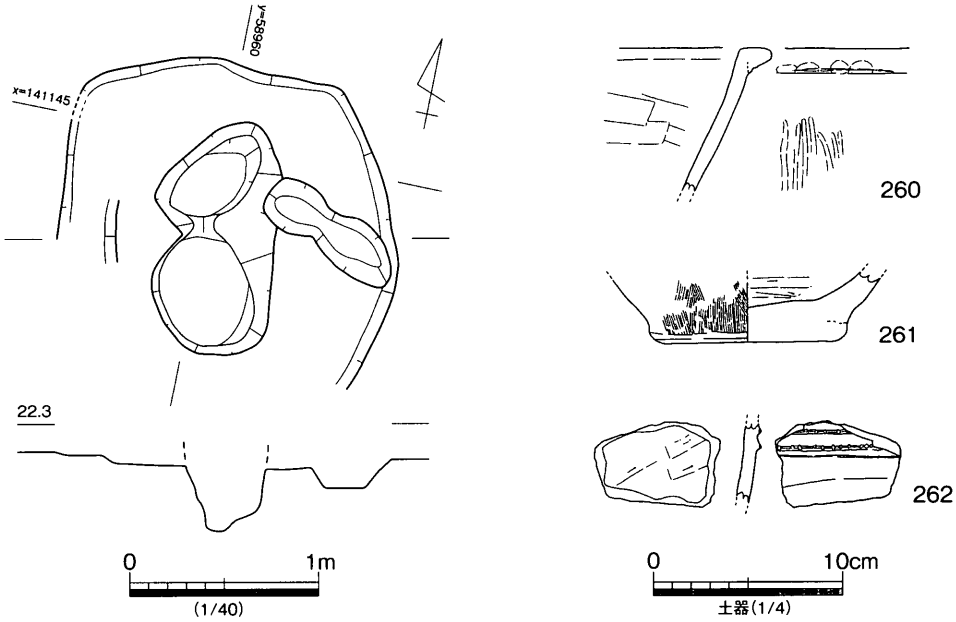
出土遺物としては弥生時代中期前半の土器と石器が出土した。255・256 は壺と鉢、257 は先端部を欠くサヌカイト製の石錐、258・259 はサヌカイト製の打製石庖丁、及び削器である。

SKb70（第 110・112 図）

Ⅶ西区北半部の第３遺構面上で検出した遺構である。この遺構は隣接する SKb68 に切られる。

平面は東西方向に短く延びて、断面は隅丸の逆台形状を呈する。長径 1.7 m、短径 0.4 m、深さ 0.3 m を測る。埋土は２層に分けられ、上層は黒褐色粘土、下層は黒色粘土を呈する。

出土遺物としては弥生時代後期中頃の土器が出土した。251 は甕である。口縁部は「く」の字状に短



第 113 図　SKb73 平・断面図、出土遺物

く外反し平坦に仕上げ、底部は平底を呈している。外面は縦方向のハケ及びタタキ、内面には縦方向のヘラ削りを施している。252・253は鉢である。底部は明瞭な平底を呈している。254は台付鉢である。

SKb73（第113図）

Ⅶ西区北半部の第3遺構面上で検出した土坑である。この土坑はSKb74の南に位置し、SHb22A・SHb22Bを切り込んでいる。底面よりSHb22A・SHb22Bの主柱穴跡と不整形な落ち込みを検出した。

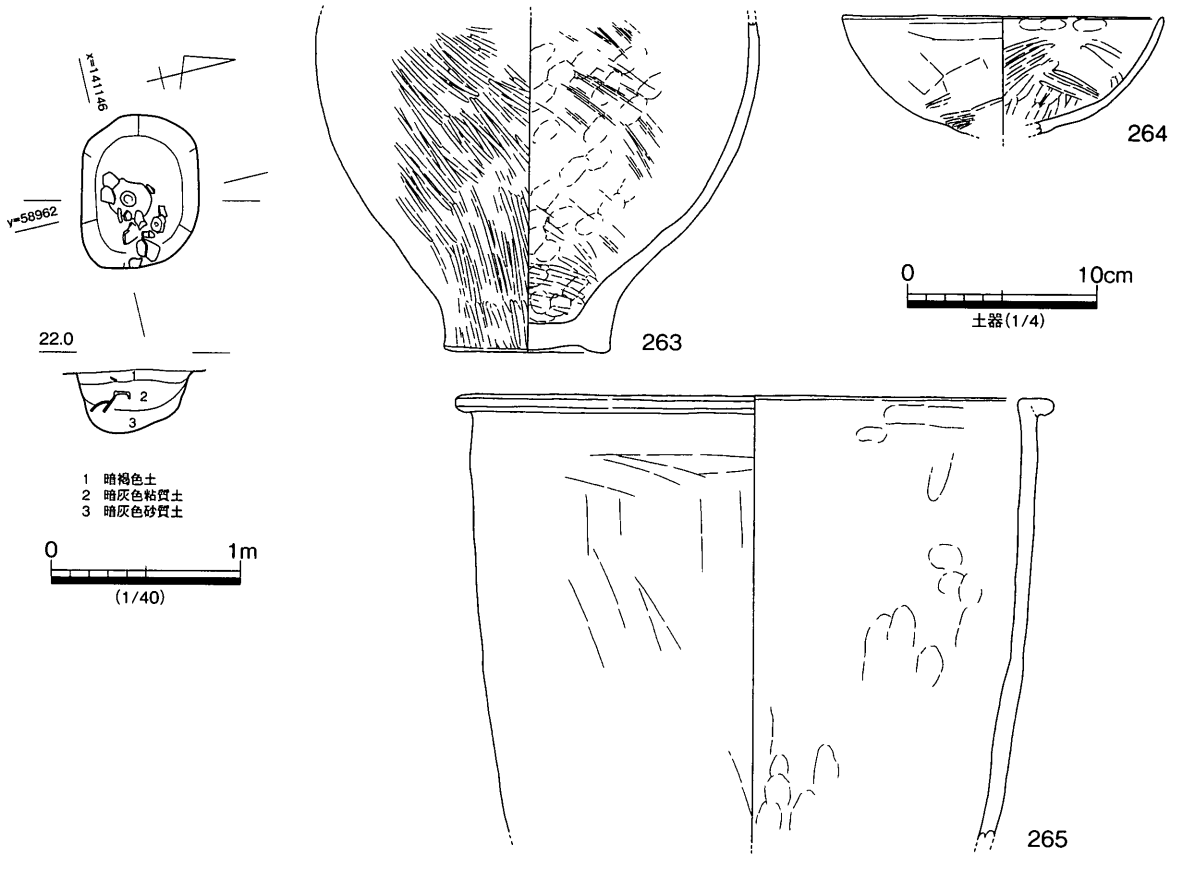
形状は不整多角形状を呈し、かなり浅いことから削平を受けたものと考えられる。底部は平坦で上面では柱穴を2基と、不整形で細長い落ち込みを検出した。長径1.9 m、短径1.6 m、深さ0.1mを測る。

出土遺物として、260～262等の弥生土器が出土したが、底部で検出した柱穴跡等の遺構出土の土器が混じり込んでいる可能性がある。

SKb74（第114図）

Ⅶ西区北半部の第3遺構面上で検出した土坑である。この土坑はSKb73の北に位置し、SHb20とも隣接する。形状は楕円形状を呈し、断面はU字状を呈する。長径は0.8 m、短径0.6 m、深さ0.3 mを測る。埋土は3層に分れ、上層は暗褐色土、中層は暗灰色粘質土、下層は暗灰色砂質土を呈する。

出土遺物として、263～265等の土器が出土した。263は弥生時代中期前半の壺である。265の口縁部は、短く屈曲し端部は丸く仕上げ、体部は直線的に底部へ延びる。



第114図　SKb74平・断面図、出土遺物

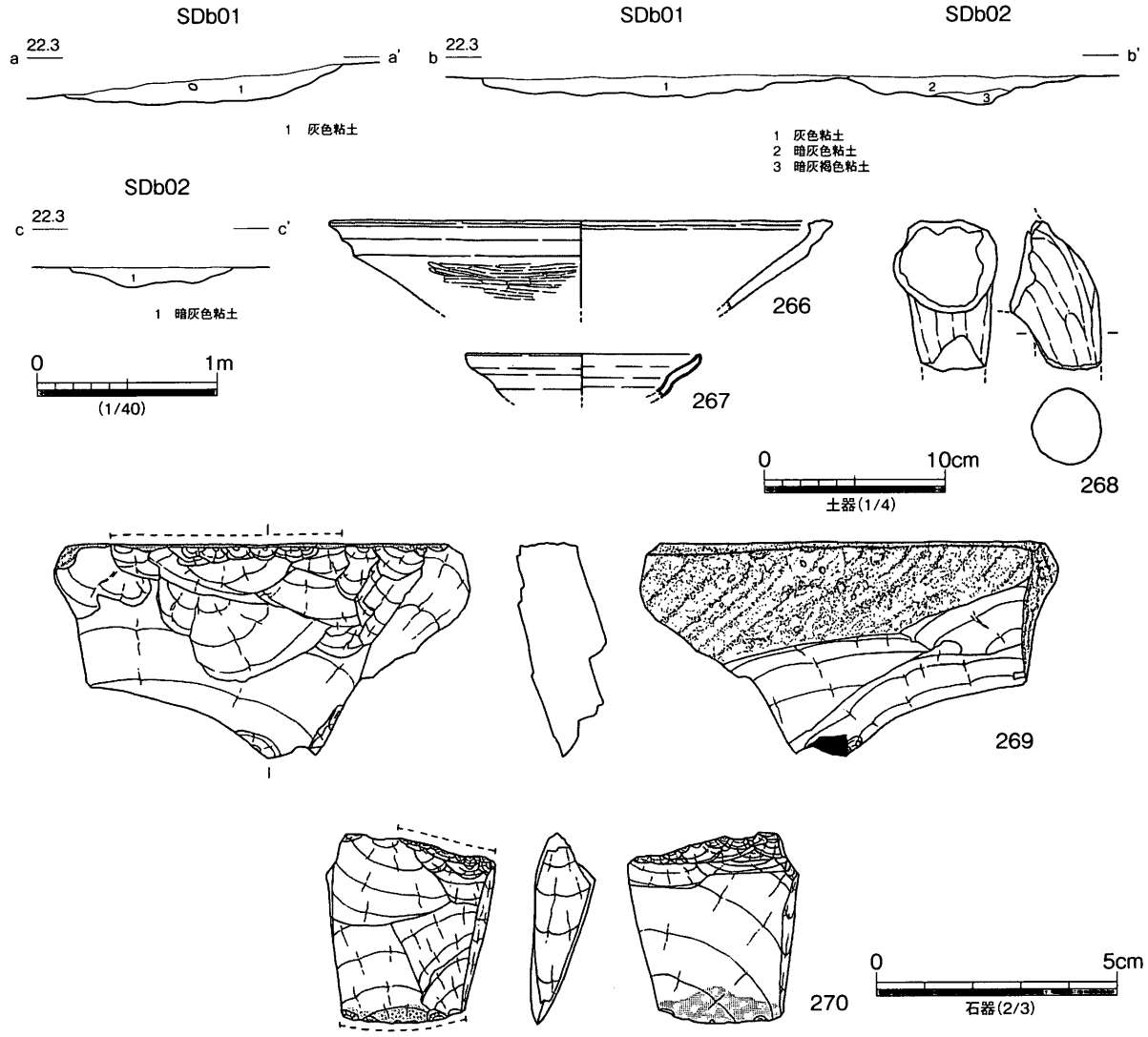
6．溝状遺構

SDb01（第 115 図）

Ⅶ東・西区南半部の第 1 遺構面上で検出した、条里方向に向きを揃えた溝状遺構である。調査区を東西に直線状に横断し、SDb02・03・20 等を切り込んでいる。削平を受けたためか、上面の幅は地点によりかなり差があり、深さもかなり浅い。

検出長は約 55.0 m、幅約 1.0 ～ 2.2 m、主軸は北より 81°西へ向く。断面は不整形で凸凹した浅い皿状を呈し、深さ約 0.1 mを測る。埋土は灰色粘土の単層である。

出土遺物は 266 ～ 270 の、弥生土器、土師器、陶器、石器が出土した。266 は弥生時代後期初頭頃の高杯杯部である。口縁部は屈曲し、端部は左右に拡張させ、数条の凹線文を施している。外面にはヘラミガキを顕著に施している。267 は陶器皿、268 は土師器土釜の脚部片である。269 はサヌカイト製の石核である。礫面を残した板状の剥片を石核の素材とし、素材の木口面を打面、広口面（分割面）を作業面として一方向からの加撃により剥片を産出している。270 はサヌカイト製の楔形石器である。これらの出土遺物のうち、267・268 等の土器が最終的に埋没した時期を示しているものと考えられ、他の遺物は混入したものと考えられる。



第 115 図　SDb01・02 断面図、出土遺物

SDb02・03・19（第 115・120 図）

Ⅶ東・西区南半部の第 1 遺構面上で検出した溝状遺構である。調査区南西端部から東から西へ反り気味に延び、SDb01 付近で SDb03 と分岐する。周辺の遺構との関係では、SDb01・20・21・22 等に切られていることから、第 1 遺構面上の溝状遺構では、比較的古い時期の遺構と考えられる。削平を受けたためか、深さもかなり浅く、溝の上面幅では、東半部と西半部ではかなり差がある。特にⅦ西区に当たる西半部では、溝幅も狭く、深さも浅いところから、かなり削平を受けているものと考えられる。

検出長は約 48 m、幅は西半部では約 0.2 m、東半部では約 1.0 mを測り、主軸は北より 72° 東へ向く。断面は不整形で凸凹した浅い皿状を呈し、深さは約 0.15 mを測る。埋土は 2 層に分かれ、上層が暗灰色粘土、下層が暗灰褐色粘土である。

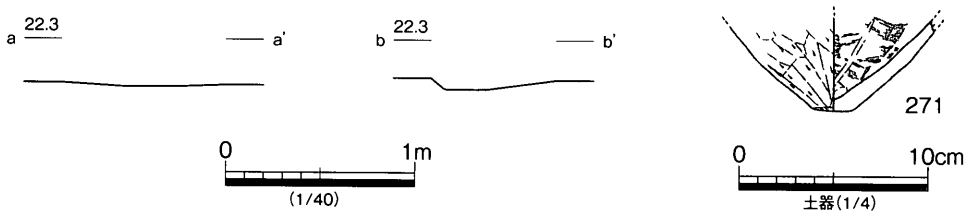
出土遺物は、SDb19 から 288・289 の弥生時代後期中頃以降の土器が出土した。288 は甕の上半部である。口縁部は「ハ」の字状に開き、端部は丸く仕上げている。体部は球体気味である。289 は高杯杯部である。口縁部は屈曲し、外上方に開き、端部は尖り気味に仕上げている。

SDb04（第 116 図）

Ⅶ東区中央部の第 1 遺構面上で検出した、SDb01 同様に条里方向に向きを揃えた溝状遺構である。SDb01 から北へ約 35.0 m離れた地点で、SDb01 に向きを揃えて、東西方向に直線状に延びる。なお、先端部から、東へ 3.0 mの地点では北に延びる小さい突出部があり、本来北に延びる小溝が分岐していたものと考えられる。

削平を受けたためか残りが悪く、検出長は約 15 m、幅は 0.6 ～ 1.2 mを測り、主軸は北より 79° 西へ向く。断面は不整形で浅い皿状を呈し、深さは約 0.2 mを測る。

出土遺物としては、弥生土器が少量出土した。271 は口縁部を欠く鉢で、弥生時代後期後半頃の土器である。



第 116 図　SDb04 断面図、出土遺物

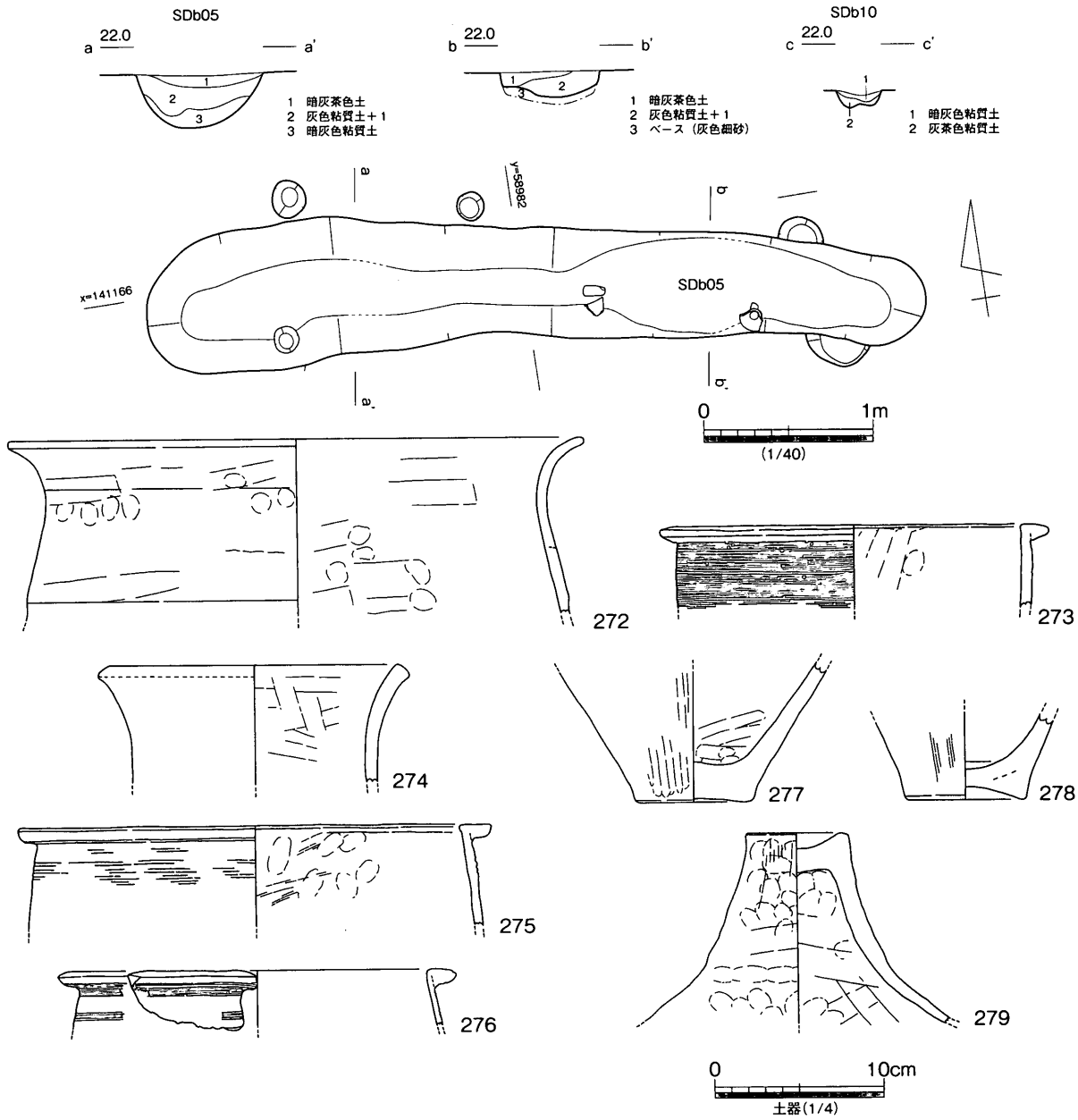
SDb05（第 117・118 図）

Ⅶ東区中央部の第 3 遺構面上で検出した、東西方向に延びる短い溝状遺構である。周辺は遺構密度が高く、この遺構は SBb15 と重複している。

検出長は 4.6 m、幅は約 0.7 mを測り、主軸は北より 81° 西へ向く。断面は不整形で浅い U 字状を呈するが、東半部と西半部では深さがかなり異なり、東半部では約 0.15 m、西半部では 0.3 mを測る。埋土は 2 ～ 3 層に分れ、下層ないし中層には灰色粘質土に暗灰茶色土が混じったブロック層を確認した。

出土遺物としては、272 ～ 281 等の弥生時代前期～中期前半の土器、石器が出土した。272 は甕の上半部である。体部上端部で湾曲気味に屈曲し、口縁部は外上方に外反し、端部は丸く仕上げている。273・275・276 は中期前半の甕上半部である。口縁部は断面三角形の突帯を貼り付け、口縁部下には櫛

描直線文を施す。279 は甕の蓋である。280 はサヌカイト製の削器である。281 は結晶片岩製の太型蛤刃石斧である。上部には装着痕と考えられる窪みが認められる。太型蛤刃石斧は破損品が多いが、この資料は欠損部がない保存状態が良好な資料である。

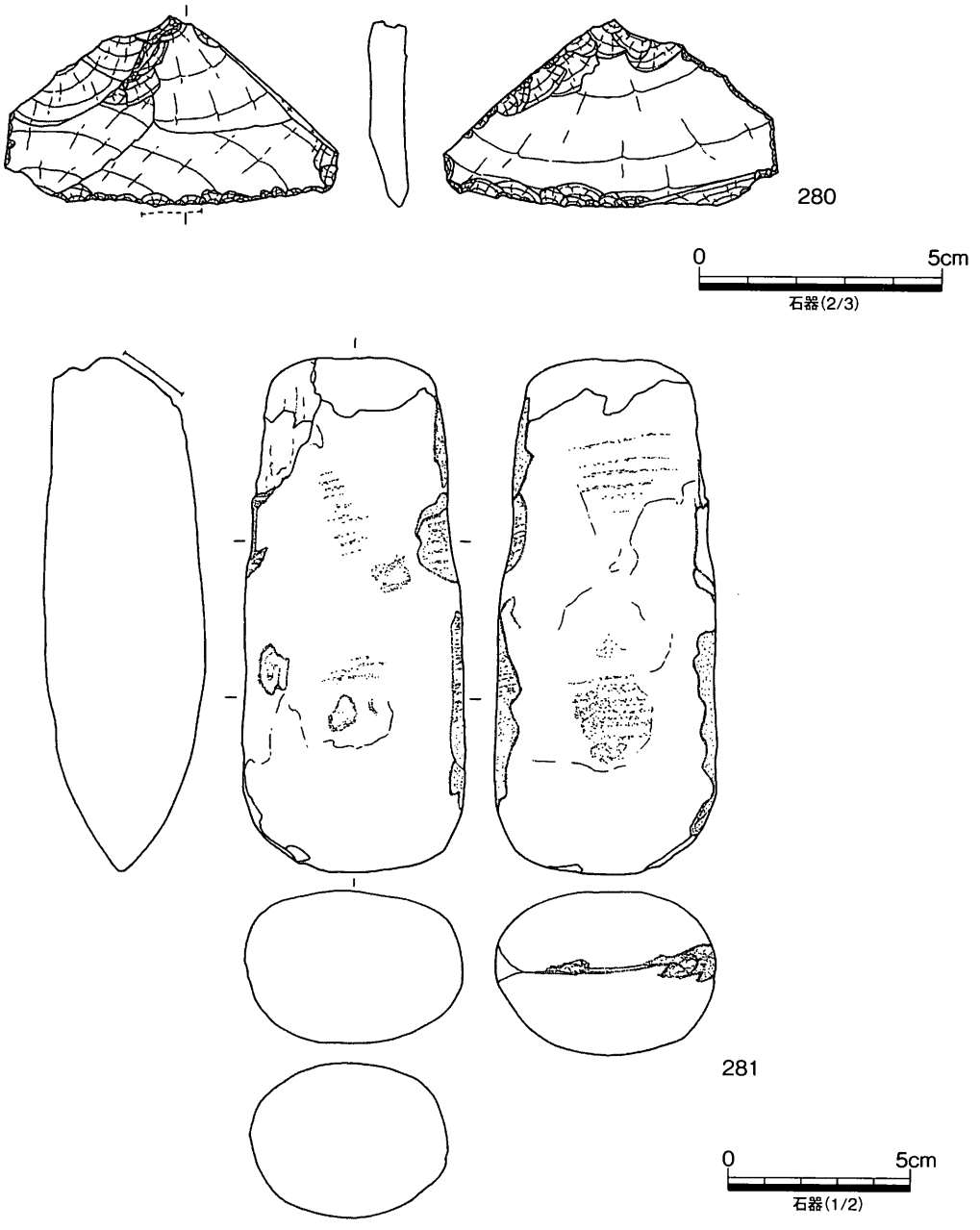


第 117 図　SDb05・10 断面図、SDb05 出土遺物（1）

SDb09（第 70 図）

Ⅶ東区北半部の第 3 遺構面上で検出した、南北方向に延びる小規模な溝状遺構である。周辺は遺構密度が高く、この遺構は SBb17・18 と重複し、SDb10 に切られている。

削平を受けたためか残りが悪く、検出長は 3.3 m、幅は約 0.2 m を測り、主軸は北より 25.5° 東へ向く。断面は浅い U 字状を呈し、深さ約 0.1 m を測る。



第118図　SDb05出土遺物（2）

SDb10（第117図）

Ⅶ東区北半部の第3遺構面上で検出した、南北方向に延びる不整形で短い溝状遺構である。周辺は遺構密度が高く、この遺構はSBb18と重複し、SDb09を切り込んでいる。

削平を受けたためか残りが悪く、検出長は1.4 m、幅は約0.3 mを測り、断面は不整形で浅い逆台形状を呈し、深さ約0.1 mを測る。埋土は2層に分れ、上層は暗灰色粘質土、下層は灰茶色粘質土である。

SDb11（第119図）

Ⅶ東区北半部の第3遺構面上で検出した、南北方向に延びる不整形で短い溝状遺構である。SDb11の東辺はSDb12と接しており、この遺構はSDb12に切られている。

削平を受けたためか残りが悪く、北半部はかなり幅が狭まり、細長くなっている。検出長は3.5 m、幅は約0.2～0.7 mを測る。断面は隅丸の逆台形状を呈し、深さ約0.2 mを測る。埋土は3層に分れる。

出土遺物としては282～284の弥生時代中期前半の土器が出土した。282・283は甕の上半部である。口縁部は断面三角形の突帯を貼り付け、口縁部下には櫛描直線文を顕著に施している。284は甑の底部片である。

SDb12（第119図）

Ⅶ東区北半部の第3遺構面上で検出した、南北方向に延びる不整形で短い溝状遺構である。SDb12の西辺はSDb11と接しており、この遺構はSDb11を切り込んでいる。

削平を受けたためか残りが悪く、検出長は3.7 m、幅は約0.5～0.7 mを測る。断面は浅いU字状を呈し、深さ約0.15 mを測る。埋土は2層に分れる。上層は暗褐色粘質土、下層は暗灰黄色粘質土である。

出土遺物としては285～287の弥生時代中期前半の土器が出土した。285・286は甕の上半部である。口縁部には断面三角形の突帯を貼り付けている。286には櫛描文を顕著に施している。287は甕の底部である。

SDb16（第54図）

Ⅶ東区SHb43西側で検出した小規模な溝状遺構である。詳細はSHb43と合わせて報告した

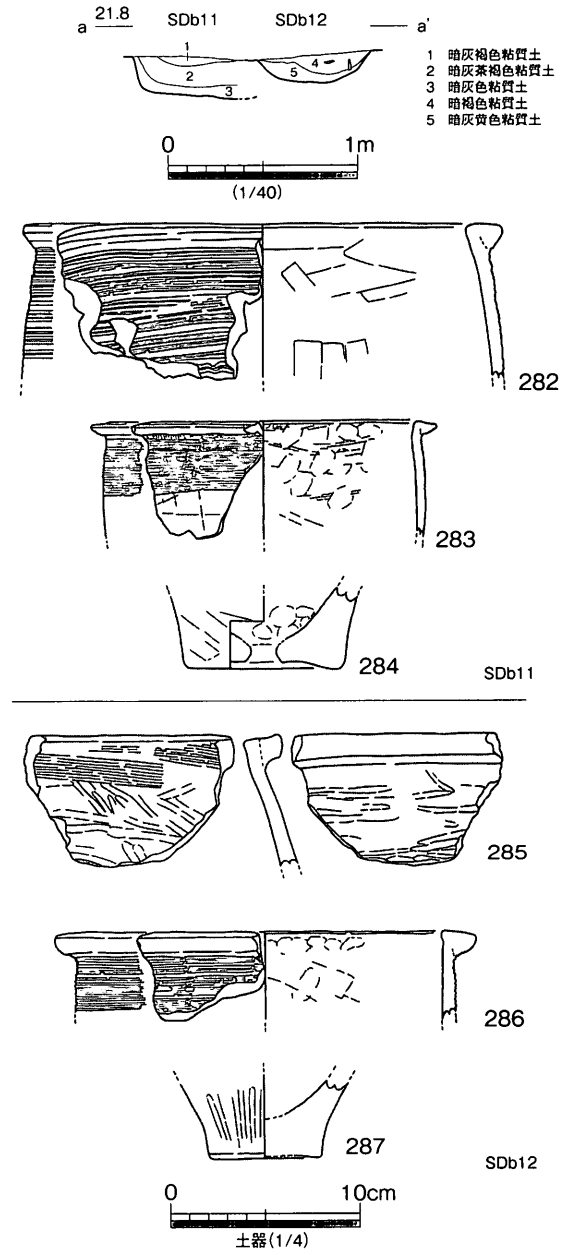
SDb17（第55図）

Ⅶ西区SHb44北側で検出した小規模な溝状遺構である。詳細はSHb44と合わせて報告した

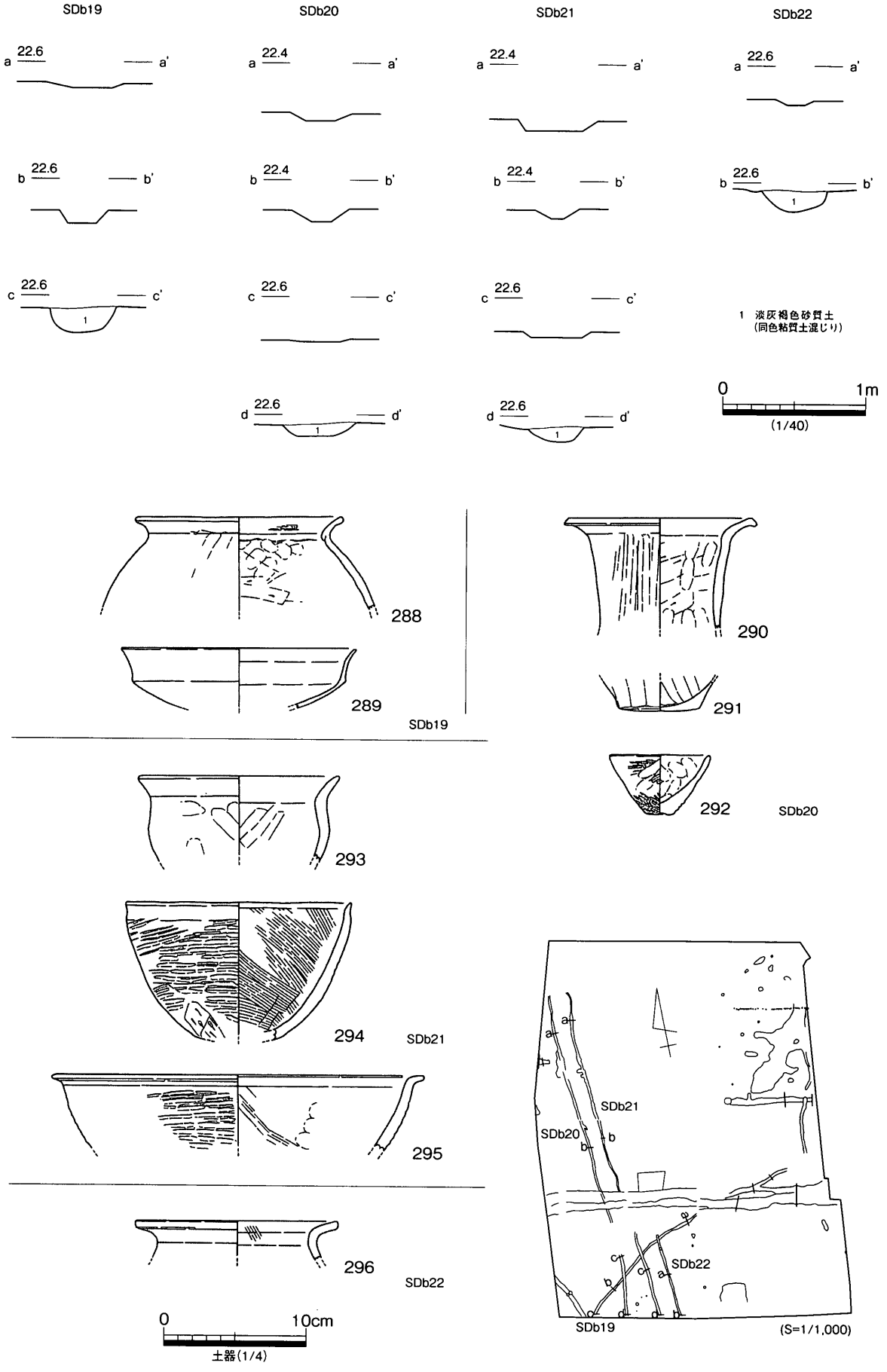
SDb20（第120図）

Ⅶ西区南半部の第1遺構面上で検出した溝状遺構である。調査区を南北に直線状に横断し、途中でSDb19を切り込み、SDb01に切られている。先端部から、南へ約10～14 mの地点では西に向かって不整形な突出部があり、本来西に延びる小溝等が分岐していたものと考えられる。なお、この溝状遺構の東には、この遺構と同形状で同方向のSDb21・22が位置する。おそらく同じ目的で掘られた溝状遺構で、改修の際に場所が移動したものと考えられるが、その時期差はさほど長期間のものとは考えられない。

検出長は約57 m、幅は約0.5 mを測り、主軸は北より3°西へ向く。断面は不整形で浅い皿状を呈し、



第119図　SDb11・12断面図、出土遺物



第 120 図　SDb19 ～ 22 断面図、出土遺物

深さは約 0.1 mを測る。埋土は粘土の小ブロックを含んだ淡灰褐色砂質土の単層である。

出土遺物としては、290 ～ 292 の弥生時代後期中頃の土器が出土した。290 は長頸壺の口頸部である。291 は甕の底部である。292 はミニチュアの鉢である。

SDb21（第 120 図）

Ⅶ西区南半部の第 1 遺構面上で検出した溝状遺構である。先に報告した SDb20 と同様、調査区を南北に直線状に横断し、途中 SDb19 を切り込み、SDb01 に切られている。先端部から、南へ約 14 mの地点では西に向かって小さい突出部 2 箇所があり、本来西に延びる小溝が分岐していたものと考えられる。なお、この溝状遺構の両側には、この遺構と同形状で同方向の SDb20・22 が位置する。

検出長は約 57.0 m、幅は約 0.5 mを測り、主軸は北より 6°西へ向く。断面は不整形で浅い皿状を呈し、深さは約 0.1 mを測る。埋土は粘土の小ブロックを含んだ淡灰褐色砂質土の単層で、SDb20 の埋土に類似する。

出土遺物としては、293 ～ 295 の弥生時代後期後半頃の土器が出土している。293 は小型の鉢である。口縁部は外上方に折り曲げて形成し、体部は椀状を呈する。294 は比較的器高が高いタイプの鉢で、外面にタタキ、内面にハケを顕著に施している。295 は大型の鉢で、口縁部は短く折り曲げて整形し、体部外面にはタタキを顕著に残している。

SDb22（第 120 図）

Ⅶ西区南半部の第 1 遺構面上で検出した溝状遺構である。先に報告した SDb20・21 と同様、南北に直線状に延びる遺構であるが、削平を受けて北半部は消失し、南半部の 1/2 程度のみを残す。

検出長は 15 m、幅は約 0.4 mを測り、主軸は北より 5.5°西へ向く。断面は不整形で浅い皿状を呈し、深さは約 0.1 mを測る。埋土は粘土の小ブロックを含んだ淡灰褐色砂質土の単層で、SDb20・21 の埋土に類似する。この溝状遺構と先に報告した SDb20・21 と主軸方位の点で比較すれば、SDb21 の方がこの遺構の主軸方位に近く、SDb21 と SDb22 は同一時期に並存していた可能性も考えられる。

出土遺物としては、弥生土器が少量出土した。296 は甕の口縁部である。口縁部は「ハ」の字状に外反し、端部を平坦に仕上げている。

SDb26（第 121 図）

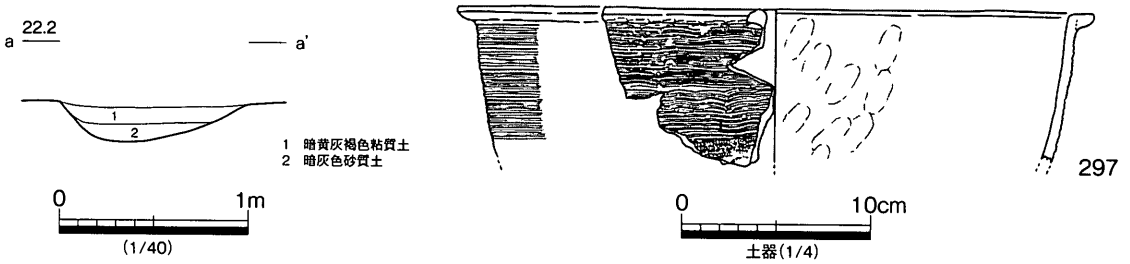
Ⅶ西区南半部の第 3 遺構面上で検出した、東西方向に延びる幅広の短い溝状遺構である。周辺は遺構密度も高く、SHb20、SBb07、SDb27 等と隣接する。SDb26 と SDb27 とは、ほぼ直角に交わるような位置関係にあり、また、埋土も類似しており、その関連性が指摘できる。

検出長は 5.0 m、幅は約 0.7 mを測り、主軸は北より 79°西へ向く。断面は不整形で皿状を呈し、深さは約 0.2 mを測る。埋土は 2 層に分けられ、上層が暗黄灰褐色粘土、下層が暗灰色砂質土である。

出土遺物としては、弥生時代中期前半の土器が少量出土した。297 は甕の上半部で、口縁部には断面三角形の突帯を貼り付け、口縁部下には櫛描直線文を顕著に施している。

SDb27（第 122 図）

Ⅶ西区南半部の第 3 遺構面上で検出した、南北方向に延びる不整形で短い溝状遺構である。周辺は

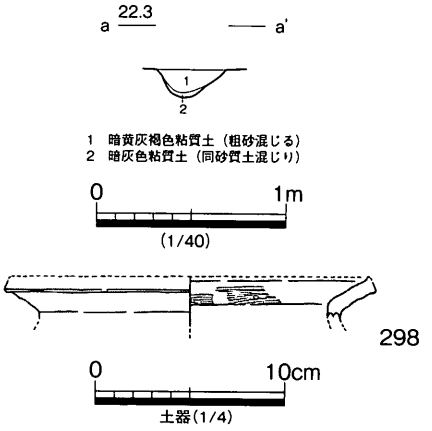


第 121 図　SDb26 断面図、出土遺物

遺構密度も高く、この遺構は SHb21、SBb07、SDb26 等と隣接する。先にも報告したが、SDb27 と SDb26 とは、ほぼ直角に交わるような位置関係にあり、また、埋土も類似している。そのため、この２遺構は、その配置上の特徴から、土地区画に伴うものと考えられる。

検出長は 1.8 m、幅は約 0.4 m を測り、主軸は北より 11° 東へ向く。断面は浅い U 字状を呈し、深さは約 0.15 m を測る。埋土は２層に分けられ、上層が暗黄灰褐色粘土、下層が暗灰色粘質土である。

出土遺物としては、弥生時代後期中頃の土器が少量出土した。298 は甕の口縁部である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は拡張気味に平坦に仕上げている。

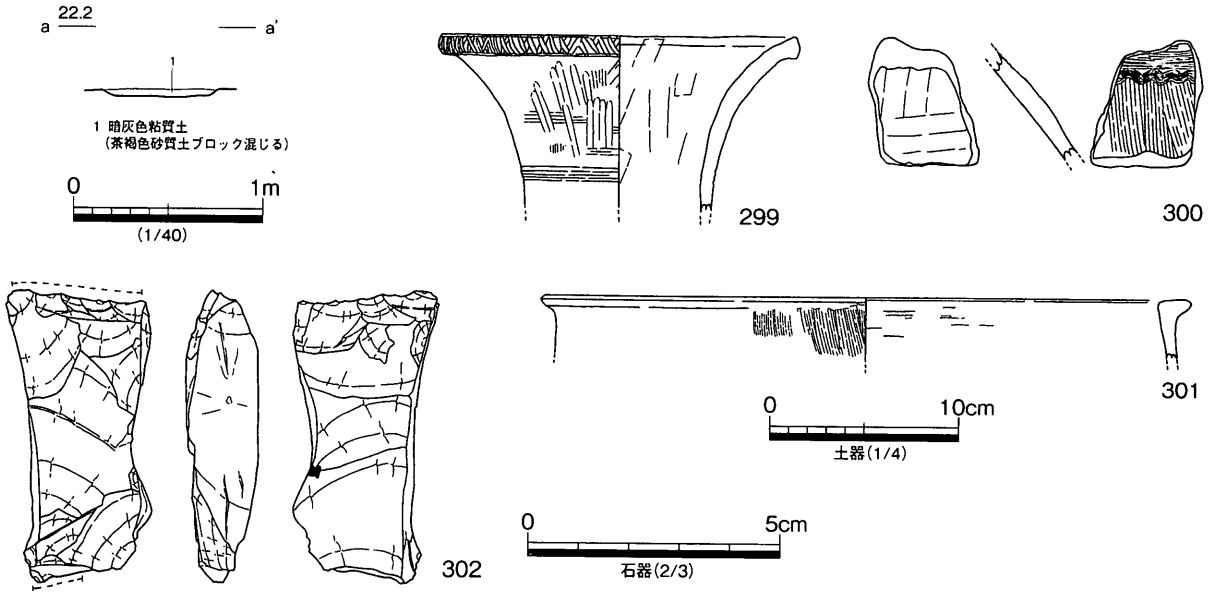


第 122 図　SDb27 断面図、出土遺物

SDb28（第 123 図）

Ⅶ西区中央の第３遺構面上で検出した、北東方向に延びる溝状遺構である。北端部では東へ湾曲し SHb41 に切られる。削平を受けたためか、北半部から南半部にかけて先細り気味に細くなる。周辺は遺構密度も高く、SHb14、SKb69 等に隣接し、SHb27、SBb23 と重複する。

検出長は 20 m、幅は南端部で約 0.3 m、北端部で 0.6 m を測り、主軸は北より 26° 東へ向く。断面は浅い皿状を呈し、深さは約 0.05 m を測る。埋土はブロック土が混じった暗灰色粘質土である。



第 123 図　SDb28 断面図、出土遺物

出土遺物としては、弥生時代中期前半の土器及び石器が出土している。299・300は壺である。299は広口壺の口縁部である。口頸部は「ハ」の字状に開き、口縁端部に刻目、頸部にヘラ描沈線文を施している。301は大型甕の口縁部である。口縁部には断面三角形の突帯を貼り付けている。302はサヌカイト製の楔形石器である。上下両端部にエッジをもち、木口に裁断面が認められる。

SDb29（第39図）

Ⅶ西区SHb30外周で検出した不定形な溝状遺構である。詳細はSHb30と合わせて報告した。

SDb32（第49図）

Ⅶ西区SHb35外周で検出した溝状遺構である。詳細はSHb35と合わせて報告した。

SDb33（第41・42図）

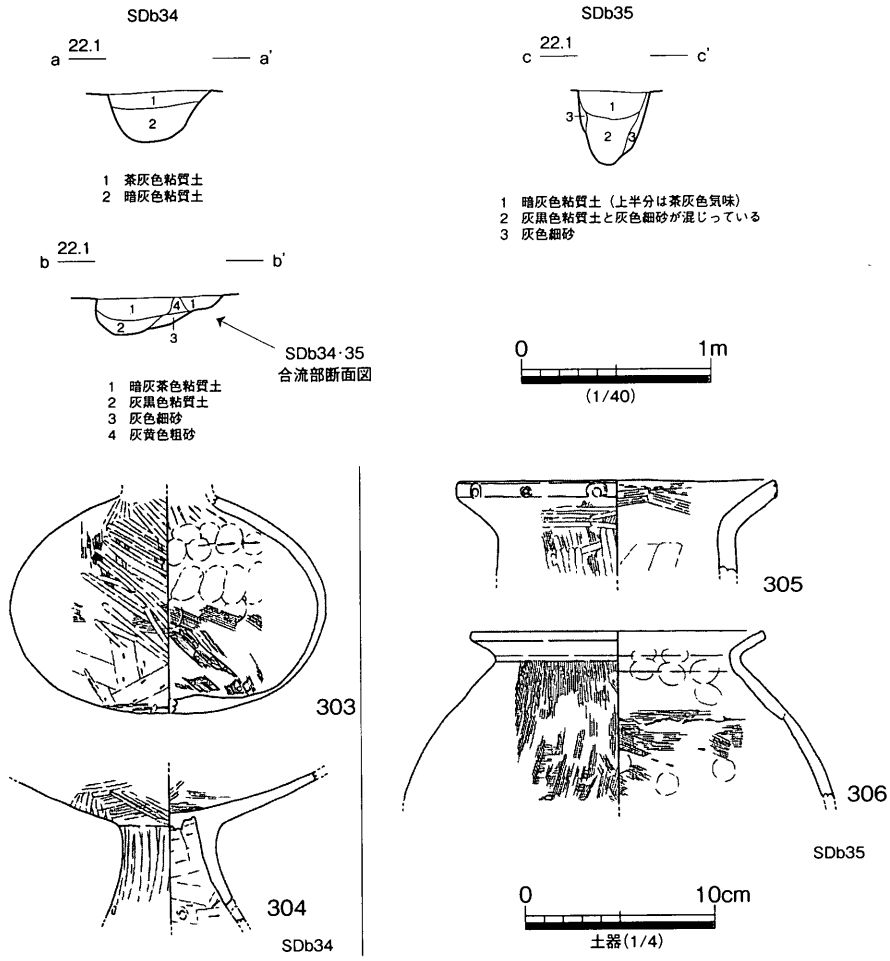
Ⅶ西区SHb31・32外周で検出した不定形な溝状遺構である。詳細はSHb31・32と合わせて報告した。

SDb34（第124図）

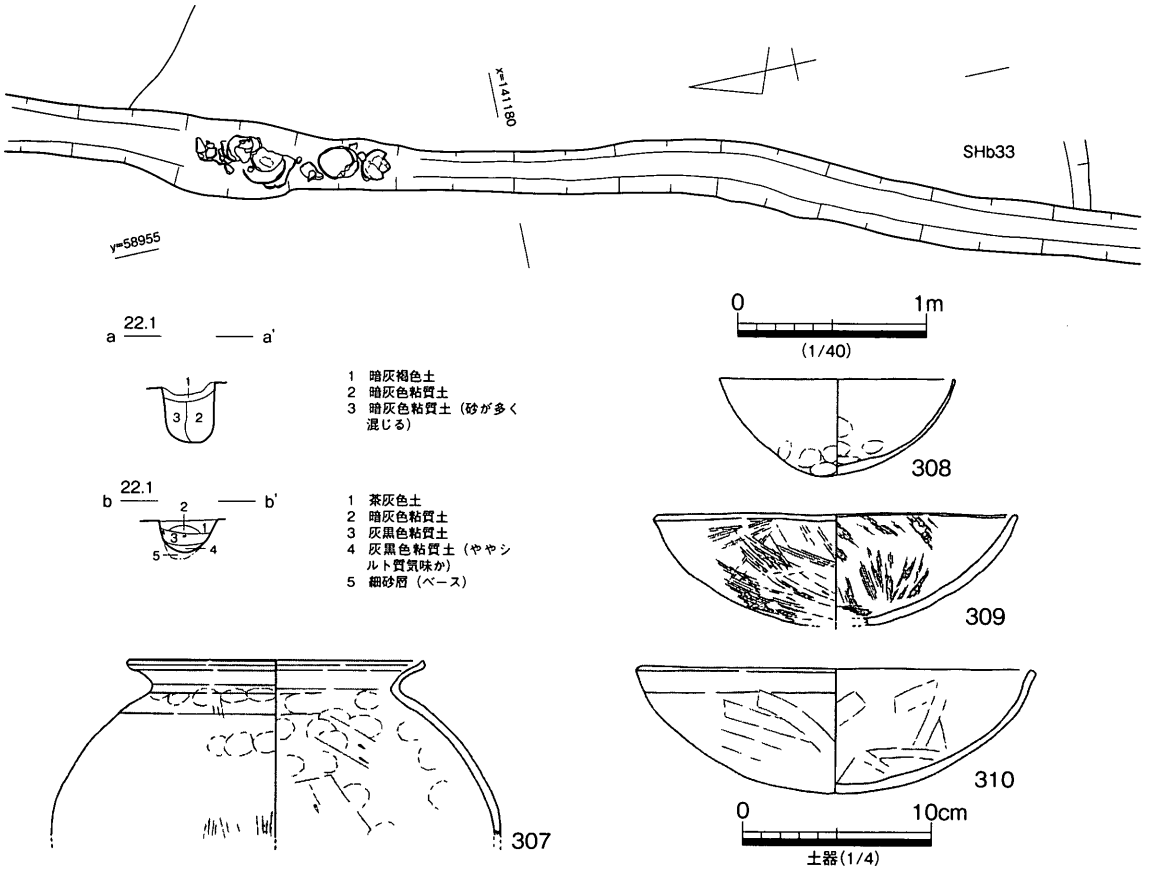
Ⅶ西区北半部の第3遺構面上で検出した、SHb34の住居内から南へ延びる小規模な溝状遺構である。SHb34との切り合いは確認できていないが、本来SHb34の床面に配されている、SDb49・50等と繋がり、その先はSXb20の水溜め状の遺構まで繋がる遺構と考えられ、SHb34とは関連しない可能性が高い。なお、この溝状遺構の中間地点では、SDb35が分岐している。

検出長は3.0 m、幅は約0.6 mを測る。断面はU字状を呈し、深さは約0.25 mを測る。

出土遺物としては、303・304の弥生時代後期中頃の土器が出土している。303は細頸壺の体部である。体部は球体化し、外面上半部にヘラミガキ、下半部にヘラ削りを顕著に施している。304は下川



第124図　SDb34・35断面図、出土遺物



第 125 図　SDb37 断面図、出土遺物

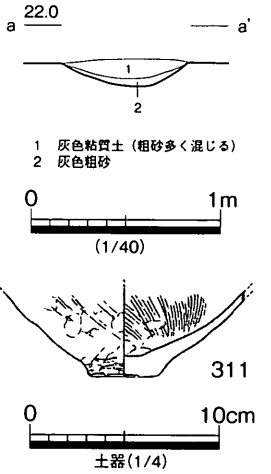
津 B 類に類似する高杯の杯と脚の接合部である。

SDb35（第 124 図）

Ⅶ西区北半部の第 3 遺構面上で検出した、SHb34 の住居内から南へ延びる SDb34 から分岐する、小規模な溝状遺構である。SDb35 は小規模な溝状遺構にもかかわらず、深さがある点が特徴である。

検出長は 1.8 m、幅は約 0.4 m を測る。断面は U 字状を呈し、深さは約 0.4 m を測る。埋土は 3 層に細分できるが、概ね上層は暗灰色粘質土、下層は灰黒色粘質土である。

出土遺物としては、305・306 の弥生時代後期中頃以降の土器が出土した。305 は広口壺の口頸部で、口縁端部に竹管文を施している。306 は甕の上半部で体部がかなり球体化している。



第 126 図　SDb39 断面図、出土遺物

SDb37（第 125 図）

Ⅶ西区北半部の西辺際の第 3 遺構面上で検出した、北東方向に向って直線状に延びる、細くて長い溝状遺構である。南端部は西壁に当たり、調査区外に延びる。南端部より北端部に向けて直線状に進み、途中 SHb31・33、SDb33 等を切り込み、北端部では SXb20 を切る。

検出長は 18.5 m、幅は 0.2 ～ 0.4 m を測り、主軸は北より 19.5° 東へ向く。断面は U 字状を呈し、深さは約 0.3 m を測る。埋土は 4 層に細

分できるが、主体を占めるのは、暗灰色系の粘質土である。

溝状遺構の北端部付近では、弥生時代後期後半の土器（307 ～ 310）がまとまり良く出土した。307 は甕の上半部である。口縁部は「く」の字状に外反し端部は平坦に仕上げている。体部はかなり球体化し器壁は薄い。308 ～ 310 は浅い鉢で、底部は丸底を呈している。

SDb39（第 126 図）

Ⅶ西区北半部の第３遺構面上で検出した、南北方向に延びる幅広で短い溝状遺構である。周辺は遺構密度も高く、この遺構の東側には SDb40、西側には SHb44 が隣接しており、SHb44 の周溝の可能性がある。

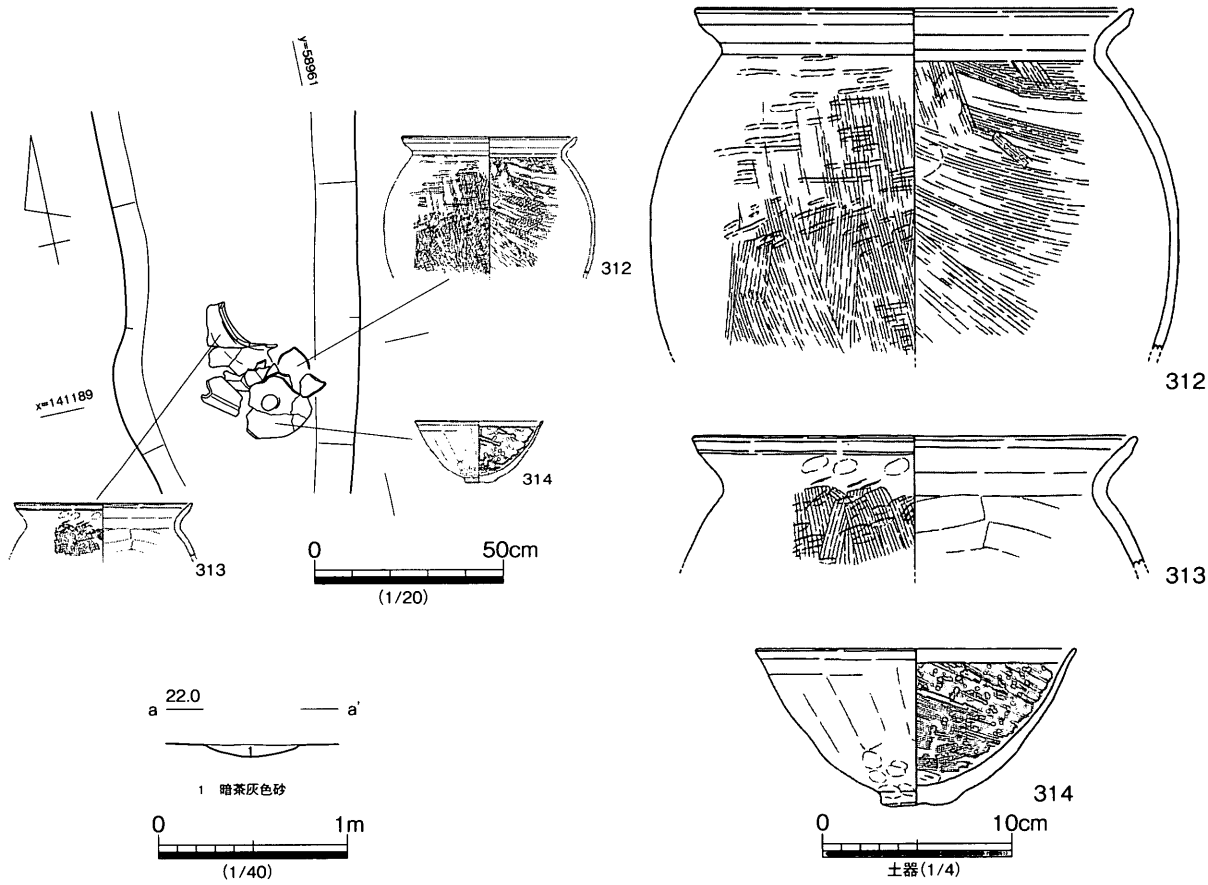
削平を受けたものと考えられ、残りが悪く、検出長は 3.8 m、幅は約 0.7 m を測る。断面は浅い皿状を呈し、深さは約 0.15 m を測る。埋土は２層に分けられ、上層が灰色粘質土、下層が灰色粗砂である。

出土遺物としては、311 の弥生時代後期後半の土器が出土した。311 は口縁部を欠く鉢である。底部は平底を呈し、僅かに突出している。

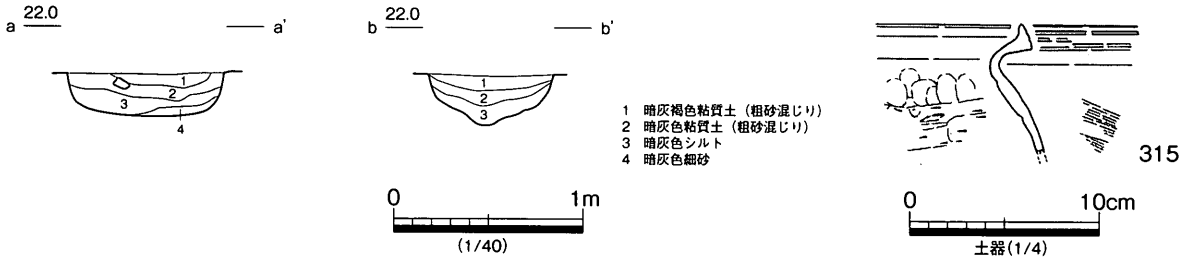
SDb40（第 127 図）

Ⅶ西区北半部の第３遺構面上で検出した、南北方向に延びる幅広で短い溝状遺構である。周辺は遺構密度も高く、この溝状遺構の西側には SDb39 が隣接する。

削平を受けたものと考えられ、残りが悪く、検出長は 3.0 m、幅は約 0.6 m を測る。断面は浅い皿状



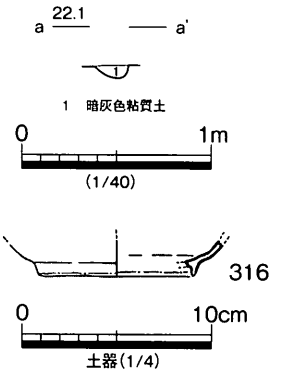
第 127 図　SDb40 断面図、出土遺物



第 128 図　SDb44 断面図、出土遺物

を呈し、深さは約 0.1 mを測る。埋土は暗茶灰色砂の単層である。

溝状遺構のほぼ中央から比較的まとまり良く、弥生時代後期後半の土器（312 ～ 314）が出土した。312・313 は甕の上半部である。口縁部は外反し、端部は僅かに突出気味に仕上げている。体部は球体化の傾向がある。外面にはハケ、タタキ、内面にはハケ、ナデを施している。314 は平底を呈する鉢である。

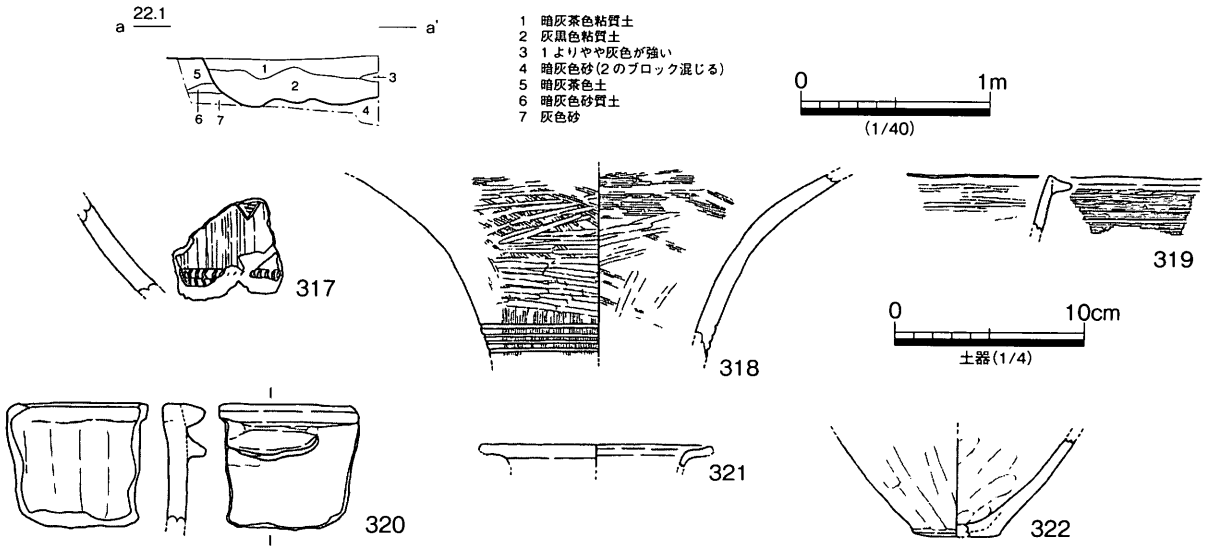


第 129 図　SDb48 断面図、出土遺物

SDb44（第 128 図）

Ⅶ西区北半部の第 3 遺構面上で検出した、東西方向に延びる不整形で短い溝状遺構である。周辺は遺構密度も高く、この溝状遺構は SHb35 と重複している。

削平を受けたものと考えられ、残りが悪く、形状も不整形である。検出長は 3.1 m、幅は 0.4 ～ 0.9 m を測る。断面は場所によって形状が異なり、西側では幅広の U 字状を呈し、東側では底が V 字に近い形状を呈する。深さは約 0.3 mを測り、埋土は 4 層に分けられるが、主体になるのは暗灰色系の粘質土かシルトである。



第 130 図　SDb51 断面図、出土遺物

出土遺物としては、315の弥生時代後期前半の土器が出土した。315は甕の口縁部である。端部は上方に拡張し、退化した凹線文を施している。外面にはハケ、内面にはオサエ及びヘラ削りを施している。

SDb48（第129図）

Ⅶ東中央部の第3遺構面上で検出した南北方向に延びる細い溝状遺構である。

検出長は4.3 m、幅は約0.2 mを測る。断面は浅いU字状を呈し、深さは約0.1 mを測る。埋土は暗灰色粘質土である。

出土遺物としては、316の磁器が出土した。316は磁器皿の高台部で、混入品の可能性が高い。

SDb51（第130図）

Ⅶ西区中央の第3遺構面上で検出した溝状遺構である。西壁際で確認したため、全体の形状は不明瞭な点が多い。周辺は遺構密度も高く、この溝状遺構はSHb33を切り込み、SDb37に切られている。検出状況からこの遺構は、蛇行した流路の最も湾曲した部分に当るものか、あるいは不整形な落ち込み状の遺構の一部と考えられる。

検出長は6 m、幅は0.2 mを測る。断面は幅広のU字状を呈し、深さは約0.25 mを測り、埋土は3層に分けられるが、概ね上層は暗灰茶色粘質土、下層は灰黒色粘質土である。

出土遺物としては、317～322の弥生時代中期中頃ないし後期の土器が出土した。318～320は中期中頃の土器で、317・321・322は後期の土器である。

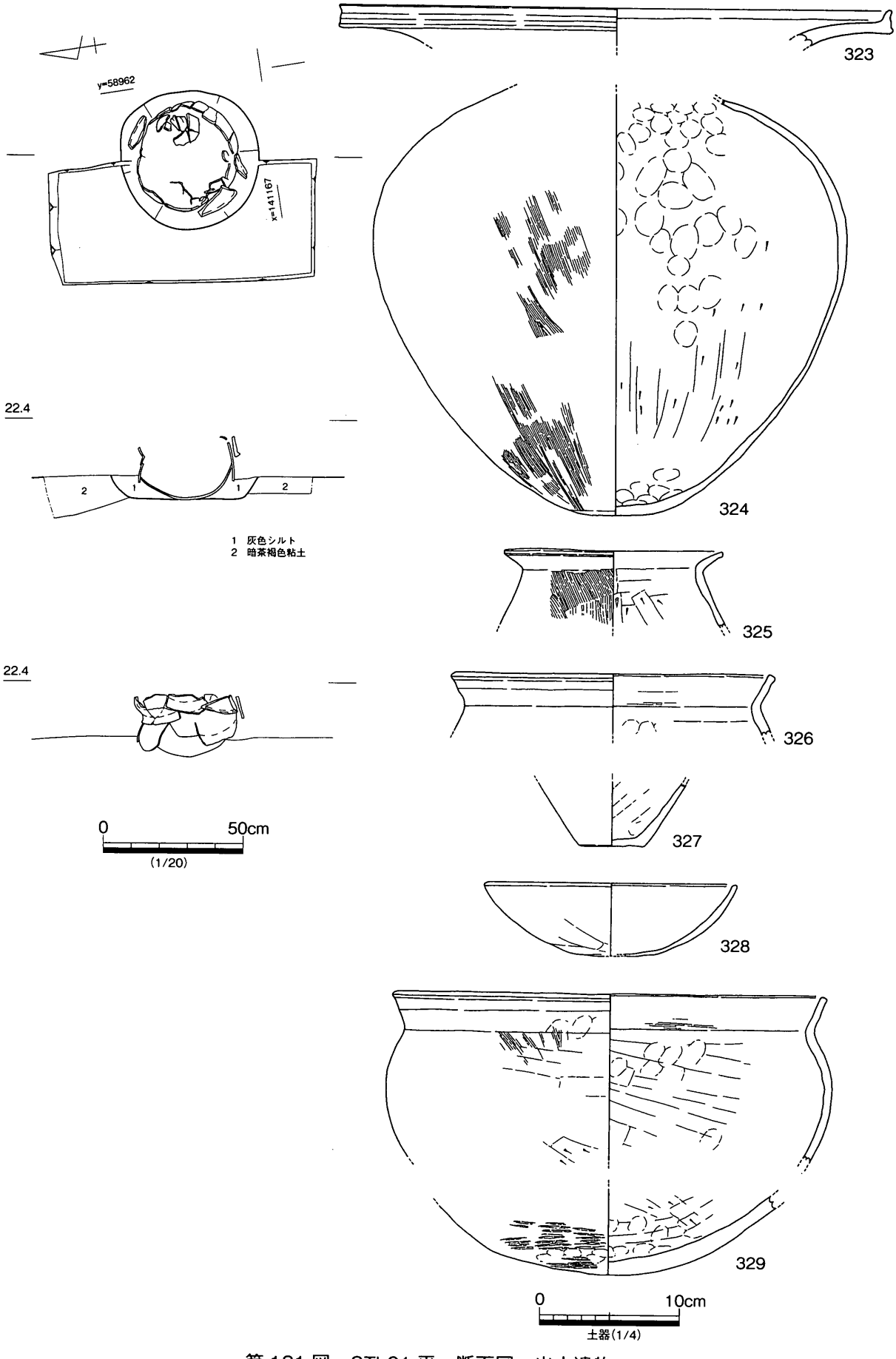
7．土器棺墓

STb01（第131図）

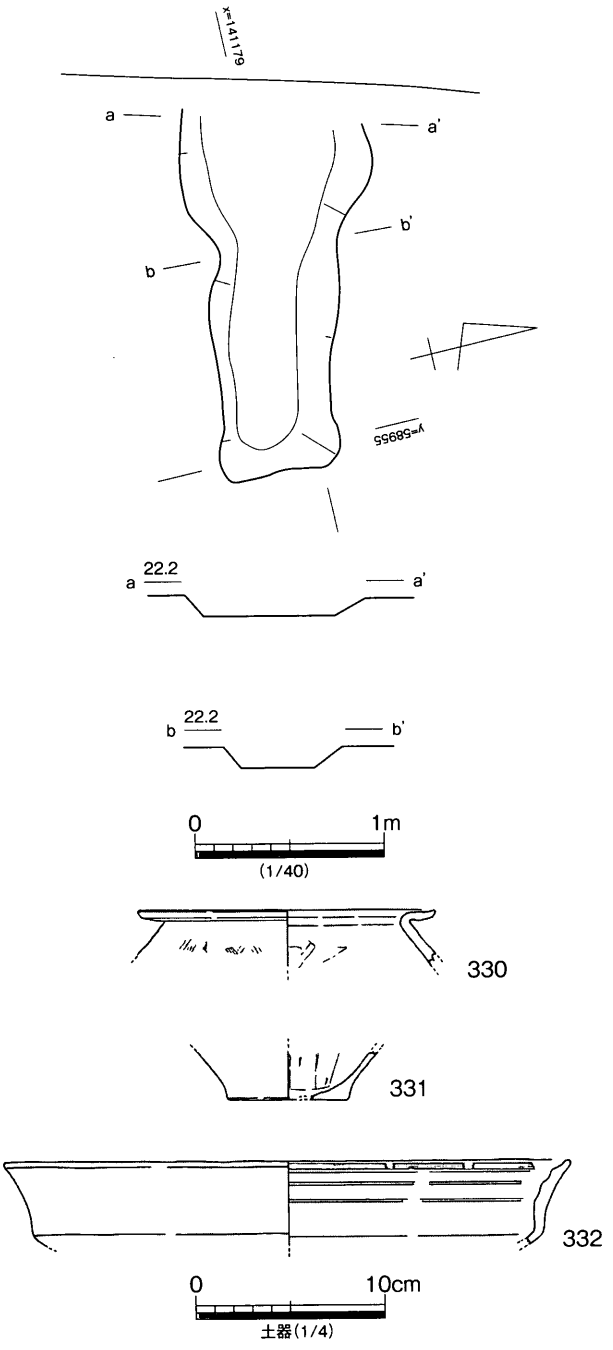
Ⅶ西区南端部の第1遺構面上で検出した土器棺墓である。上半部は削平を受けていて、約2/3以下を残す。

掘り方は土器棺のほぼ中間の高さで検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、断面は浅い隅丸逆台形状を呈する。径約0.5 m、深さ約0.1 mを測る。土器棺を含めた高さは0.22 m以上を測る。埋土は単層で灰色シルトを呈する。土器棺は口縁部と体部の一部を欠いた壺を横位に設置し、その上に大型の鉢で蓋をしている。

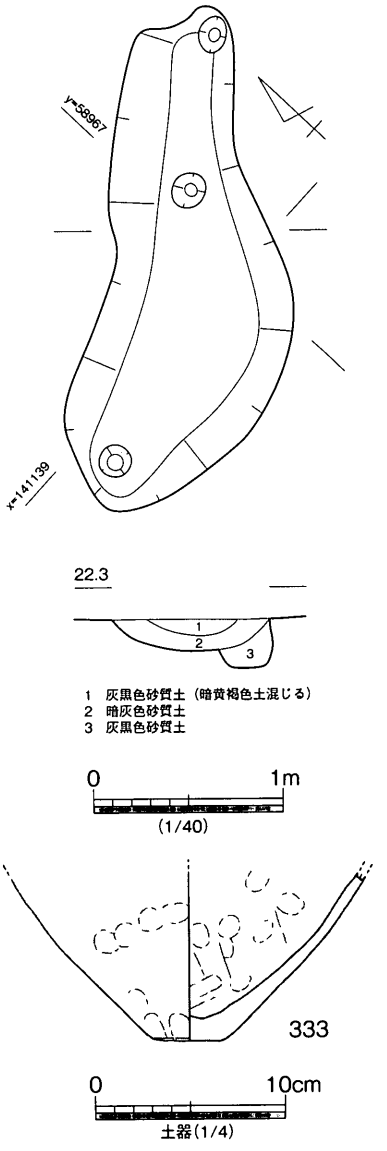
出土遺物としては、弥生時代終末期の土器棺としている壺と鉢、及び土器棺を据付ける際の補強材として、甕・鉢等の破片が出土した。324は口頸部を欠く壺で、土器棺の身に当る。体部は球体気味に丸みをもち、底部は平底を僅かに残す。器壁は薄く、外面調整はハケ、内面調整は上半部にオサエ、下半部にはヘラ削りを施す。329は大型の鉢で、土器棺の蓋にあたる。口縁部は「く」の字状に外反し、端部を平坦に仕上げる。体部は丸みを持ち、底部は丸底を呈する。323・325～328は土器棺を据付ける際の補強材として使われた土器である。



第 131 図　STb01 平・断面図、出土遺物



第 132 図　SXb11 平・断面図、出土遺物



第 133 図　SXb13 平・断面図、出土遺物

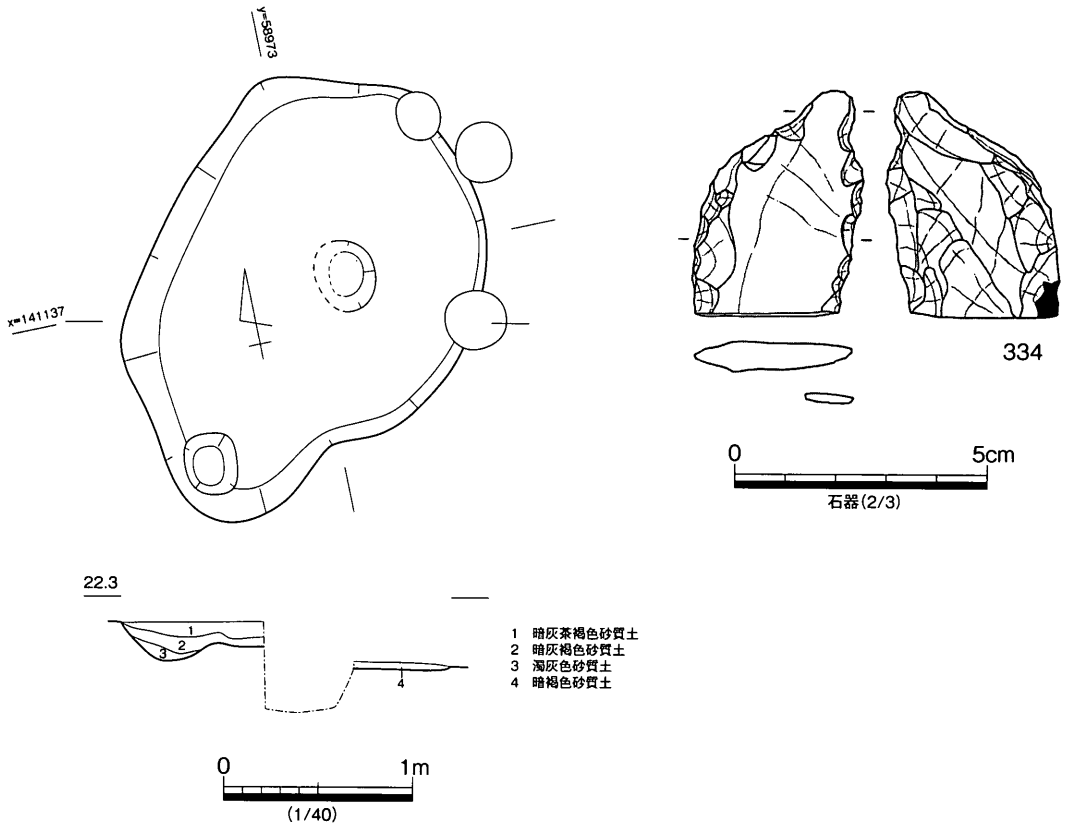
8．不整形遺構

SXb11（第 132 図）

Ⅶ西区中央の第 1 遺構面上の西辺で検出した、不整形な落ち込みである。西半部が調査区より外れているため、全体の形状は不明である。断面は隅丸の逆台形状を呈する。

長径 2.1 m以上、短径 0.6 ～ 0.9 m、深さ 0.1 mを測る。

出土遺物としては、330 ～ 332 の弥生時代後期前半の土器が出土した。330・331 は甕である。332 は高杯の口縁部である。形状、調整手法から見てこの土器は、下川津 B 類に類似する土器である。



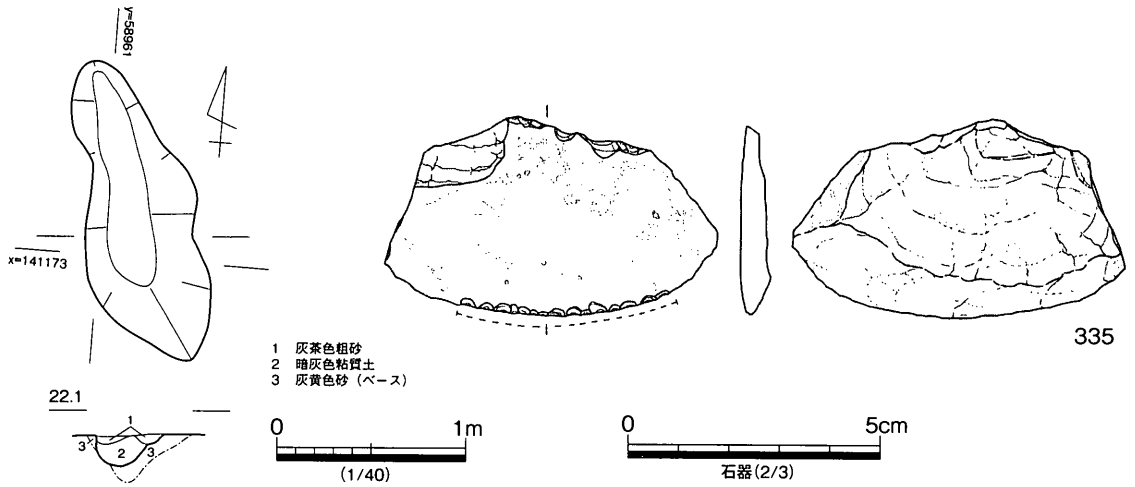
第 134 図　SXb14 平・断面図、出土遺物

SXb13（第 133 図）

Ⅶ西区北端部の第３遺構面上で検出した、不整形な落ち込みである。周辺は遺構密度の高い区域で、この遺構は SHb17 を切り込んでいる。

平面の形状は南半部が膨らんだ楕円形状を呈し、断面は浅い U 字状を呈する。長径は 2.7 m、短径 0.8 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は２層に分れ、上層は灰黒色砂質土、下層は暗灰色砂質土である。

出土遺物としては、333 の弥生時代後期後半の土器が出土した。333 は口縁部を欠く鉢である。



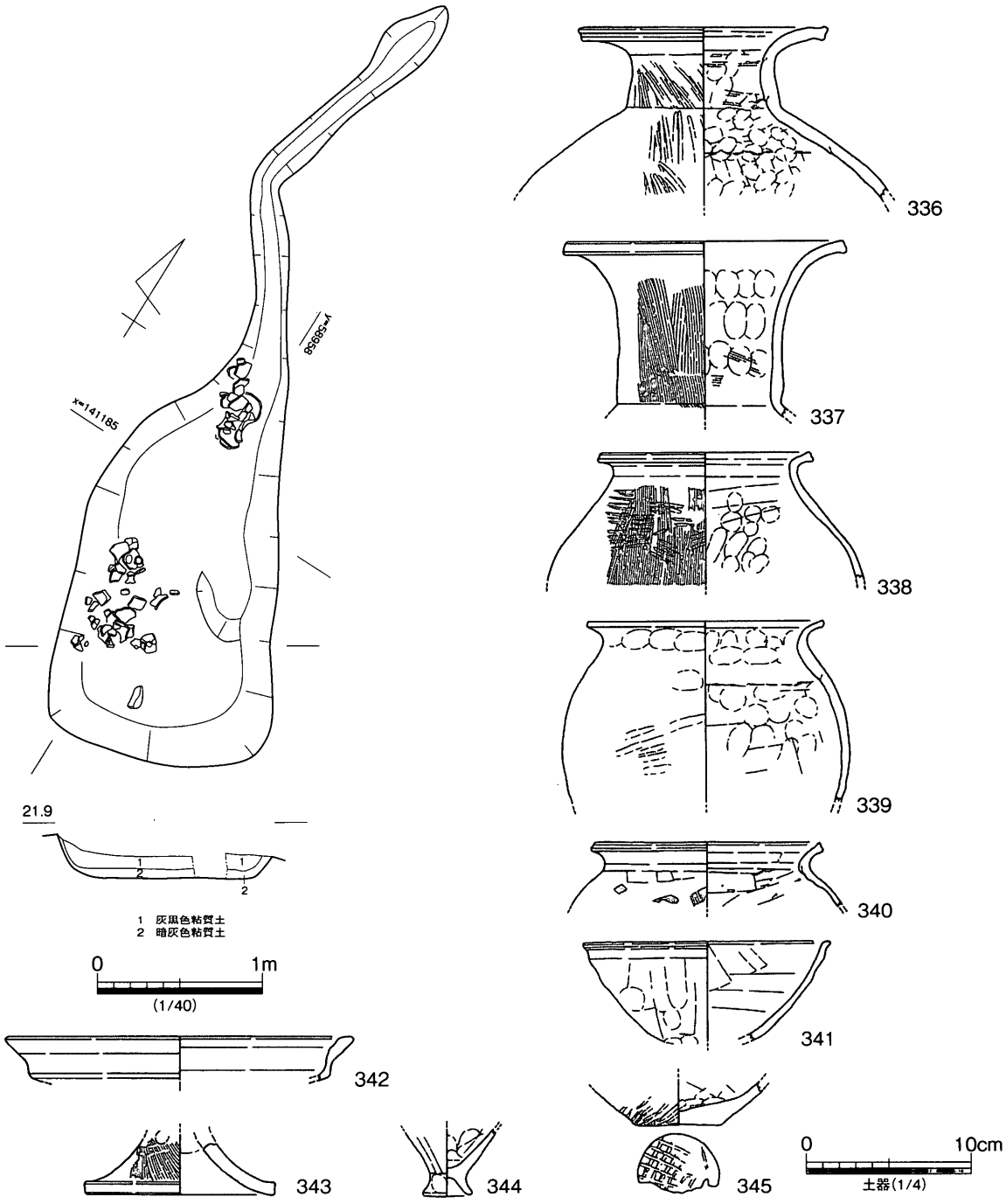
第 135 図　SXb18 平・断面図、出土遺物

SXb14（第 134 図）

Ⅶ東・西区南端部の、境界付近の第３遺構面上で検出した、不整形な落ち込みである。周辺は遺構密度の高い区域で、この遺構は SBb03 を切り込んでいる。

平面の形状は不整形な楕円形状を呈し、底部は起伏があり、平坦ではない。長径は 2.4 m、短径 1.7 m、深さ約 0.2 mを測る。埋土は３層に分れ、概ね上層は暗灰茶褐色砂質土、下層は暗灰褐色砂質土である。

出土遺物としては、334 のサヌカイト製の石器が出土した。334 は先端部を欠くサヌカイト製の石匙である。



第 136 図　SXb20 平・断面図、出土遺物

SXb15（第 34 図）

Ⅶ西区 SHb25 外周で検出した不定形な溝状の落ち込みである。詳細は SHb25 と合わせて報告した。

SXb16（第 36 図）

Ⅶ西区 SHb27 外周で検出した不定形な溝状の落ち込みである。詳細は SHb27 と合わせて報告した。

SXb18（第 135 図）

Ⅶ西区中央の第３遺構面上で検出した、不整形な落ち込みである。周辺は遺構密度の高い区域で、この遺構は SHb32 と重複しているが、位置的な点から SHb32 に伴う可能性もある。

平面の形状は、凹凸のある不整形な楕円形状を呈し、断面は浅い U 字状を呈する。長径は 1.7 m、短径 0.7 m、深さ約 0.15 mを測る。埋土は２層に分れ、上層は灰茶色粗砂、下層は暗灰色粘質土である。

出土遺物としては、335 の安山岩製の石器が出土した。335 は素材面を残した剥片の、片側縁に軽度の調整を加え刃部にしている削器である。

SXb20（第 136 図）

Ⅶ西区北半部の第３遺構面上で検出した、不整形な落ち込みである。周辺は遺構密度の高い区域で、この遺構は SHb34 と SDb37 に切られている。

平面の形状は、北半部は細い溝状を呈し、南半部は不整形な長方形状を呈する。断面は幅広の逆台形状を呈する。検出長は 4.8 m、北半部の幅は約 0.3 m、南半部の幅は約 1.3 m、南半部の深さは約 0.25 mを測る。埋土は２層に分れ、上層は灰黒色粘質土、下層は暗灰色粘質土である。これらの検出状況から、この遺構は北から流れ込む水を溜めた、水溜状の遺構とも考えられる。

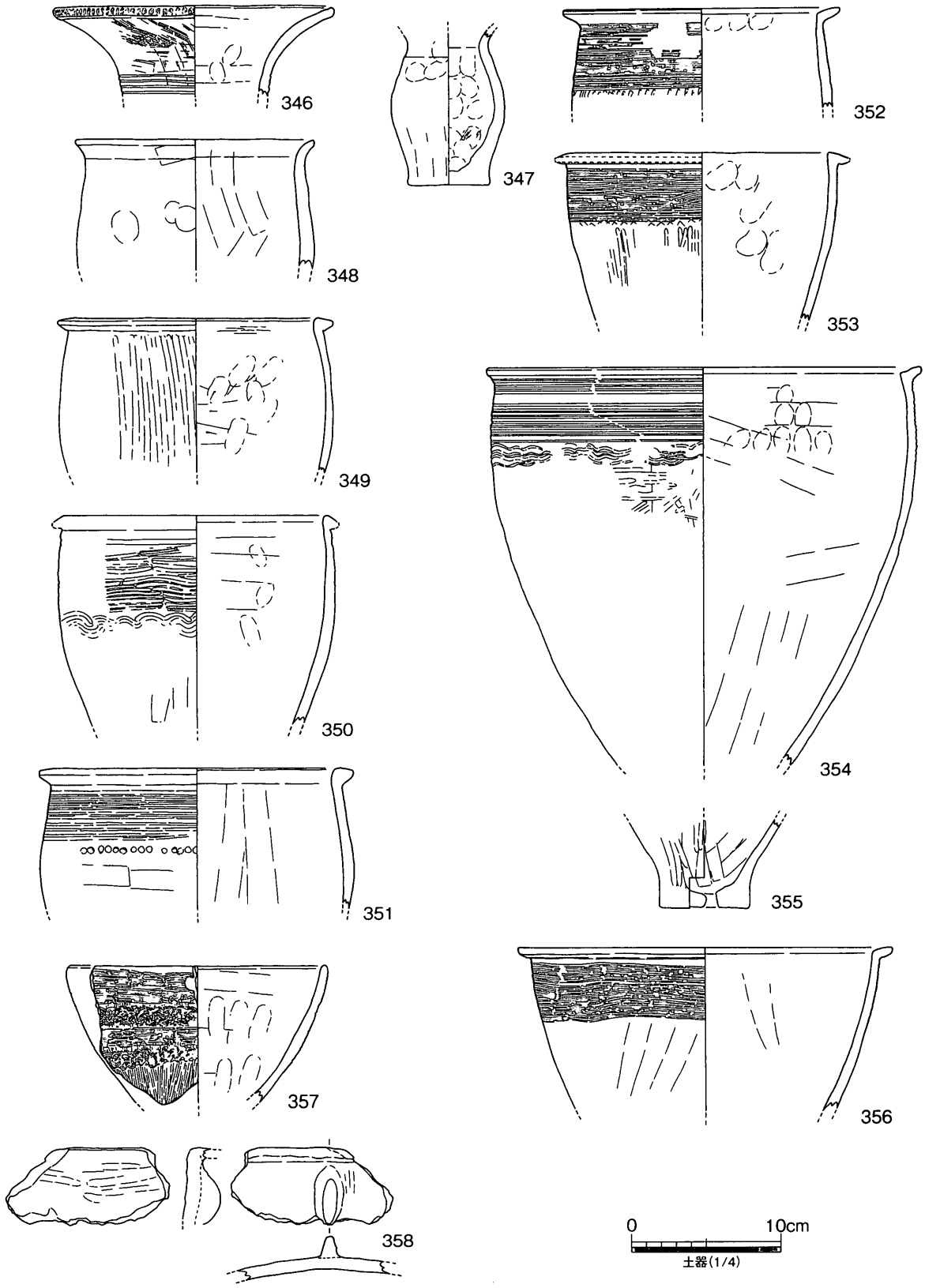
中央部及び南半部から比較的まとまり良く弥生時代後期中頃の土器（336 ～ 345）が出土した。336・337 は壺の上半部である。口縁部は外反し、端部は僅かに突出気味に仕上げている。体部は球体化の傾向がある。338 ～ 340 は甕の上半部である。341 はおそらく平底を呈する鉢である。342 は高杯の口縁部である。344 は製塩土器の下半部である。

9．包含層出土遺物（第 137 ～ 144 図）

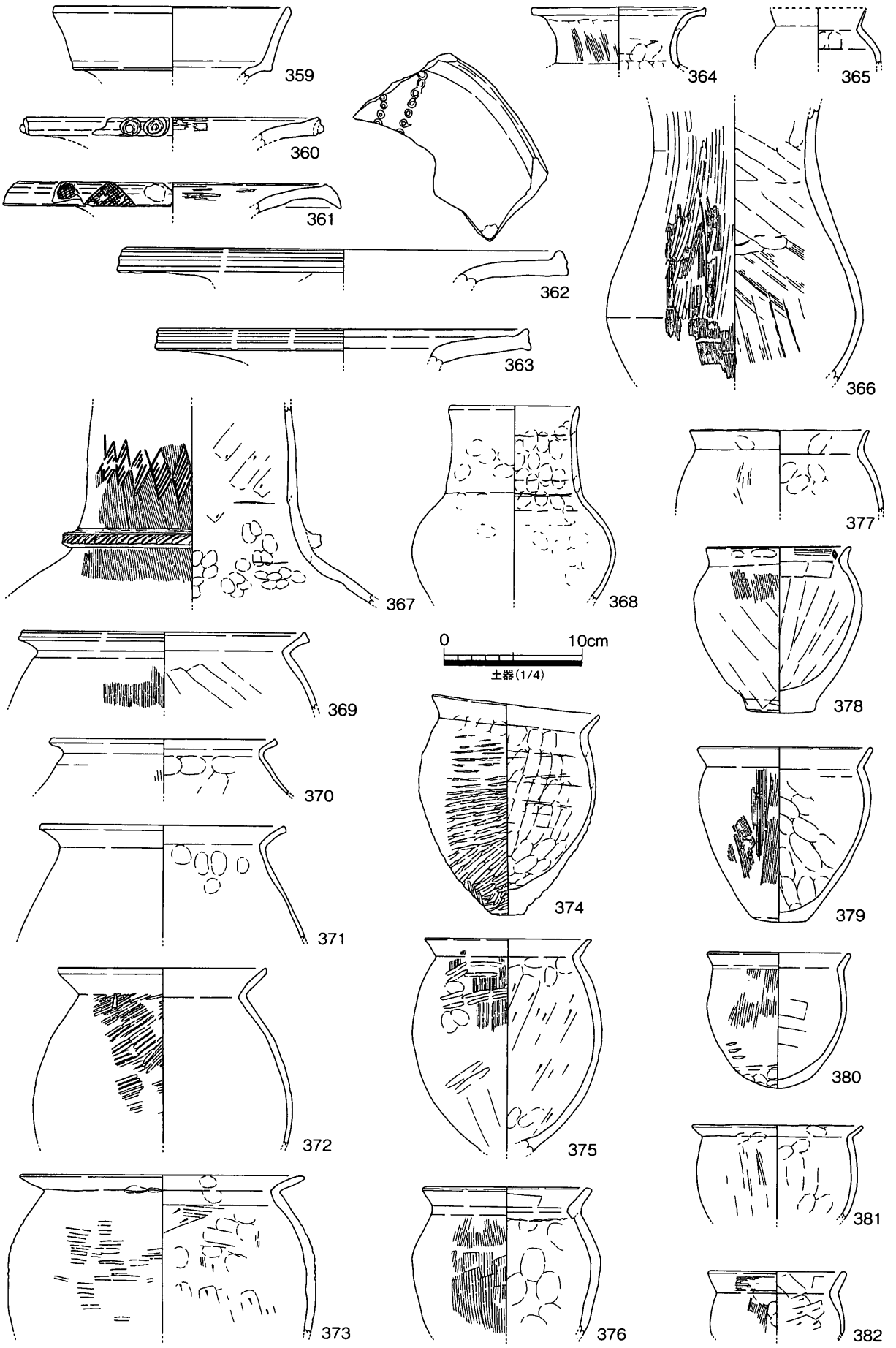
Ⅶ区、東水路③のほぼ全域には、弥生時代前期～終末期の土器を含む、層厚約 0.3 mを測る褐色系の粘質土（第７図７・18・54・56 層等）が広がり、その上面と下面において遺構面を２面確認した。その堆積土中から出土した遺物を報告する。なお、以下の報告資料中には、機械掘削や遺構検出時の遺物も含まれている。

346 ～ 358 は弥生時代中期前半の土器である。346・347 は壺である。346 は広口壺の口頸部である。「ハ」の字状に開き端部は平坦に仕上げ、ヘラ状工具により刻目を施す。頸部には３条のヘラ描直線文を施している。348 ～ 354・356 は甕である。349 ～ 354・356 は口縁部に突帯を貼付ける瀬戸内型甕で、349 を除き、口縁部下に複帯構成の櫛描直線文、その下段に櫛描波状文や刺突文を施している。355 は甑の底部である。

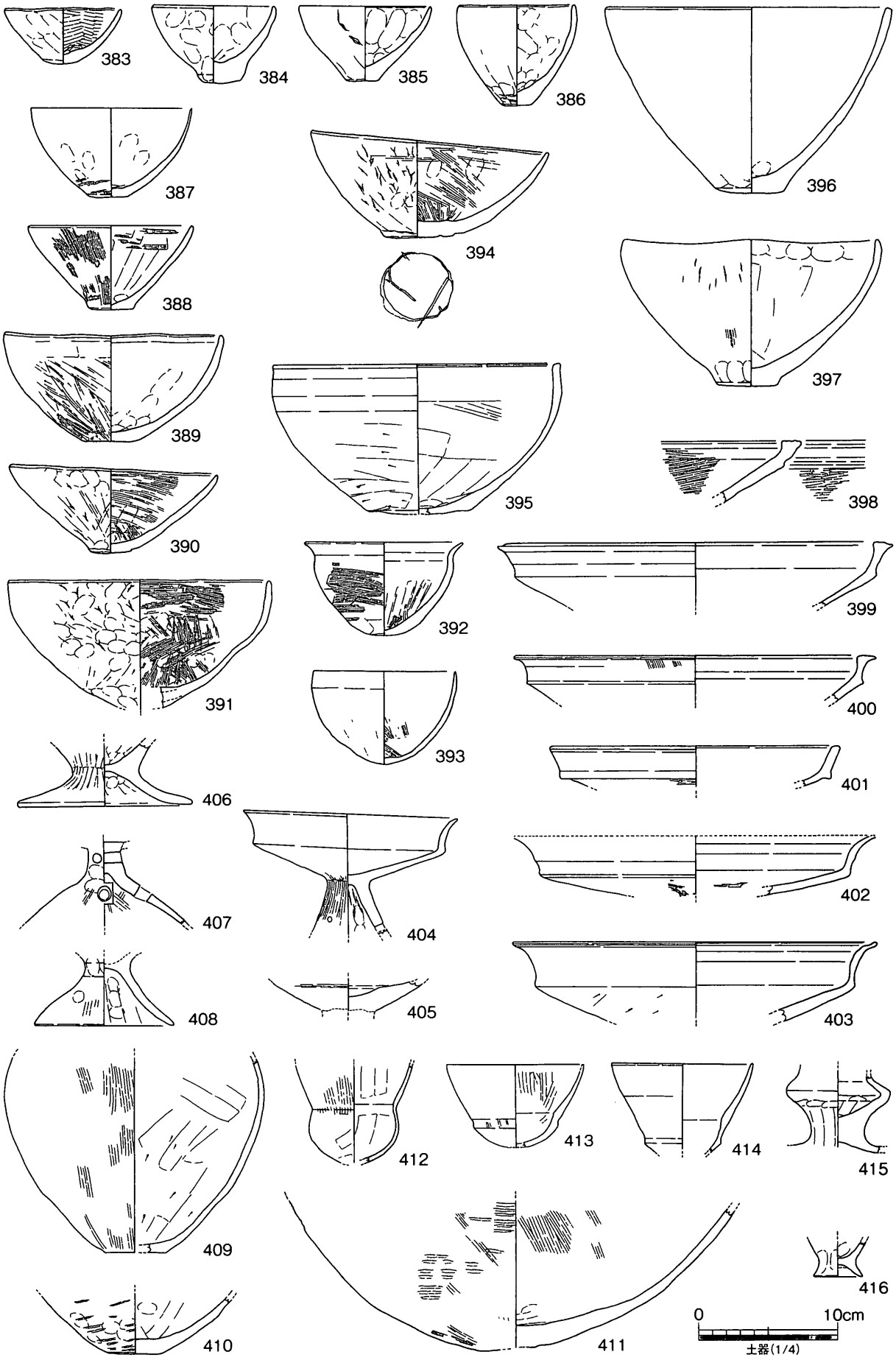
359 ～ 365･367 ～ 416 は弥生時代後期前半～終末の土器である。359 ～ 365･367･409 ～ 411 は壺である。



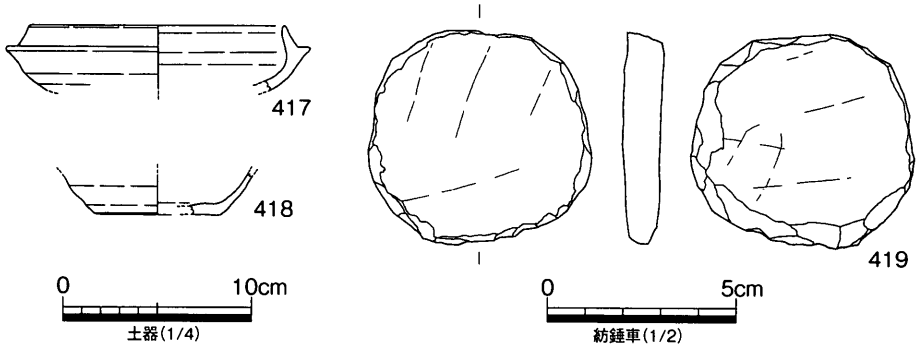
第137図　包含層出土遺物（1）



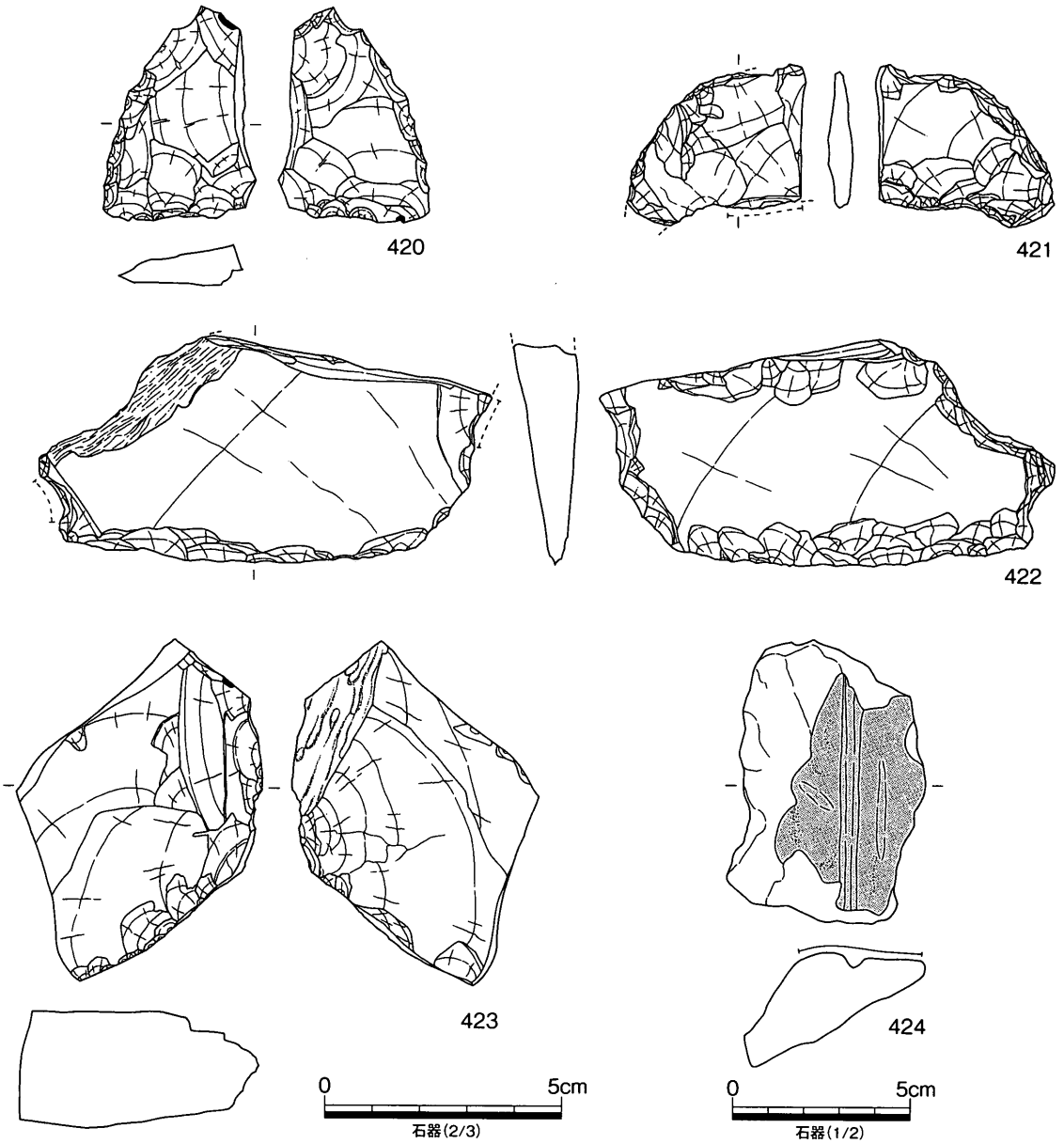
第138図　包含層出土遺物（2）



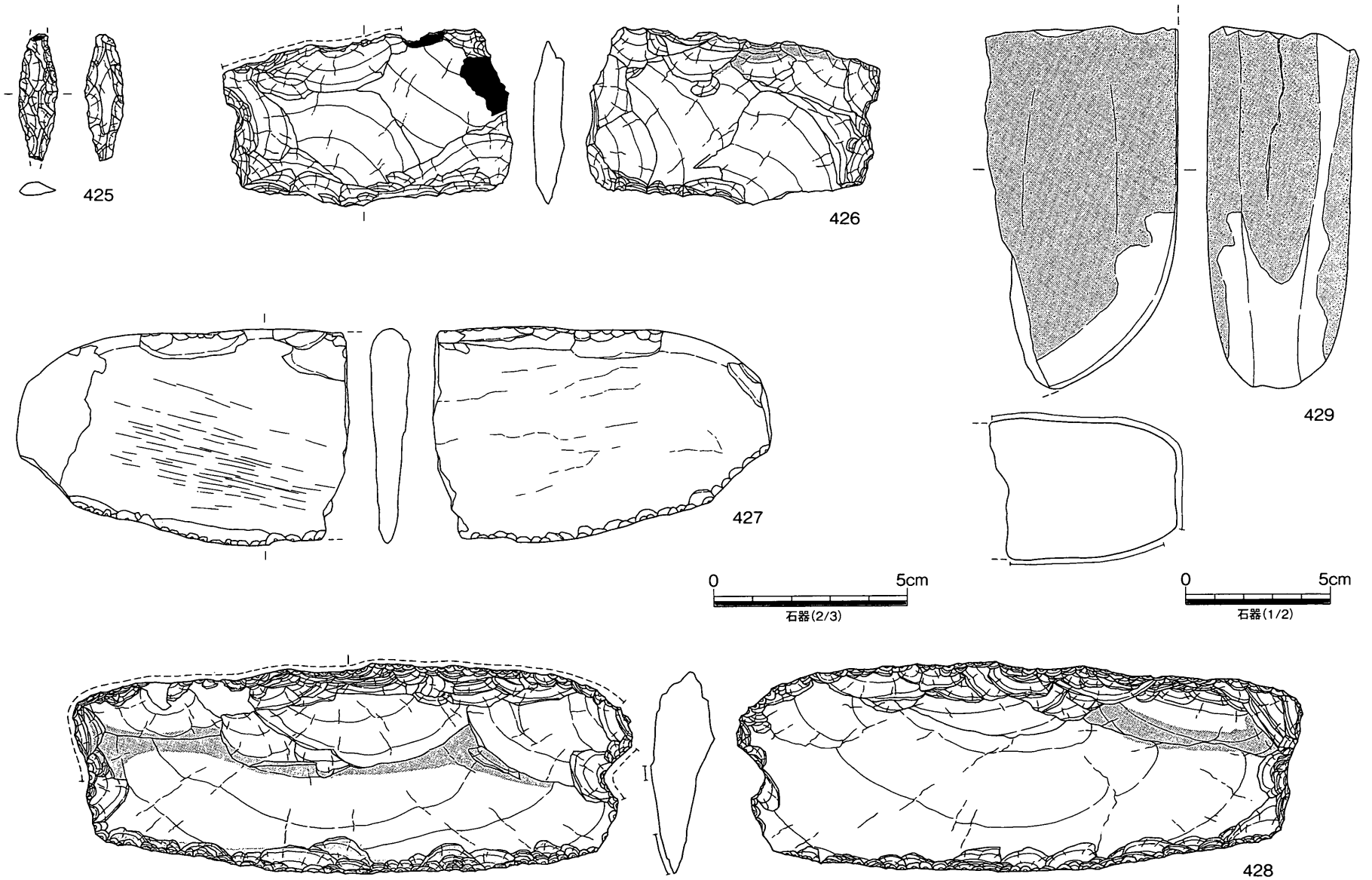
第139図　包含層出土遺物（3）



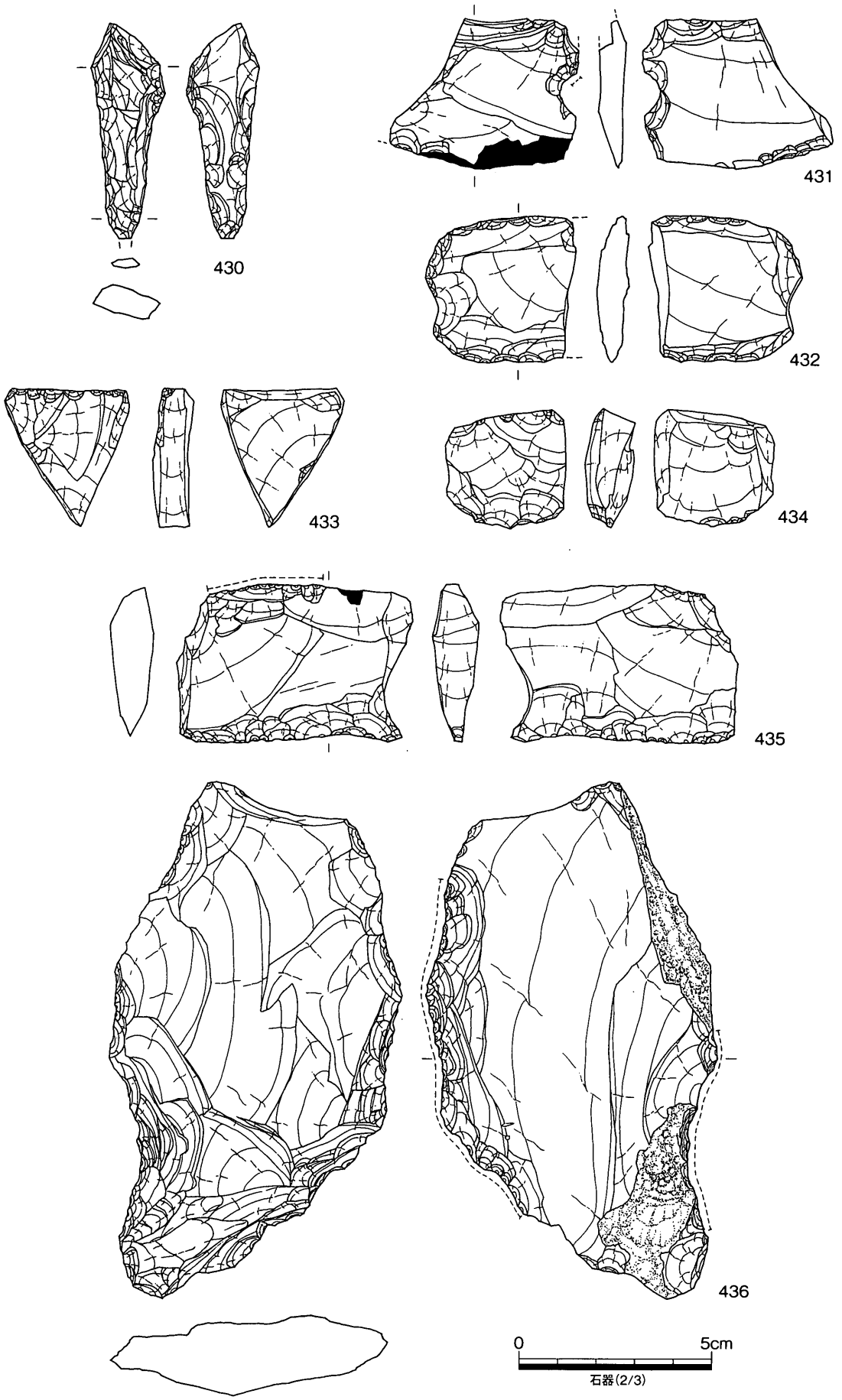
第 140 図　包含層出土遺物（4）



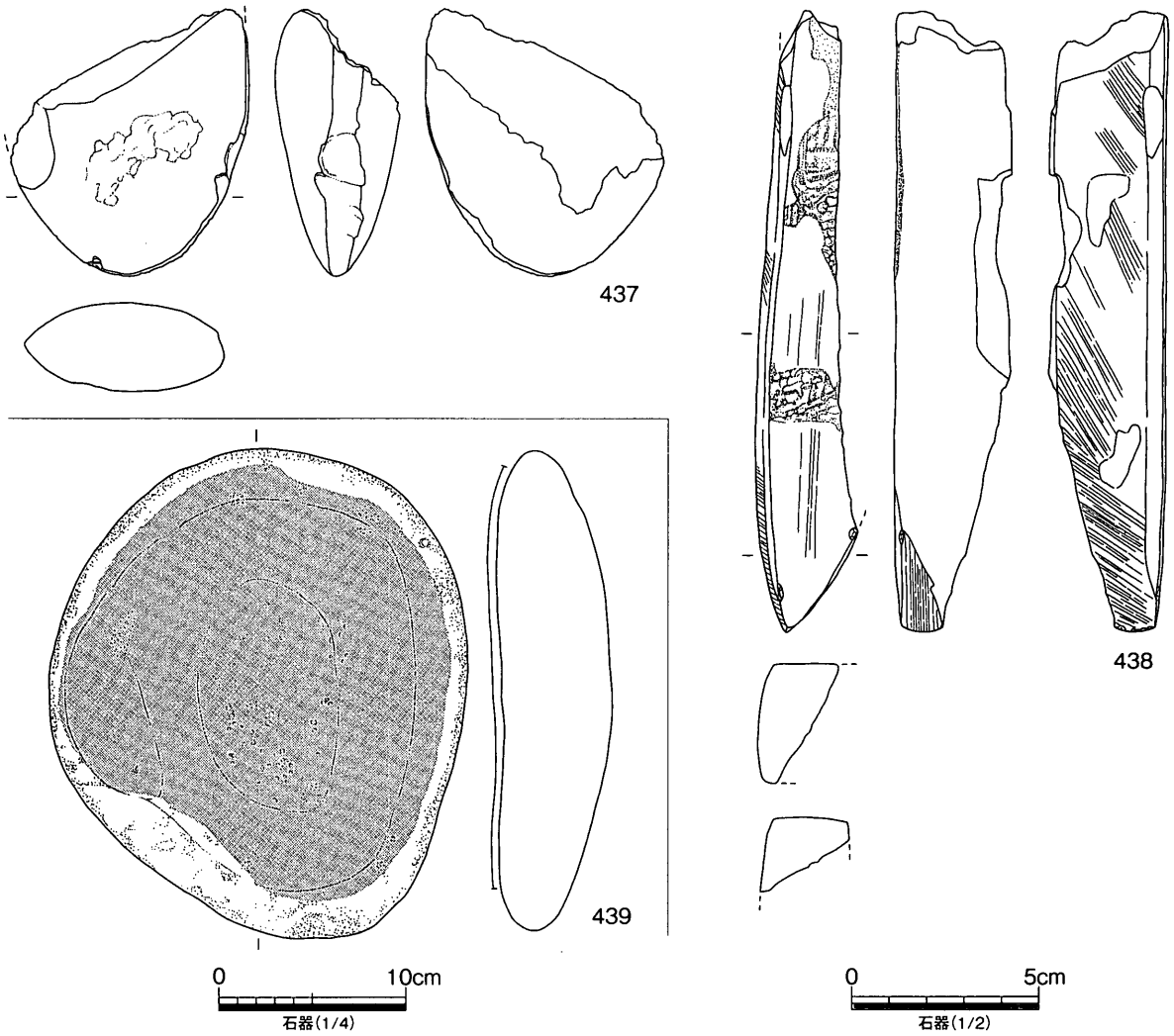
第 141 図　包含層出土遺物（5）



第142図　包含層出土遺物（6）



第 143 図　包含層出土遺物（7）



第 144 図　包含層出土遺物（8）

359 は終末期の二重口縁の壺である。360 は口縁端部に円形浮文を付した壺で、おそらく外来系の土器であろう。361 は口縁端部に、ヘラ状工具により鋸歯文を施す。362・363 は後期前半の長頸壺の口縁部である。362 は端部を拡張し、数条の凹線文を施している。また、内面には２条の直線状に施した竹管文が認められる。363 は端部を拡張し、２条の細い凹線文を施している。365 は終末期の小型壺である。367 は長頸壺の頸部で、体部との境に刻目を施した突帯を付し、頸部に菱形文を施す。369 ～ 382 は甕である。形状、調整等で数タイプに分かれる。369 の口縁部は「く」の字状に外反し、端部を平坦に仕上げ、その後に幅広の凹線文を施している。370 はその形状、調整等から下川津Ｂ類に類似する甕と考えられる。372・373 の体部は球体気味に膨らみ、終末期の様相を示している。383 ～ 397 は鉢である。形状、調整等で数タイプに分かれる。398 ～ 405 は高杯の上半部である。398 ～ 400 は後期初頭の高杯杯部である。口縁部は屈曲し短く外反させ端部を拡張している。401 ～ 404 は後期中頃の高杯杯部である。412 ～ 414 は終末期の小型丸底壺である。416 は終末期の製塩土器の脚台部である。外面にはオサエの痕跡が顕著に残る。

417・418 は須恵器の杯である。この遺跡からは須恵器の出土が少ないため貴重な資料である。417 は６世紀後半の杯身、418 は 10 ～ 11 世紀頃の杯の底部である。419 は土製紡錘車の未製品である。

420 ～ 439 は包含層出土の石器類である。420 はサヌカイト製の打製石鏃の未製品である。片側縁を除き整形作業が進行している。421 はサヌカイト製の打製石小刀である。422・426・428・431・432 はサヌカイト製の打製石庖丁である。428 はサヌカイト製で完形の打製石庖丁である。石庖丁は再利用しているためか、完形品が少なく希少な資料である。427 は安山岩製の磨製石庖丁である。約半分が残存している。425･430 はサヌカイト製で棒状の石錐である。433 ～ 435 はサヌカイト製の楔形石器である。側縁部に裁断面が認められる。437 は緑色岩製の太型蛤刃石斧の刃部片である。叩き石に転用したものか、敲打痕が顕著である。438 は結晶片岩製の柱状片刃石斧である。線状痕及び敲打痕が顕著に認められる。436 は大型の剥片を素材とした石器の未製品と考えられるが、器種を特定できないので、二次加工ある剥片に含めた。423 はサヌカイト製の石核としたが、形状から打製石斧等の破損品の可能性もある。424・439 は砥石に分類した。424 は砂岩製の砥石で、金属器を研いだためか、砥面には細い 1 条の溝が認められる。

参考文献

大久保徹也　1990　「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団

第Ⅴ章　Ⅸ区の調査成果

第１節　Ⅸ区の調査概要

Ⅸ区は調査面積850㎡を測る調査区である。Ⅸ区は先述したように（第Ⅲ章　第１節　地理的概要）、微高地の南西辺の低湿地部に当る。この地区の東隣には、平成19年度に整理作業を行ったⅠ・Ⅲ区が位置しており、同地区から続く小規模な自然河川跡と、大型の溝状遺構等を検出した。また、この地区は、先のⅠ・Ⅲ区同様に、微高地上からの廃棄遺物と考えられる大量の弥生土器、土師器、木製品等が出土した。

調査区の全域には、弥生時代中期～後期後半頃の土器を含む堆積層（第148図西壁10～28層）が広がる。微高地上から続く第１遺構面については、Ⅲ区の西半部及びⅨ区においては、地形が西に向かって傾斜し、後世の削平を受けたため検出できなかった。その削平面より下位において遺構面を３面確認した。

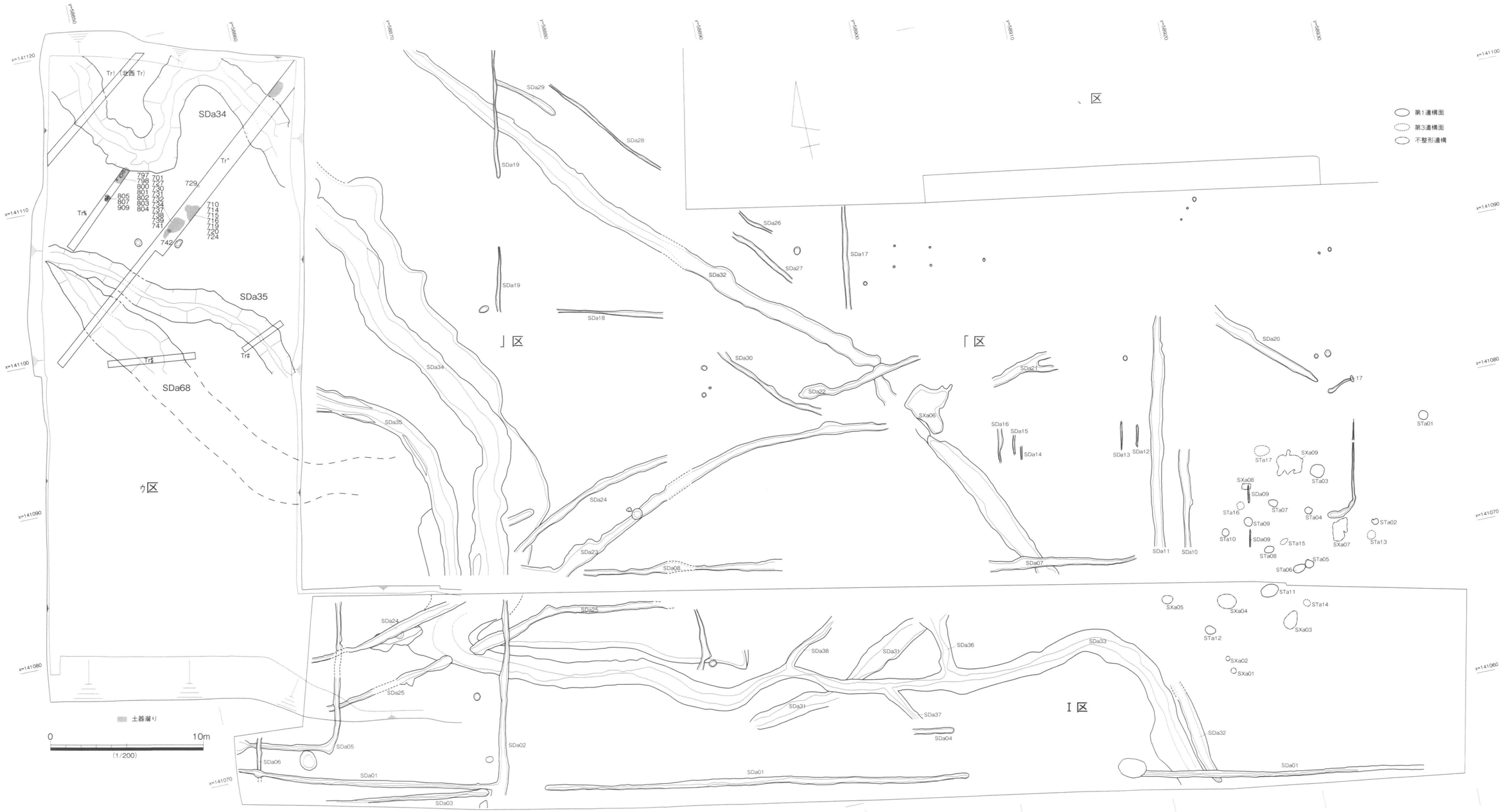
上位は、Ⅰ・Ⅲ区から続く「第２遺構面」に相当し、古墳時代前期以降の溝状遺構２条を検出した。中位は、１条の溝状遺構を検出した。これを「第２遺構面下層」とする。下位は、Ⅰ・Ⅲ区から続く「第３遺構面」に相当し、弥生時代後期後半～終末期の溝状遺構４条、自然河川跡２条を検出した。

Ⅸ区で検出した溝状遺構や自然河川跡は、北西－南東方向へ延びており、結果的に微高地上の集落の南西縁辺を画している。

先述したように、この地域には微高地上からの廃棄遺物と考えられる多量の弥生時代中期～古墳時代前期前半の土器、石器類、木製品等が出土している。平成19年度に報告したⅠ・Ⅲ区で430箱、Ⅸ区からは280箱出土しており、本遺跡全体の出土遺物の約45％を占めている。

Ⅲ・Ⅸ区では、第３遺構面上の溝状遺構や自然河川跡が、ある程度埋まった段階で土器、石器類等が大量に廃棄されている状態を確認できた。廃棄された土器や石器類の分布を平面的に分ければ、Ａ～Ｊ群に分けられる。Ⅸ区ではＤ～Ｊ群を検出した。中でもＥ群の出土量と、出土した土器の残りの良さは注目できる。廃棄された土器は残りの良いものが多く、弥生時代後期後半の土器が主体を占めている。この時期の三木町周辺の弥生土器の地域性を検討する上で、多様なデータを提供してくれる貴重な資料になった。

なお、「第Ⅰ章　第３節　整理作業の経過」でも触れたが、Ⅸ区の出土遺物量は、現状の整理体制では単年度で処理できる数量ではないため、Ⅸ区の整理作業を２ヵ年に分けて行うことになり、Ⅸ区で検出した自然河川跡（SRa02）の遺物を平成21年度以降に報告することにした。



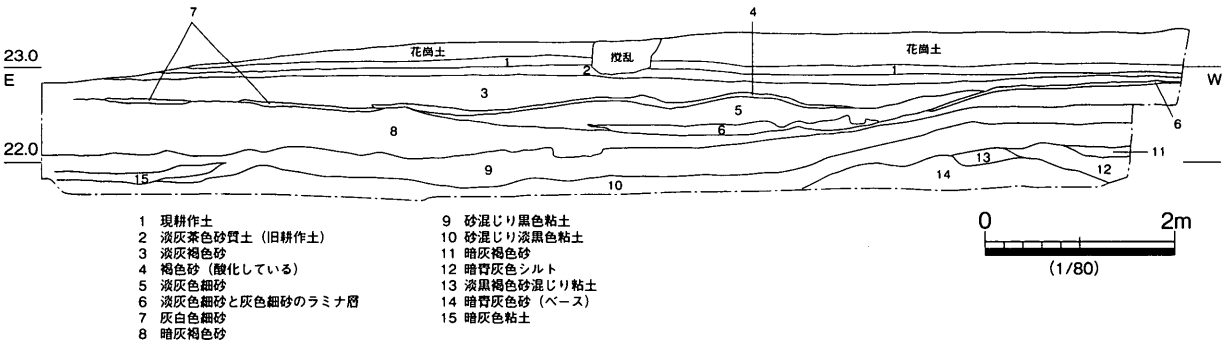
第145図　ウ区・周辺調査区 第1・2遺構面遺構分布図

第 146 図　Ⅸ区第３遺構面平面図

第２節　Ⅸ区の基本層位

Ⅸ区の旧地盤はＴＰ．平均22.5ｍを測り、旧状は全面農地であった。Ⅸ区全域には弥生時代中期～後期後半頃の土器を含む河川堆積層と考えられる、褐色系の粘質土～シルト（第148図西壁10層）や灰色系の砂（第148図西壁11層）等からなる複数の堆積層が、約0.5ｍの層厚でⅨ区のほぼ全域に堆積していた。その堆積層中を含めて、３面の遺構面を検出した。上位の「第２遺構面」は、西壁10層上面に広がっており、ＴＰ．平均22.6ｍを測り、古墳時代前期前半以降の遺構を検出した。中位の「第２遺構面下層」は、西壁18層上面に広がっており、ＴＰ．平均22.4ｍを測る。下位の「第３遺構面」は、ＴＰ．平均22.1ｍを測り、弥生時代後期後半頃の遺構を検出した。この調査区で検出した遺構の大部分はこの遺構面上で検出した。

Ⅸ区の南半部には、Ⅰ・Ⅲ区から続く約0.1～1.0ｍの淡灰褐色系の粗砂等（第147図３～８層）が堆積している。堆積砂はラミナ状の堆積も確認できることから、短期間に堆積したことは間違いなく、この堆積砂により低湿地部は、現地盤の高さ近くまで埋まっている。なお、この堆積砂は、Ⅸ区第１遺構面上のSDa34・35、Ⅰ区SDa23・24・32・33・36～38等を最終的に埋めた埋土になっている。これらの遺構からは、時期を示す良好な遺物が乏しいため、堆積時期を決めるのは困難であるが、一時期、微高地南西辺の低湿地を埋める大規模な洪水が、この遺跡におよんだことは確かである。



第147図　Ⅸ区南壁土層図

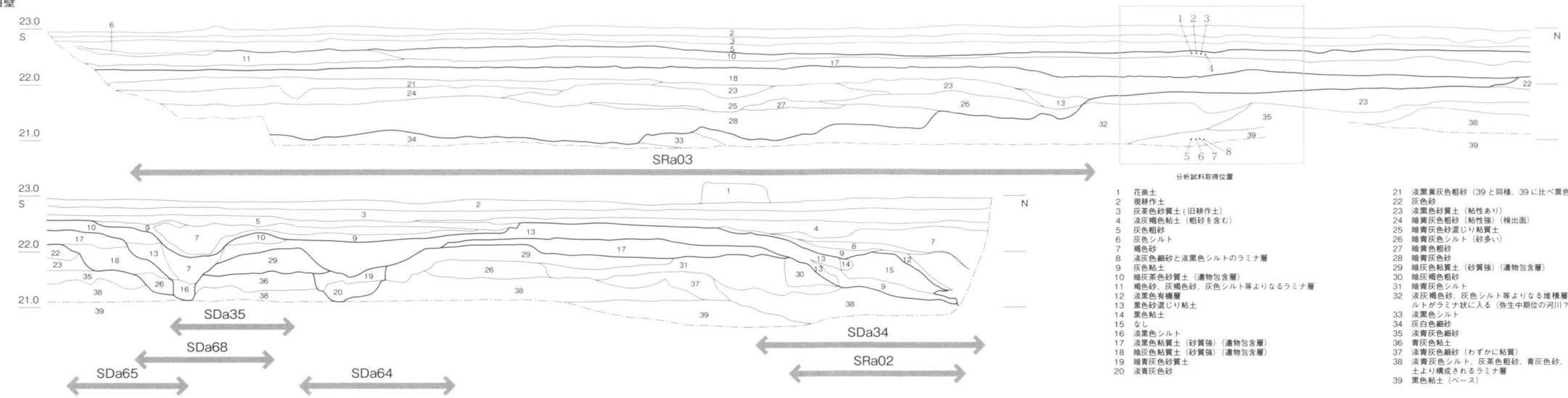
第３節　Ⅸ区の遺構・遺物

１．溝状遺構

SDa34（第148～151図）

Ⅲ・Ⅸ区の第２遺構面上で検出した、Ⅰ区のSDa33から続く溝状遺構である。Ⅰ区のSDa33は、ほぼ東西方向に流れ、Ⅰ区西端部のⅢ区との境界付近で北に大きく屈曲し、Ⅲ区へ延びる。Ⅲ区の南端部ではSDa34とSDa35に分岐し、西へ反り気味に北方向に流れ、Ⅸ区の北端部へ続く。Ⅸ区では「S」字状に蛇行し、調査区の北西端部より調査区外へ延びる。蛇行するⅨ区の区間では流れが激しかったのか、Ⅰ区のSDa33やⅢ区のSDa34の形状に比べると幅も広く、深さも深く、掘り方をオーバーハング

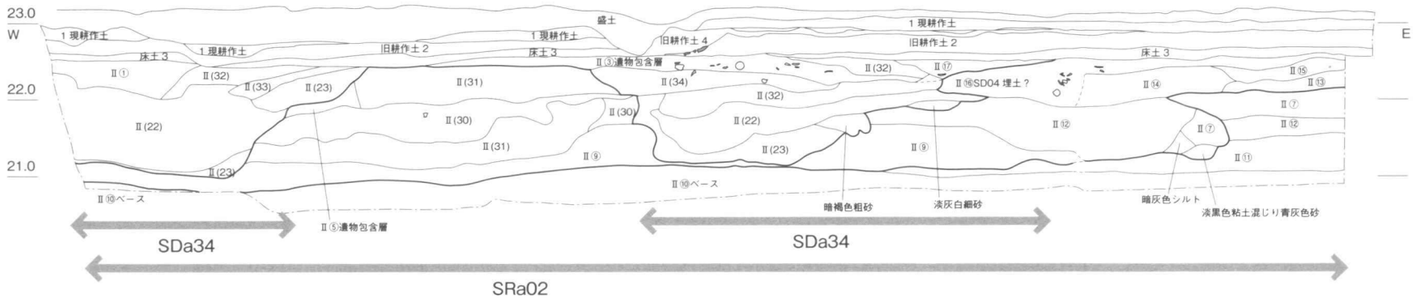
西壁



分析試料取得位置

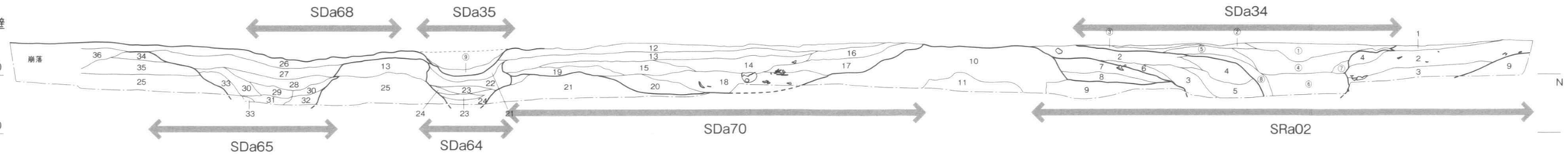
1　花崗土
2　現耕作土
3　灰茶色砂質土（旧耕作土）
4　淡灰褐色粘土（粗砂を含む）
5　灰色粗砂
6　灰色シルト
7　褐色砂
8　淡灰色細砂と淡黒色シルトのラミナ層
9　灰色粘土
10　暗灰茶色砂質土（遺物包含層）
11　褐色砂、灰褐色砂、灰色シルト等よりなるラミナ層
12　淡黒色有機層
13　黒色砂混じり粘土
14　黒色粘土
15　なし
16　淡黒色シルト
17　淡黒色粘質土（砂質強）（遺物包含層）
18　暗灰色粘質土（砂質強）（遺物包含層）
19　暗青灰色砂質土
20　淡青灰色砂
21　淡黒黄灰色粗砂（39と同様、39に比べ黒色粘土強）
22　灰色砂
23　淡黒色砂質土（粘性あり）
24　暗黄灰色粗砂（粘性強）（検出面）
25　暗青灰色砂混じり粘質土
26　暗青灰色シルト（砂多い）
27　暗黄色粗砂
28　暗青灰色砂
29　暗灰色粘質土（砂質強）（遺物包含層）
30　暗灰褐色粗砂
31　暗青灰色シルト
32　淡灰褐色砂、灰色シルト等よりなる堆積層、灰色シルトがラミナ状に入る（弥生中期位の河川？）
33　淡黒色シルト
34　灰白色細砂
35　淡青灰色細砂
36　青灰色粘土
37　淡青灰色細砂（わずかに粘質）
38　淡青灰色シルト、灰茶色粗砂、青灰色砂、淡黒色粘土より構成されるラミナ層
39　黒色粘土（ベース）

北壁



1	現耕作土
旧耕作土２	淡灰茶色砂質土
床土３	淡茶灰色砂質土
旧耕作土４	淡灰色砂質土
Ⅱ①	淡灰褐色粘土（粗砂を含む）
Ⅱ③遺物包含層	暗灰茶色砂質土
Ⅱ⑤遺物包含層	暗灰色粘質土（砂質強）
Ⅱ⑦	淡黒色砂質土（粘性あり）
Ⅱ⑨	淡青灰色シルト、灰茶色粗砂、青灰色砂、淡黒色粘土より構成されるラミナ層
Ⅱ⑩ベース	黒色粘土
Ⅱ⑪	淡青灰色細砂（わずかに粘質）
Ⅱ⑫	暗青灰色砂
Ⅱ⑬	暗青灰褐色シルト
Ⅱ⑭	淡灰茶色砂
Ⅱ⑮	灰茶褐色砂
Ⅱ⑯SD04 埋土？	淡黒褐色粘質土（遺物を多量に含む）
Ⅱ⑰	淡灰褐色粘土
Ⅱ(22)	褐色砂
Ⅱ(23)	黒色砂混じり粘土
Ⅱ(30)	淡青灰色砂質土
Ⅱ(31)	暗褐色砂
Ⅱ(32)	灰褐色粗砂
Ⅱ(33)	暗灰色シルト
Ⅱ(34)	淡灰茶色砂混じり粘土
Ⅱ(22)の下	暗褐色粗砂
Ⅱ(22)の下	淡灰白細砂
Ⅱ⑪の上	暗灰色シルト
Ⅱ⑪の上	淡黒色粘土混じり青灰色砂

Tr②西壁



①　淡灰茶色粗砂
②　淡灰茶色細砂
③　灰色シルト混じり細砂
④　淡灰茶色砂
⑤　暗灰茶色細砂
⑥　灰茶色砂
⑦　灰茶色砂
⑧　淡黒色シルト混じり細砂
⑨　茶褐色粗砂
1　灰茶色粘土
2　黒褐色粘土
3　黒色シルト
4　灰褐色砂
5　暗青灰色砂
6　淡黒色砂混じり粘土
7　暗灰色砂混じり粘土
8　暗灰色砂質土
9　灰色砂質土
10　暗灰茶色砂
11　灰褐色粗砂
12　茶褐色シルト
13　暗灰茶色シルト
14　淡黒色粘土
15　黒色粘土
16　粗砂混じり黒色粘土
17　粗砂混じり淡黒色粘土
18　粗砂混じり淡黒色粘土
19　淡黒色砂質土
20　暗灰色砂質土
21　灰色粘土
22　淡黒色粘土
23　灰色粗砂
24　暗灰色シルト
25　灰色砂質土
26　細砂混じり灰色シルト
27　砂混じり黒色粘土
28　黒色粘土
29　暗黒色粘土
30　砂混じり淡黒色粘土
31　砂混じり淡黒色粘土
32　砂混じり黒色粘土
33　砂混じり黒色粘土
34　砂混じり砂混じり粘土
35　淡黒色粘土
36　砂混じり黒色粘土

0　2m
(1/80)

第148図　Ⅸ区西・北壁・Ｔｒ②西壁土層図

気味に切り込んでいる箇所も認められる。なお、この溝状遺構は、下位の第3遺構面上のSRa02と同一方向に流れており、SRa02の埋土を大きく切り込んでいる。

Ⅲ区まで含めた検出長は45.5 m以上、幅約2.0～3.2 m、深さは地点によりかなり差があり、Ⅲ区では約0.9 mを測るが、蛇行しているⅨ区の北西端部では約1.4 mを測り、同位置の下位に所在するSRa02の底のレベルに近い。断面は全体的には不整形な逆台形状を呈するが、先にも述べたが、Ⅲ区の北端部やⅨ区では、急激な流れにより掘り方をオーバーハング気味に切り込んでいる箇所も認められる。埋土は5層以上に分かれるが、堆積状況から比較的短期に堆積したものと考えられる。第148図Tr②西壁①～④層は、淡灰褐色系の粗砂が主となる。この堆積砂はかなり広範に堆積しており、この溝状遺構と一連の遺構であるSDa33・35等の埋土にもなっている。また、Ⅰ・Ⅲ区の境界付近では、この堆積層はSDa34・35等を覆い隠すように、広範囲に厚く堆積している。

出土遺物としては、弥生時代中期、後期前半、後期後半～終末期の土器と、サヌカイト製の石器類及び木製品等が出土しているが、これらの遺物の中には、同位置の下位に所在するSRa02の遺物を掻き上げたものが混入している可能性がある。特に最下層出土の遺物はSRa02の底のレベルに近く、SRa02の下層の遺物の可能性が高い。また、最下層からは土器溜りJ群を検出しているが、これらの遺物も同様に、SRa02の下層の遺物が混入している可能性がある。

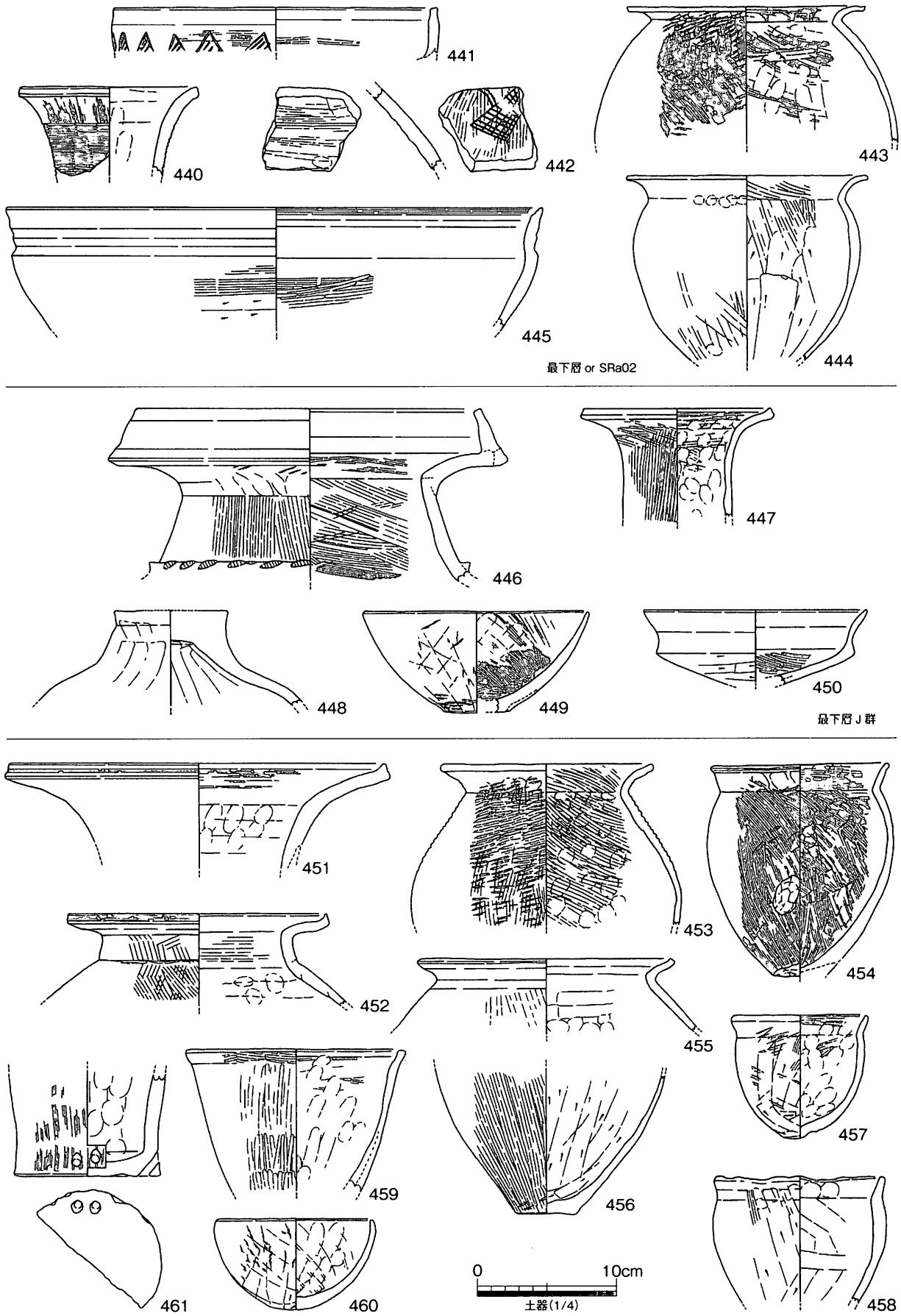
440～445はSRa02の可能性が最も高い土器である。440は中期前半の壺口頸部である。外面には櫛描文を顕著に施している。441は後期後半頃の二重口縁壺の口縁部である。外面には鋸歯文を施している。442は細片のため詳細には解らないが、壺の体部片と考えられる。外面にはヘラ状工具により線刻が認められる。443・444は終末期の甕である。443の口縁部は外上方に折り曲げ、端部は平坦である。体部は球体化しており、外面にはタタキとハケを施している。445は大型の鉢である。口縁部は屈曲し内面に綾線が形成される。

446～450は最下層のJ群から出土した土器である。446は大型の二重口縁壺の口頸部である。口縁部は内傾し、端部を平坦に仕上げている。頸部と体部の境には断面三角形の突帯を付し、突帯の頂部にはハケ状工具による刺突文を施している。447は後期前半の広口壺の口頸部である。450は下川津B類に類似する高杯の杯部である。口縁部は屈曲し、端部は尖り気味に仕上げている。杯部の底部外面にはヘラ削りを顕著に施している。

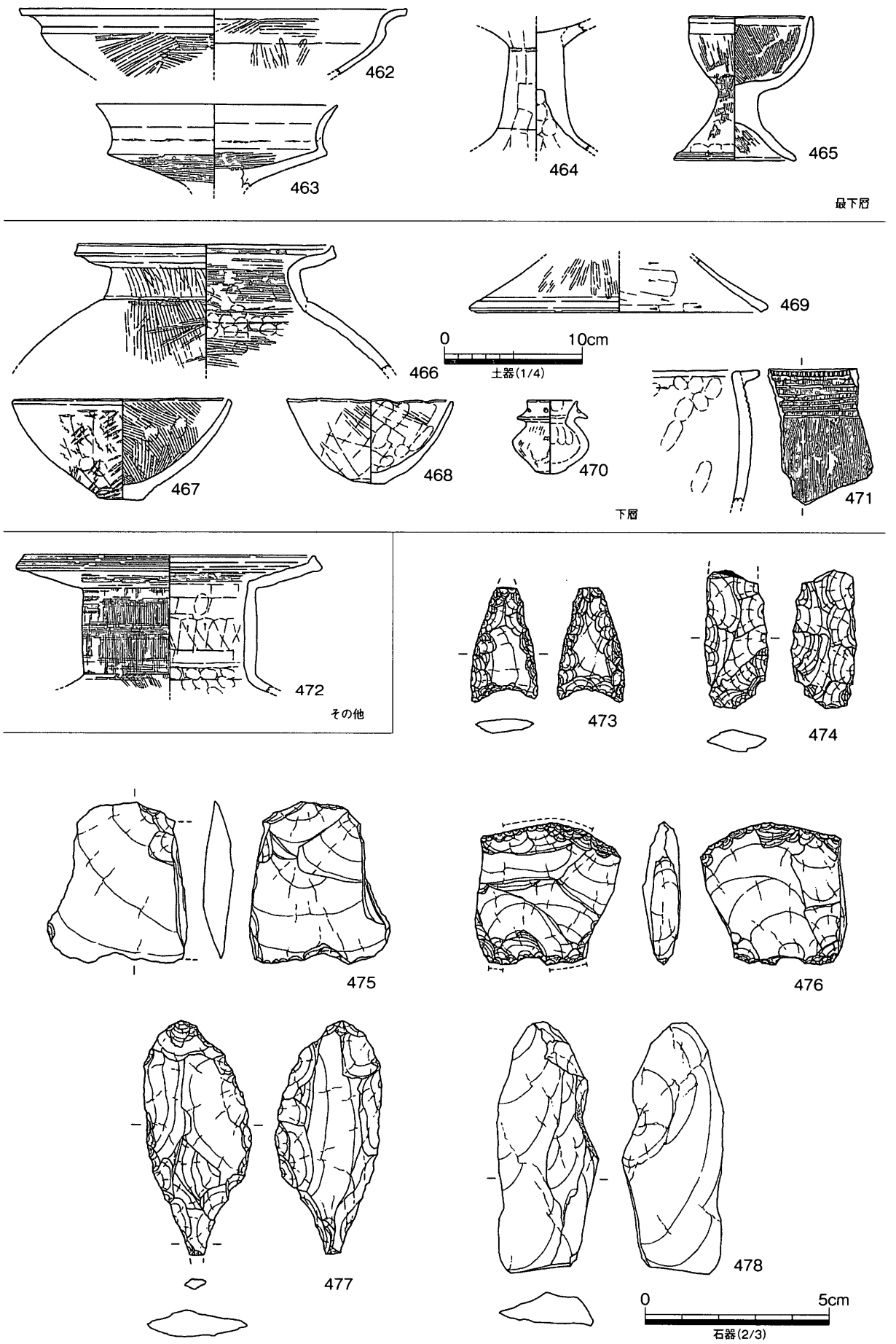
451～465は最下層出土の土器である。451･452は後期中葉以降の壺である。451は広口壺の口頸部で、口縁部は「ハ」の字状に外上方に開き、端部を僅かに拡張し凹線文を施している。452は広口壺の上半部で、口縁端部を僅かに拡張し、凹線文を施している。453～458は後期中頃以降の甕である。453は体部の球体化が認められ、外面にはタタキを顕著に施している。455は下川津B類に類似する甕の上半部である。462～465は高杯である。462･463は後期後半頃の高杯である。463は下川津B類に類似する。

466～471は下層から出土した土器である。466は後期中頃の広口壺の上半部である。469は後期中頃の大型の高杯脚部で、470はミニチュアの壺である。頸部に三角形状の突帯を貼り付けている。471は前期末～後期初頭頃の甕の口縁部で、口縁部を貼り付け、端部にはヘラ状工具により刻目を施している。

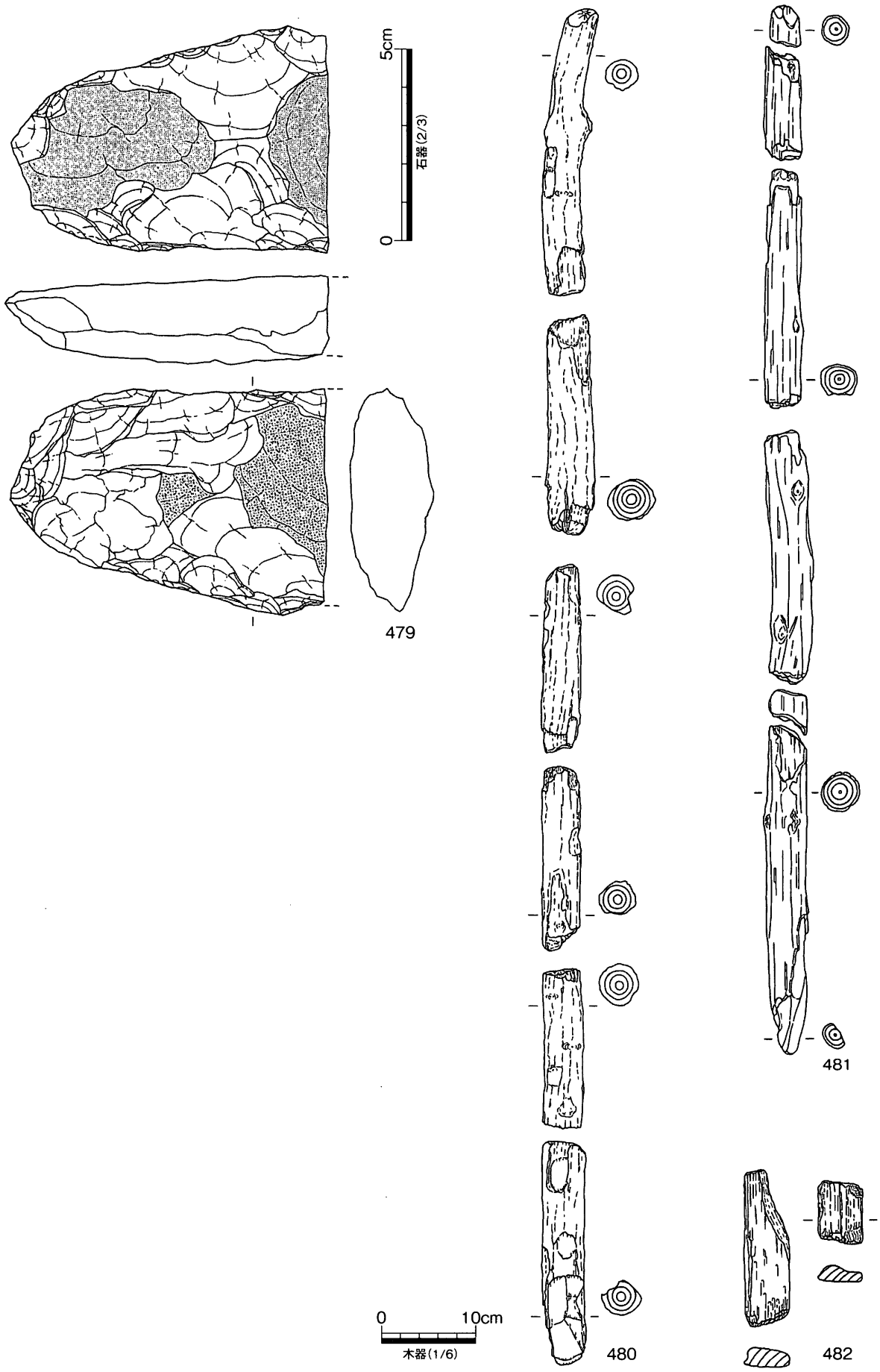
473～479はSDa34から出土した、サヌカイト製の石器類である。473は先端部を欠く、打製凹基式石鏃である。474は先端部を欠く、打製石鏃の未製品である。475は剥片に分類したが、おそらく削器ないし石庖丁の未製品であろう。476は楔形石器で、側縁には裁断面、上下両側縁上には潰れ痕が認め



第 149 図　SDa34 出土遺物（1）



第 150 図　SDa34 出土遺物（2）



第 151 図　SDa34 出土遺物（3）

られる。477は石錐である。479は磨き痕等が認められることより、打製石斧を転用した石庖丁の未製品と考えられる。

480・481は最下層から出土した、芯持材を用いた木杭である。先端部には刃先を削り出している。

SDa35（第148図）

先に報告したSDa34同様に、Ⅲ・Ⅸ区の第2遺構面上で検出した、Ⅰ区のSDa33から続く溝状遺構である。Ⅰ区のSDa33は、ほぼ東西方向に流れ、Ⅰ区西端部のⅢ区との境界付近で北に大きく屈曲しⅢ区へ延びる。Ⅲ区の南端部ではSDa34とSDa35に分岐する。分岐したSDa35は、西へ反り気味に北方向に延びて、Ⅸ区の中央部へ続く。Ⅸ区では僅かに蛇行しながら北西方向へ進み、調査区の外へ延びる。なお、この溝状遺構は、下位の第3遺構面上のSDa64と同一方向に流れており、SRa02の埋土を大きく切り込んでいる。おそらく、SDa64が埋没した後に、それを改修したものがこの遺構と考えられる。

Ⅲ区まで含めた検出長は31ｍ以上、幅約0.6～1.2ｍ、深さ約0.8ｍを測る。断面の形態は地点により差があるが、全体的には不整形な逆台形状を呈する。埋土は地点により若干異なり、5層以上に分かれるが、SDa34同様に比較的短期に堆積したものと考えられ、淡灰褐色系の粗砂が主となる。（第148図西壁7層）

SDa64（第146・148・152～156図）

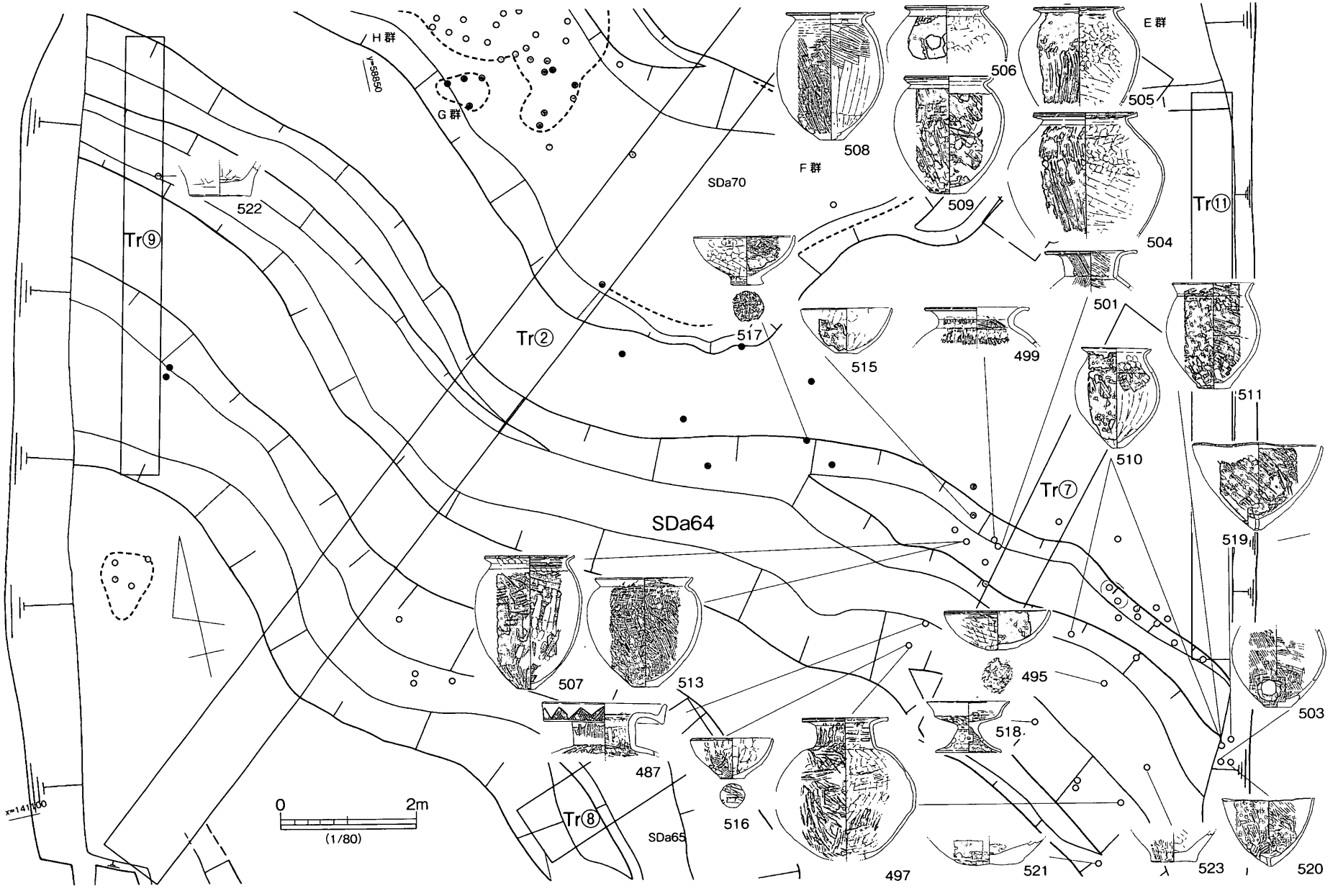
Ⅲ・Ⅸ区の第3遺構面上で検出した、SRa02を切り込んでいる溝状遺構である。SDa64はⅢ区南端部においては、SRa02の上面をSRa02と同一方向に流れているが、南端部より約7ｍ地点で西方へ向きを変える。その後SDa64は、僅かに蛇行しながら北西方向へ進み、Ⅸ区の北半部に至り、調査区外へ延びる。なお、この溝状遺構は、上位の第2遺構面上のSDa35とほぼ同一線上に流れており、SDa64を改修した遺構がSDa35にあたるものと考えられる。

Ⅲ区の区間まで含めた検出長は約31ｍ以上、幅約2.0～3.0ｍ、深さ約0.8ｍを測る。断面は全体的には不整形なU字状ないしV字状を呈する。埋土は地点によりかなり差があり、5層以上に分かれる。

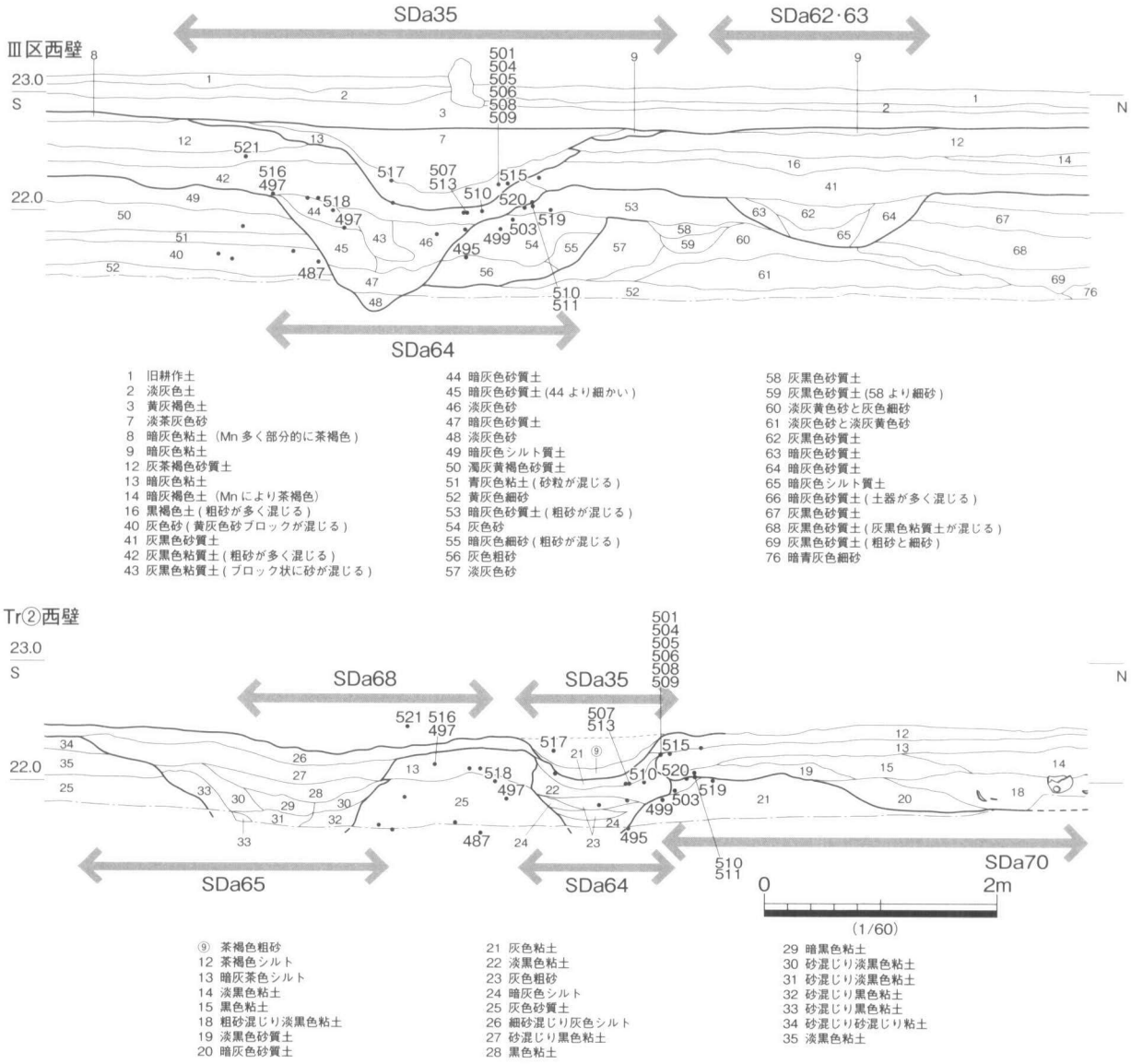
出土遺物としては、弥生時代前期～弥生時代終末期の土器とサヌカイト製の石器類が、主に東半部から出土した。なお、この溝状遺構の東半部の北肩部の上端部の掘り方のベースになっている包含層からは、多量の弥生後期後半頃の土器が出土している。遺構の肩口周辺の遺物であるため、本遺構の出土品に含めるものか、包含層の遺物で取り扱うものか判断し難い遺物があったが、不確定な遺物については、「第3節　3．包含層の出土遺物」の中で報告することにした。

483～496は下層から出土した土器である。483～487は壺である。483は後期中頃の下半部を欠く広口壺である。口縁部は頸部から屈曲して水平に延び、端部を僅かに拡張させ凹線文を施す。体部は球体化している。484は483と同タイプの壺で、頸部外面にヘラ状工具により、2条の直線状の線刻が認められる。486は口縁部に刻目、櫛描文、穿孔、円形浮文等を施した、装飾性の高い広口壺である。487は二重口縁壺の口頸部である。口縁部の外面には鋸歯文を施している。488～494は甕である。489は口縁部を拡張して、外面に凹線文を施した、後期前半頃の甕で、他の488・490～494は後期後半頃の甕である。495・496は鉢である。

497～524は上層から出土した土器である。497～503は壺である。497・498は後期中葉頃の同タイプの広口壺である。なお、498は形状・調整等から下川津B類に類似する壺と考えられる。



第152図　SDa64遺物分布平面図



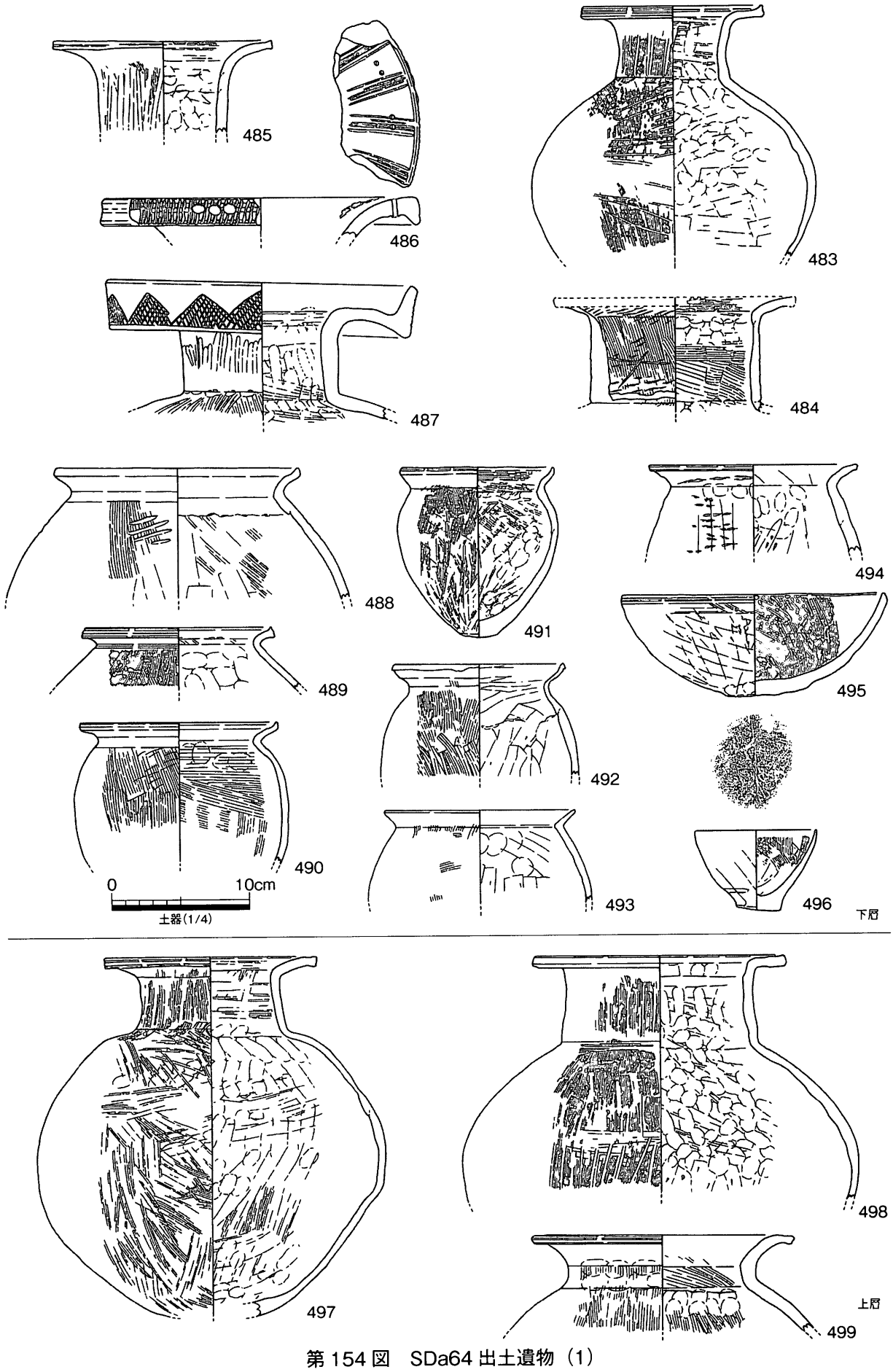
第 153 図　SDa64 垂直遺物分布図

504 ～ 514・521 は甕である。504 ～ 506 は下川津 B 類に類似した甕である。口縁部は体部から屈曲させて短く延び、端部を平坦に仕上げている。体部内面の上半部には顕著なオサエ、下半部には顕著なヘラ削りを施している。なお、504 の口縁部には凹線文を数条施している。515 ～ 517 は鉢である。底部には平底を明瞭に残す。524 は櫛描文を顕著に施した中期中頃の壺の体部片である。

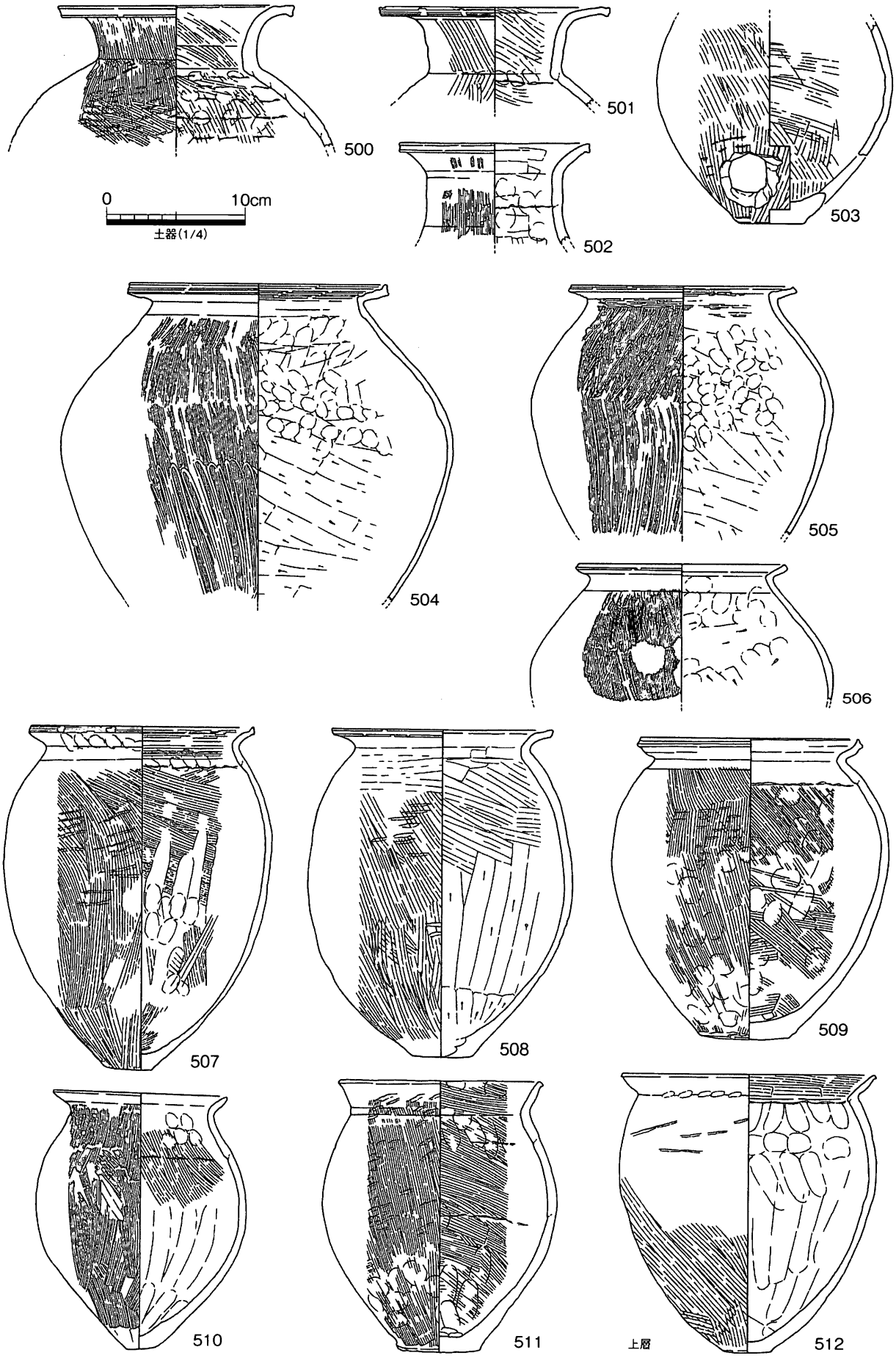
SDa65（第 146・157 ～ 160 図）

Ⅲ・Ⅸ区の第 3 遺構面上で検出した、SRa02 から分岐する溝状遺構である。SDa65 はⅢ区南端部より約 7 m地点で、SRa02 から西方へ分岐しⅨ区へ続く。Ⅸ区では蛇行しながら北方向に進み、調査区外へ延びる。なお、この溝状遺構は、SDa68 とほぼ同一線上に流れており、SDa65 を改修した遺構が SDa68 に当るものと考えられる。

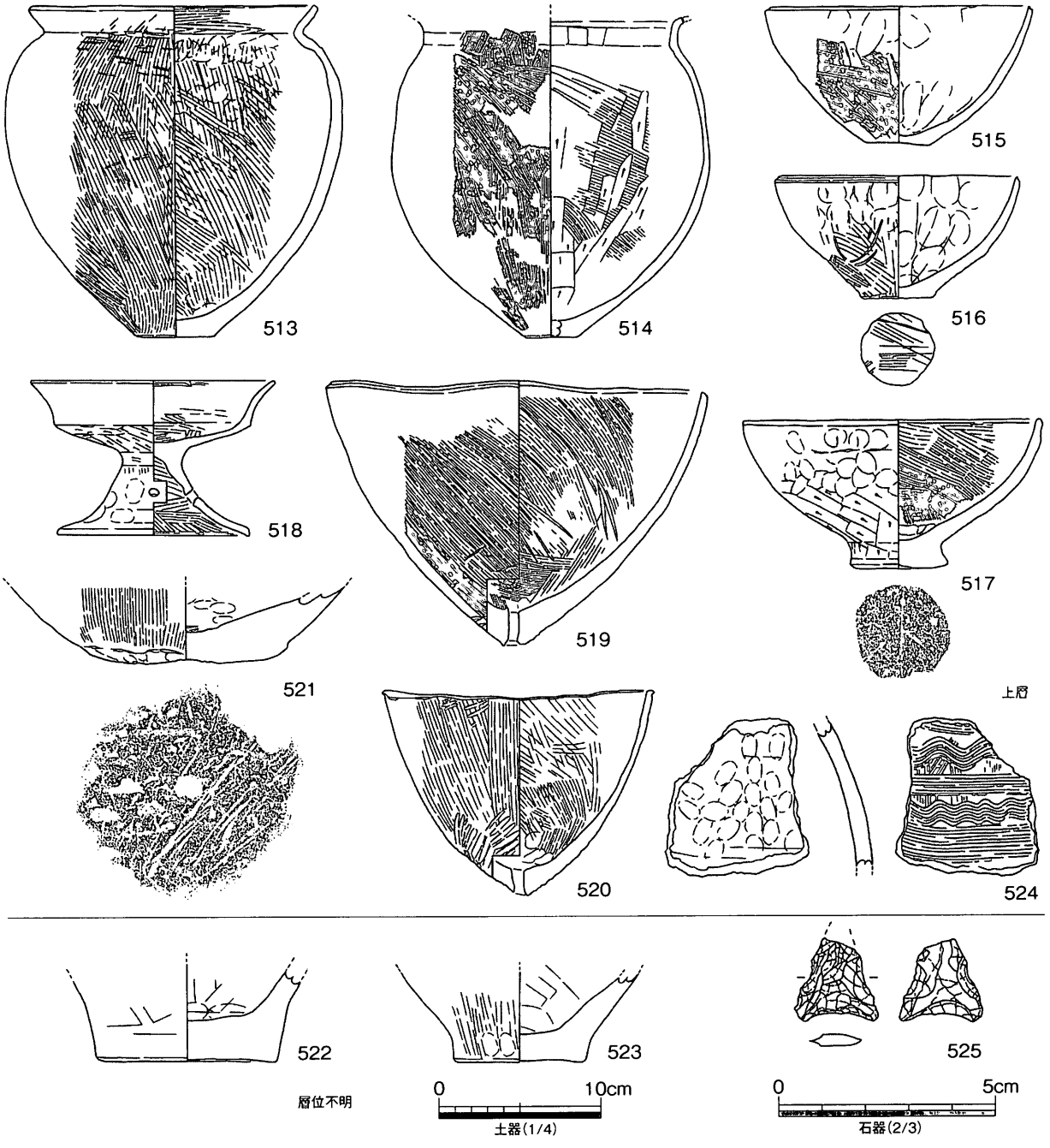
Ⅲ区の区間まで含めた検出長は約 29 m以上、幅約 1.8 ～ 3.4 m、深さ約 0.9 mを測る。断面は全体的には不整形な V 字状ないし U 字状を呈する。埋土は地点によりかなり差があり 4 層以上に分かれる。



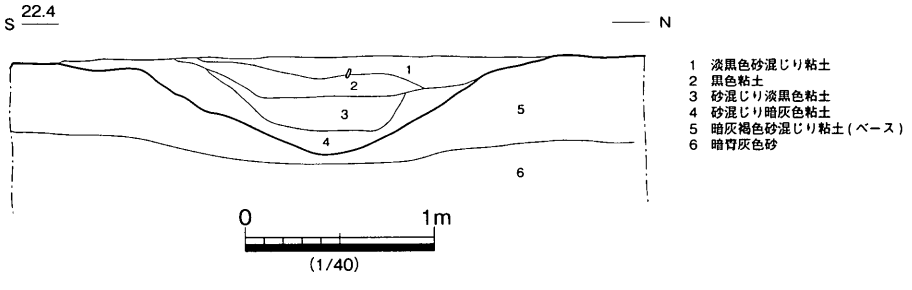
第 154 図　SDa64 出土遺物（1）



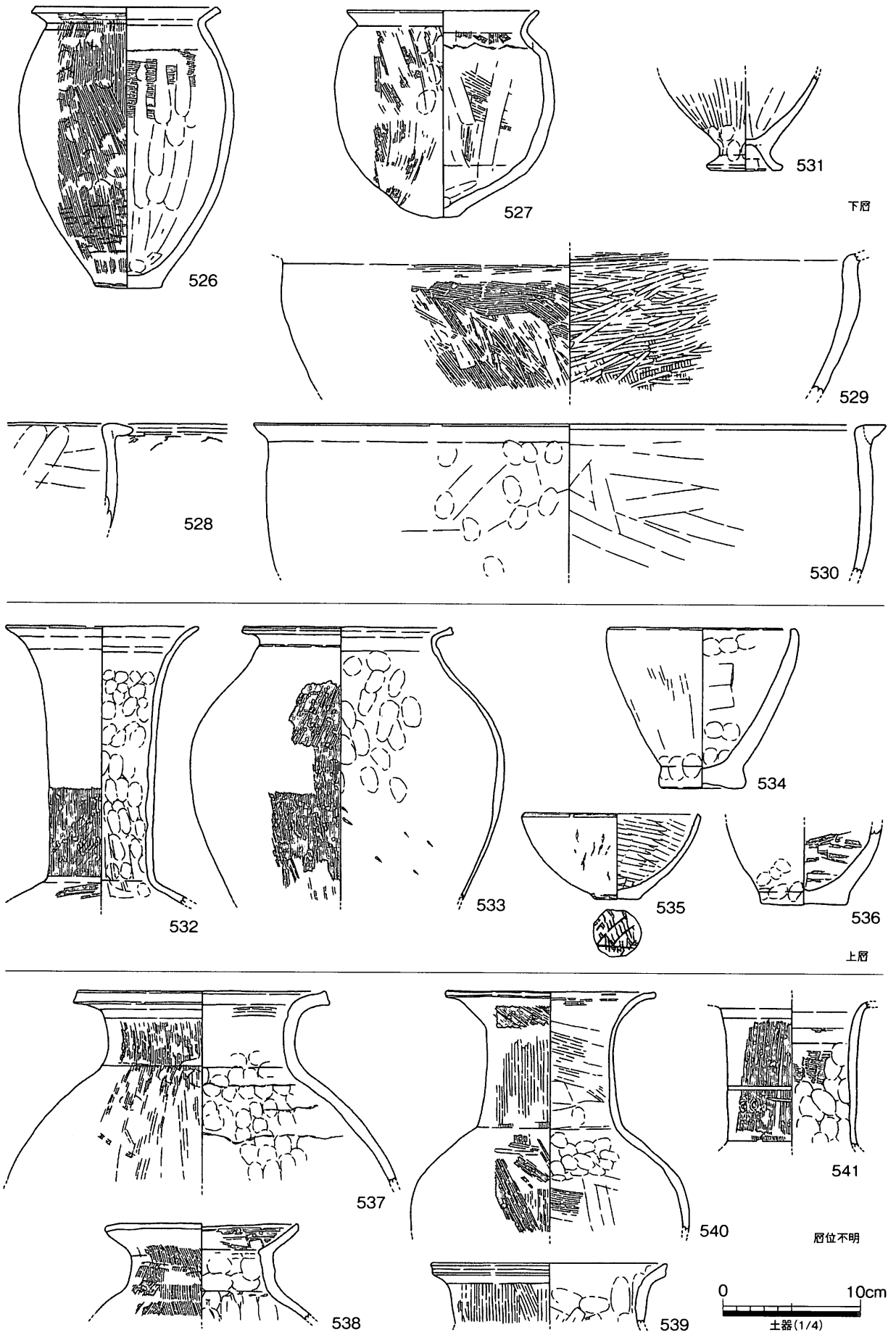
第155図　SDa64 出土遺物（2）



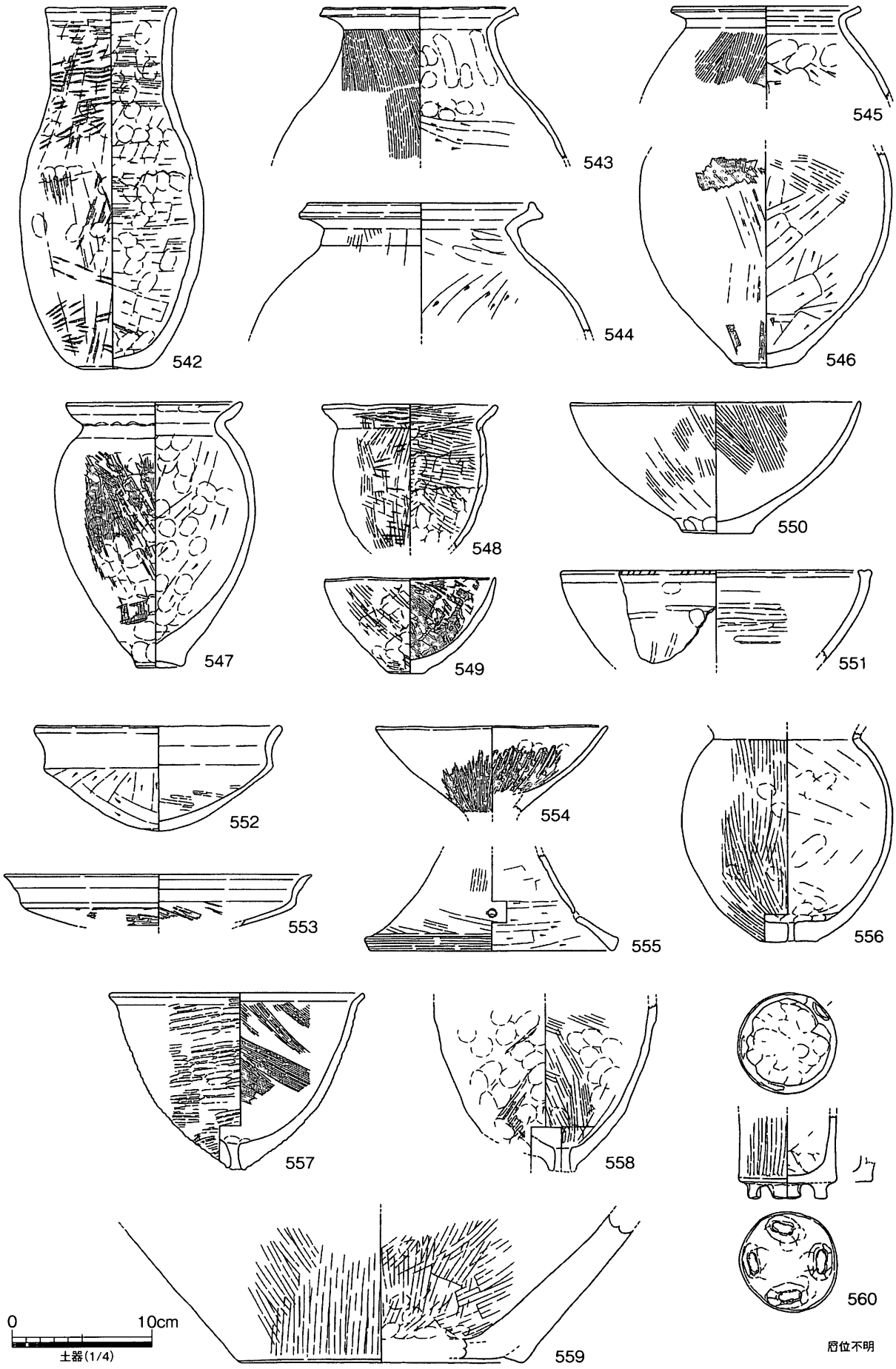
第 156 図　SDa64 出土遺物（3）



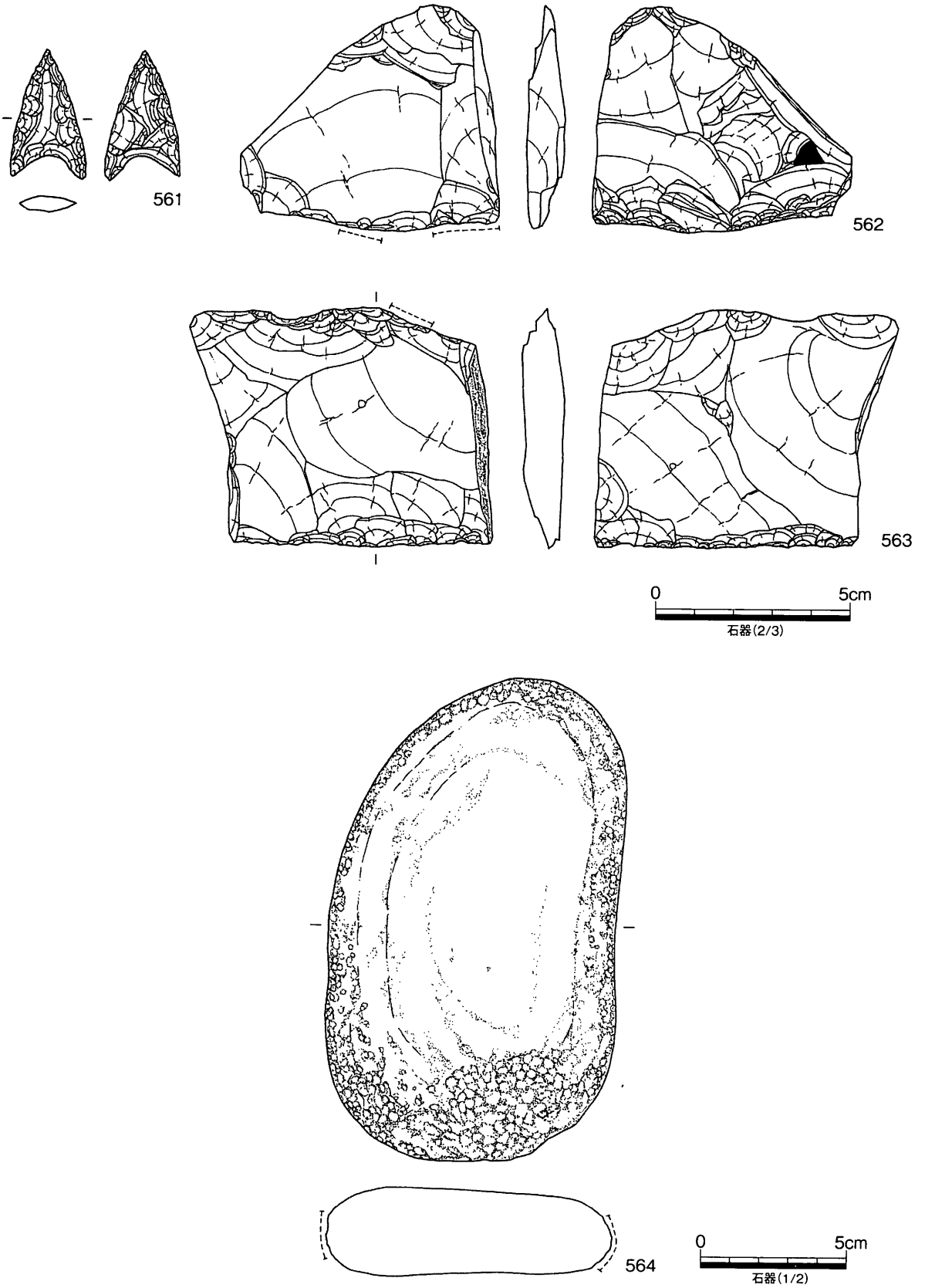
第 157 図　SDa65 断面図



第 158 図　SDa65 出土遺物（1）



第159図　SDa65出土遺物（2）



第 160 図　SDa65 出土遺物（3）

出土遺物としては、弥生時代中期、後期後半～弥生時代終末期の土器とサヌカイト製の石器類が出土した。

526～530は下層出土の土器である。526･527は後期後半の甕である。531は後期後半の台付鉢である。529･530は中期の比較的大型の鉢である。

532～536は上層出土の土器である。532後期前半頃の長頸壺の口頸部である。口縁部は「ハ」の字状に開き、端部を丸く仕上げている。頸部は長く、内面にはオサエを顕著に施している。533は下川津B類に類似した甕である。体部外面には縦方向のハケ、内面の上半部にはオサエ、下半部にはヘラ削りを顕著に施し、器壁を極力薄く仕上げている。

537～560は出土した層位が不明瞭な土器である。537～544・559は壺である。541は長頸壺の頸部である。外面には竹管文等の装飾、内面にはオサエの痕跡が顕著である。542は長胴気味の直口壺である。559は大型壺の底部で、土器棺に使用できる大きさである。545～548は甕である。552は鉢である。口縁部は外上方に屈曲し、端部を丸く仕上げている。底部外面にはヘラ削りを顕著に施している。553～555は高杯である。553は高杯杯部である。口縁部は外上方に屈曲し、端部は尖り気味に仕上げている。555は下川津B類に類似した高杯脚部である。端部は拡張させ、外面に数条の凹線文を施している。560は木製品等で見られる合子を模倣した、合子形土製品である。円筒状の土器の底部に4つの小さな支脚を貼付けている。なおこの土器は、平成19年度に報告したⅢ区のSRa02の土器溜まりD群から出土した土器（2008鹿伏・中所遺跡Ⅰ　第102図678）と接合している。そのため、土器溜りD群とSDa65の埋没時期を検討する上で貴重な資料になった。

561～564は出土した石器である。561はサヌカイト製で、凹基式の打製石鏃である。562は裁断面が認められることより、サヌカイト製の楔形石器に分類したが、欠損した打製石斧の可能性がある。563はサヌカイト製の打製石庖丁の未製品である。

SDa68（第148図）

Ⅸ区中央の第2遺構面下層の上位で検出した溝状遺構であるが、レベル差が小さいことより、上位の第2遺構面と合わせて検出した。この溝状遺構はⅢ区から延びる遺構と考えられるが、Ⅸ区では平面を検出できたものの、Ⅲ区では検出できなかった。この溝状遺構は複数の遺構と切り合い関係が認められる。具体的には、SDa65を切り込み、SDa35に切られている。なお、この遺構は、下位の第2遺構面上のSDa65とほぼ同一線上に流れており、SDa65を改修したものがSDa68に当るものと考えられる。

Ⅲ区の区間まで含めた検出長は約22m以上、幅約2.0～3.5m、深さ約0.3mを測る。断面は全体的には不整形な浅いU字状ないしV字状を呈する。埋土は3層以上に分かれる。

出土遺物としては、弥生時代後期後半～弥生時代終末期の土器とサヌカイト製の石器類が出土した。

SDa69（第146図）

Ⅸ区南東部の第3遺構面上で検出した溝状遺構である。SRa03の北肩部から河床部へ向けて流れ込む小規模な溝状遺構である。河床では溜り状に広がっている。検出長は約4.5m以上、幅約1.2m、深さ約0.1mを測る。断面は全体的には不整形な浅いU字状を呈する。

SDa70（第148図）

Ⅸ区北半部の第３遺構面上で検出した溝状遺構である。Ⅸ区 SRa02 の東端部から南へ大きく湾曲した後に SRa02 の西端部へと続く、幅広で浅い不整形な溝状遺構である。検出状況よりⅢ区の SDa66・67 が、Ⅲ・Ⅸ区の境界で合流したものが SDa70 に当るものと考えられる。Ⅸ区 SDa70 の東端部は、SDa34・66・67、SRa02 等が交わる地点に当る。これらの諸遺構との切り合い関係については、その接点にⅢ区とⅨ区の境界が位置し、また、その地点を SDa34 が大きく切りこんでいるため、平面で明確には掴めていない。ただし、境界近辺で出土している土器溜りＤ群の広がりや、Ⅲ区の西壁面の土層序等を考慮すれば、これらの溝状遺構は SRa02 がある程度埋まった段階で、SRa02 を切り込んでいる可能性が考えられる。

検出長は約 23 m以上、幅約 2.5 ～ 5.0 m、深さ約 0.8 mを測る。断面は全体的には不整形で、浅いⅢ状を呈する。埋土は９層に分かれ、上層は黒色系の粘質土、下層は暗灰色系の砂質土が主体を占める。

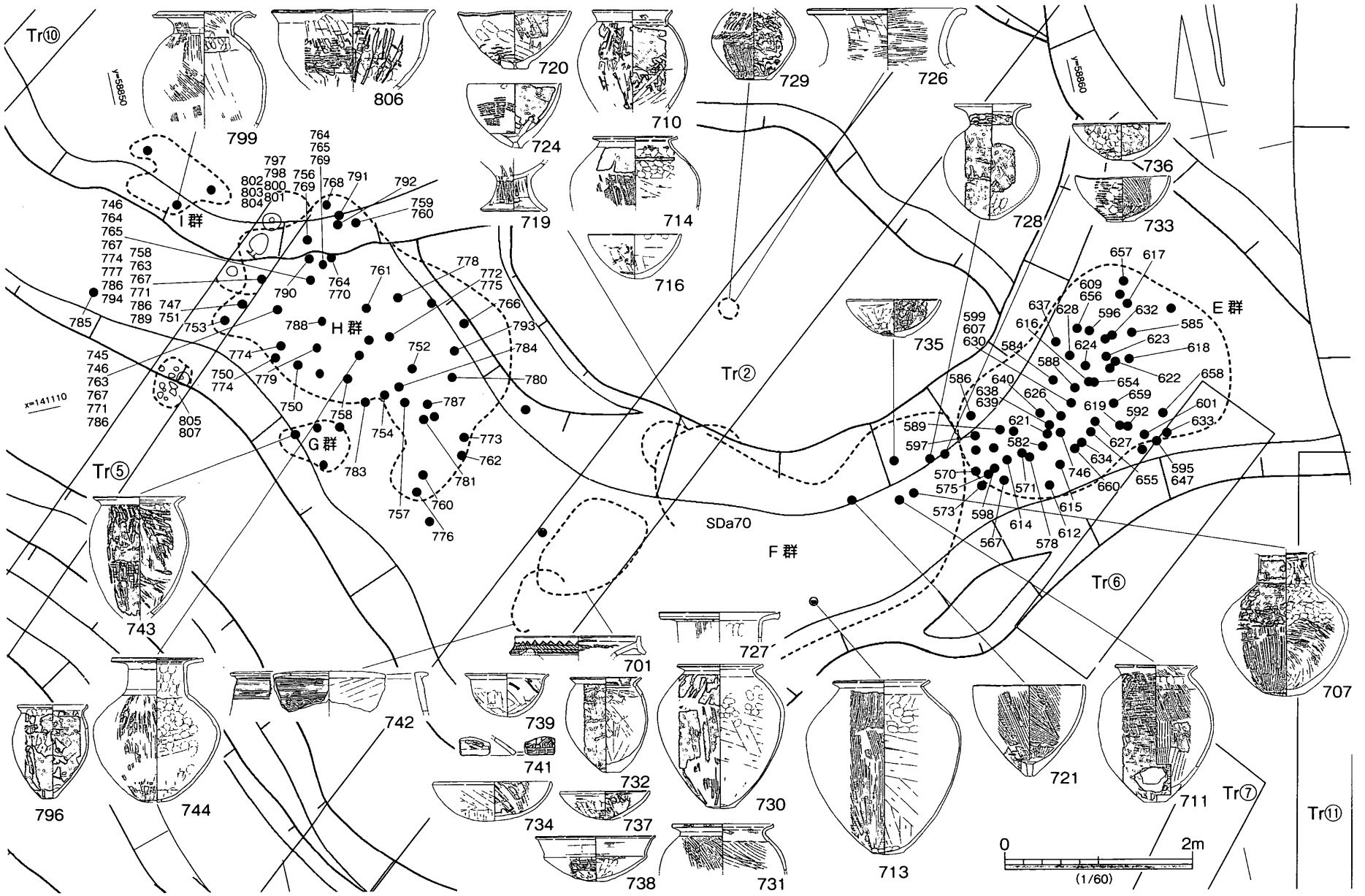
SDa70 からは、微高地上の集落からの廃棄遺物と考えられる、多量の弥生土器からなる土器溜りを５地点で検出した。その土器溜りは東よりＥ群・Ｆ群・Ｇ群・Ｈ群・Ｉ群と仮称した。これらの土器溜りは、平成 19 年度に報告したⅢ区の土器溜りＤ群とほぼ同時期で、同様の性格が考えられる。この溝状遺構から出土した遺物量はコンテナ 70 箱を数える。なお、平成 19 年度に報告した SRa02 のＤ群については、その検出状況から本来 SDa70 に廃棄された土器溜りとして捉えられるものである。

SDa70 出土遺物（第 161 ～ 180 図）

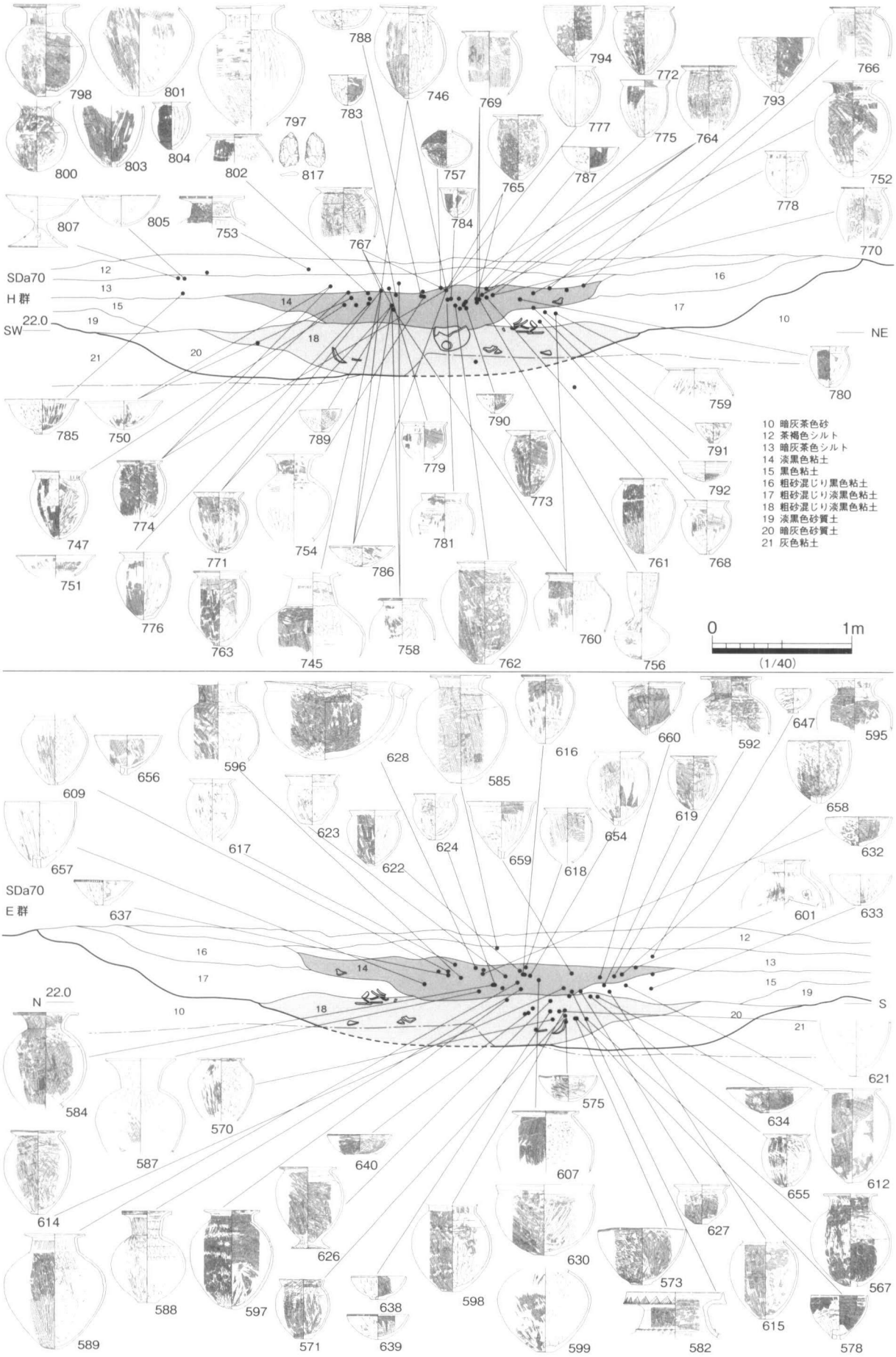
遺物の出土層位については、SDa70 の中央に南北に設定した、Ｔｒ②の 18 層（第 162 図）を基点にして、それより上位を上層、18 層以下を下層として区分した。なお、層位が不明瞭な遺物については、垂直分布を参考にして区分した。傾向として、出土した遺物は上端と下端のほぼ中間に位置する、18 層の上位から 14 層にかけて出土している。出土した遺物は、少量の弥生時代中期前半～中期中頃、後期前半の遺物を含むが、層位の上下に関係なく、弥生時代後期中頃の新相から後期後半古相頃の遺物が主体を占めている。

Ｅ群の下層から出土したのは、565 ～ 578 の土器である。565 ～ 567 は広口壺である。565 は口縁部を上下に拡張し、ヘラ状工具により斜格子文を施す。頸部下端には突帯を貼付けている。566 は下川津Ｂ類に類似する広口壺である。口縁部は頸部から屈曲させ直線状に延び、端部を平坦に仕上げている。頸部は下方に開く様に、直線状に延びて体部に続く。体部は球体状を呈している。外面はハケ、内面上半部にはオサエ、下半部にはヘラ削りを顕著に施している。また、口縁端部には竹管文を施している。569 ～ 572 は甕である。569・570 は下川津Ｂ類の甕である。口縁部は体部から屈曲させて短く延び、端部を平坦に仕上げている。体部上半部には縦方向のハケ、下半部には縦方向のヘラミガキを施している。また、体部内面の上半部には顕著なオサエ、下半部には顕著なヘラ削りを施している。571 は他と比べ形状も粗雑であることから、在地の甕と考えられる。573 ～ 577 は鉢である。大きさによって数タイプに分かれる。底部も明瞭な平底を呈するものと、僅かに平底を残すものとに分かれる。

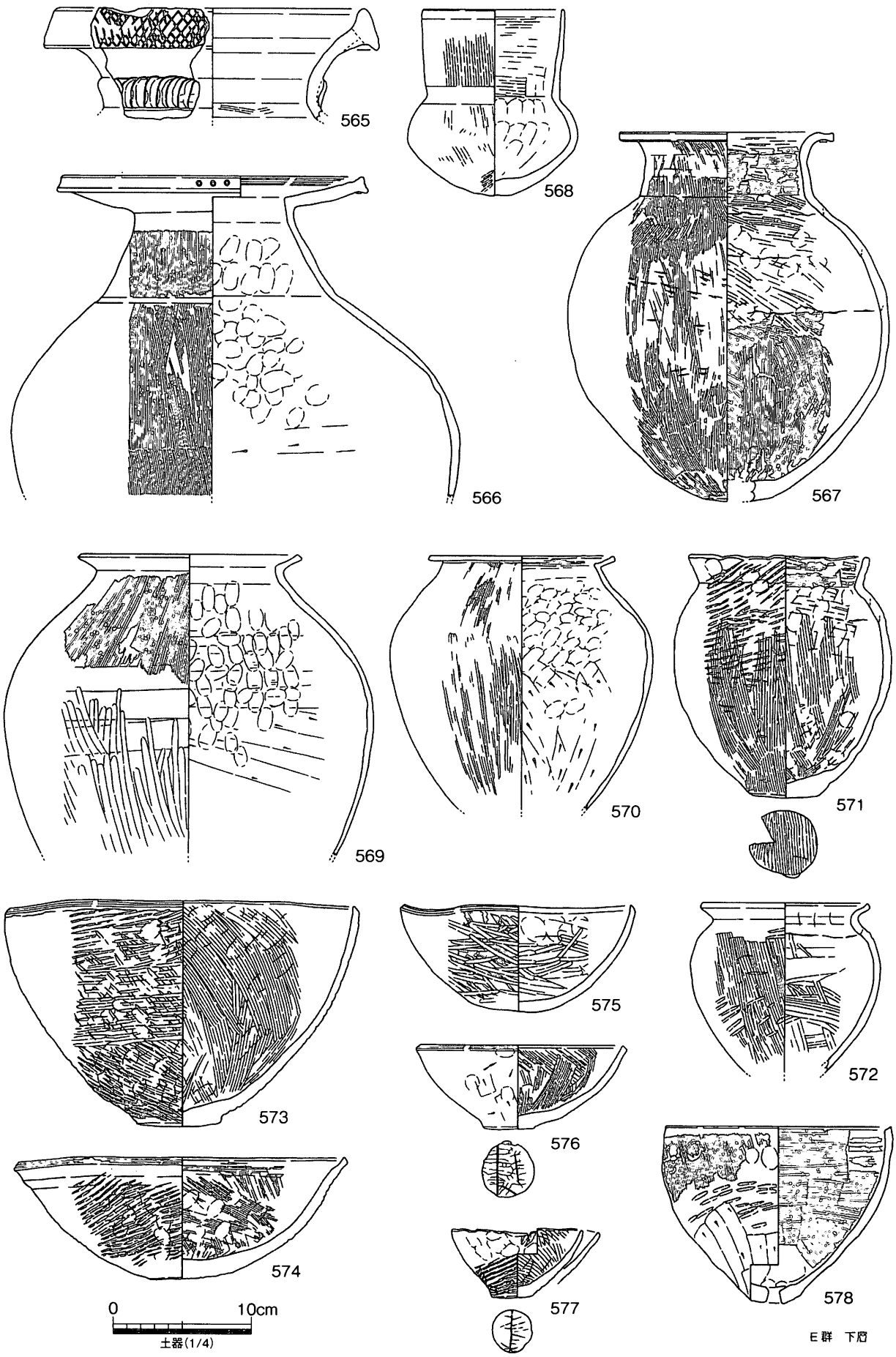
Ｅ群の上層から出土したのは、579 ～ 660 の土器である。579 ～ 606 は後期中頃以降の壺である。580 ～ 582 は二重口縁の壺である。580 はかなり大型壺の口縁部である。581・582 の口縁部の外面には鋸歯文を施している。589・590 は下川津Ｂ類に類似する広口壺である。口縁部は頸部から屈曲させ直線状に延び、端部を平坦に仕上げでいる。頸部は下方に開く様に直線状に延びて体部に続く。体部は丸みを持ちながらも底部に続き、底部は平底を呈する。外面はハケ及び縦方向のヘラミガキ、内面上半部には



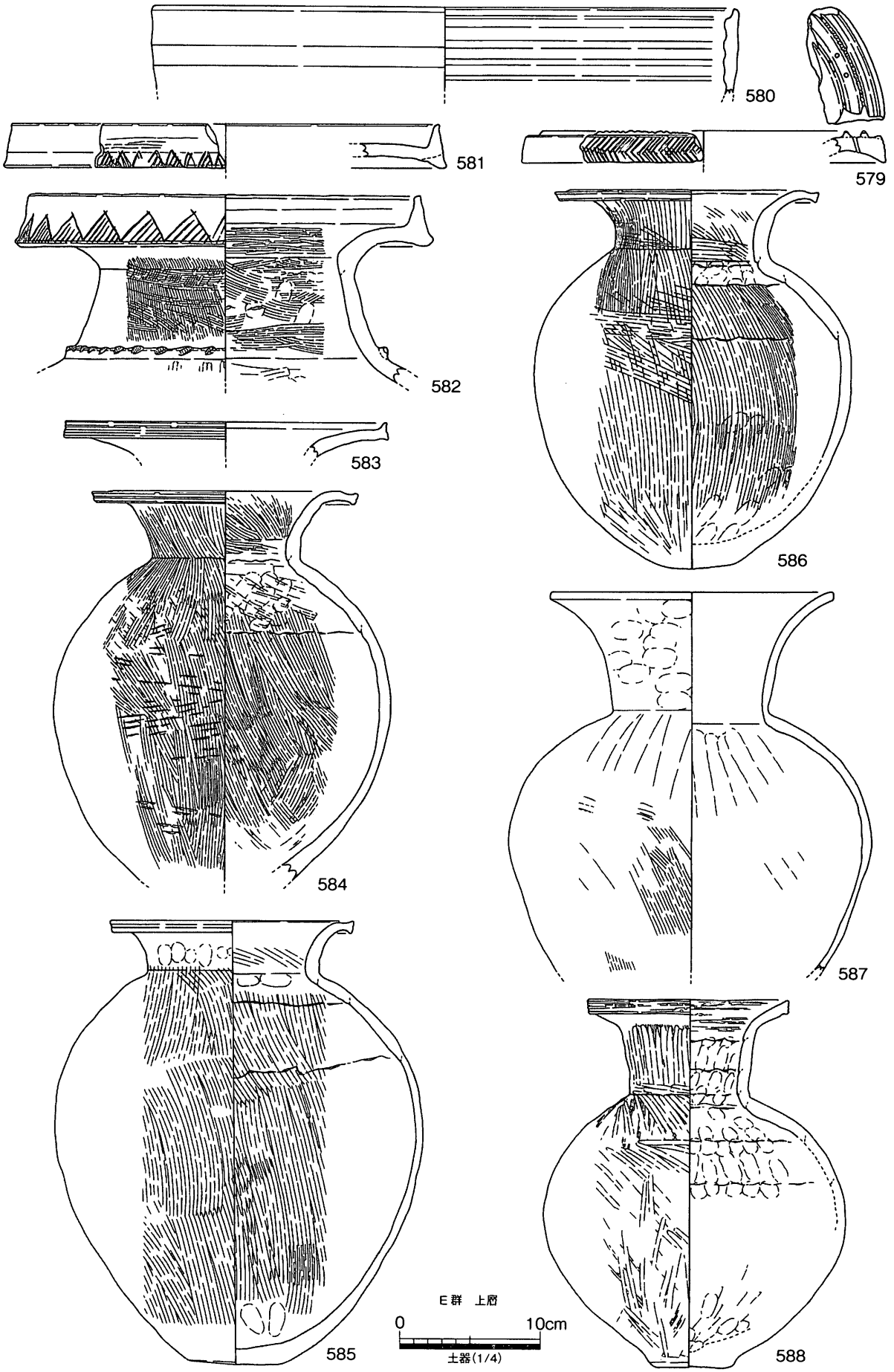
第 161 図　SDa70 遺物分布平面図



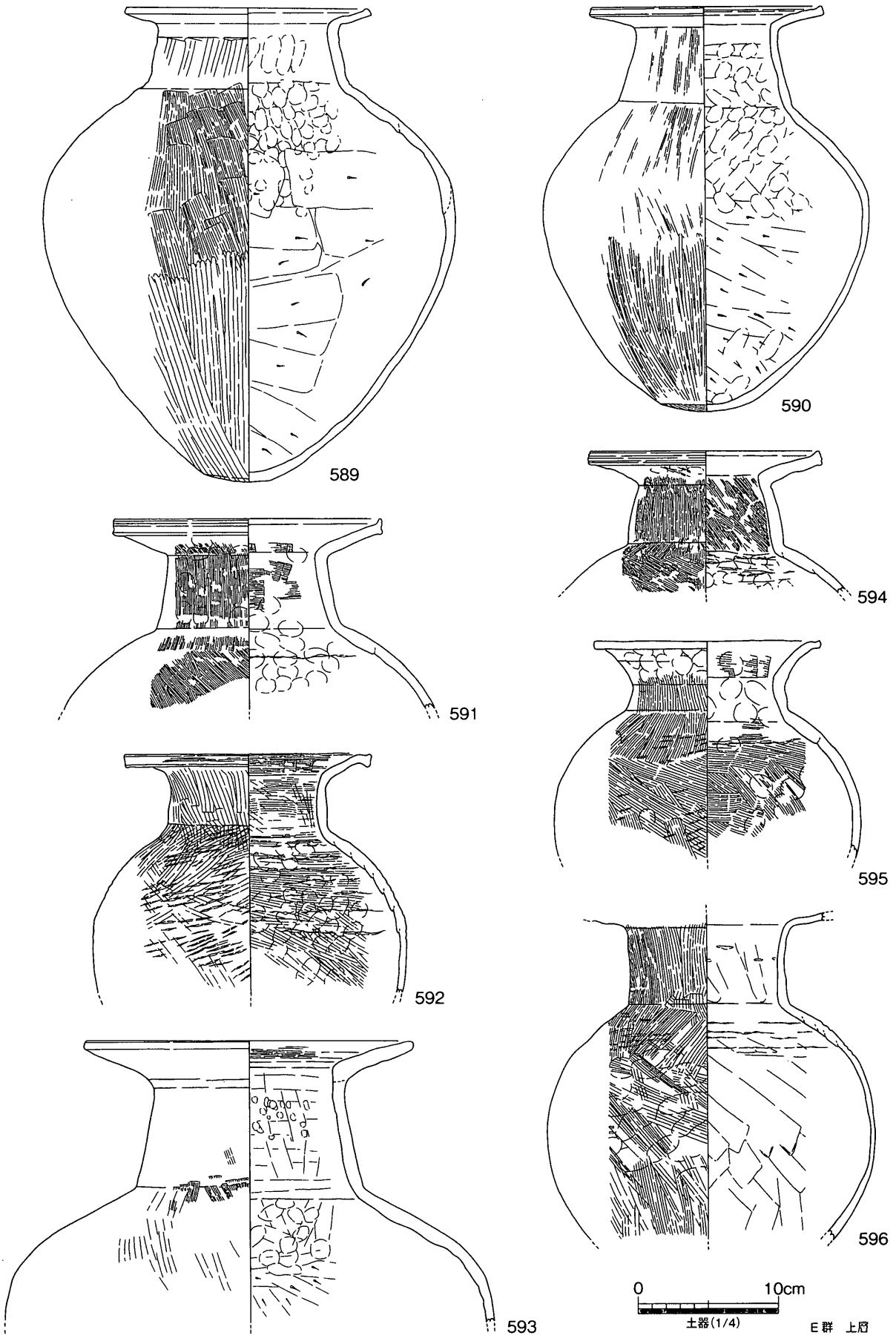
第162図　SDa70垂直遺物分布図



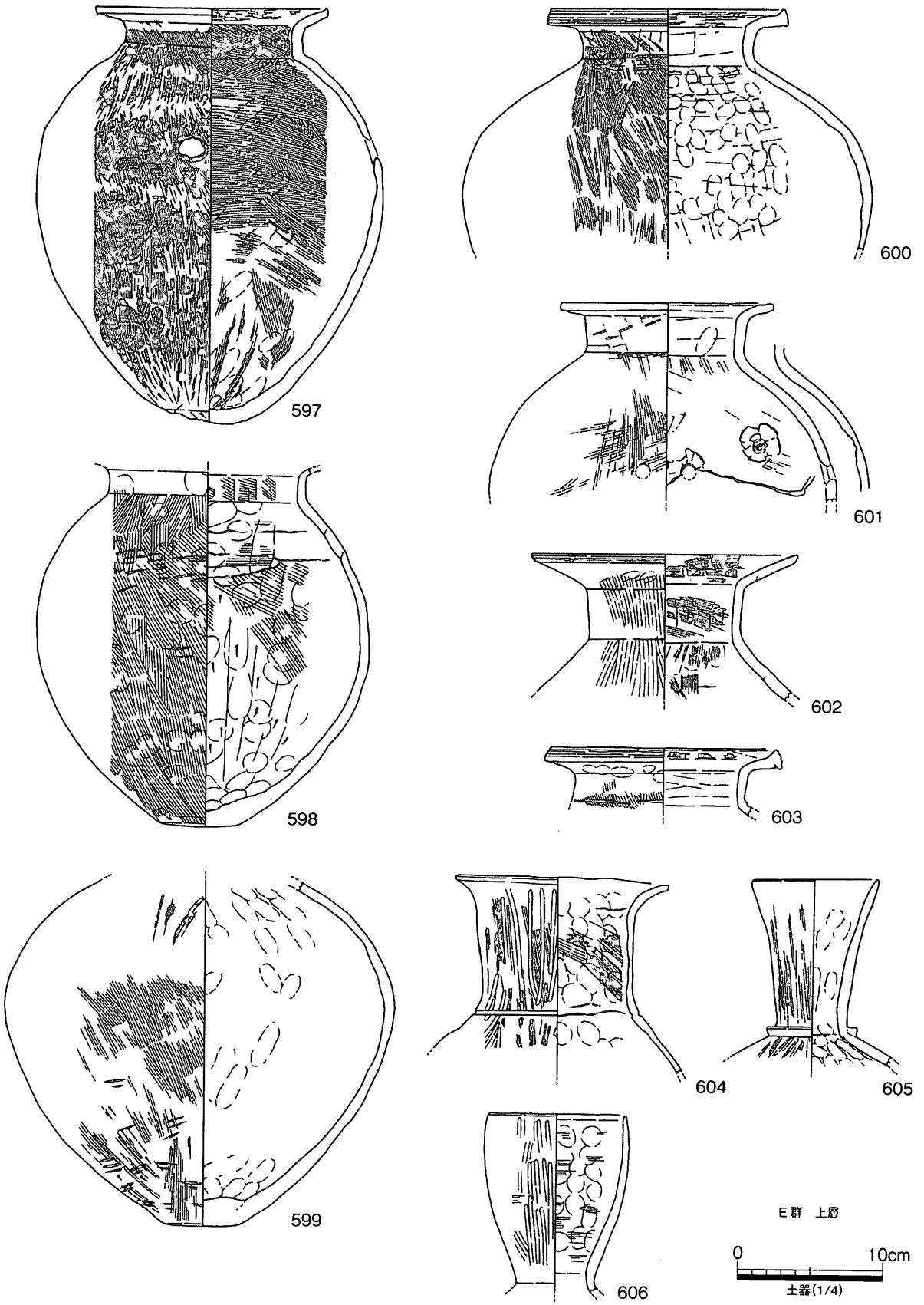
第163図　SDa70出土遺物（1）



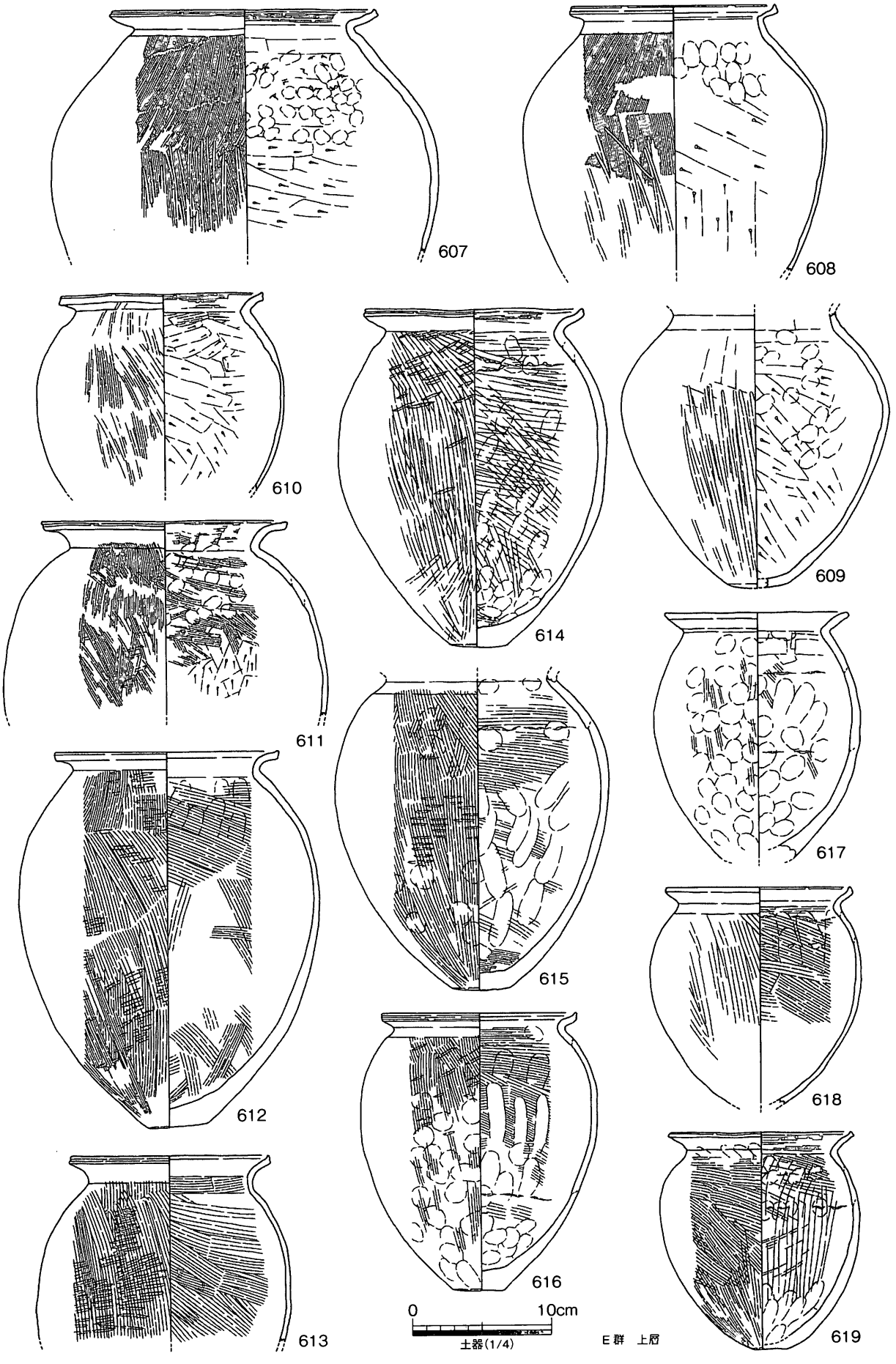
第164図　SDa70出土遺物（2）



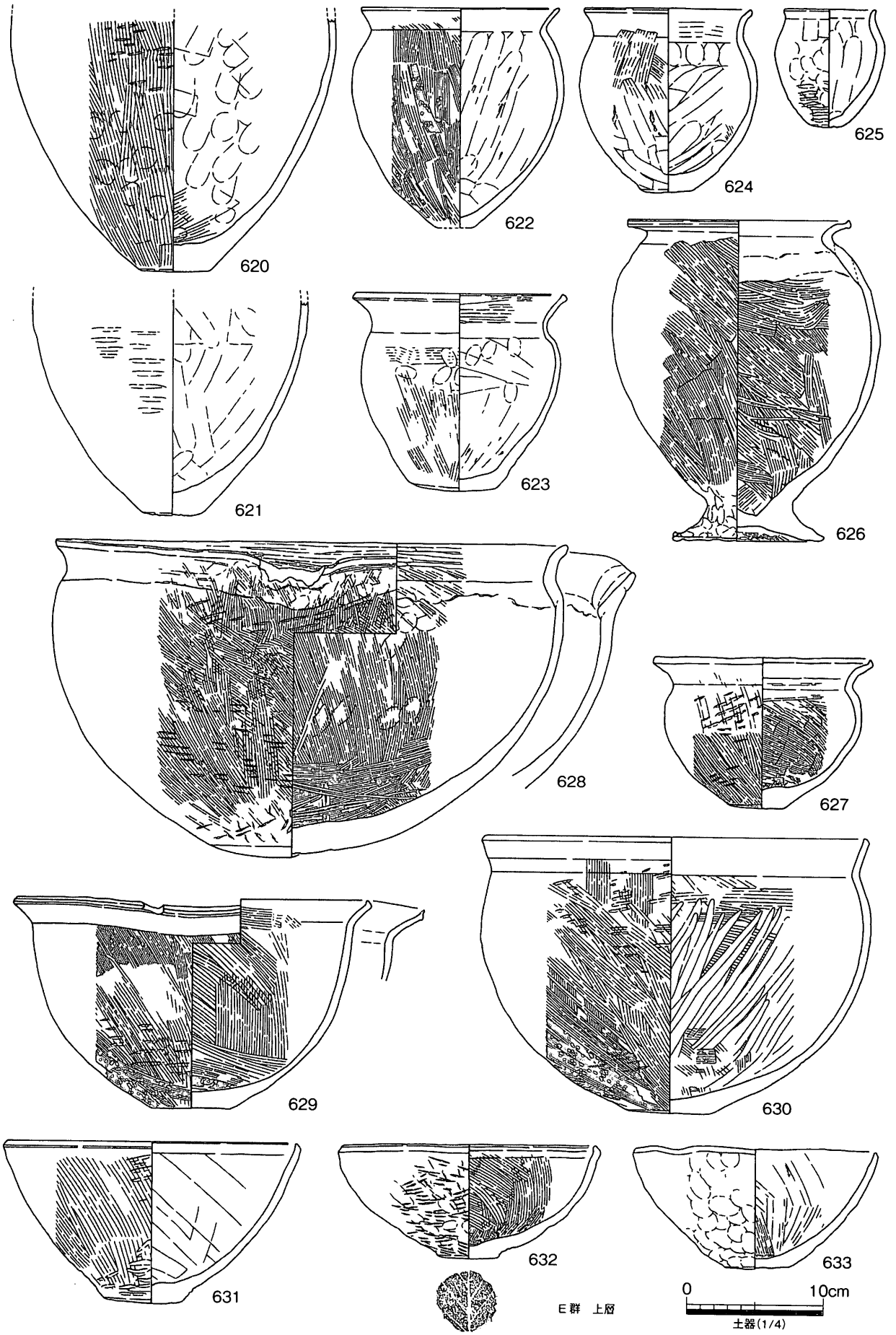
第165図　SDa70 出土遺物（3）



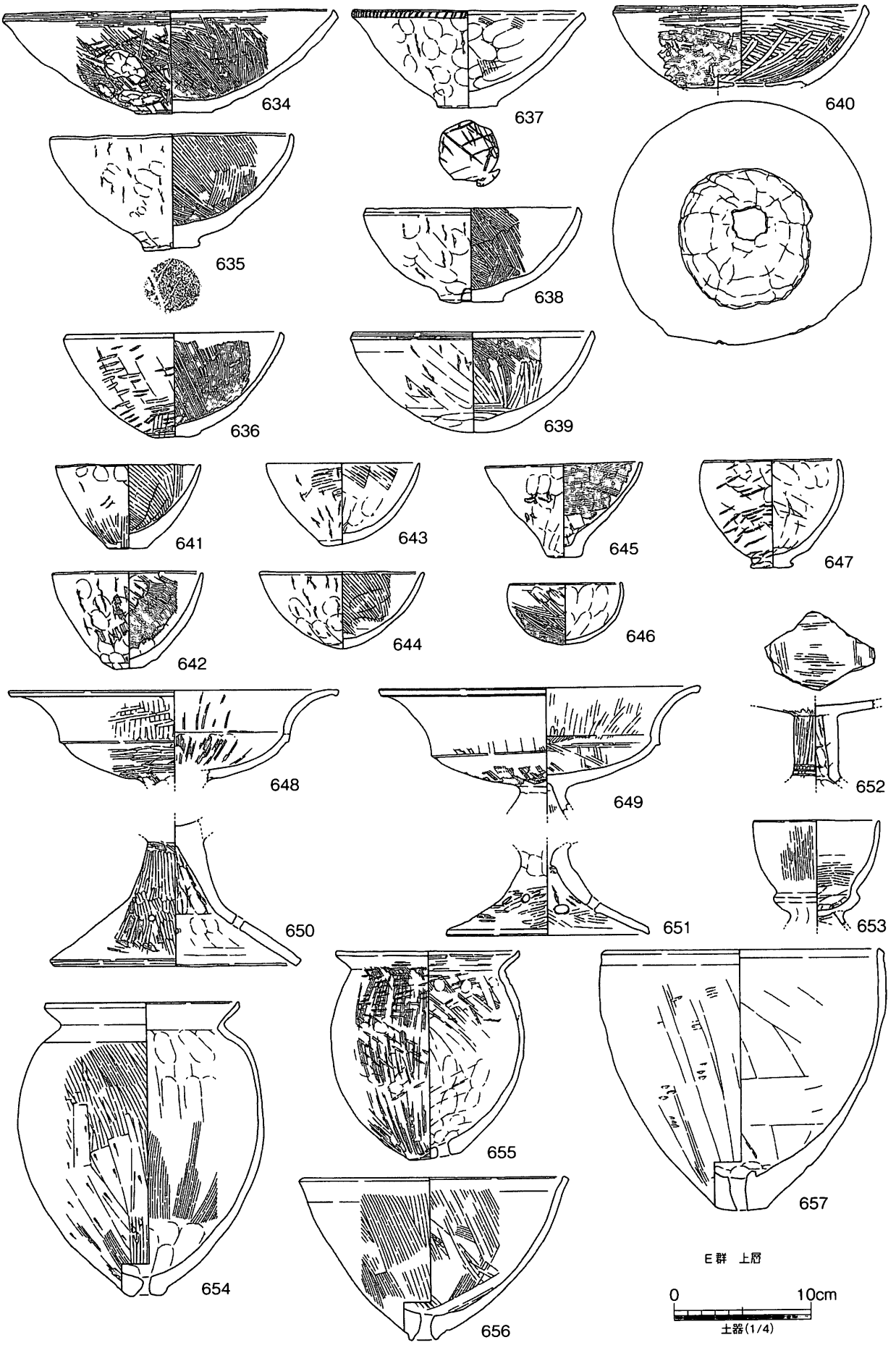
第 166 図　SDa70 出土遺物（4）



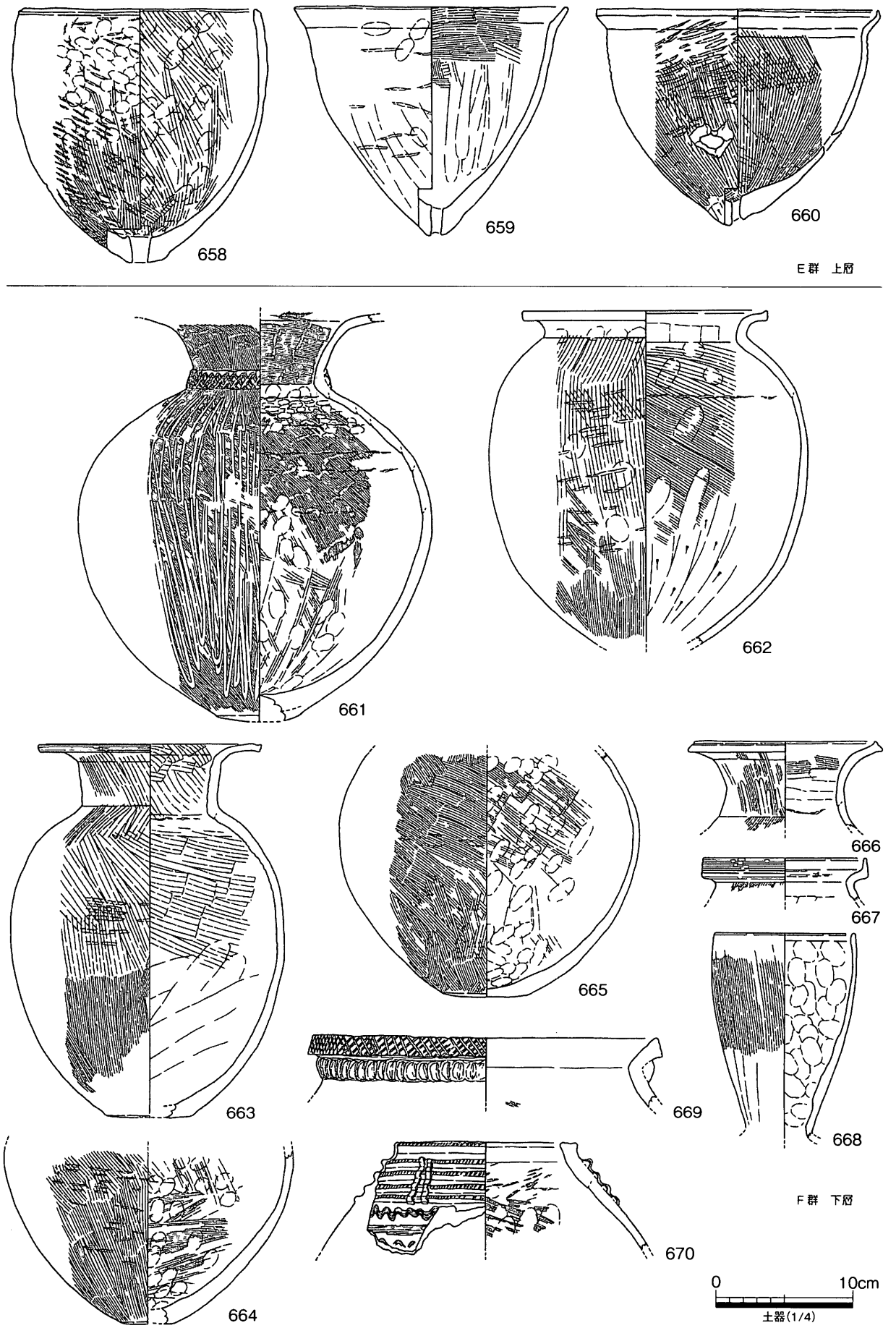
第167図　SDa70出土遺物（5）



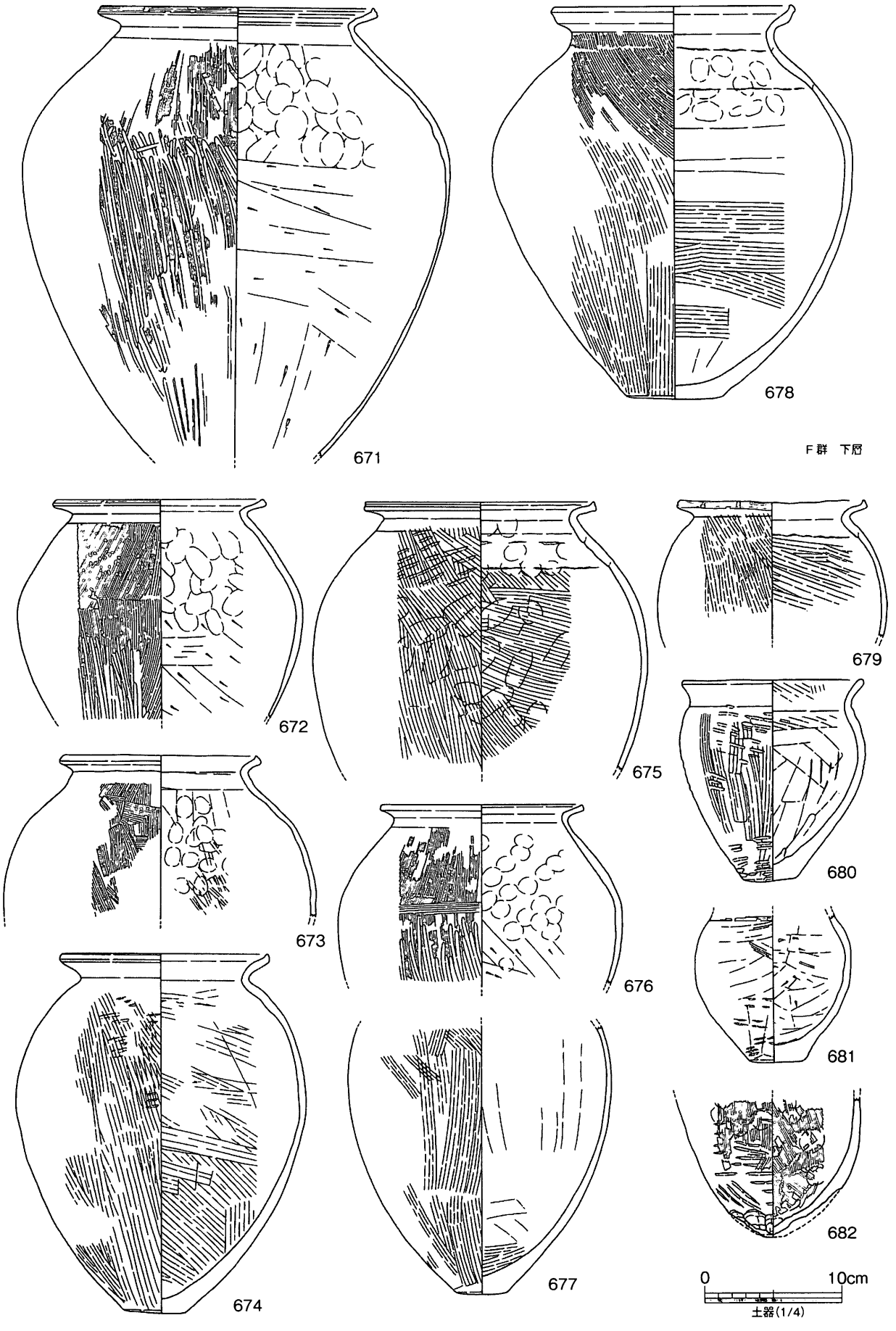
第168図　SDa70出土遺物（6）



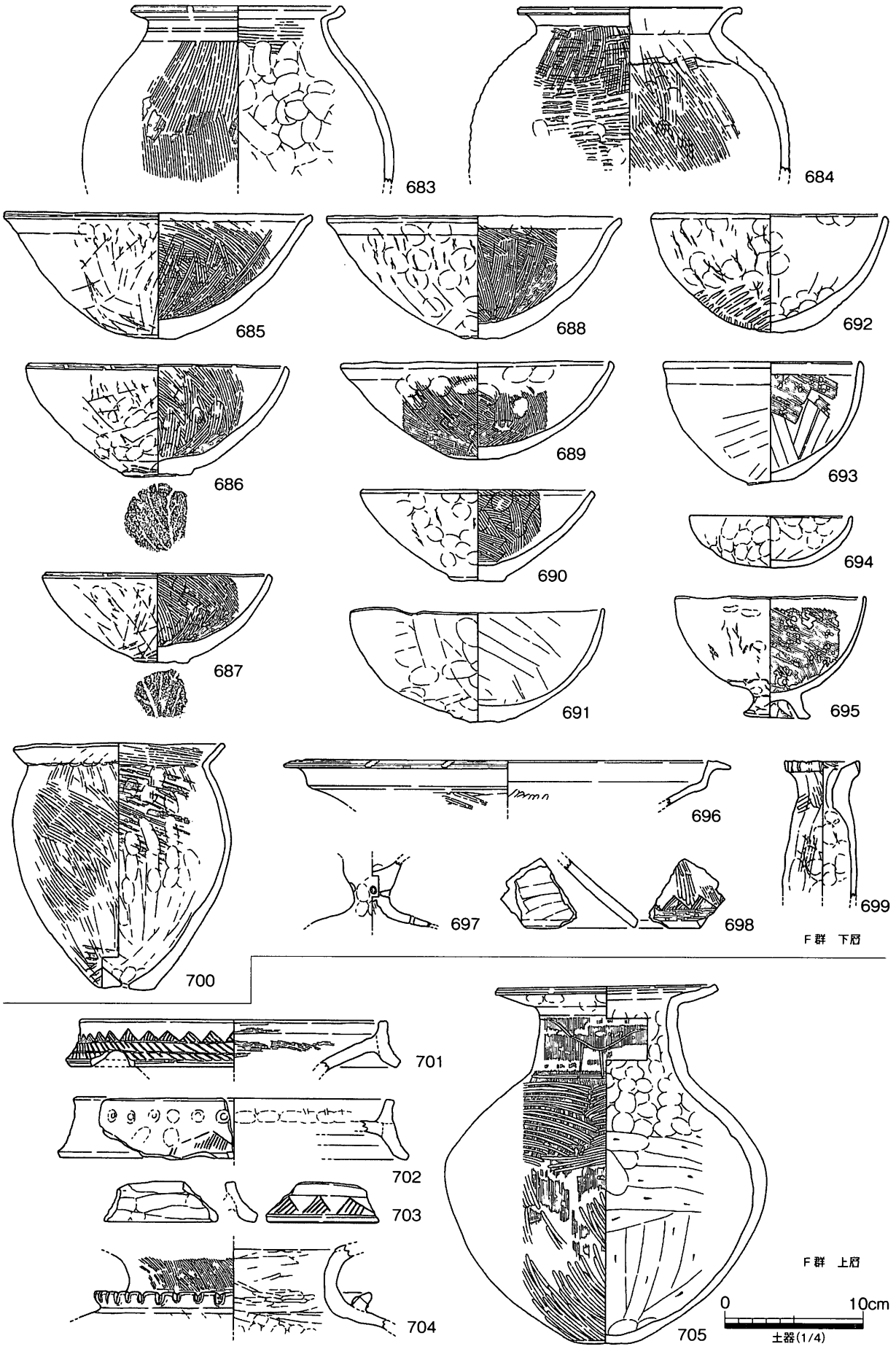
第169図　SDa70出土遺物（7）



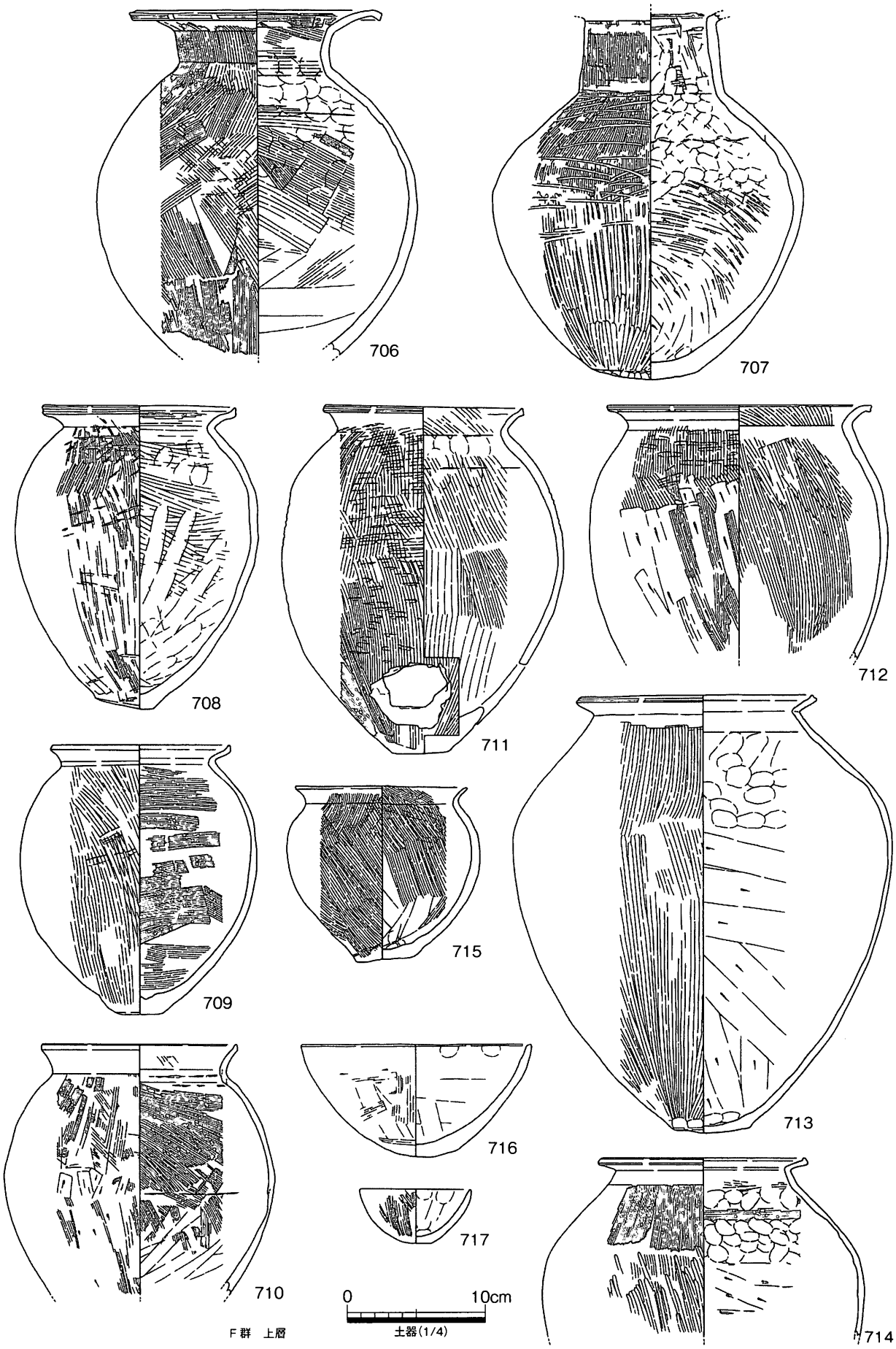
第 170 図　SDa70 出土遺物（8）



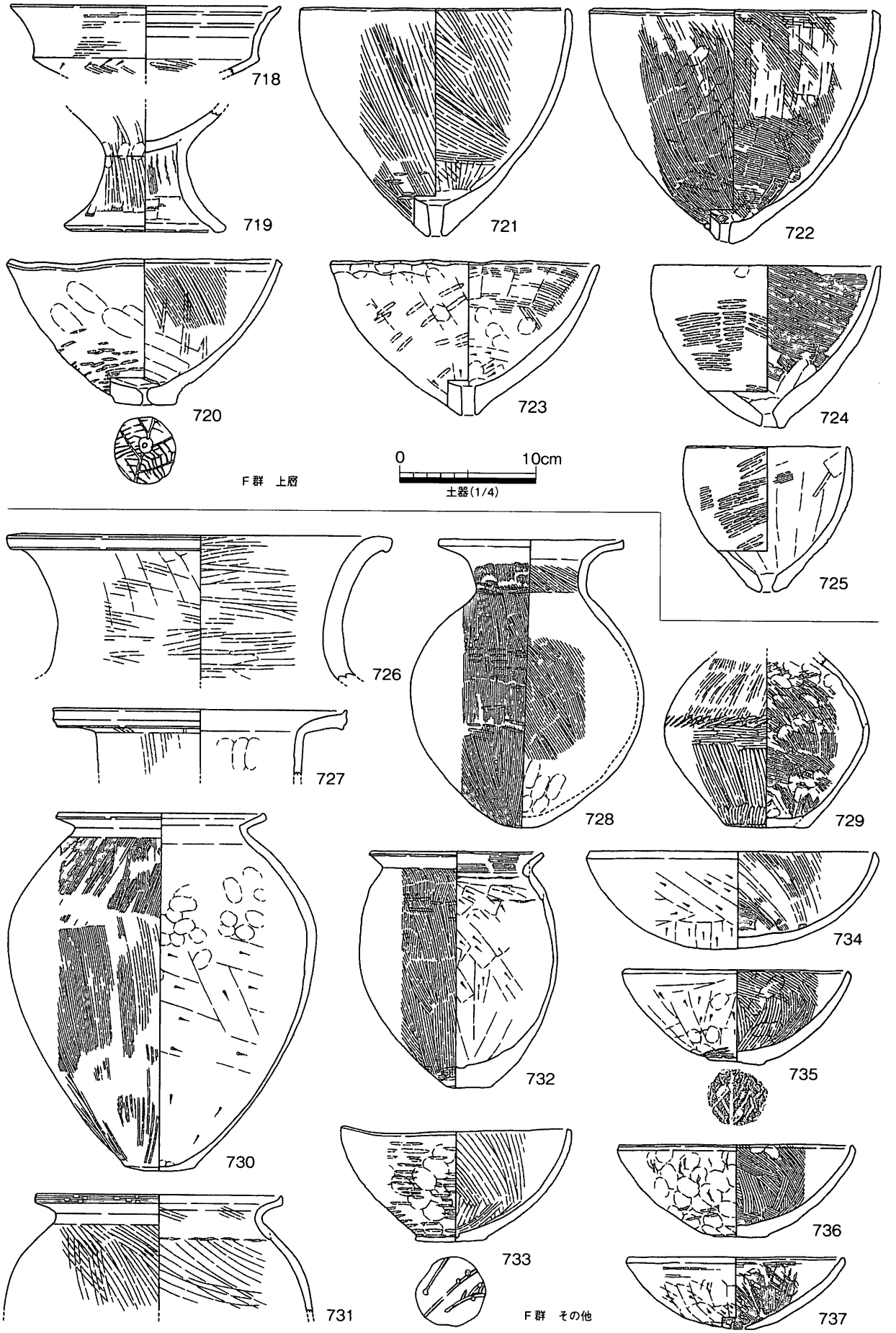
第 171 図　SDa70 出土遺物（9）



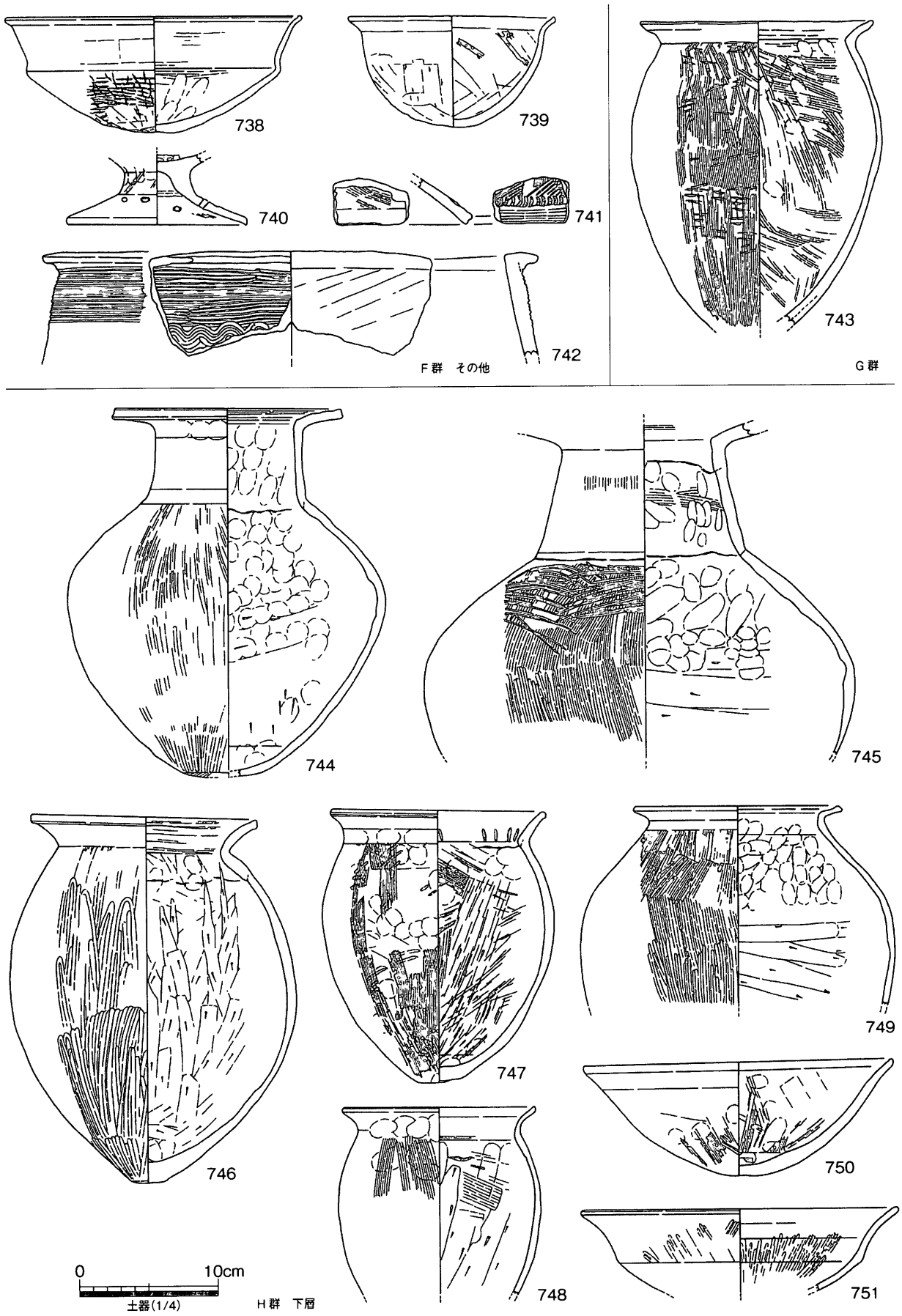
第 172 図　SDa70 出土遺物（10）



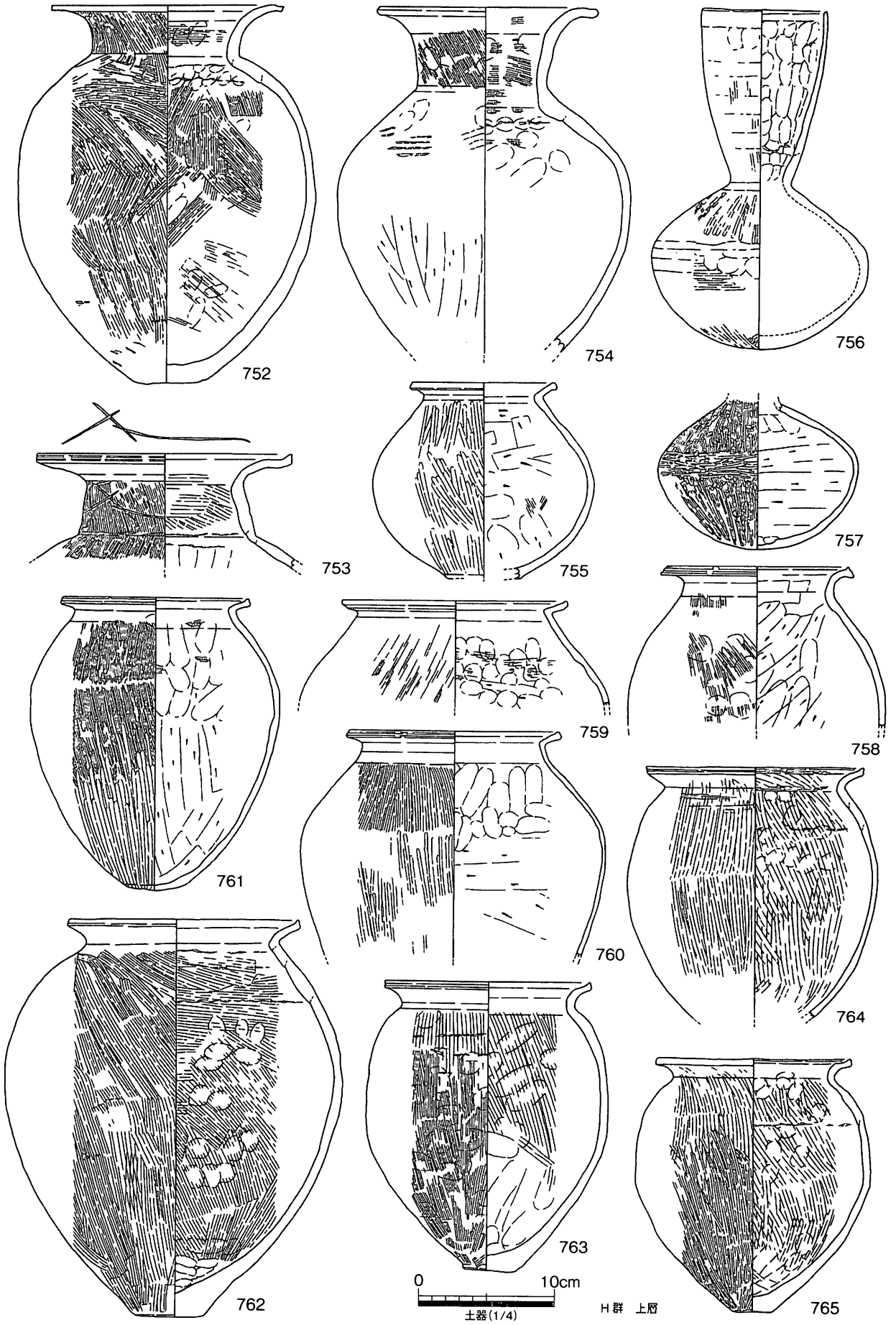
第173図　SDa70出土遺物（11）



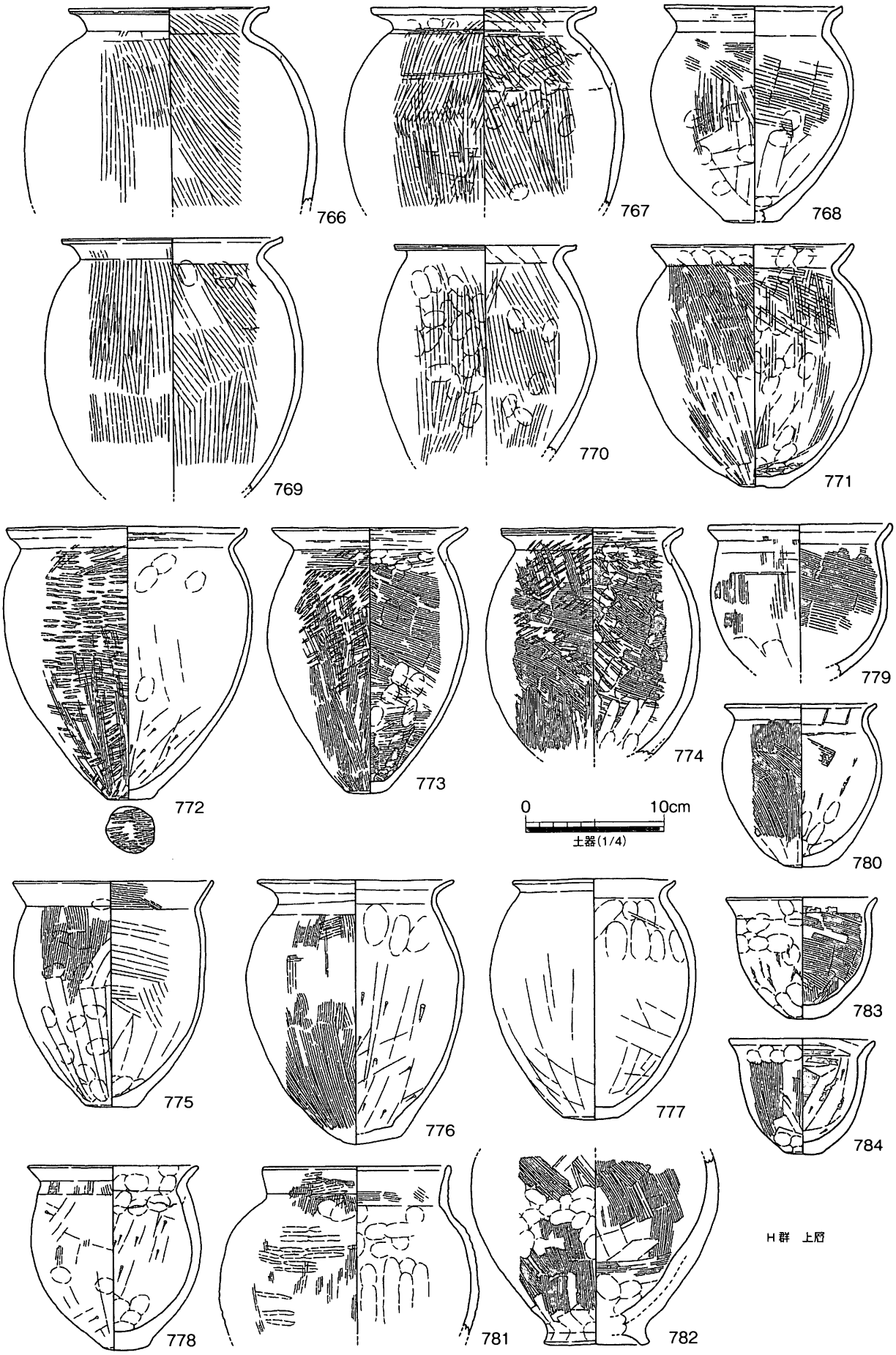
第174図　SDa70出土遺物（12）



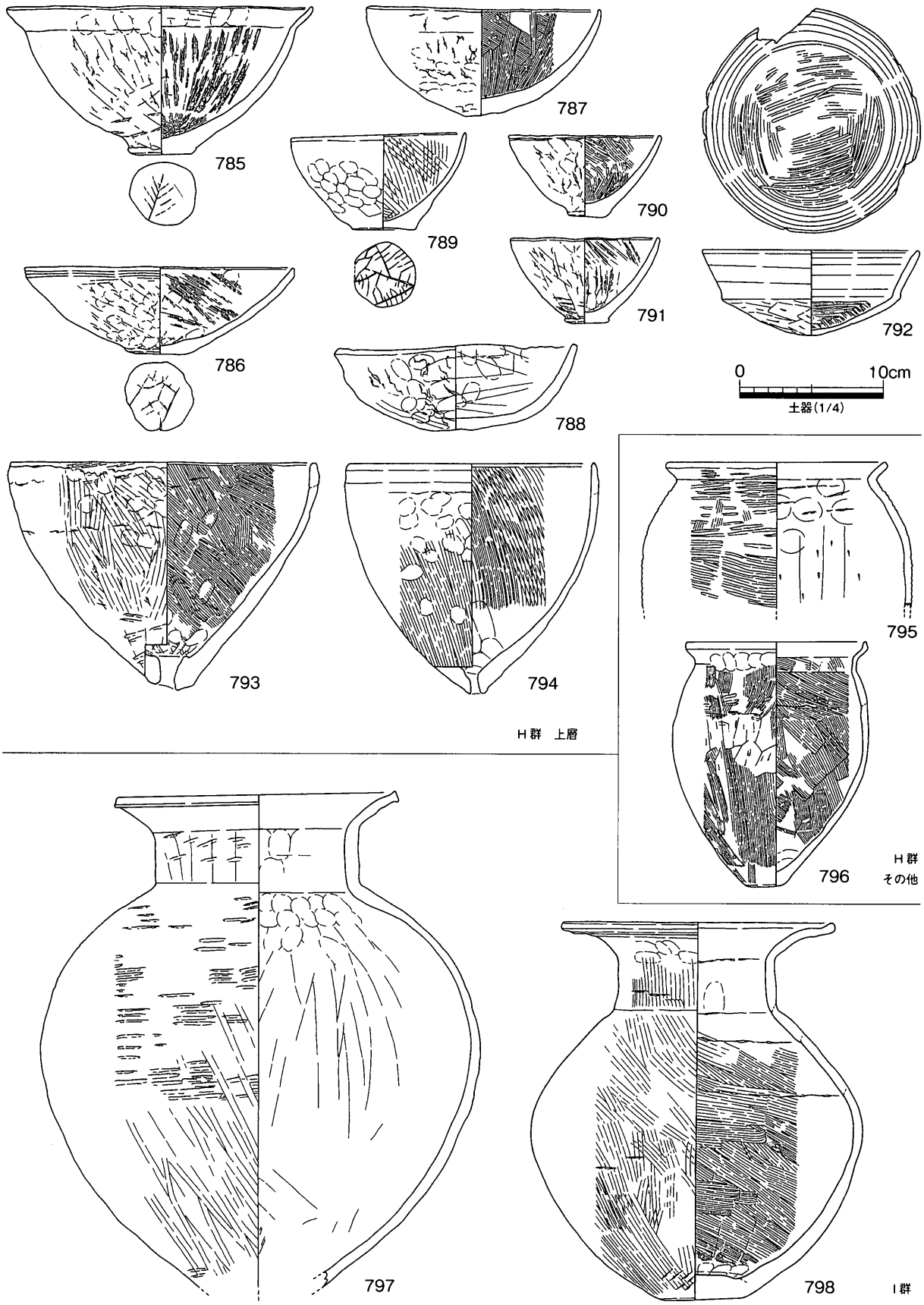
第175図　SDa70出土遺物（13）



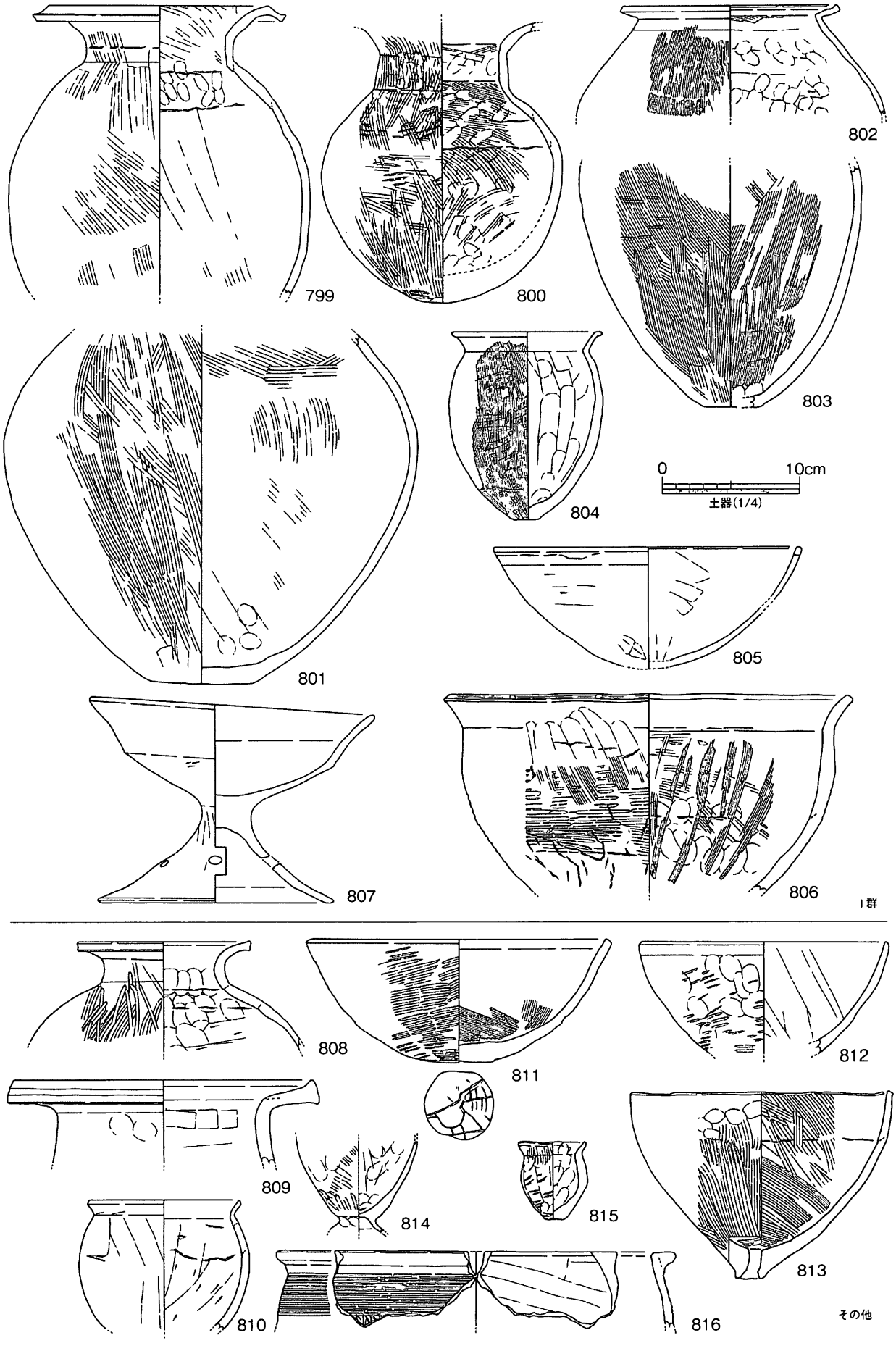
第176図　SDa70出土遺物（14）



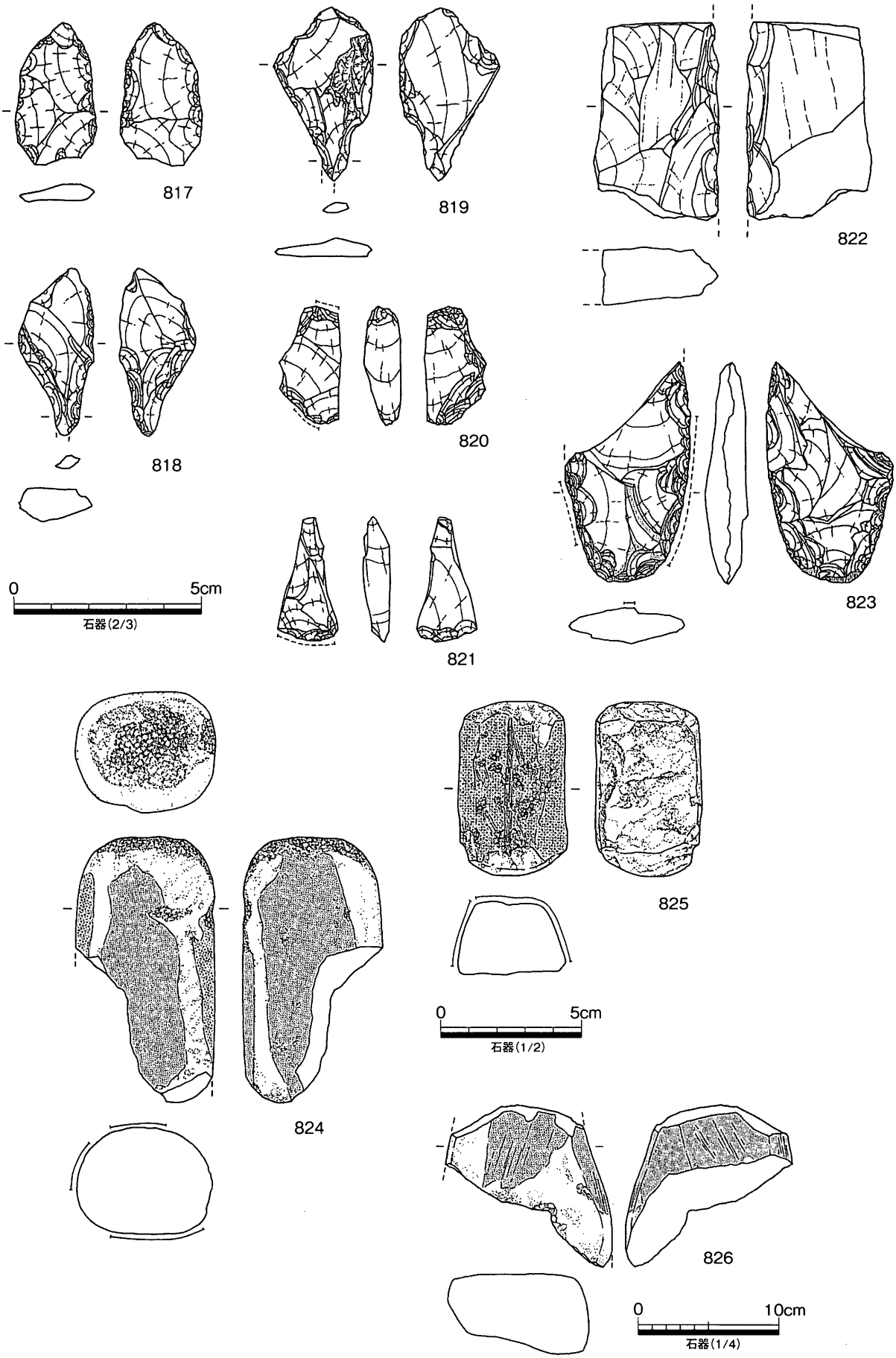
第177図　SDa70出土遺物（15）



第178図　SDa70出土遺物（16）



第179図　SDa70出土遺物（17）



第 180 図　SDa70 出土遺物（18）

オサエ、下半部にはヘラ削りを顕著に施している。597・598・600・601・603は頸部の短い広口壺である。600・603は口縁部を拡張させて凹線文を施している。後期前半頃の壺の上半部である。605・606は細頸壺の口頸部である。605は体部との境に、断面三角形の突帯を貼り付けている。607～626は後期中頃以降の甕である。607・608は下川津B類に類似した甕である。口縁部は体部から屈曲させて短く延び、端部を平坦に仕上げている。体部上半部には縦方向のハケ、下半部には縦方向のヘラミガキを施している。また、体部内面の上半部には顕著なオサエ、下半部には顕著なヘラ削りを施している。626は台付の甕である。底部に粗雑な脚台を貼り付けている。627～647は後期中頃以降の鉢である。644・646の小型の鉢を除き、他は平底を呈している。大きさによって数タイプに分かれる。628・629は片口の鉢である。628の口縁部は短く外反し、端部は丸く仕上げている。外面はハケ、タタキ、内面はハケ、ミガキを顕著に施している。648～652は高杯である。648・649は高杯の杯部である。口縁部は「ハ」の字状に外反し、端部は丸く仕上げている。底部は下方に丸味をもつ。調整はハケ及びミガキを施している。653は小型丸底壺に台を付した台付壺である。654～660は甑である。654・655の甕タイプの甑と、656～660の鉢タイプの甑とに分かれる。

F群の下層から出土したのは、661～699の土器である。661～670は壺である。670は中期中頃の無頸壺である。口縁部の下には貼付突帯、櫛描文等を施している。661は後期中頃の広口壺である。口縁部は「ハ」の字状に開き、頸部との境には突帯を貼り付けている。体部は球体化の傾向が見られ、底部は僅かに平底を呈している。調整はハケ及びミガキを顕著に施している。667は口縁部で、外面には数条の凹線文を施している。詳細な形状が解らないため壺に分類したが、吉備系の甕の可能性がある。668は細頸壺の口頸部である。671～684は甕である。671・672・676・683は下川津B類に類似した甕である。口縁部は体部から屈曲させ短く延び、端部を平坦に仕上げている。体部外面には縦方向のハケ及びヘラミガキを施している。また、体部内面の上半部には顕著なオサエ、下半部には顕著なヘラ削りを施している。685～695は鉢である。695は小型の脚台を貼り付けた台付鉢である。696は後期初頭頃の高杯杯部である。口縁部は屈曲し外反し、端部は平坦に拡張し複数の凹線文を施している。698は高杯の脚部である。下端部には鋸歯文が外周している。699は支脚である。700は甕形の甑である。

F群の上層から出土したのは、701～725の土器である。701～707は壺である。701～703は二重口縁の壺である。口縁部に鋸歯文、竹管文等の装飾性の高い文様を顕著に施している。704は壺の頸部である。形状から本来は二重口縁の壺と考えられる。頸部の下端には、断面三角形の突帯を貼り付け、ヘラ状工具により刻目を施している。705・707は下川津B類に類似した、広口壺である。705の頸部にはヘラ状工具により記号文を描いている。708～715は甕である。708～712・715は後期中頃の甕である。713・714は下川津B類の甕である。口縁部は体部から屈曲させて短く延び、端部を平坦に仕上げでいる。体部上半部には縦方向のハケ、下半部には縦方向のヘラミガキを施している。また、体部内面の上半部には顕著なオサエ、下半部には顕著なヘラ削りを施している。716・717は鉢である。718は下川津B類に類似した高杯の杯部である。720～725は鉢形の甑である。

726～742はF群から出土した、層位不明の土器である。726～729は壺である。729は中期後半の口頸部を欠く広口壺である。体部中央に最大径をもち、底部はしっかりとした平底を呈する。728は後期中頃以降の広口壺である。口縁部は「ハ」の字状に開き、端部を平坦に仕上げている。体部は球体し、底部に平底を僅かに残す。調整は縦方向のハケ、タタキ等を施している。730～732・742は甕である。730は下川津B類の甕である。口縁部は体部から屈曲させて短く延び、端部を平坦に仕上げている。体

部上半部には縦方向のハケ、下半部には縦方向のヘラミガキを施している。また、体部内面の上半部にはオサエ、下半部にはヘラ削りを顕著に施している。731・732は後期中頃の甕である。742は中期前半の甕口縁部である。断面三角形の突帯を貼り付け、口縁部下には櫛描直線文及び櫛描波状文を施している。733～739は鉢である。740·741は高杯脚部である。741は脚部の端部である。鋸歯文、半裁竹管文、凹線文等の装飾性の高い文様を施していることから、いわゆる装飾高杯の可能性が高い。

G群から出土したのは、743の甕である。口縁部は「ハ」の字状に開き、端部は尖り気味に仕上げている。体部は長胴気味に形成している。調整はハケ、タタキ、オサエ等が認められる。

H群の下層から出土したのは、744～751の土器である。744・745は下川津B類に類似した、広口壺である。口縁部は頸部から屈曲させ直線状に延び、端部を平坦に仕上げている。頸部は下方に開く様に直線状に延び体部に続く。体部は丸みを持ちながらも底部に続き、底部は平底を呈する。外面はハケ及びヘラミガキ、内面上半部にはオサエ、下半部にはヘラ削りを顕著に施している。

746～749は甕である。746～748は後期後半の甕である。749は下川津B類に類似した甕である。口縁部は体部から屈曲させて短く延び、端部を平坦に仕上げている。体部上半部には縦方向のハケ、下半部には縦方向のヘラミガキを施している。また、体部内面の上半部にはオサエ、下半部にはヘラ削りを顕著に施している。751は後期中頃以降の高杯杯部である。

H群の上層から出土したのは、752～794の土器である。752～757は壺である。752～754は後期中頃以降の広口壺である。752・754の口縁部は「ハ」の字状に開き、体部は長胴気味で底部は平底を呈する。753は下川津B類に類似した、広口壺の口頸部である。口縁部は頸部から屈曲させ直線状に延び、端部を平坦に仕上げた後、退化した凹線文を1条施している。頸部は下方に開く様に直線状に延びて体部に続く。外面は縦方向のハケ、内面上半部には横方向のハケを施している。なお、頸部外面にはヘラ状工具により直線状の記号文を施している。756・757は細頸壺である。758～782は甕である。758は後期前半の甕である。口縁部を上下に拡張して凹線文を施している。759·760は下川津B類の甕である。口縁部は体部から屈曲させて短く延び、端部を平坦に仕上げている。体部上半部には縦方向のハケ、下半部には縦方向のヘラミガキを施している。また、体部内面の上半部にはオサエ、下半部にはヘラ削りを顕著に施している。761は下川津B類に類似する甕である。759・760に類似しているが、体部・底部の形状を見る限り、一段階新しい様相を示している。766～769は体部が球体化しており、終末期に近い時期が考えられる。782は台付き甕の下半部である。783～792は鉢である。792は高杯の杯部に類似するタイプで、口縁部は屈曲し外上方に延びて端部は丸い。底部は丸底で、内面はヘラミガキ、外面はヘラ削りを施している。793・794は三角錐状を呈した鉢形の甑である。

I群から出土したのは、797～807の土器である。797～801は後期中頃以降の壺である。797・798は広口壺である。口縁部は頸部から屈曲させて直線状に延び、頸部は下方に筒状に延びて体部に続く。外面はハケ、タタキ、ヘラミガキ、内面にはハケ、板ナデ等を施している。802～804は甕である。802は下川津B類の甕である。口縁部は体部から屈曲させて短く延び、端部を平坦に仕上げている。体部上半部には縦方向のハケを施している。また、体部内面の上半部にはオサエを顕著に施している。807は後期中葉頃の高杯である。805・806は鉢である。806は大型の部類に属する鉢である。口縁部は屈曲して外上方に延びる。体部は椀状を呈し、外面にはタタキ、内面にはオサエとハケを施している。

808～816は土器溜り以外で出土した土器である。808・809は広口壺である。809の口縁部は、頸部から屈曲させて直線状に延び、端部を平坦に拡張させている。頸部は下方に筒状に延び体部に続く。

816は中期前半の甕口縁部である。口縁部には断面三角形状の突帯を貼り付け、口縁部下には櫛描直線文を顕著に施している。814は後期中頃の製塩土器である。この時期のものとしては珍しく、外面にタタキを施している。813は三角錐状を呈した、鉢形の甑である。

817～826はSDa70から出土した石器類である。817～821・823はサヌカイト製の打製石器で、817は石鏃の未製品、818・819は石錐、820・821は側縁部に裁断面をもつ楔形石器である。823は槍先形石器に分類したが、打製石庖丁の可能性がある。824は砂岩製の太型蛤刃石斧の基部である。822は安山岩製の打製石斧の側縁部である。825・826は砂岩製の砥石である。

2．自然河川跡

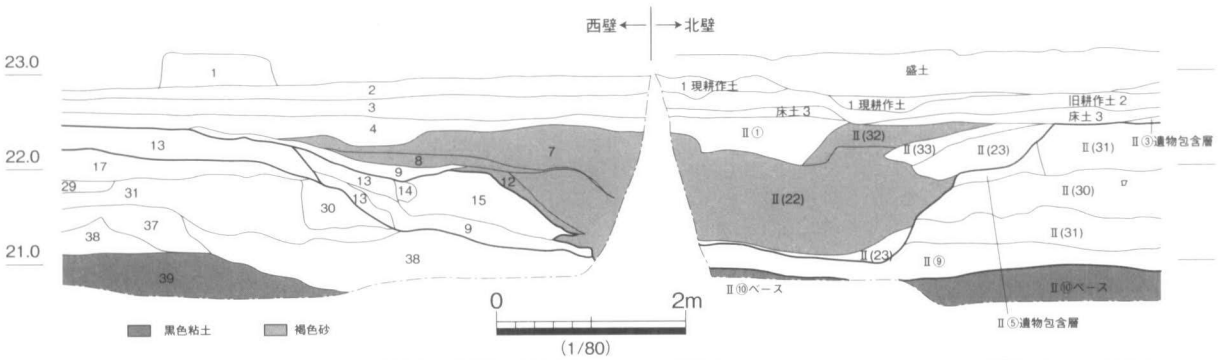
SRa02（第181図）

Ⅰ・Ⅲ・Ⅸ区の第3遺構面上で検出した自然河川跡である。Ⅰ区のSRa02は、ほぼ東西方向に流れ、Ⅰ区西端部のⅢ区との境界付近で北に大きく屈曲しⅢ区へ延びる。Ⅲ区の南端部ではSDa65と分岐し、その後、直線気味に北方向に流れ、Ⅸ区の北端部へ続く。Ⅸ区では南へ大きく蛇行して調査区の北西端部より調査区外へ延びる。蛇行する区間では、Ⅰ・Ⅲ区の形状に比べ幅も広く深さも深く、擂鉢状を呈している。

Ⅲ・Ⅸ区のSRa02北端部ではSDa66・67・70が、Ⅲ区南半部ではSDa64が、この河川跡を切り込んでいる。また、この河川跡の上位の第2遺構面上では、この河川跡と同じルート上に、SDa34・35等の溝状遺構を検出した。

Ⅰ・Ⅲ区の区間まで含めた検出長77 m以上、幅4.0～8.0 m以上を測る。深さは地点により差があるが、Ⅰ区では約1.3 m（河床面TP.約20.8 m）、Ⅲ区では約0.9 m（河床面TP.約21.3 m）、Ⅸ区では約1.6 m（河床面TP.約20.9 m）を測る。

Ⅲ区のSRa02では、微高地上の集落からの廃棄遺物と考えられる、多量の弥生時代後期中頃～後期後半頃の土器からなる土器溜りを、3地点で検出した。その土器溜りを南よりB群、C群、D群と仮



1 花崗土
2 現耕作土
3 灰茶色砂質土（旧耕作土）
4 淡灰褐色粘土（粗砂を含む）
7 褐色砂
8 淡灰色細砂と淡黒色シルトのラミナ層
9 灰色粘土
12 淡黒色有機層
13 黒色砂混じり粘土
14 黒色粘土
15 なし
17 淡黒色粘質土（砂質強）（遺物包含層）
29 暗灰色粘質土（砂質強）（遺物包含層）
30 暗灰褐色粗砂
31 暗青灰色シルト
37 淡青灰色細砂（わずかに粘質）
38 淡青灰色シルト、灰茶色粗砂、青灰色砂、淡黒色粘土より構成されるラミナ層
39 黒色粘土（ベース）
1 現耕作土
旧耕作土2
床土3
旧耕作土4
Ⅱ①
Ⅱ③遺物包含層
Ⅱ⑤遺物包含層
Ⅱ⑨
淡灰茶色砂質土
淡茶灰色砂質土
淡灰色砂質土
淡灰褐色粘土（粗砂を含む）
暗灰茶色砂質土
暗灰色粘質土（砂質強）
淡青灰色シルト、灰茶色粗砂、青灰色砂、淡黒色粘土より構成されるラミナ層
Ⅱ⑩ベース
Ⅱ(22)
Ⅱ(23)
Ⅱ(30)
Ⅱ(31)
Ⅱ(32)
Ⅱ(33)
黒色粘土
褐色砂
黒色砂混じり粘土
淡青灰色砂質土
暗褐色砂
灰褐色粗砂
暗灰色シルト

第181図　SRa02断面図

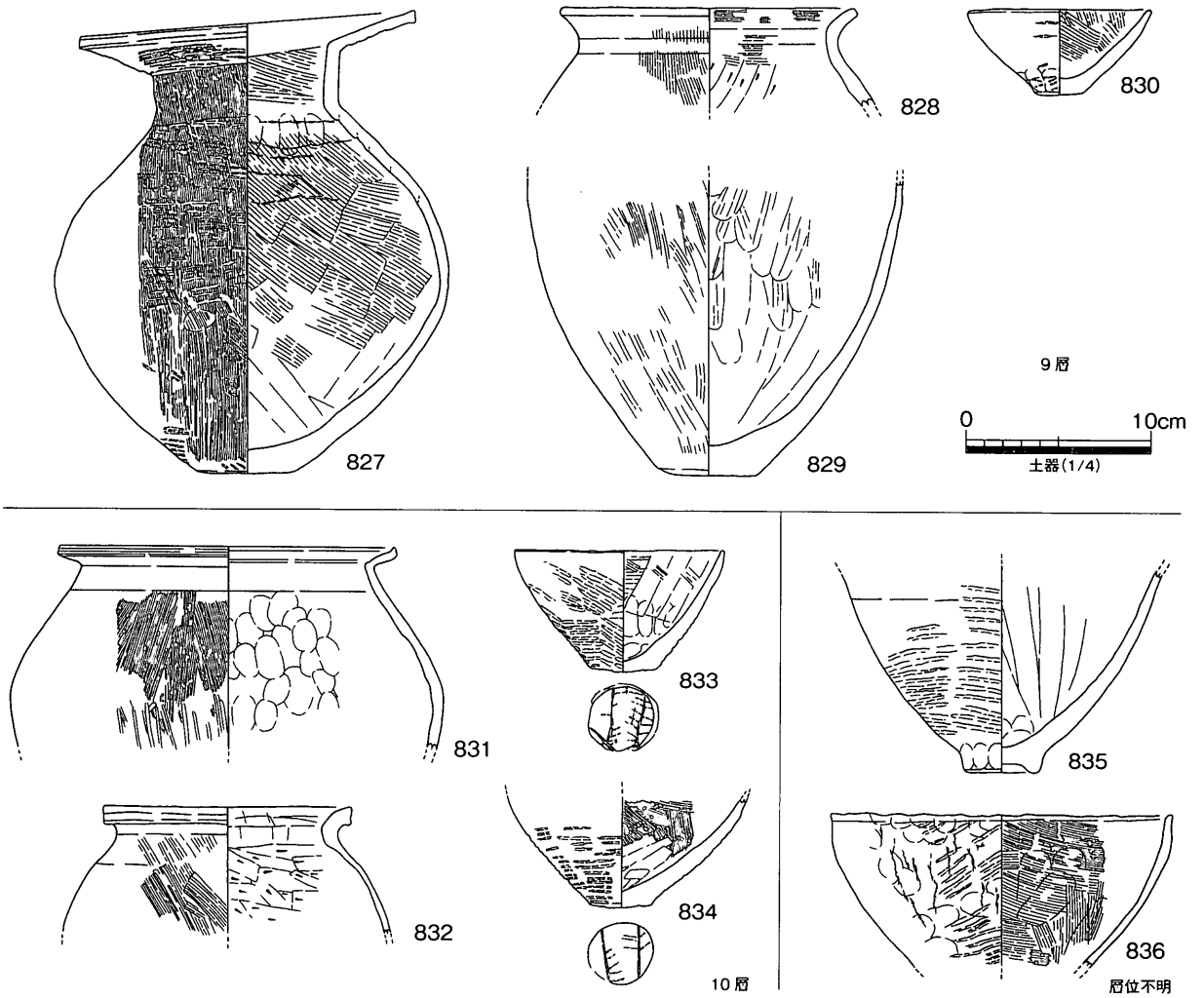
称した。この土器溜りからの出土遺物は64箱を数える。Ⅸ区のSRa02も、Ⅲ区同様に土器溜りを4地点で検出した。

SRa03（第147・148・182図）

Ⅰ・Ⅲ・Ⅸ区の第3遺構面上で検出した自然河川跡である。確認できたのは河川跡の東岸部で、最深部及び西岸部については調査区より外れる。河川跡の一部を検出したのみで不明な点が多いが、緩やかな傾斜を呈していることから、川幅の広い自然河川跡の可能性が高い。SRa03の東肩部は不整形な形状を呈し、Ⅰ・Ⅲ区及びⅨ区南東端部では東に突き出した摺鉢状の弧を描き、その先は北方向へ直線状に延びて西壁の中央付近で調査区外へ続く。この不整形な形状は、Ⅰ区のSRa01・02に類似し、おそらく河川が「S」字状に蛇行した際に形成された地形と考えられる。隣接するSRa02との前後関係は、Ⅲ区の南壁の土層から、SRa02より後出するものと考えられる。

検出長35.0m以上、検出幅10.0m以上を測る。微高地からの比高差は約2.0mを測る。

この河川跡の上位には淡灰褐色系の粗砂を主体とした、堆積砂（第147図3～8層）が約0.9mの厚さで堆積している。この堆積砂はかなり広範囲に堆積しており、SDa34・33・35等の埋土にもなっている。ラミナ状の堆積が認められることより、比較的短期に堆積したものと考えられ、この砂により南西辺部の低湿地部は、現地盤の高さ近くまで埋まっている。おそらく、SRa03の南にはこの堆積砂を埋土にし



第182図　SRa03出土遺物

た河川跡があり、その河川の氾濫により堆積したものと考えられる。

Ⅲ区のSRa03の下位層では、微高地上の集落からの廃棄遺物と考えられる多量の弥生時代後期後半～終末期の土器からなる土器溜りA群を検出しているが、Ⅸ区では、Ⅲ区に比べかなり出土遺物が少ない。

出土遺物としては弥生時代後期中頃の土器と石器が出土した。827～830はⅨ区南壁9層（第147図）から出土した土器である。827は広口壺である。口縁部は頸部から屈曲させて直線状に延び、端部を平坦に仕上げている。頸部は下方に筒状に延び体部に続く。体部は丸みを持ちながらも底部に続き、底部は平底を呈する。外面はハケ及びヘラミガキ、タタキ、内面にはハケ及び板ナデを顕著に施している。828・829は甕で、830は小型の鉢である。831～834はⅨ区南壁10層（第147図）から出土した土器である。831は下川津B類の甕である。口縁部は体部から屈曲させて短く延び、端部を平坦に仕上げている。体部上半部には縦方向のハケ、下半部には僅かにヘラミガキを施している。また、体部内面の上半部にはオサエを顕著に施している。833･834は鉢である。底部は平底で、外面にタタキ、内面にハケ、板ナデを施している。

3．包含層出土の遺物（第183～191図）

Ⅸ区の堆積層中からは多量の遺物が出土した。特にSDa64の東半部の北肩部からSDa70周辺の堆積層中からは、多量の弥生時代後期後半の土器が出土している。遺物の取り上げについては、調査区中央部に設定したＴｒ②及びⅨ区西壁の層位（第148図参照）を基準にして取り上げを行った。それらの中より代表的な遺物を報告する。

837～867はSDa64の北肩部からSDa70周辺に堆積する、Ｔｒ②19層から出土した弥生時代後期中頃の土器である。なお、837～841・847・853・854・856・857・866は、SDa64の肩口周辺から出土した土器である。837～848は壺である。838・841は下川津B類の広口壺である。口縁部は頸部から屈曲させ水平気味に延び､端部を平坦に仕上げている。頸部は下方に開き気味に直線状に延びて体部に続く。体部は丸みを持ちながらも底部に続き、底部は平底を残す。外面はハケ及びヘラミガキ、内面上半部にはオサエ、下半部にはヘラ削りを顕著に施している。849～858は甕である。858は中期前半の甕の上半部である。口縁部は如意状に屈曲し端部を丸く仕上げている。口縁下には櫛描直線文及び櫛描波状文を施している。859～863は鉢である。864～866は鉢の形状を呈する甑である。867は板状の土製品である。２方向に管状の細穴を穿っている。

868～870はＴｒ②19層の直上に堆積する、Ｔｒ②13層から出土した土器である。868は広口壺の上半部である。869は上半部を欠く甕である。底部は尖り気味で、僅かに平底を呈する。870は甕形の甑である。

871～880はⅨ区の南半部に堆積している、Ｔｒ②26・36層ないしⅨ区西壁17・18相当層から出土した土器である。871～875は壺である。871は弥生時代後期前半の大型の広口壺である。口縁部は「ハ」の字状に開き、端部僅かに拡張し数条の凹線文を施す。体部の最大径は上位に位置し、底部は平底を呈する様である。外面にはヘラミガキ、内面にはナデ、オサエ、ヘラ削り等を施す。872は後期中頃以降の広口壺である。口縁部は頸部から屈曲気味に「ハ」の字状に広がり、端部には数条の凹線文を施す。頸部は下方に開き気味に筒状に延びて体部に続く。体部は丸みを持ちながらも底部に続き、底部は僅か

に平底を残す。外面はハケ及びヘラミガキ、内面にはオサエ、ヘラ削りを施している。876～880は甕である。

881～887はＴｒ②19層の直上に堆積する、Ｔｒ②12～13相当層から出土した土器である。881は小型丸底壺、882・883は甕、884は鉢である。885・886は弥生時代後期前半頃の高杯杯部である。

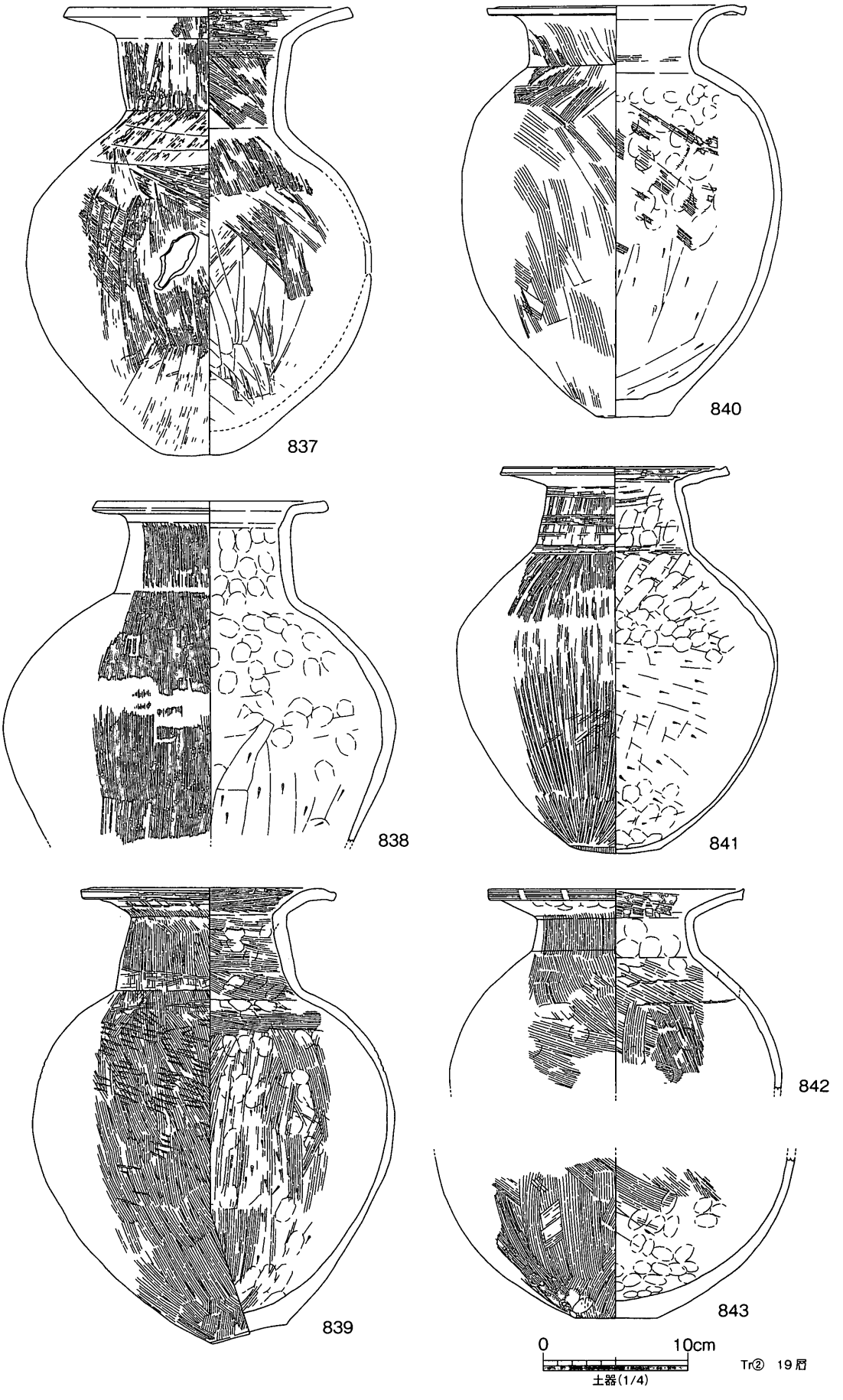
888～925は出土状況が不明瞭な土器の中で、残りが良いものや、特徴的な土器を図化したものである。888～898は壺である。888は畿内系と考えられる、広口壺口頸部である。口縁部の内外面には竹管文を廻らせている。894は山陰系と考えられる、二重口縁の壺である。896・897は西瀬戸内系と考えられる壺である。口縁部は「ハ」の字状に開き、体部との境には突帯を貼り付け、体部は長胴気味である。899～912は甕である。899～901は下川津Ｂ類に類似した、後期後半の甕上半部である。体部は球体気味に張り、外面はハケ、内面上半部にはオサエ、下半部にはヘラ削りを顕著に施している。909～912は中期前半の甕上半部である。918～921は高杯である。918は、形状から西瀬戸内系と考えられる高杯である。922は長方形状の透し穴を配した、器台の下半部である。923は台付鉢の底部である。底部には２穴一対の小穴を穿っている。924は後期中頃の製塩土器である。体部は「ハ」の字状に開き、外面にはヘラ削りを施している。926は土玉である。

927～932はサヌカイト製の打製石器である。927・928は楔形石器である。裁断面が認められていないところから、ほとんど使用されていないものと考えられる。929～931は凹基式石鏃である。932は船底状に成形した、素材の短辺を作業面とした石核である。作業面上には上端に位置する打面からの加撃痕が、顕著に認められる。934は緑色岩製の刃部を欠く太型蛤刃石斧である。上部には柄に装着するためか、抉りを左右両面に施している。935は結晶片岩製の刃部を欠く柱状片刃石斧である。

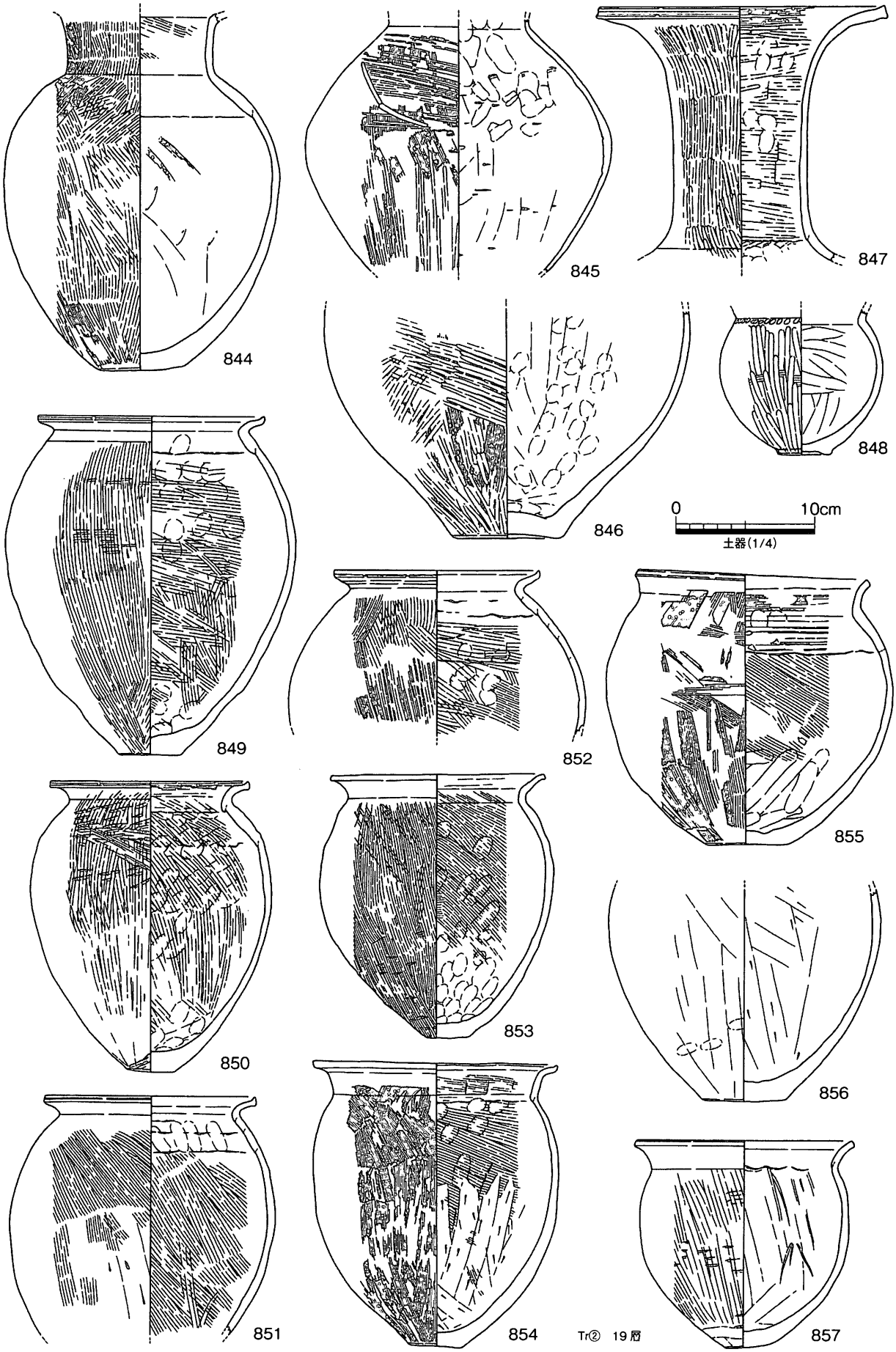
937～941はⅨ区の東に隣接するⅡ・Ⅲ区から出土した包含層出土の石器の中で、平成19年度の報告にもれた資料である。937・938は結晶片岩製の打製石庖丁である。両端部には抉りを施している。939はサヌカイト製の打製石庖丁である。940はサヌカイト製の槍先形石器である。槍先形石器は相対的に数が少なく、残りが悪いものが多いが、この資料は保存状態が良好である。

参考文献

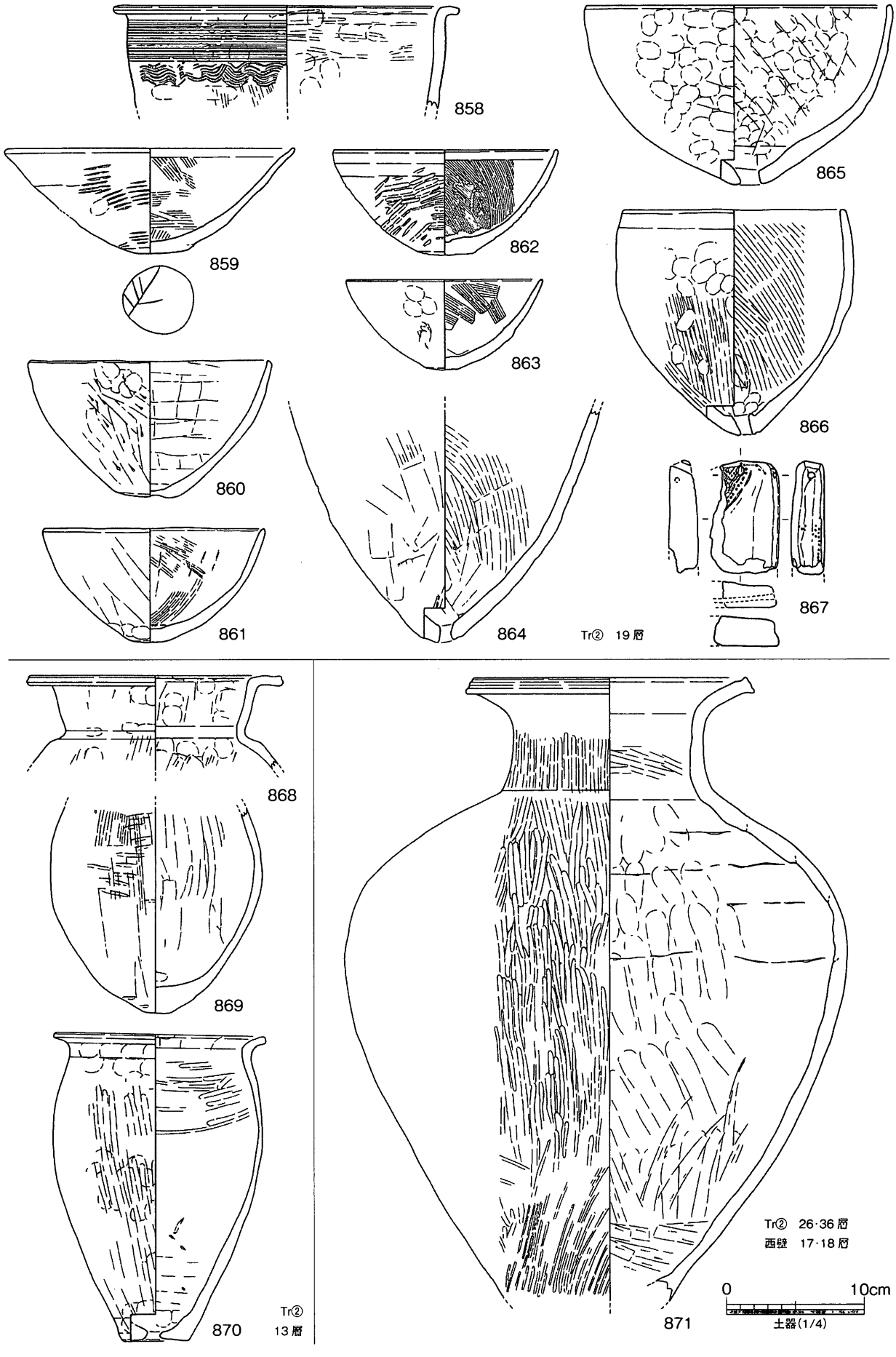
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団　1990
『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅶ　下川津遺跡』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1995
平成６年度「鹿伏・中所遺跡」『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1996
平成７年度「鹿伏・中所遺跡」『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会　2008「鹿伏・中所遺跡Ⅰ」『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊』



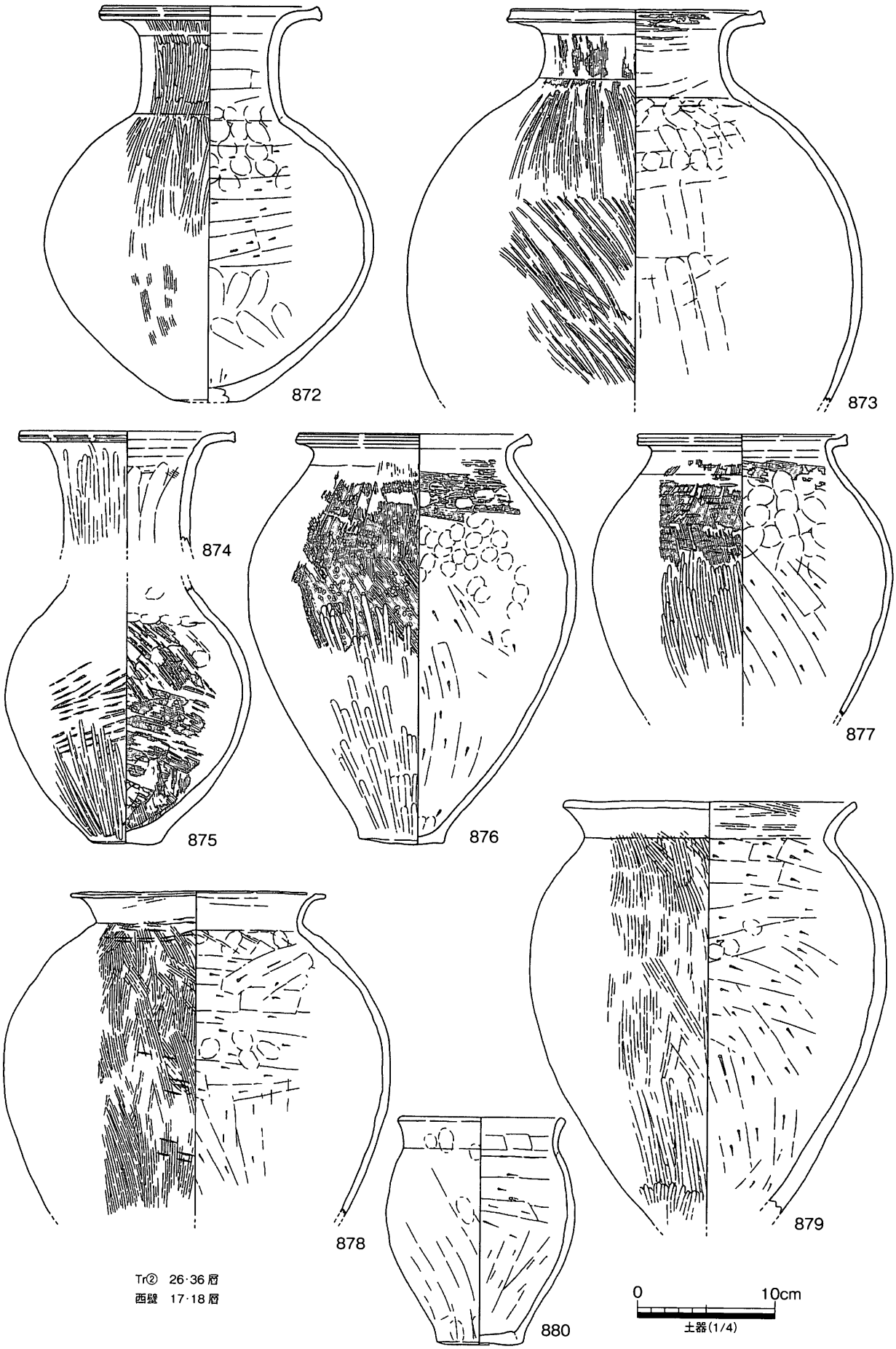
第183図　Ⅸ区包含層出土遺物（1）



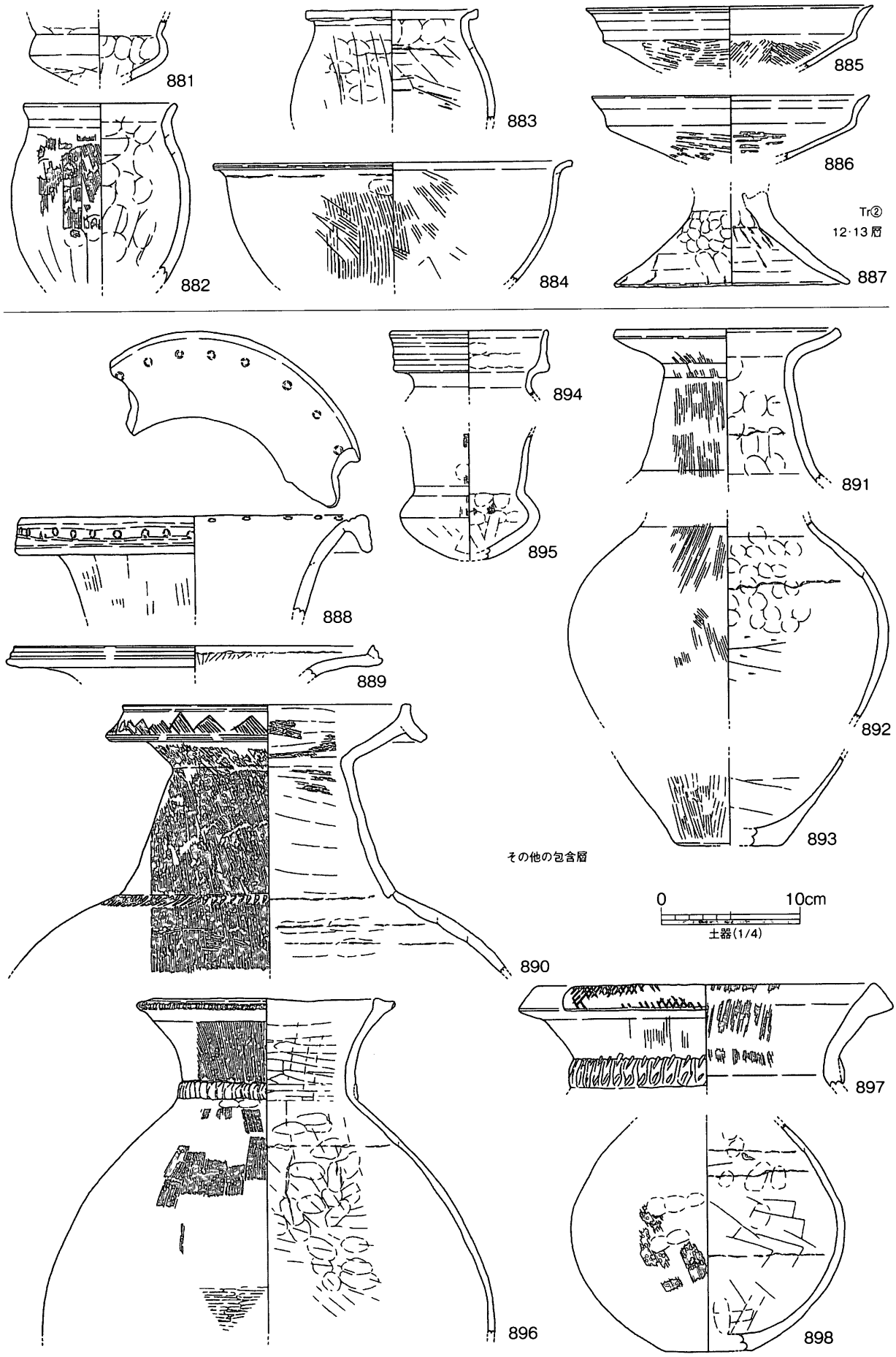
第184図　Ⅸ区包含層出土遺物（2）



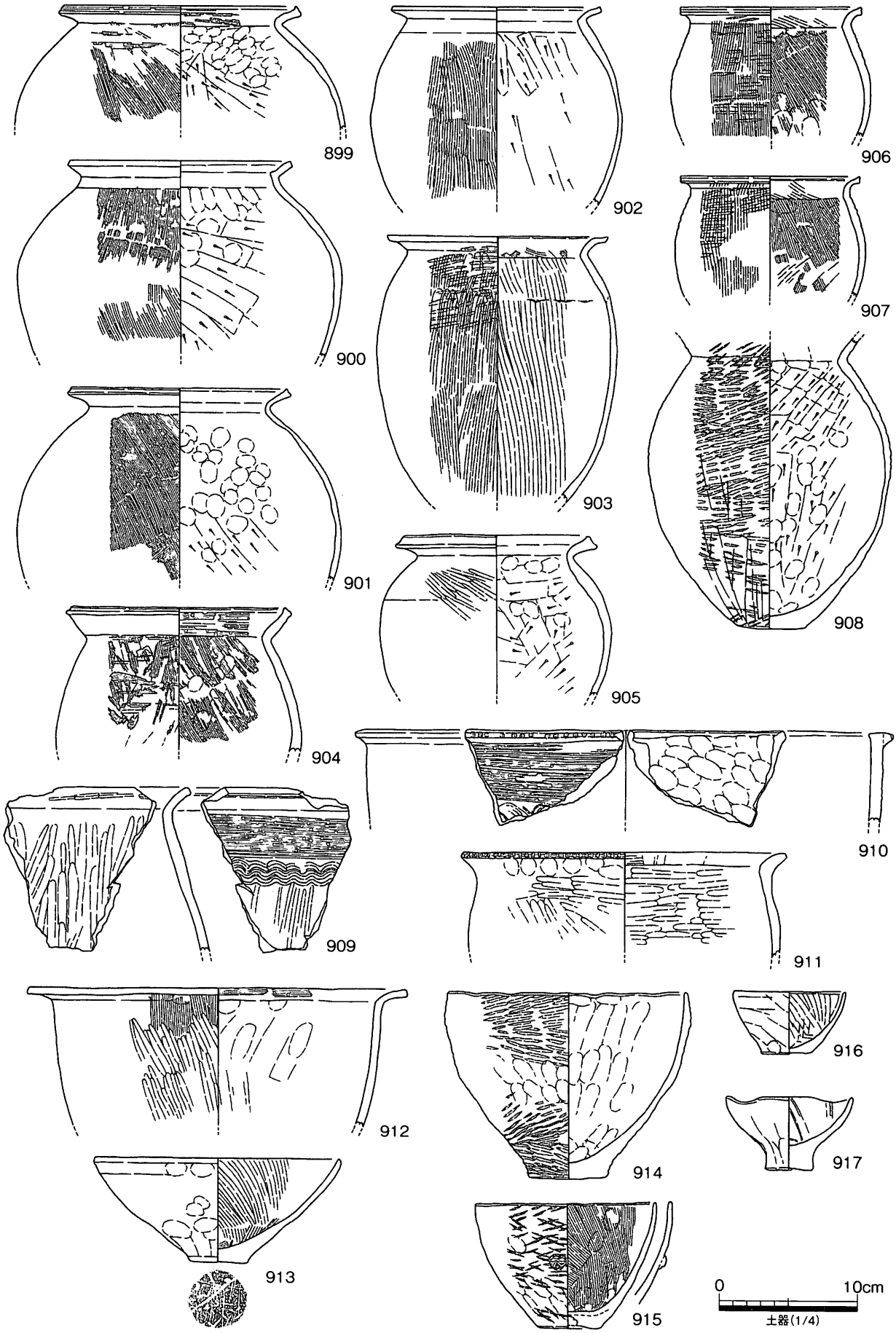
第185図　Ⅸ区包含層出土遺物（3）



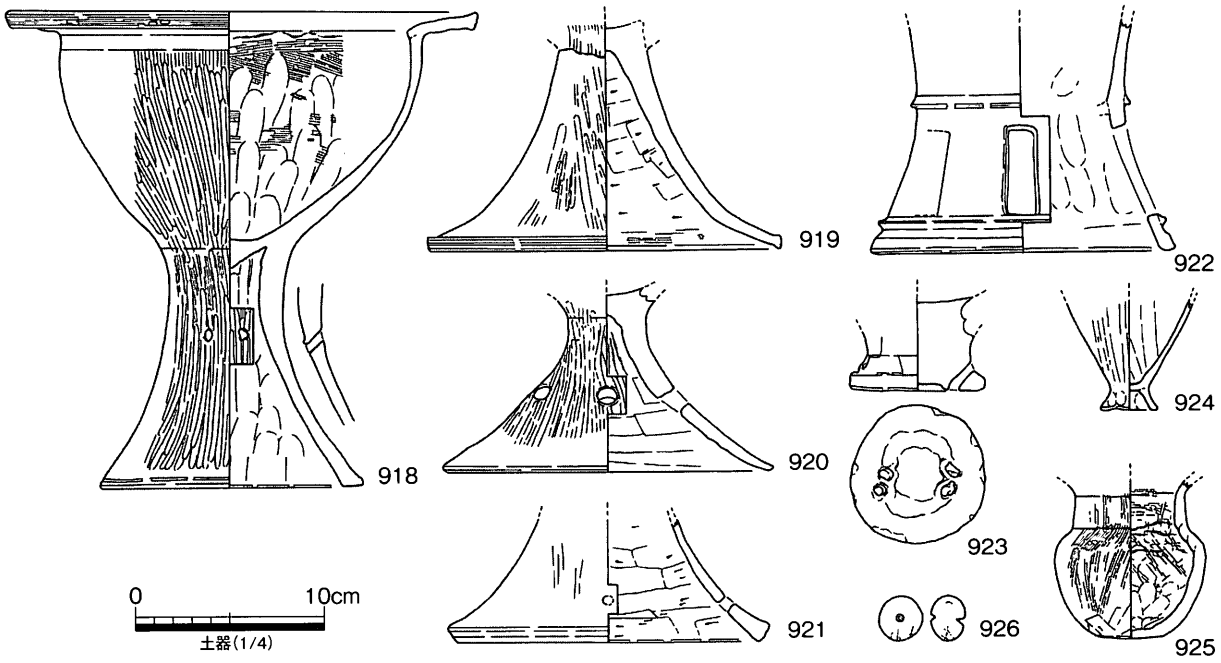
第186図　Ⅸ区包含層出土遺物（4）

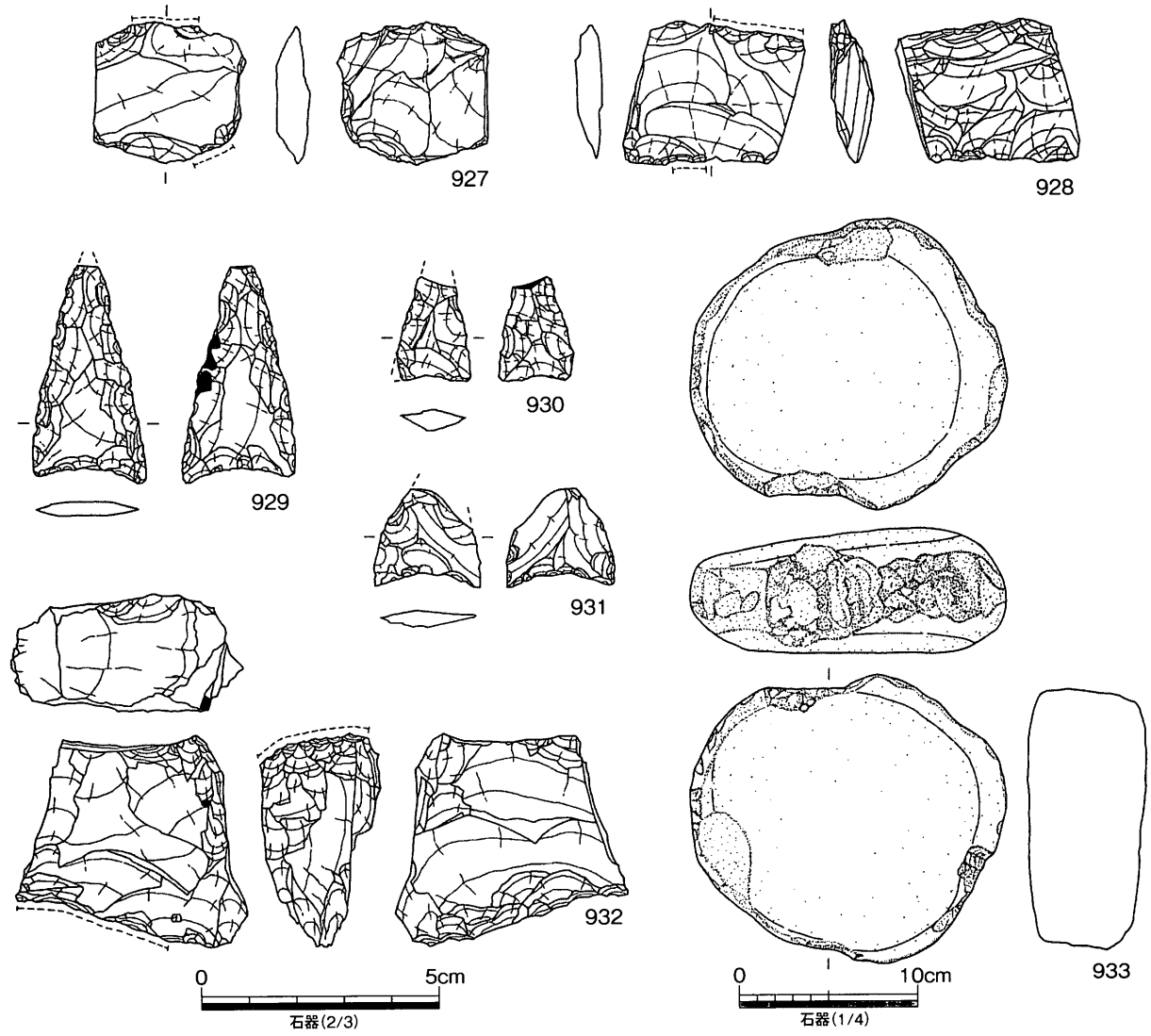


第187図　Ⅸ区包含層出土遺物（5）

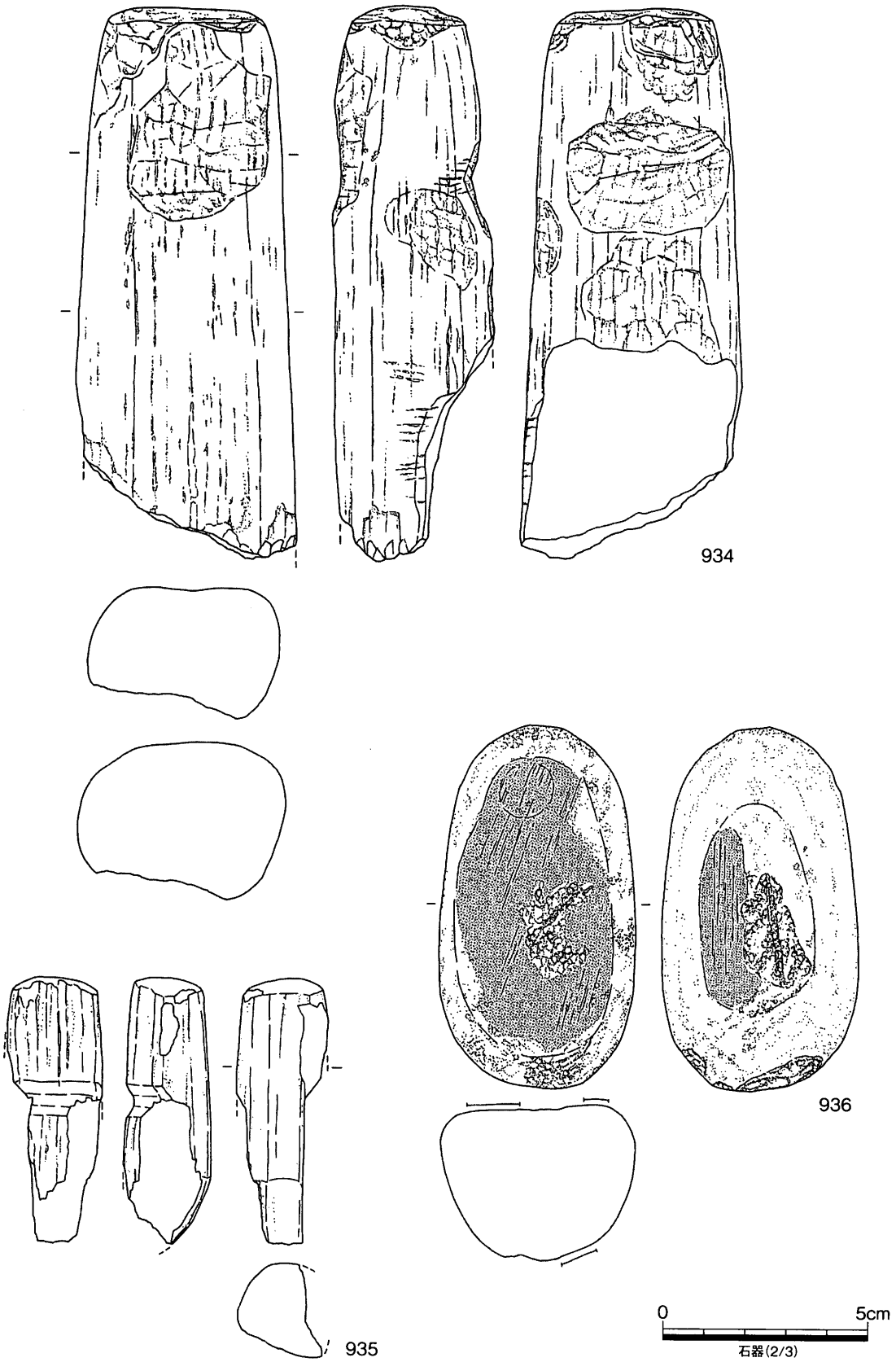


第188図　Ⅸ区包含層出土遺物（6）

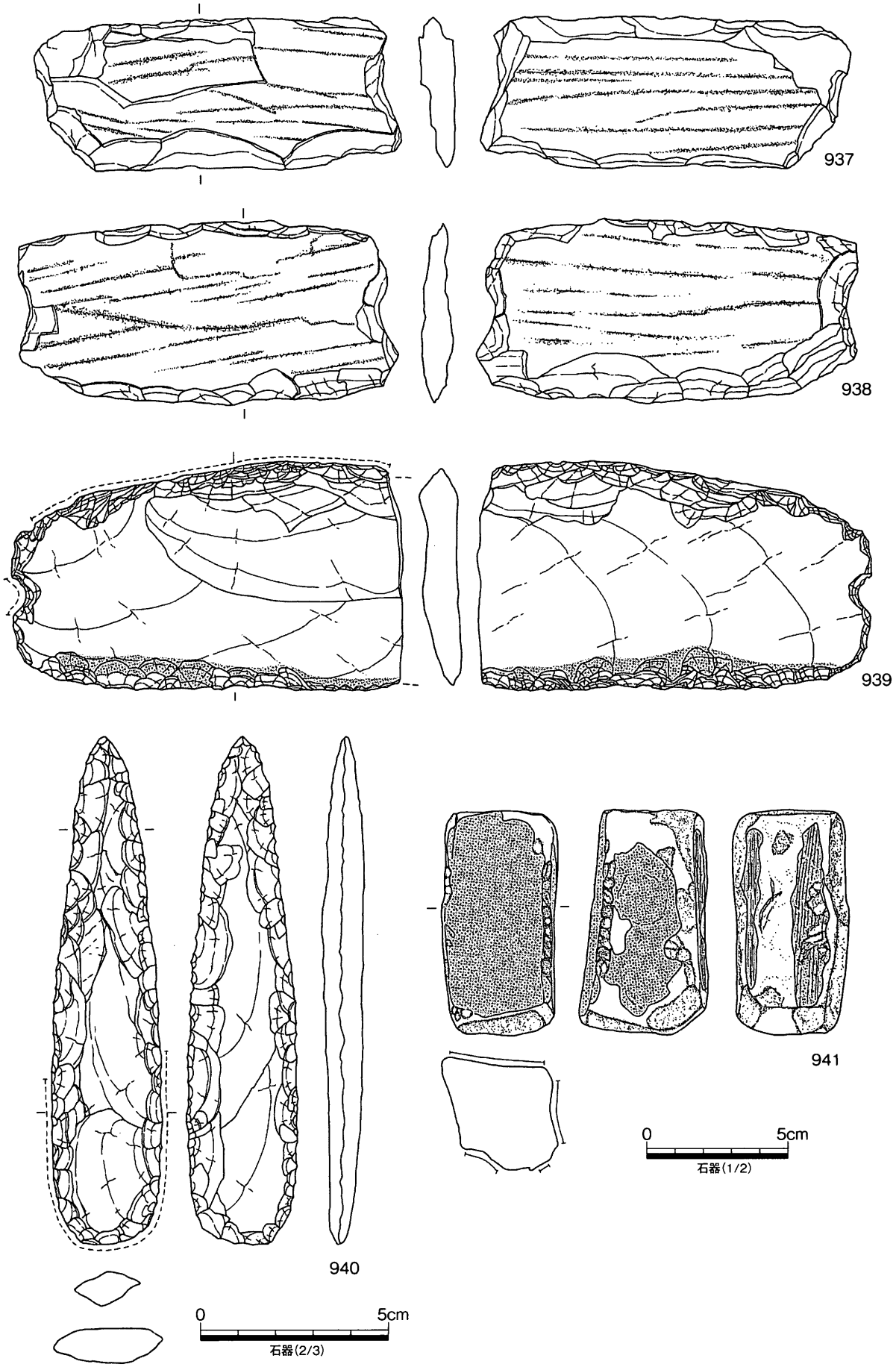




第189図　Ⅸ区包含層出土遺物（7）



第190図　Ⅸ区包含層出土遺物（8）



第191図　Ⅱ・Ⅲ区出土遺物

第192図　ウ区・周辺調査区 第3遺構面遺構分布図

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　鹿伏・中所遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、鹿伏・中所遺跡より出土した弥生時代終末期の柱材 28 点、木８点の合計 36 点である。

３．方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

第５表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

モミ属　Abies　マツ科　（第 193 図）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に５種が自生し、そのうちウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの４種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ 45 m、径 1.5 mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

ツガ属　Tsuga　マツ科　（第 193 図）

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、１分野に２～４個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存

在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりツガ属に同定される。ツガ属には、ツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ 20 ～ 25 m、径 50 ～ 80cm である。材は耐朽性、保存性ともに中庸で建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Endl.　ヒノキ科　（第 193 図）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で 1 分野に 2 個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1 ～ 15 細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 40 m、径 1.5 m に達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

ヒノキ科　Cupressaceae

横断面、放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔の型及び 1 分野に存在する個数が不明瞭なものはヒノキ科とした。

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、分野壁孔の型及び 1 分野に存在する個数が不明瞭である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりヒノキ科に同定される。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　（第 194 図）

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20m、径 40cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 30 m、径 2 m に達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸榾木など広く用いられる。

コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　（第 194 図）

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1 ～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15 m、径 60cm ぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　(第 194・195 図)

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ 15 m、径 60cm に達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

ヤマグワ　Morus australis Poiret　クワ科　(第 195 図)

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは２～３個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の１～３細胞ぐらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、１～６細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ 10 ～ 15m、径 30 ～ 40cm である。材は堅硬で靭性に富み、建築などに用いられる。

ヤブニッケイ　Cinnamomum japonicum Sieb.　クスノキ科　(第 195 図)

横断面：やや小型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および数の少ない階段穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりヤブニッケイに同定される。ヤブニッケイは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ 15 m、径１mに達する。材は強さ中庸で、家具、器具、薪炭などに用いられる。

サカキ　Cleyera japonica Thunb.　ツバキ科　（第196図）

横断面：小型の道管が、単独ないし２個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ８～10ｍ、径20～30cmである。材は強靭かつ堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ツルウメモドキ属　Celastrus　ニシキギ科　（第196図）

横断面：年輪のはじめに大型の丸い道管が、ほぼ単独で配列する環孔材である。晩財部では、角張ったごく小型の小道管が、多数集合して帯状に配列する傾向を示す。早材部から晩材部にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面:道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、単列のものと、12細胞幅を超え高さは４mmに達する大型のものからなる。

以上の形質よりツルウメモドキ属に同定される。ツルウメモドキ属にはツルウメモドキ、オオツルウメモドキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の蔓性植物である。

ノブドウ属　Ampelopsis　ブドウ科　（第196図）

横断面：年輪のはじめに大型の丸い道管が、ほぼ単独で配列する環孔材である。孔圏部外では、やや角張った小道管が、単独あるいは数個複合してまばらに散在する環孔材である。早材部から晩材部にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は階段状である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、６細胞幅程度で高さは３mmに達するが、大きいものは12細胞幅を超える。

以上の形質よりノブドウ属に同定される。ノブドウ属にはノブドウ、ウドカズラがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の蔓性植物である。

５．所見

鹿伏・中所遺跡出土の木材は、モミ属２点、ツガ属３点、ヒノキ８点、ヒノキ科１点、クリ３点、コナラ属コナラ節５点、コナラ属クヌギ節９点、ヤマグワ１点、ヤブニッケイ１点、サカキ１点、ツルウメモドキ属１点、ノブドウ属１点であった。

そのうち柱材28点は、モミ属２点、ツガ属３点、ヒノキ８点、ヒノキ科１点、クリ３点、コナラ属コナラ節５点、コナラ属クヌギ節４点、ヤマグワ１点、ヤブニッケイ１点であった。ヒノキを主とする針葉樹、コナラ属を主とする落葉広葉樹が多く、照葉樹は少ない。

針葉樹は木理通直で大きな材がとれ、ヒノキないしヒノキ科の木材は特に良材である。ツガ属は耐朽性、保存性は中庸の材で、切削、加工はあまり容易でない。モミ属は温帯性のモミと考えられ、耐久性、

保存性ともに低いが、軽軟なことから加工が容易な木材である。落葉広葉樹のうちコナラ属コナラ節やコナラ属クヌギ節といったコナラ属の木材は、概して弾力に富んだ強い材であり、クリは重厚で保存性が良い材で、ヤマグワはやや堅硬で靱性に富む材である。照葉樹のヤブニッケイは強さ中庸の材である。いずれも、高木となり大材がとれる樹種である。

その他の加工木もしくは自然木と考えられる木材８点は、コナラ属クヌギ節５点、サカキ１点、ツルウメモドキ属１点、ノブドウ属１点であった。サカキは強靱で堅硬な材である。ツルウメモドキ属とノブドウ属は蔓性植物である。

モミ属、ツガ属、ヒノキ、ヒノキ科は、温帯を中心に広く分布する針葉樹である。クリ、コナラ属コナラ節、コナラ属クヌギ節、ヤマグワ、ヤブニッケイ、サカキ、ツルウメモドキ属、ノブドウ属は温帯もしくは温帯下部の暖温帯に分布する広葉樹である。

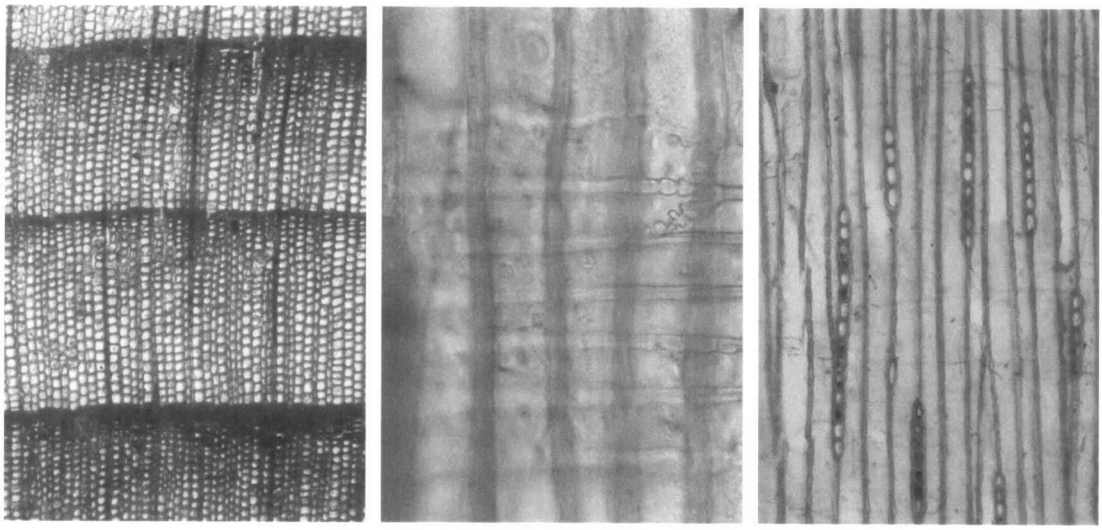
以上のように鹿伏・中所遺跡では、柱材には主にヒノキなどの針葉樹とコナラ属、クリなどの落葉広葉樹といった大きな材をとることのできる高木になるものが使われていた。いずれも当該地域周辺にも生育する樹種である。その他の加工木もしくは自然木も、当時遺跡周辺にも生育する樹種であったと考えられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242

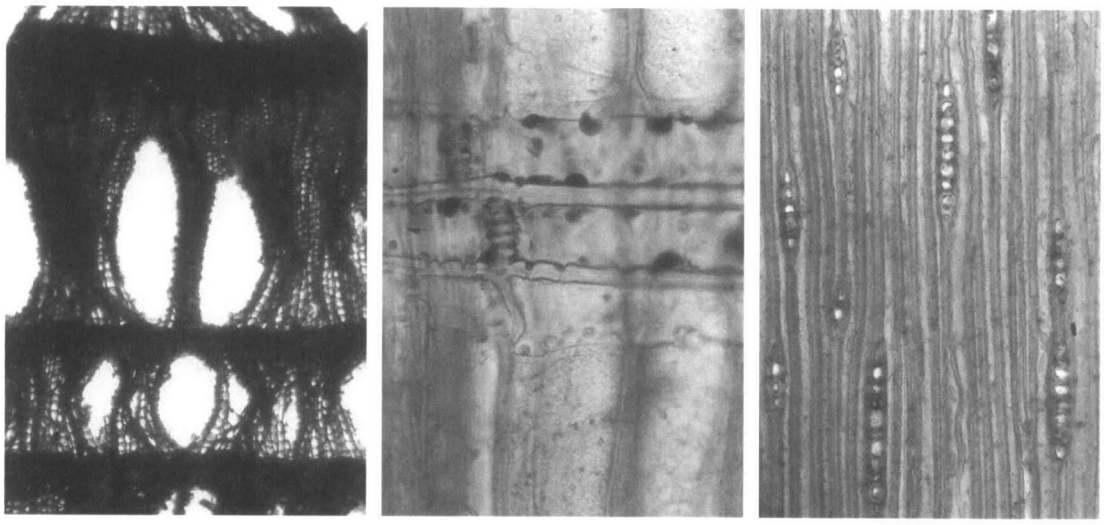
第５表　鹿伏・中所遺跡における樹種同定結果

資料番号	報文番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構名	層位	注記番号	備考	結果（学名／和名）	
1	134	Ⅶ西区	H11	SHb41 SP0848		P1679	柱材	*Abies*	モミ属
2	6	Ⅶ東区	G11	SHb02 柱材SP0274		H1304	柱材	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
3	4	Ⅶ東区	G11	SHb02 柱材SP0279		H1305	柱材	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
4		Ⅶ東区	G11	SHb02 柱材SP0371		H1306	柱材	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
5	5	Ⅶ東区	G11	SHb02 柱材SP0377		H1307	柱材	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
6		Ⅶ西区	F10	SHb17 P03		H1308	柱材	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
7		Ⅶ西区	F10	SHb17 P34		H1309	柱材	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
8		Ⅶ西区	F10	SHb17 P37		H1310	柱材	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
9	146	Ⅶ西区	I10	SBb29 SP0724柱材		B1080	柱材	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
10		Ⅶ西区	I10	SBb29 SP0727柱材		B1081	柱材	Cupressaceae	ヒノキ科
11		Ⅶ西区	I10	SBb29 SP0742柱材		B1082	柱材	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
12	145	Ⅶ西区	H10	SBb29 SP0732柱材		P1681	柱材	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
13	147	Ⅶ西区	H09	SBb29 SP0736柱材		P1682	柱材	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
14		Ⅶ西区	H10	SBb27 SP0942		B1079	柱材	*Cinnamomum japonicum* Sieb.	ヤブニッケイ
15		Ⅶ東区	H11	SBb17 SP0489		P1670	柱材	*Tsuga*	ツガ属
16	133	Ⅶ東区	H11	SBb17 SP0495		P1671	柱材	*Tsuga*	ツガ属
17		Ⅶ東区	H11	SBb17 SP0578		P1672	柱材	*Abies*	モミ属
18		Ⅶ東区	G11	SAb02 SP0226		P1666	柱材	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
19		Ⅶ東区	H11	SP0780		P1674	柱材	*Tsuga*	ツガ属
20		Ⅶ東区	H11	SP0594		P1673	柱材	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
21		Ⅶ西区	F10	SP0161		P1676	柱材	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
22	3	Ⅶ東区	G11	SP0269		P1667	柱材	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc	クリ
23		Ⅶ東区	G12	SP0434		P1669	柱材	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc	クリ
24	148	Ⅶ西区	F10	SP0151		P1675	柱材	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
25		Ⅶ西区	G10	SP0501		P1677	柱材	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
26		Ⅶ西区	G10	SP0602		P1678	柱材	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
27		Ⅶ東区	G11	SP0410		P1668	柱材	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc	クリ
28		Ⅶ西区	H10	SP0875		P1680	柱材	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
29	481	Ⅸ区	C05	SDa34 NO. 50		D2366	木	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
30		Ⅸ区	C05	SDa34 川底 NO. 56		D2367	木	*Cleyera japonica* Thunb.	サカキ
31		Ⅸ区	C05	SDa34 川底 NO. 57		D2368	木	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
32	480	Ⅸ区	C05	SDa34 川底 NO. 59		D2369	木	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
33		Ⅸ区	D05	SDa34 川底付近Tr. とTr. の間		D2370	木	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
34		Ⅸ区	C05	SRa02	灰色砂層	R2368	木	*Celastrus*	ツルウメモドキ属
35		Ⅸ区	C05	SRa02 H群		R2369	木	*Ampelopsis*	ノブドウ属
36		Ⅸ区	D05	SRa02 底部	灰色砂層	R2370	木	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節



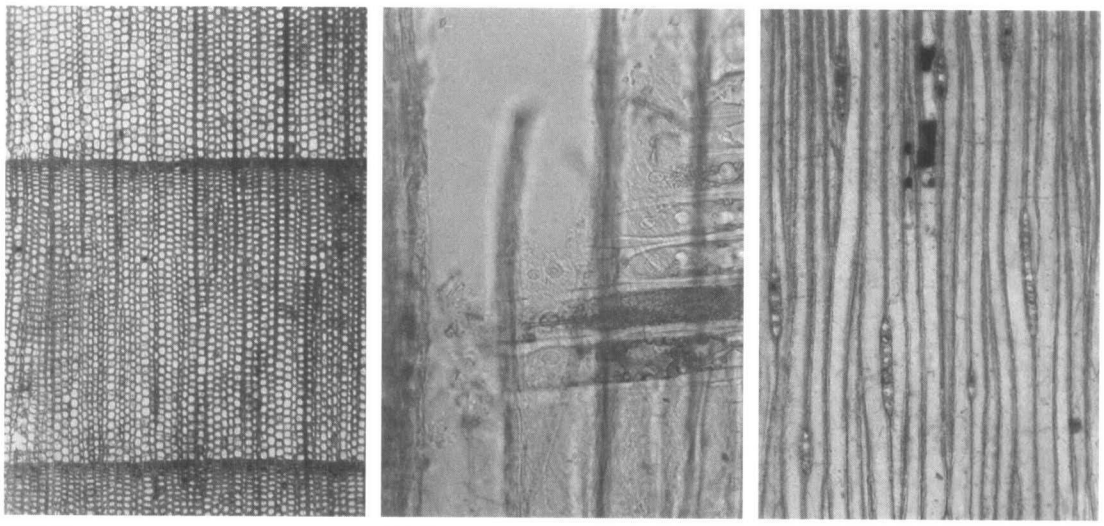
横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.05mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

1．資料番号1　柱材　モミ属



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.05mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

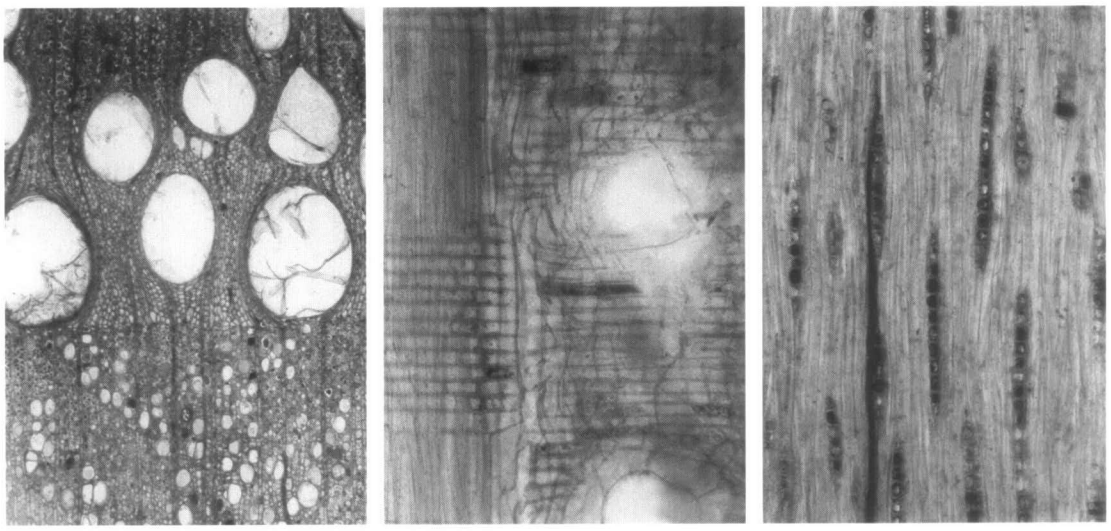
2．資料番号19　柱材　ツガ属



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.05mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

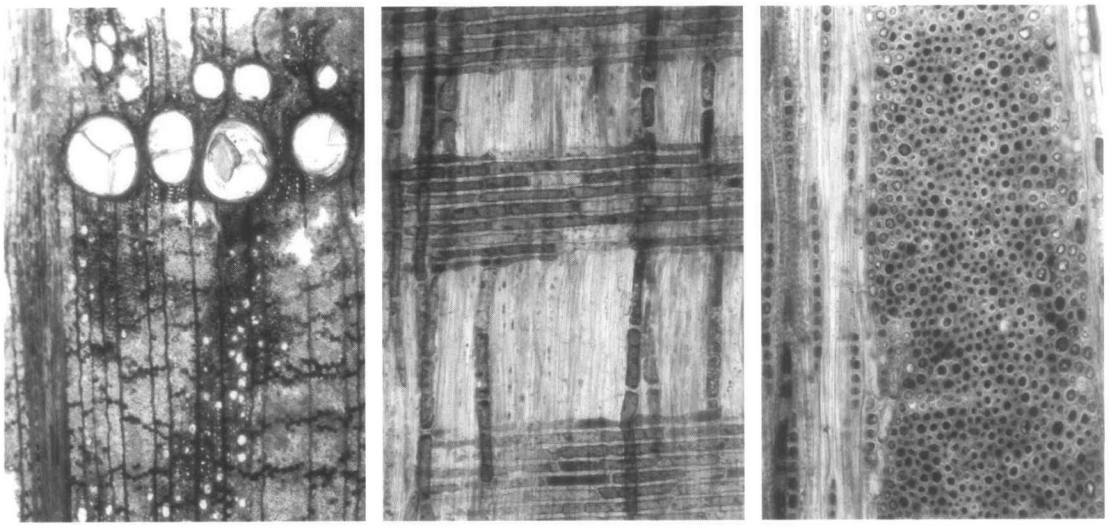
3．資料番号2　柱材　ヒノキ

第193図　鹿伏・中所遺跡の木材（1）



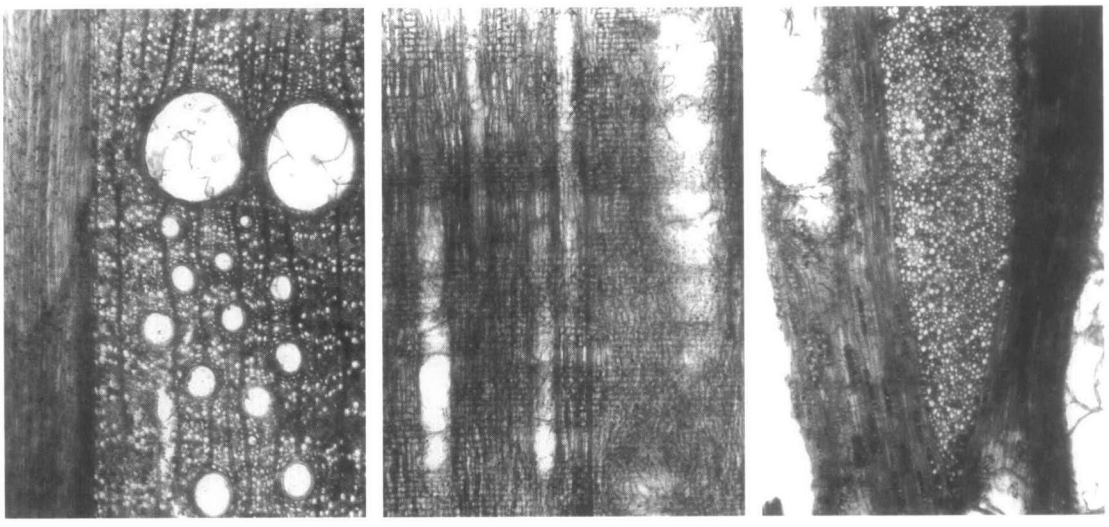
横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

4．資料番号23　柱材　クリ



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

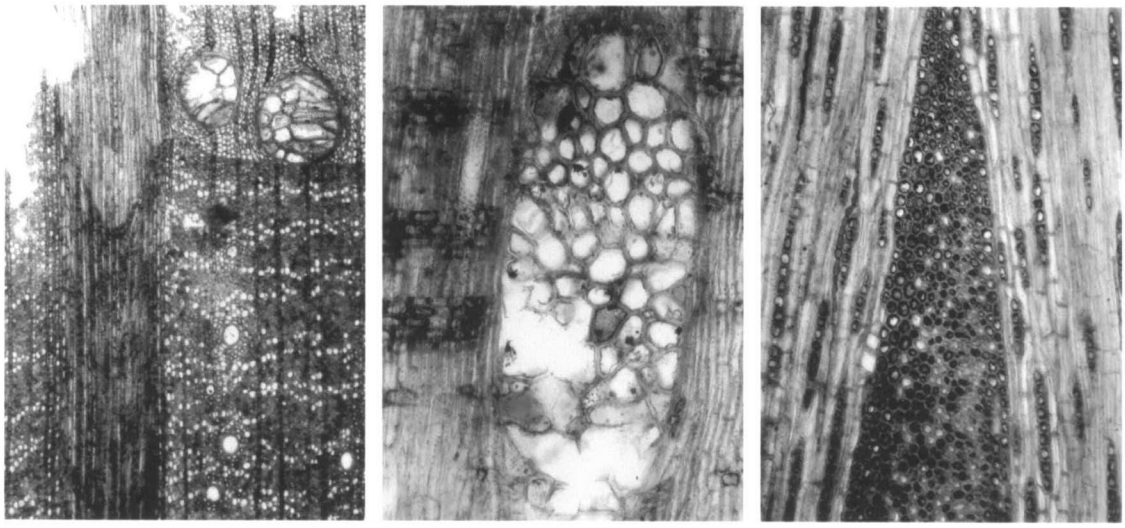
5．資料番号18　柱材　コナラ属コナラ節



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.5mm　接線断面 ―――― : 0.5mm

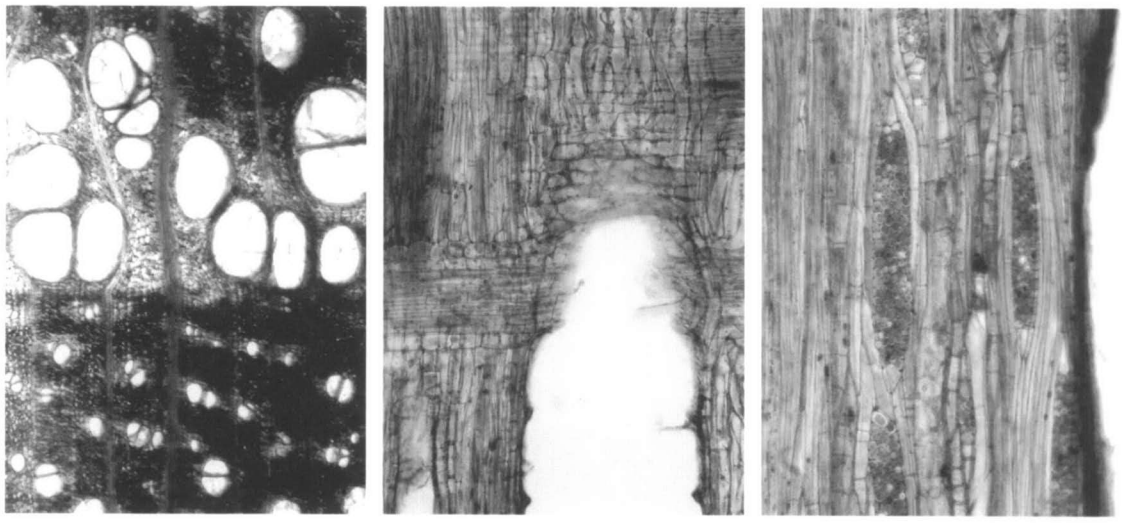
6．資料番号24　柱材　コナラ属クヌギ節

第194図　鹿伏・中所遺跡の木材（2）



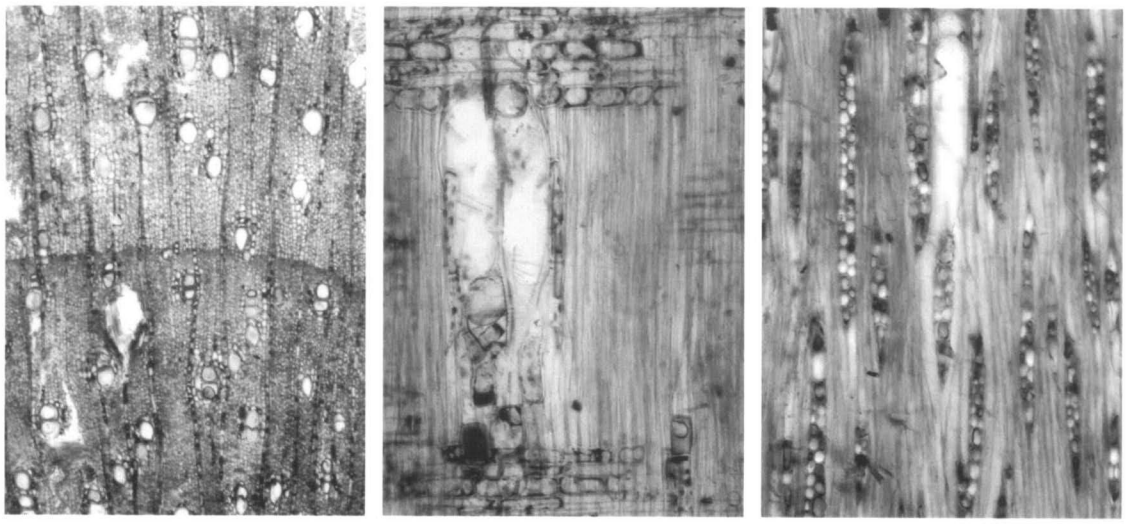
横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

7．資料番号25　柱材　コナラ属クヌギ節



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

8．資料番号26　柱材　ヤマグワ



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

9．資料番号14　柱材　ヤブニッケイ

第195図　鹿伏・中所遺跡の木材（3）